

川原湯勝沼遺跡(2)

ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

2005

国 土 交 通 省

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

川原湯勝沼遺跡(2)

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

2005

国 土 交 通 省

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



Ⅱ区第2面調査区全景 西→ (2004.4.23・合成)



73区1・3号埋甕



73区1・3号埋甕断面



73区1号埋甕胴部近接 (115)



73区3号埋甕頸部近接 (116)



73区26号土坑出土遺物 (左203・右204)



剣形石製模造品 (56)



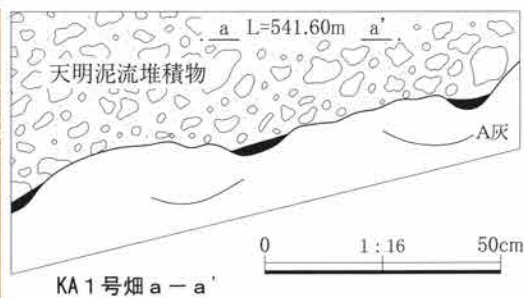
浅間粕川テフラ堆積層近接 (I区11ヤックラ A-A'・図28)



II区泥流面調査区全景 北→ (2003.11.29)



I区泥流面全景 西→ (2003.8.5)



KA 1号畑・浅間A灰検出状況 (図8)



調査区内降下の浅間A軽石



II区調査風景 (2004.4.22)

序

吾妻川は、群馬と長野の県境を源とし、浅間山と草津白根山を等距離にとり東へ流れ、流域には吾妻渓谷などの景勝美観をつくりながら、渋川で利根川に合流する流路延長76.2キロの河川です。

この吾妻川が、群馬県の北西部に位置する吾妻郡を2分し、そのちょうど中程に位置する吾妻渓谷付近に治水・利水を目的に八ッ場ダム建設事業が進められています。

平成6年から八ッ場ダム建設に伴う発掘調査が実施され、川原畑・川原湯・横壁・林・長野原の5地区では、現在までに30を超える遺跡で縄文時代から近世まで人々の連綿たる営みが確認されてきています。

本書では、平成15、16年にかけて発掘調査された川原湯勝沼遺跡を扱います。遺跡からは、天明三年（1783）に発生した天明泥流に埋もれた畑跡、平安時代の住居跡、古墳時代の遺物、弥生文化が群馬の地に最初に伝わってきた際の様子をうかがう上で重要な資料となる壺棺再葬墓など、それぞれの時代で特徴的な資料が得られました。

この地域の歴史的な全体像の解明は今後の調査の進展を待つべきですが、記録保存された本書の中にこの遺跡で生活を営んだ人々の足跡を確認し、それを将来の創造に役立てていただけることを願っております。

発掘調査から報告書刊行にいたるまで、委託機関である国土交通省はもとより、関係機関や地元皆様をはじめとする関係各位からのご指導とご協力を戴きましたことに感謝申し上げます、序と致します。

平成17年10月1日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇夫

例 言

1. 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う川原湯勝沼遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第303集で報告されている川原湯勝沼遺跡と同一遺跡別地点の調査報告書であり、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書として本遺跡を扱うのは、第2次となるため題名遺跡名称に(2)を付した。
3. 遺跡の呼称及び所在地は以下の通りである。
川原湯勝沼遺跡（かわらゆかつぬまいせき）
群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯字勝沼 16、17-1～9、21-2、21-9、31、32-1～4
4. 本発掘調査及び整理事業は、群馬県教育委員会の調整に基づき財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省より委託を受けて実施した。
5. 発掘調査・整理期間と調査体制は次の通りである。
<平成15年度>
・発掘調査
期 間 平成15年7月1日～平成15年9月3日（旧A区）
平成15年10月1日～平成15年12月26日（旧B・C区）
事 務 局 理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保佑史 八ッ場ダム調査事務所長
水田稔 調査研究部長 津金澤吉茂 調査研究課長 斉藤和之 庶務係長 野口富太郎 主事
丸山知恵子
調査担当 原信行 廣津英一 篠原正洋 関俊明 阿久津聡
<平成16年度>
・発掘調査
期 間 平成16年4月5日～平成16年4月30日
事 務 局 理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保佑史 八ッ場ダム調査事務所長
巾隆之 調査研究部長 佐藤明人 調査研究課長 斉藤和之 庶務係長 野口富太郎 主事
富澤よね子
調査担当 小野和之 柏木一男 原信行 瀧川仲男 篠原正洋 関俊明
・整理事業
期 間 平成16年9月1日～平成17年3月31日
事 務 局 同上
整理担当 関俊明
6. 報告書作成関係者
編 集 関俊明
本文執筆 関俊明 篠原正洋 株式会社 古環境研究所
遺物観察 遺物観察は当事業団諸氏の教示により関がおこなった。縄文晩期土器については、設楽博己氏に御教示指導頂いた。遺物115、116の実測図作成、観察は篠原正洋がおこなった。
石材同定 渡辺弘幸
遺構写真 発掘調査担当者
遺物写真 佐藤元彦 関俊明
保存処理 関邦一
7. 発掘調査及び整理事業での委託関係
遺構測量及び空中写真 株式会社 測研
自然科学分析 株式会社 古環境研究所
遺構図及び遺物実測図作成編集・トレース 株式会社 測研
整理補助 一場ハル江 加藤敬子 黒岩あさ子 黒岩由美子 篠原信子 高原みち子 富澤冬子 中島嘉江
丸山里美 水出礼子（株式会社 歴史の杜）
8. 出土遺物・図面・写真等の資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
9. 本遺跡の発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の諸氏・諸機関に御教示・御指導を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。（敬称略）
飯島義雄 石田真 伊勢屋ふじこ 井上素子 追川吉生 金子宥巻 黒岩文夫 小菅尉多 斉藤和之 坂寄富士夫 設楽博己 白石光男 堤隆 富田孝彦 中島直樹 福田義治 松島榮治 水田稔 安井真也
長野原町教育委員会 群馬県教育委員会文化課 国土交通省関東地方建設局八ッ場ダム工事事務所

凡 例

1. 本書の中では、調査区を任意に設定し、I区・II区と呼称している。調査方法にある100mメッシュの「区」とは異なるので留意いただきたい。
2. 挿図中に使用した方位は、座標北を表している。本書で使用する測量図の座標はすべて、2002年4月改正前の旧日本測地系を用いている。
3. 平成14年3月長野原町の遺跡名称の変更がなされ、本遺跡以外にも本書の中で記述した遺跡名が名称変更に該当する場合がある。詳細については、『ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡報告書』第1集（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第287集）及び第2集（同第303集）を参照頂きたい。
4. 遺構図及び遺物図には該当箇所に縮率を掲載しているので、それぞれ図中で確認頂きたい。遺物写真は遺物図と同縮率を原則とした。なお、遺構全体図（縮率は一部を除いて1:250）を3枚添付している。断面図、立面図等の平面ポイントは、同平面図が本文中に準備できないものについては、別刷付図中に示してある。
5. 本書の図版で使用した網掛けの摘要は、本文中で示す。
6. 畑及び平坦面の面積計測は、縮率1:100及び1:40の平面図を原則として用い、CADソフトを用いて計測した。算出にあたって畑の範囲が確定しない場合には（ ）で示した。
7. 遺物観察表では全体を計測できず推定によるものには、（ ）で表した。土器・陶磁器類の色調等には、農林水産技術会議事務局監修・（財）日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1991年度版を用いた。
8. 出土遺物には、新たに報告書内で統一した遺物番号を付した。遺物観察表中には、調査時点の番号を併記し、出土位置として掲載した。遺物観察表・実測図・写真は、90～121頁に一括している。また、本書中では遺物番号のみの表記で扱う場合もある。
9. 本書の中で、「泥流面」・「泥流畑」は天明三年浅間泥流堆積物に埋まった遺構面及びその畑遺構を指す呼称とした。遺構名や呼称については、特に畑遺構と天明浅間災害に関してのいくつかの検証を試みた先行の第3集（同第319集）に従っている。
10. 本書の中で扱う畑遺構は、細分される小単位の畑の集合によって構成される。これを「単位畑」と呼称し、畑及び平坦面の番号を対応させ、整理した遺構番号を適用させている。
11. 本書で用いる土層断面図には、浅間A軽石（天明三年浅間山噴火に伴う降下テフラ）を極力忠実に図中で表示するよう努めたが、一次堆積層で1～3cmという厚さであるため、その意図を反映し尽くすことができていない。適宜、考慮の上確認願いたい。また、各断面図中には原則として、浅間A軽石については土層注記していないので併せて留意願いたい。
12. 遺構番号は、調査時の遺構番号との置き換えをおこなっているもので、次頁一覧表を参照されたい。以下に付番の手順を示す。特に、天明泥流下の調査においては、発掘調査報告書第319集に従い、以下の通りとする。
 - ①泥流畑と平坦面については、遺構の性格上、遺跡名の頭文字のアルファベットを付してこれまでの一連の発掘調査遺跡の例と区別できるようにした。
例：KA 3号畑 → 川原湯勝沼遺跡3号畑
 - ②遺構内に所属する遺構名は「-」で結んだ遺構番号を充てた。
例：KA 4-1号平坦面 → 川原湯勝沼遺跡4号畑内の1号平坦面また、必要に応じて、図中などで遺構番号を略した場合がある。
例：2ヤックラ → 2号ヤックラ
13. 本書中で掲載したテフラは、浅間A軽石（As-A、1783年）、浅間粕川テフラ（As-Kk、1128年）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）、浅間草津黄色軽石（As-YPk、10,500～11,500年前?）を必要に応じて略号で用いている。この他に、浅間A軽石と同じ時期に降下した新暦6月26日降下に比定できる火山灰が確認されている。これを、「6月26日降下の『浅間A灰』」と本文中で仮称した。
14. 出土銭貨の観察には、『日本貨幣カタログ』（日本貨幣共同組合1998）を用いた。

遺構名称置き換え一覧

煙 (平坦面含む)		
掲載遺構名	掲載遺構名	発掘調査時遺構名
KA 1号煙	KA 1号平坦面	1号煙 1-1号平坦面
KA 2号煙	KA 2-1号煙 KA 2-2号煙 KA 2-3号煙 KA 2-4号煙 KA 2-5号煙	2号煙 2-1号煙 2-2号煙 2-3号煙 2-4号煙 2-5号煙
KA 3号煙		3号煙
KA 4号煙		4号煙
KA 5号煙		5号煙
KA 6号煙		6号煙
55区1号竈		7号煙
KA 8号煙	KA 8-1号煙 KA 8-1号平坦面 KA 8-2号煙 KA 8-2号平坦面 KA 8-3号煙	8号煙 8-1号煙 8-1号平坦面 8-2号煙 8-2号平坦面 8-3号煙
KA 9号煙	KA 9-1号煙 KA 9-2号煙 KA 9-2号平坦面 KA 9-3号煙 KA 9-3号平坦面 KA 9-4号煙 KA 9-4号平坦面 KA 9-5号煙	1号煙 2号煙 2号平坦面 3号煙 3号平坦面 4号煙 4号平坦面 5号煙 6号煙
KA 10号煙	KA 10-1号煙 KA 10-2号煙 KA 10-2号平坦面 KA 10-3号煙 KA 10-3号平坦面 KA 10-4号煙 KA 10-4号平坦面 KA 10-5号煙 KA 10-5号平坦面 KA 10-6号煙 KA 10-7号煙 KA 10-8号煙 KA 10-8号平坦面 KA 10-9号煙 KA 10-9号平坦面 KA 10-10号煙 KA 10-10号平坦面 KA 10-11号煙 KA 10-11号平坦面 KA 10-12号煙 KA 10-13号煙 KA 10-14号煙 KA 10-15号煙 KA 10-16号煙 KA 10-16号平坦面 KA 10-17号煙 KA 10-18号煙 KA 10-18号平坦面 KA 10-19号煙 KA 10-19号平坦面 KA 10-20号煙 KA 10-21号煙 KA 10-22号煙 KA 10-22号平坦面 KA 10-23号煙 KA 10-23号平坦面 KA 10-24号煙 KA 10-24号平坦面 KA 10-25号煙 KA 10-25号平坦面 KA 10-26号煙 KA 10-26号平坦面 KA 10-27号煙 KA 10-27号平坦面 KA 10-28号煙 KA 10-28号平坦面 KA 10-29号煙 KA 10-30号煙 KA 10-31号煙	7号煙 7号平坦面 8号煙 8号平坦面 9号煙 9号平坦面 10号煙 10号平坦面 11号煙 12号煙 13号煙 13号平坦面 14号煙 14号平坦面 15号煙 15号平坦面 16号煙 16号平坦面 17号煙 18号煙 19号煙 20号煙 21号煙 21号平坦面 22号煙 23号煙 23号平坦面 24号煙 24号平坦面 25号煙 26号煙 27号煙 27号平坦面 28号煙 28号平坦面 29号煙 29号平坦面 30号煙 30号平坦面 31号煙 31号平坦面 32号煙 32号平坦面 33号煙 33号平坦面 34号煙 35号煙 36号煙
KA 11号煙	KA 11-1号煙 KA 11-1号平坦面 KA 11-2号煙 KA 11-2号平坦面 KA 11-3号煙 KA 11-3号平坦面 KA 11-4号煙 KA 11-4号平坦面 KA 11-5号煙 KA 11-5号平坦面 KA 11-6号煙	37号煙 37号平坦面 38号煙 38号平坦面 39号煙 39号平坦面 40号煙 40号平坦面 41号煙 41号平坦面 42号煙

ヤックラ	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
→(変更なし)	1号ヤックラ
→(変更なし)	2号ヤックラ
→(変更なし)	3号ヤックラ
→(変更なし)	4号ヤックラ
→(変更なし)	5号ヤックラ
→(変更なし)	6号ヤックラ
→(変更なし)	7号ヤックラ
→(変更なし)	8号ヤックラ
→(変更なし)	9号ヤックラ
→(変更なし)	10号ヤックラ
→(変更なし)	11号ヤックラ
→(変更なし)	12号ヤックラ
→(変更なし)	13号ヤックラ
→(変更なし)	14号ヤックラ
15号ヤックラ	1号ヤックラ
16号ヤックラ	2号ヤックラ
17号ヤックラ	3号ヤックラ
18号ヤックラ	4号ヤックラ
19号ヤックラ	5号ヤックラ

道	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
→(変更なし)	1号道
→(変更なし)	2号道
→(変更なし)	3号道
→(変更なし)	4号道
→(変更なし)	5号道

溝	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
→(変更なし)	1号溝
→(変更なし)	2号溝
→(変更なし)	3号溝
55区1号溝	4号溝

住居	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
73区1号住居	1号住居
73区2号住居	2号住居
73区3号住居	3号住居

埋蔵	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
73区1号埋蔵	1号埋蔵
63区2号埋蔵	2号埋蔵
73区3号埋蔵	3号埋蔵

土坑		
掲載遺構名	掲載遺構名	発掘調査時遺構名
73区1号土坑	報告書303集に掲載	1号土坑
73区2号土坑		2号土坑
		73区29号土坑
		73区15号土坑
		73区3号土坑
		73区4号土坑
		73区5号土坑
		73区6号土坑
		73区7号土坑
		73区8号土坑
		73区9号土坑
		73区10号土坑
		73区11号土坑
		73区12号土坑
		63区13号土坑
		73区14号土坑
		14号土坑
		15号土坑
		73区16号土坑
		73区17号土坑
		63区18号土坑
		63区19号土坑
		63区20号土坑
		63区21号土坑
		63区22号土坑
		63区23号土坑
		63区24号土坑
		63区25号土坑
		73区26号土坑
		63区27号土坑
		63区28号土坑
		29号土坑
		63区30号土坑
		73区31号土坑
		63区32号土坑
		73区33号土坑
		63区34号土坑
		73区35号土坑
		73区36号土坑
		73区37号土坑
		63区38号土坑
		73区39号土坑
		63区40号土坑

焼土	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
63区1号焼土	1号焼土
63区2号焼土	2号焼土
73区3号焼土	3号焼土
63区4号焼土	4号焼土
63区5号焼土	5号焼土
73区6号焼土	6号焼土

ピット	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
73区1号ピット	1号ピット
73区2号ピット	2号ピット
73区3号ピット	3号ピット
73区4号ピット	4号ピット
73区5号ピット	5号ピット
73区6号ピット	6号ピット
73区7号ピット	7号ピット
73区8号ピット	8号ピット
73区9号ピット	9号ピット
73区10号ピット	10号ピット
73区11号ピット	11号ピット
73区12号ピット	12号ピット
73区13号ピット	13号ピット
73区14号ピット	14号ピット
73区15号ピット	15号ピット
73区16号ピット	16号ピット
73区17号ピット	17号ピット
73区18号ピット	18号ピット
63区19号ピット	19号ピット
73区20号ピット	20号ピット
63区21号ピット	21号ピット
63区22号ピット	22号ピット
63区23号ピット	23号ピット
63区24号ピット	24号ピット
63区25号ピット	25号ピット
63区26号ピット	26号ピット
73区27号ピット	27号ピット
73区28号ピット	28号ピット
63区29号ピット	29号ピット
63区30号ピット	30号ピット
63区31号ピット	31号ピット
63区32号ピット	32号ピット
73区33号ピット	33号ピット
73区34号ピット	34号ピット
73区35号ピット	35号ピット
73区36号ピット	36号ピット
73区37号ピット	37号ピット
73区38号ピット	38号ピット
73区39号ピット	39号ピット
73区40号ピット	40号ピット
63区41号ピット	41号ピット
63区42号ピット	42号ピット
63区43号ピット	43号ピット
63区44号ピット	44号ピット
63区45号ピット	45号ピット

河道	
掲載遺構名	発掘調査時遺構名
63区1号河道	1号河道

目 次

【口絵 / 序 / 例言・凡例 / 目次】

I 調査に至る経過と経緯	1
1. 発掘調査と整理の経過	1
2. 調査の方法	3
3. 遺跡の環境	5
(1) 遺跡の立地	5
(2) 周辺の遺跡	6
(3) 天明三年浅間災害と被災遺跡	12
II 遺跡の調査記録	13
1. 調査の概要	13
2. 基本土層	13
3. 泥流面の調査	17
(1) 畑の全体構造	17
(2) 畑	18
(3) ヤックラ	32
(4) 道	38
(5) 溝	40
(6) 天明泥流流下に関する記録	41
4. 第2面の調査	43
(1) 溝	43
(2) 畠	43
(3) 住居	45
(4) 埋設土器	51
(5) 土坑	54
(6) 焼土	62
(7) ピット	65
(8) 河道	65
5. 出土遺物	69
III 自然科学分析	71
1. 分析地点と試料について	71
2. 群馬県、川原湯勝沼遺跡の火山灰分析	72
3. 群馬県、川原湯勝沼遺跡における植物珪酸体分析	75
IV まとめと課題	79
1. 第2面	79
2. 泥流畑	79

【遺物観察表 / 遺物実測図・写真図版 / 抄録】

【遺構全体図・3枚】

挿図表写真目次

表1	調査遺跡一覧	11	図37	55区1号畠	44
表2	畑計測値等一覧表	18	図38	55区拡張トレンチ a-a'	45
表3	ヤックラ計測値等一覧表	33	図39	73区1号住居(1)	46
表4	土坑計測値等一覧表	55	図40	73区1号住居(2)	47
	出土遺物観察表	90	図41	73区2号住居(1)	48
			図42	73区2号住居(2)	49
本文写真1	川原湯勝沼遺跡Ⅱ区 西→	6	図43	73区3号住居	50
本文写真2	73区K+3ライン断面 西→	45	図44	73区2・3号住居	51
本文写真3	73区2号住居 断面B-B' 南→	45	図45	73区1・3号埋蔵	52
本文写真4	73区1号埋蔵内遺物	53	図46	73区1・3号埋蔵検出状況	53
本文写真5	73区3号埋蔵内遺物	53	図47	63区2号埋蔵	54
本文写真6	73区1号埋蔵検出状況 西→	53	図48	63区18~20・22・27・28号土坑	56
			図49	63区21号土坑、73区5・6・15号土坑	57
			図50	73区7~10・37号土坑	58
図1	グリッド設定模式図	2	図51	63区23・30・34号土坑、73区11・12・14・31・36号土坑	59
図2	調査遺跡位置図	4	図52	63区24号土坑、73区35・39号土坑	60
図3	調査遺跡位置図	10	図53	73区17号土坑	60
図4	川原湯勝沼遺跡グリッド設定図	14	図54	63区40号土坑、73区26・33号土坑	61
図5	川原湯勝沼遺跡位置図(1:2,500)	15	図55	63区25・38号土坑	62
図6	I区 基本土層図	16	図56	63区13・32号土坑、73区3・4・16号土坑	63
図7	Ⅱ区 基本土層図	17	図57	73区29号土坑	63
図8	KA1号畑	19	図58	63区1・2・4・5号焼土、73区3・6号焼土	64
図9	KA2号畑	19	図59	63区19・21~26・29~32・41~45号ピット	65
図10	KA8号畑(1)	20	図60	Ⅱ区ピット	66
図11	KA8号畑(2)	21	図61	73区1~18・20・27・28・33~40号ピット	67
図12	KA9号畑(1)	22	図62	63区1号河道	68
図13	KA9号畑(2)	23	図63	I区試料採取地点位置図	71
図14	KA10号畑(1)	23	図64	天仁噴出物の分布	71
図15	KA10号畑及び作物痕跡の倒伏方向	24	図65	Ⅱ区現況図と遺構全体図	80
図16	KA10号畑(2)	25	図66	KA2号畑とKA10号畑	83
図17	KA10号畑(3)	26	図67	5号ヤックラの変遷	84
図18	KA10号畑(4)	27	図68	黄褐色土の分布	84
図19	KA10号畑(5)	28	図69	5号ヤックラの変遷とKA2-3号畑	85
図20	KA10号畑(6)	29	図70	KA10号畑	85
図21	KA10-24~31号畑断面図	29	図71	畝断面状況区分け図	86
図22	KA10号畑(7)	30	図72	KA1号畑の変遷	86
図23	KA11号畑(1)	31	図73	「北毛地域(1)関係要図」	87
図24	KA11号畑(2)	32	図74	泥流面遺物1~25	100
図25	2号ヤックラ	32	図75	第2面遺物26~41	102
図26	3~6号ヤックラ	34	図76	第2面遺物42~53	104
図27	7~9号ヤックラ	35	図77	第2面遺物54~65	106
図28	10・11号ヤックラ	36	図78	第2面遺物66~86	108
図29	12~15号ヤックラ	37	図79	第2面遺物87~115	110
図30	16~19号ヤックラ	38	図80	第2面遺物116~138	112
図31	1~4号道	39	図81	第2面遺物139~184	114
図32	5号道	40	図82	第2面遺物185~194	116
図33	1号溝	40	図83	第2面遺物195~202	118
図34	I区天明泥流流下方向の痕跡	41	図84	第2面遺物203~211	120
図35	Ⅱ区天明泥流流下方向の痕跡	42			
図36	55区1号溝	43			

写真図版目次

口絵1	Ⅱ区第2面調査区全景(2004.4.23)	写真2. Ⅱ区調査区全景 上が西→
口絵2	73区1・3号埋蔵 73区1・3号埋蔵断面 73区1号埋蔵胸部近接(115) 73区3号埋蔵頸部近接(116) 73区26号土坑出土遺物(左203右204) 剣形石製模造品(56)	写真1. I区KA1号畑 西→ 写真2. I区KA1号平坦面 西→ 写真1. I区KA1号畑畝断面a-a' 南→ 写真2. I区 同 南→ 写真3. I区 同 畝断面a-a' As-A灰検出状況 南→ 写真4. I区 同 南→
口絵3	浅間柏川テフラ堆積層近接(I区11ヤックラA-A'・図28)	写真1. I区KA2-1号畑 西→
口絵4	Ⅱ区泥流面調査区全景(2003.11.29)	写真2. I区KA2-3・KA2-4号畑 西→
	I区泥流面全景(2003.8.5)	写真1. I区KA2-2号畑平坦面の痕跡?(写真中央) 西→
	KA1号畑・浅間A灰検出状況(図8)	写真2. I区As-A灰層(天明三年新暦6月26日降下) 西→
	調査区内降下の浅間A軽石	写真1. I区KA2-4号畑 西→
	Ⅱ区調査風景(2004.4.22)	写真2. I区KA6号畑 北→
写真図版1	泥流面遺物1~25	写真3. I区KA4号畑 断面 西→
写真図版2	第2面遺物26~41	写真4. I区KA8-2号平坦面 北東→
写真図版3	第2面遺物42~53	写真5. I区KA8-1号平坦面 南東→
写真図版4	第2面遺物54~65	写真1. Ⅱ区KA9-3号平坦面 北→
写真図版5	第2面遺物66~86	写真2. Ⅱ区KA10-2号平坦面 北→
写真図版6	第2面遺物87~115	写真3. Ⅱ区KA9-5号畑断面a-a' 西→
写真図版7	第2面遺物116~138	写真4. Ⅱ区KA10-15号畑断面a-a' 西→
写真図版8	第2面遺物139~184	写真5. Ⅱ区KA10-2号畑 作物痕跡倒伏方向 北→
写真図版9	第2面遺物185~194	写真6. Ⅱ区 同 株痕近接 北→
写真図版10	第2面遺物195~202	写真7. Ⅱ区KA10-5号畑付近 泥流中の木材 北→
写真図版11	第2面遺物203~211	写真1. Ⅱ区KA10-21号畑断面a-a' 東→
写真図版12	写真1. I区調査区全景 東→	写真2. Ⅱ区KA10-23号畑断面a-a' 東→

写真3. II区 KA11-5号平坦面 北→
写真4. II区 同 西→
写真図版20 写真1. I区1号ヤックラ 北→
写真2. I区2号ヤックラ 南→
写真3. I区3・4号ヤックラ 西→
写真4. I区4号ヤックラ 西→
写真5. I区5号ヤックラ 西→
写真図版21 写真1. I区5号ヤックラ(南部分) 南西→
写真2. I区 同(南端部)
写真3. I区 同(55区N-16G付近) 北→
写真4. I区 同 断面A-A' 南西→
写真5. I区 同(崩落前の状態) 北→
写真図版22 写真1. I区6号ヤックラ 北西→
写真2. I区7号ヤックラ断面 東→
写真3. I区 同 西→
写真4. I区 同 拡張トレンチ(KA2-1号畑境確認) 北→
写真5. I区 同 拡張トレンチ(KA2-2号畑境確認) 北西→
写真図版23 写真1. I区8号ヤックラ断面 北東→
写真2. I区9号ヤックラ 北→
写真3. I区10号ヤックラ 東→
写真4. I区11号ヤックラ 北東→
写真5. I区 同 断面A-A' 北→
写真図版24 写真1. I区14号ヤックラ 南→
写真2. II区15号ヤックラ断面A-A' 北→
写真3. II区 同 北→
写真4. II区16号ヤックラ断面A-A' 東→
写真5. II区 同 北→
写真図版25 写真1. II区17・18号ヤックラ 北→
写真2. II区 同 南→
写真3. II区 同 遺物出土状況 南→
写真4. II区19号ヤックラ 北→
写真5. II区 同 掘り方 北→
写真図版26 写真1. I区2号道 西→
写真2. I区1号道 北→
写真3. I区4号道調査前 東→
写真4. I区 同 断面A-A' 南→
写真図版27 写真1. I区4号道 東→
写真2. I区 同 現況 東→
写真図版28 写真1. I区KA2-4号畑泥流中の礫による攪乱状況 北→
写真2. I区KA1号畑泥流中の礫 西→
写真3. I区KA2-4号畑(泥流中の礫) 北西→
写真4. II区基本土層トレンチ東壁 西→
写真図版29 写真1. I区55区1号畝検出状況 南東→
写真2. I区 同 断面 南東→
写真図版30 写真1. I区55区1号畝検出状況 南西→
写真2. I区55区1号溝 南東→
写真3. I区 同 南東→
写真4. I区 同 拡張トレンチa-a' 西→
写真図版31 写真1. II区73区1号住居 南西→
写真2. II区 同 カマド 南西→
写真3. II区 同 南→
写真4. II区 同 貯蔵穴 南西→
写真5. II区 同 掘り方 南西→
写真図版32 写真1. II区73区2号住居 西→
写真2. II区73区K+3ライン断面 西→
写真図版33 写真1. II区73区2号住居遺物出土状況(貯蔵穴上の礫) 南→
写真2. II区 同 断面図A-A' As-Kkテフラ近接 西→
写真3. II区 同 周溝 南→
写真4. II区 同 カマド 西→
写真5. II区 同 2号ビット 南→
写真図版34 写真1. II区73区3号住居 西→
写真2. II区 同 カマド掘り方 西→
写真3. II区 同 床下土坑 南→
写真4. II区73区2・3号住居 南→
写真5. II区73区3号住居調査風景
写真図版35 写真1. II区73区1・3号埋壺検出状況 南西→
写真2. II区 同 南西→
写真3. II区 同 断面D-D' 南→
写真4. II区 同
写真5. II区 同 南西→
写真図版36 写真1. II区73区1・3号埋壺 断面A-A' 南西→
写真2. II区 同 掘り方 南西→
写真図版37 写真1. II区73区1号埋壺検出状況 南西→
写真2. II区 同 北→

写真3. II区 同 断面 南西→
写真4. II区73区1・3号埋壺掘り方 南西→
写真5. II区73区3号埋壺検出状況 南西→
写真6. II区 同 南西→
写真7. II区 同 南西→
写真8. II区 同 断面 南西→
写真図版38 写真1. II区73区3号埋壺内礫
写真2. II区 同
写真3. II区73区1・3号埋壺・73区26号土坑 北→
写真4. II区73区26号土坑 南東→
写真5. II区73区1号埋壺検出状況(作業風景) 西→
写真図版39 写真1. II区73区1・3号埋壺周辺 南→
写真2. II区 同 作業風景
写真3. II区調査風景 南→
写真4. II区63区2号埋壺 南→
写真5. II区 同 検出状況 南→
写真図版40 写真1. II区63区18・19号土坑 北→
写真2. II区63区18・19・20号土坑断面A-A' 南→
写真3. II区63区21号土坑断面A-A' 東→
写真4. II区63区22号土坑 東→
写真5. II区 同(63区5号焼土) 東→
写真図版41 写真1. II区63区23号土坑 南→
写真2. II区63区24号土坑 南→
写真3. II区 同 断面A-A' 南→
写真4. II区63区25号土坑 東→
写真5. II区 同 断面及び遺物出土状況 東→
写真図版42 写真1. II区63区27号土坑遺物出土状況 北→
写真2. II区63区27・28号土坑 西→
写真3. II区 同 断面A-A' 北東→
写真4. II区63区30号土坑 南→
写真5. II区63区32号土坑 東→
写真図版43 写真1. II区63区34号土坑 南→
写真2. II区63区38号土坑 南→
写真3. II区63区40号土坑 南東→
写真4. II区73区3号土坑 南→
写真5. II区73区4号土坑 南→
写真6. II区73区7号土坑 南→
写真7. II区73区8号土坑 南→
写真8. II区73区9号土坑 南→
写真図版44 写真1. II区73区10号土坑 南→
写真2. II区73区11号土坑 南→
写真3. II区73区12号土坑 南→
写真4. II区73区14号土坑 南→
写真5. II区73区16号土坑 南→
写真図版45 写真1. II区73区17号土坑 南→
写真2. II区 同 遺物出土状況 西→
写真3. II区 同 西→
写真4. II区 同 南→
写真図版46 写真1. II区73区26号土坑 南→
写真2. II区 同 南→
写真3. II区 同 底部焼土近接 南→
写真4. II区 同 遺物(玉)出土状況 南→
写真5. II区 同 出土遺物
写真図版47 写真1. II区73区26号土坑断面A-A' 南→
写真2. II区 同 底部焼土痕 南西→
写真図版48 写真1. II区73区29号土坑 南→
写真2. II区73区31号土坑石出土状況 南→
写真3. II区73区33号土坑 南東→
写真4. II区73区35号土坑 南→
写真5. II区73区36号土坑 南→
写真6. II区73区37号土坑 南→
写真7. II区73区39号土坑 南→
写真8. II区 同 ベンガラ出土状況 南→
写真図版49 写真1. II区63区1・2号焼土 南東→
写真2. II区 同 南東→
写真3. II区63区4号焼土 南西→
写真4. II区63区5号焼土断面A-A' 東→
写真5. II区 同 北東→
写真図版50 写真1. II区73区3号焼土断面 南→
写真2. II区73区6号焼土 南→
写真図版51 写真1. II区全景 ビット検出 南→
写真2. II区全景近接 ビット検出 西→
写真図版52 写真1. II区63区1号河道 南東→
写真2. II区 同 南東→

I 調査にいたる経過と経緯

1. 発掘調査と整理の経過

昭和24年利根川改定改修計画の一環として調査着手の後、「ハッ場ダム建設に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結（平成4年7月）され本格的に着工されることとなったハッ場ダム建設は、洪水調節・水道用水・工業用水・首都圏への都市用水の供給などを目的とした多目的ダムで、天端標高586m、堤高131m、湛水面積3.04km²、総貯水容量1.07億m³の規模で、右岸は群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯字金花山、左岸は同大字川原畑字ハッ場に建設が予定されている。この事業により5地区340世帯、1000人を超す人々が故郷を失うことになる。

昭和61年7月にはダム湖関連地域の文化財総合調査計画の策定があり、これに基づいて長野原町教育委員会による「民俗」「石造文化財」「自然」に関する調査がおこなわれ、さらに埋蔵文化財の詳細分布調査が並行して実施されてきた。この結果、確認された埋蔵文化財包蔵地は183、他に石造物などの指定文化財や名勝・天然記念物などを含めた文化財総数は199を数える。このうち、ダム建設に関係する5地区（川原畑・川原湯・横壁・林・長野原）の埋蔵文化財包蔵地は79であり、その調査対象面積は約57万m²とされ、その後、平成14年3月に長野原町教育委員会で10遺跡の追加と遺跡名が変更され、合計89遺跡、総遺跡面積146万m²となった。

また下流の吾妻町松谷、三島地区などでも、ダム建設の関連工事が進展しつつある。この地域は群馬県教育委員会の『群馬県遺跡地図』（昭和48年）で、遺跡の存在が確認されている。

このような状況を踏まえ、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協議がおこなわれた。その後、平成6年3月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関す

る協定書」が締結され、ハッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の実実施計画が決定した。実施計画に示された調査組織は群馬県教育委員会で、調査機関は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。この協定を踏まえて、平成6年4月1日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、ハッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とするハッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年4月1日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長は「ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書」を締結し、平成11年4月以降は調査実施機関を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に変更し、現在の調査体制にいたっている。この間、平成10年からは発掘調査と並行し整理事業が開始され、発掘調査は現在も継続中である。

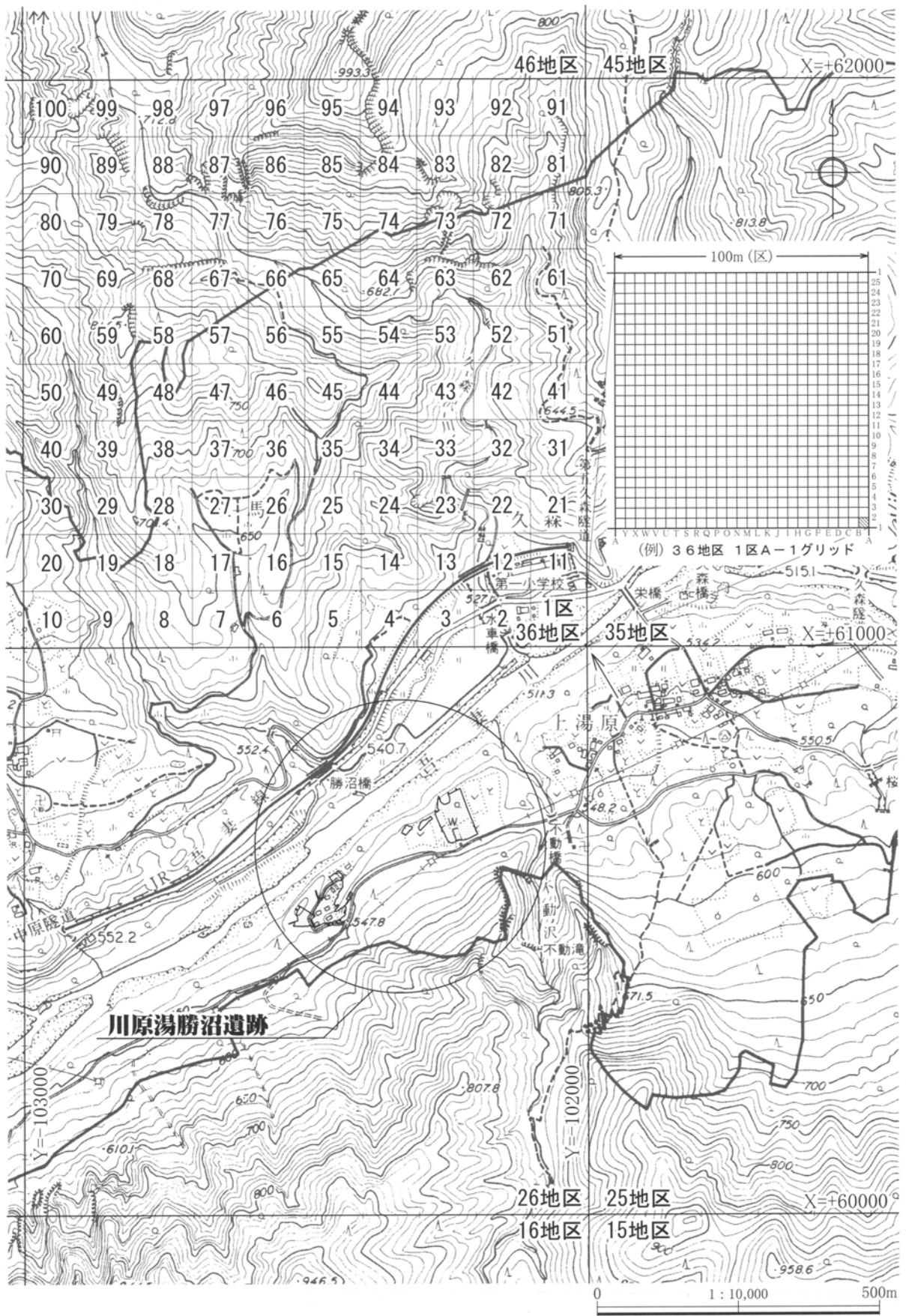
本遺跡では平成9年度に先行する調査（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書303集で既報告）がおこなわれ、その後、本報告で扱う発掘調査が平成15年度（Ⅰ・Ⅱ区）及び平成16年度（Ⅱ区2面目）におこなわれた。

各調査区の調査原因は、Ⅰ区（調査時A・C区）は付替国道145号川原湯地区改良工事業に伴う発掘調査、Ⅱ区（同B区）は県道林吾妻線2号橋下部工事業に伴う発掘調査である。

平成15年5月22日・23日におこなわれた県教委文化課による試掘調査で、Ⅰ区該当部分では、現況建物の基礎等が残っており攪乱が進行しているが発掘調査の必要性が示された。Ⅱ区北側吾妻川寄りの円形部分約285m²については、江戸時代の畑跡、畝状遺構の確認がなされたが、この試掘調査により本格的な発掘調査は必要無しの結果が示された。

平成15年度、7月1日からA区の発掘調査を着手し9月3日に終了、同年10月1日～12月26日の

I 調査に至る経過と経緯



『長野原町都市計画図』2を使用

図1 グリッド設定模式図

1. 発掘調査と整理の経過

期間で、用地買収の完了したA区周辺のC区、さらにB区の泥流面を終了させ、下位面の表土掘削を開始し、次年度調査の準備を手がけた。平成16年度はB区第2面について4月5日～4月30日の期間で発掘調査をおこなった。調査は、天明三年の浅間泥流で埋没した遺構面を「泥流面」、下位の縄文～平安時代の遺構面を「第2面」とする2面調査であった。

調査後混乱を回避するため、整理段階で、A区とC区をあわせⅠ区、B区をⅡ区として報告する。調査終了面積は、それぞれⅠ区10,792㎡、Ⅱ区5,782㎡である。

整理作業は、平成16年9月から翌年3月までおこない、冬季期間予定していた基礎整理分を含めて作業を開始し、報告書刊行を次年度の平成17年度におこなう予定で実施した。作業は、一部の遺物洗浄、遺物注記、図面整理、遺構図修正、遺物の接合・復元、遺物実測・拓本作成、トレース、図版作成等をおこない、並行して写真撮影をおこなった。

2. 調査の方法

平成6年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについては「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められてきた。以下、本書でもそれに準拠し必要部分について掲載する。

①調査における遺跡番号は、八ッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区（1：川原畑、2：川原湯、3：横壁、4：林、5：長野原）に番号を付し、八ッ場ダムの略号（YD）に続けた。ハイフン以下、各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し遺跡番号とした。遺物に対する注記及び資料整理にはこの遺跡番号を用いており、「YD 2-01」が川原湯勝沼遺跡に該当する。

②基準座標は、国家座標（2002年4月改正以前の日本測地系）に基づく日本平面直角座標第Ⅸ系を使用し、吾妻町大柏木付近を原点（座標値X=+58000.0、Y=-97000.0）とした1km方眼を基

点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。X軸、Y軸の座標値については図1及び図4グリッド設定図を参照頂きたい。

③1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。さらに、100m方眼内を4m方眼で625区画に分割し、4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを用い、南北には1～25までの算用数字を用いて、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

④例えば、図1における中央付近の「→」で示す4m方眼の小グリッドは、「36地区1区A-1グリッド」となり、遺構図面では、特に混乱が予想されない場合は、「地区」を略して用いる。

現場での遺構測量については作業員及び委託した測量業者がおこなった。

遺構平面図は原則として縮率1：40割付図で作成し、断面図等もそれに準じた。全体図については、原則的には、1：100ないしは1：200の縮率で、作業の効率化をはかり、3次元のデジタルデータを用いた現場実測や空中写真測量図などを併用した。

遺構写真については、地上写真は現場担当者が、空中写真撮影については測量委託業者がおこなった。撮影には35mm版白黒フィルムとカラースライドフィルムを用い、必要に応じて、6×7版白黒フィルムを使用した。

各遺跡の発掘調査においては、バックフォーによる表土掘削をおこない、作業員による遺構検出作業と精査により順次作業を進めた。特に、泥流面から第2面までの土砂の堆積は概ね30～50cm程度と薄く、泥流畑の耕作土になっている場合もある。縄文時代～平安時代の遺構確認は、同一面でなされることとなった。

出土遺物の現場作業内での洗浄・注記作業、写真や図面類の整理作業といった基礎整理作業はおこなわず、冬季整理での実施を予定した。

I 調査に至る経過と経緯

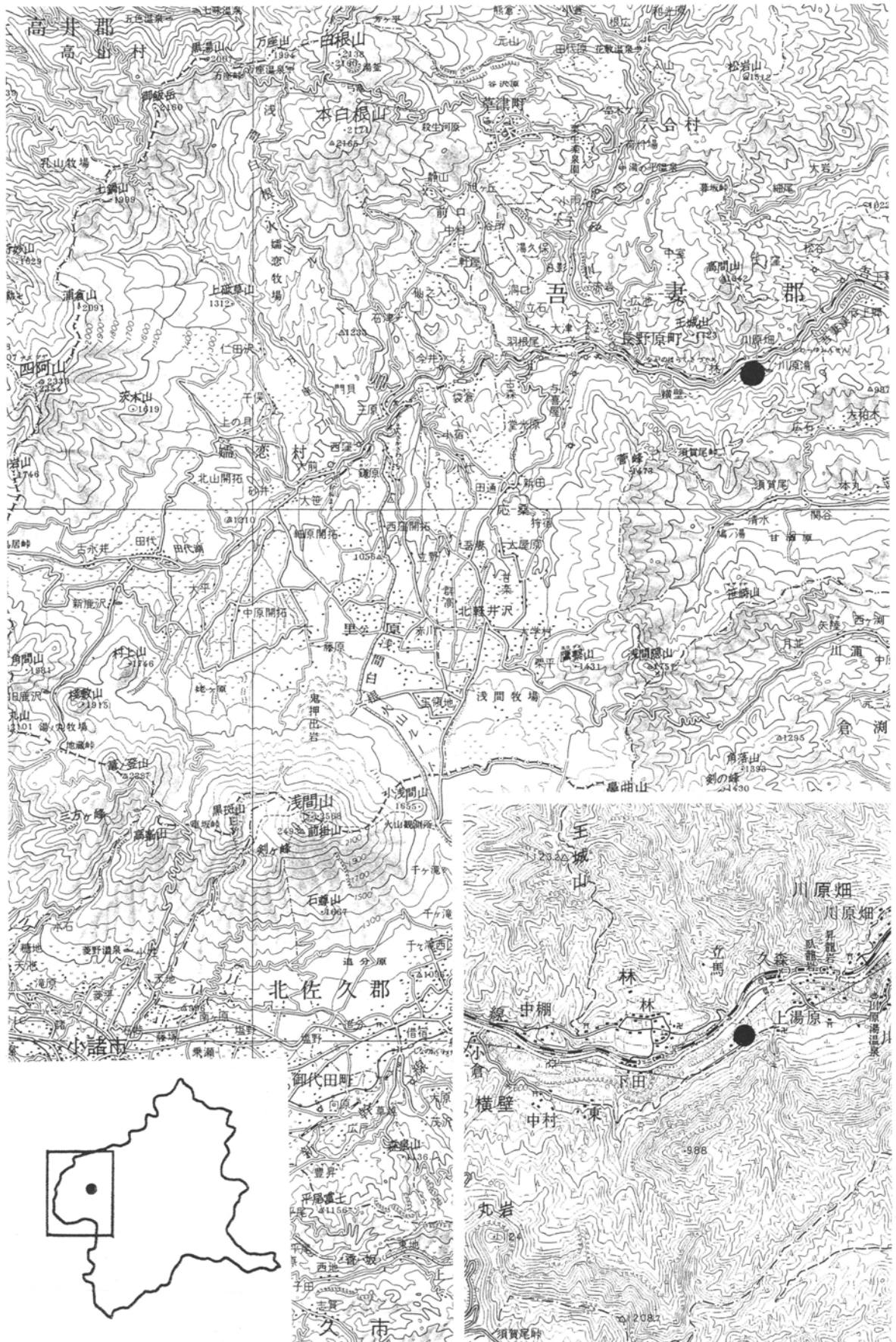


図2 調査遺跡位置図 (国土地理院 1 : 200,000 地勢図「長野」及び 1 : 50,000 地形図「草津」を使用)

3. 遺跡の環境

(1) 遺跡の立地

遺跡の所在する長野原町は群馬県の北西部に位置する。吾妻郡の西南隅に位置し、北部は吾妻川に沿って東西に延び、その西部から南に向け浅間高原を経て長野県に接している。町は地形から、高間、白根両山系と大洞山系によってはさまれた吾妻川流域地帯の北部と高原地帯の南部に大別される。

水源を上信国境の鳥居峠（1,362m）付近とする吾妻川には途中、万座川、熊川、白砂川さらに温川、四万川、名久田川等の支流が注ぎ込み、流長76.2kmからなる。渋川市街地付近で、全長322kmの利根川右岸に合流する。その間の比高差を利用した水路式発電所が、支流を併せ30か所近くあり、関東有数の電源地帯となっている。また、浅間山や白根山など第四紀の新时期火山帯が誕生する以前の古吾妻川は、今とは全く逆の上田・小諸方面に流れていたと推定されている。

この地域の地質の形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の北西部、長野県境に位置し、黒斑・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2,568mの成層火山である。約2.1万年前に黒斑火山の噴火で、「応桑泥流」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十m以上の厚さで埋めている。この堆積物とその後の浸食により、吾妻川の両岸に最上位と上位の段丘面が形成されたといわれている。浅間山は、この後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石（As-YPk、10,500～11,500年前？）の堆積が顕著である。また、天明三年（1783）の噴火により発生した泥流は下位段丘や中位段丘を数m～数十cmの厚さで覆っている。

町域の北部に該当する本遺跡群の位置は、「お辞儀をすると頭が山にぶつかる」とまでいわれ、東流する吾妻川に沿った山岳傾斜地帯である。吾妻川の両岸は長野原付近でやや幅が広く、岸に段丘が発達するが、川原湯から東では峡谷をなし、「吾妻峡谷」と称されている。北部の主な集落は吾妻川の河岸段

丘上にある。この段丘は、吾妻川からの比高差を基準に下位段丘・中位段丘・上位段丘・最上位段丘の4つに分類されており、各段丘面の現在の吾妻川からの平均的な比高差は、下位段丘で約10～15m、中位段丘で約30m、上位段丘で約60～65m、最上位段丘で約80～90mとなっている。吾妻川は強酸性の支流の流入により、酸性を帯びた水質となり魚類の生息に適さない状況であった。現在は、草津町にある中和工場で石灰投入による中和処理がおこなわれ水質改善がなされている。

遺跡の所在地周辺を俯瞰すれば、北に王城山（1,123m）、南に丸岩（1,124m）の2峰がそびえ、その谷間を東流する吾妻川の中位段丘と下位段丘を中心に遺跡が位置している（図2）。

国名勝の吾妻峡谷は、吾妻町松谷字上組の雁ヶ沢南方の弁天島から長野原町川原湯の八ッ場大橋に至る約4kmの吾妻川の溪谷をいう。安山岩を主とした火山砕屑岩が、吾妻川の浸食によって深い河谷と奇岩絶景がつくられたものである。大正元年（1912）秋、地理学者志賀重昂は九州耶馬溪に勝るとも賞賛し、「関東の耶馬溪」と称し有名になった。

溪谷の上流、JR吾妻線川原湯温泉駅の西方約2km、吾妻川に併行する国道145号線久森トンネル付近には露出している川原湯岩脈（国天然記念物）がみられ、このすぐ上流に本遺跡が所在する。

岩脈とは、マグマの一部が地中で固まったもので、長い時代を経て周りの岩石が浸食されて地表に現れたものである。2本の岩脈のうち東側のものは、ほぼ垂直で幅3m高さ約20mである。西側のものは、吾妻川の河床から潜って崖に垂直に幅7～8m高さ約50mにわたって確認することができる。両者とも岩脈に直角の方向に柱状節理が発達していて、この露頭の様子が竜の背を連想させるので、前者を昇竜岩、後者を臥竜岩と呼ぶ。岩脈の岩質は、輝石安山岩の変質したもので、貫入母岩は八ッ場安山岩とも呼ばれる。岩脈は約200万年、貫入母岩が約500万年前のものといわれ、昭和9年（1934）12月に国の天然記念物に指定された。この岩脈は、八ッ場

I 調査に至る経過と経緯

ダムが完成すれば、湖底に沈むことになる。

本遺跡は吾妻川右岸の中位段丘面上に広がる傾斜地および平坦地形で、北の急崖は、I区で約20m、II区で30mで吾妻川となる。段丘の南側には急峻な山地形が迫っていて、冬季の日照時間が極めて短い場所となっている。

遺跡の調査区は、およそ200mほど距離をおき、I区とII区と呼ぶ。

山の斜面と段丘面の交差する線に沿って、川原湯から横壁に至る町道が通る。途中に勝沼稲荷や道標などが所在していて、この町道はつい数年前まで利用されていた。しかし、「標高542m」の掲示板を掲げる上湯原橋の完成で、現在ではほとんど利用されなくなり、かつての姿を偲ぶ陰もない。

その町道の山際まで天明三年浅間泥流が1m以上の厚さで堆積している。遺跡の標高は、概ね530m～545mの範囲である。遺跡付近の吾妻川の水面標高は約510m～513mである。



本文写真1 川原湯勝沼遺跡II区 西→
(日照が不利な状況を確認する。平成15年11月26日撮影)

(2) 周辺の遺跡

長野原町内周辺の埋蔵文化財包蔵地や付近の歴史的環境をはじめ、周辺遺跡や近隣町村に分布する遺跡等については、既刊行の『ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡報告書』第1集(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第287集)、第2

集(同第303集)及び『林宮原遺跡II』(長野原町教育委員会2004)などに詳細に記述されているのでそちらを参照頂くことにして、これらの既刊の報告を頼りに、長野原町内の遺跡を概観しておく。

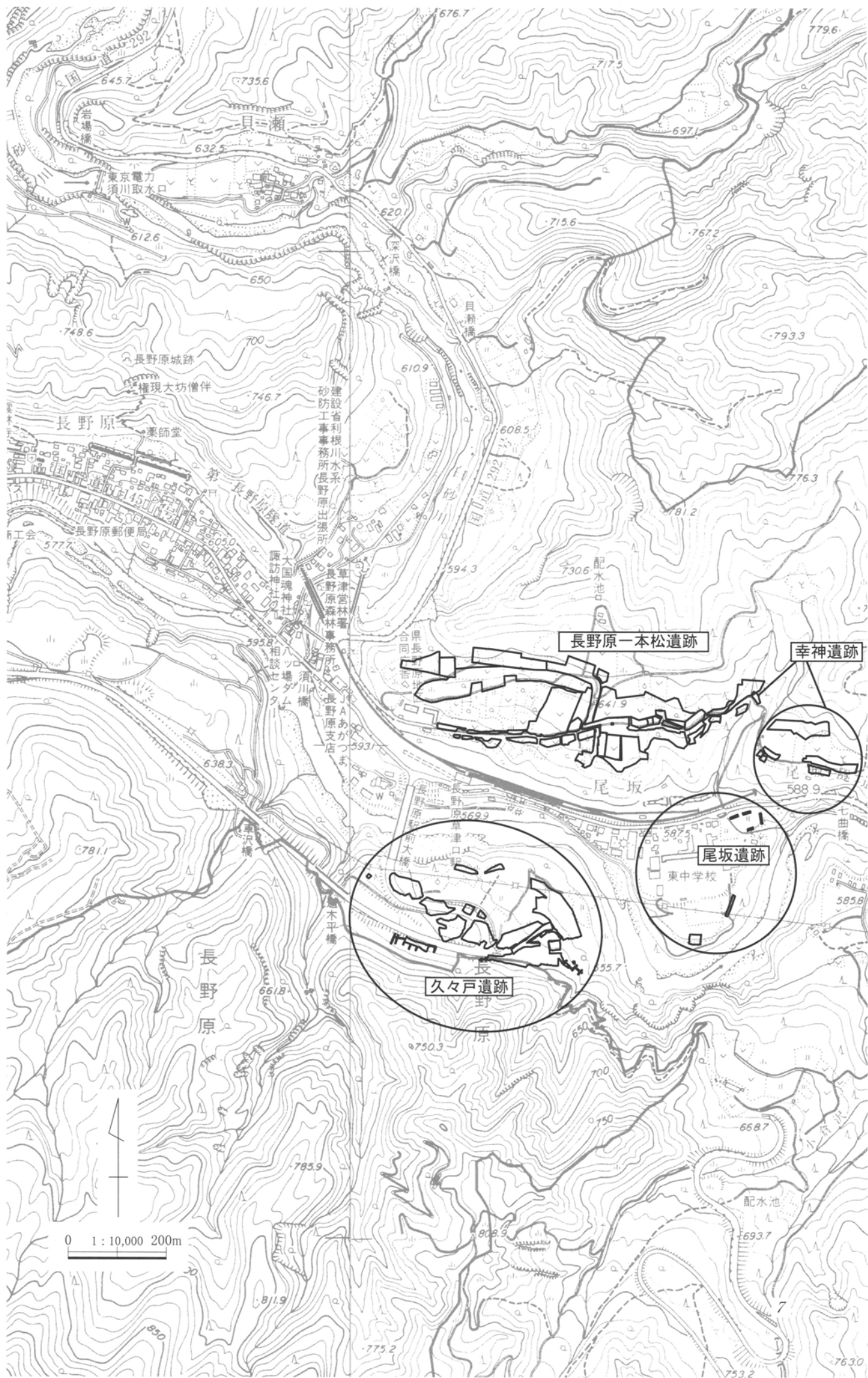
本書では、当事業団が、ダムサイト建設予定域の上流で、平成16年度までに実施した調査遺跡を図3と表1で示しておく。時代観など詳細については、今後の修正が求められる場合もあることを確認の上参照頂きたい。

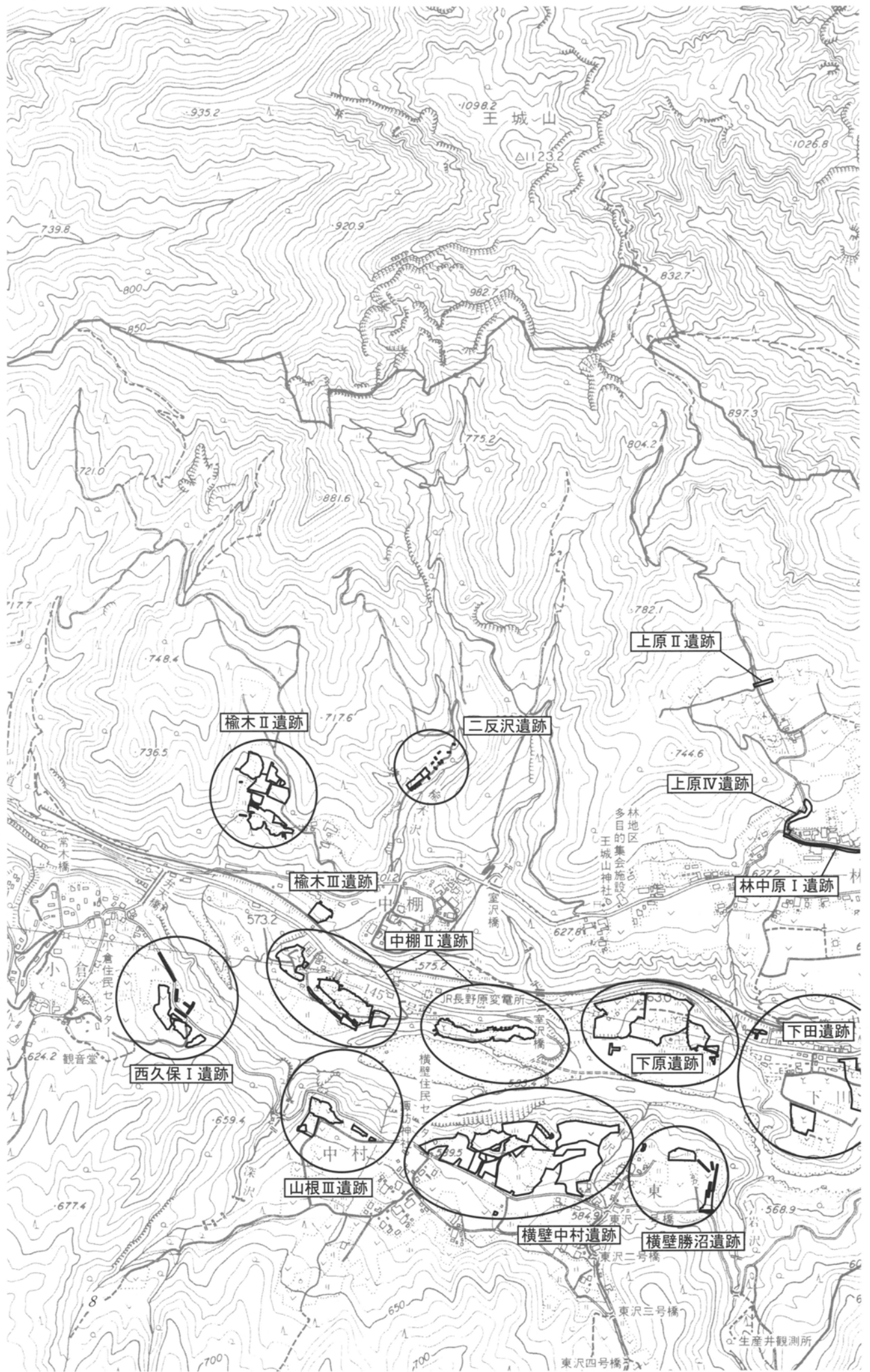
また、遺跡周辺地域の近世以降の長野原町内の歴史的な変遷は、同第3集(同第319集)に概観したので、ここでは重複を避けておく。

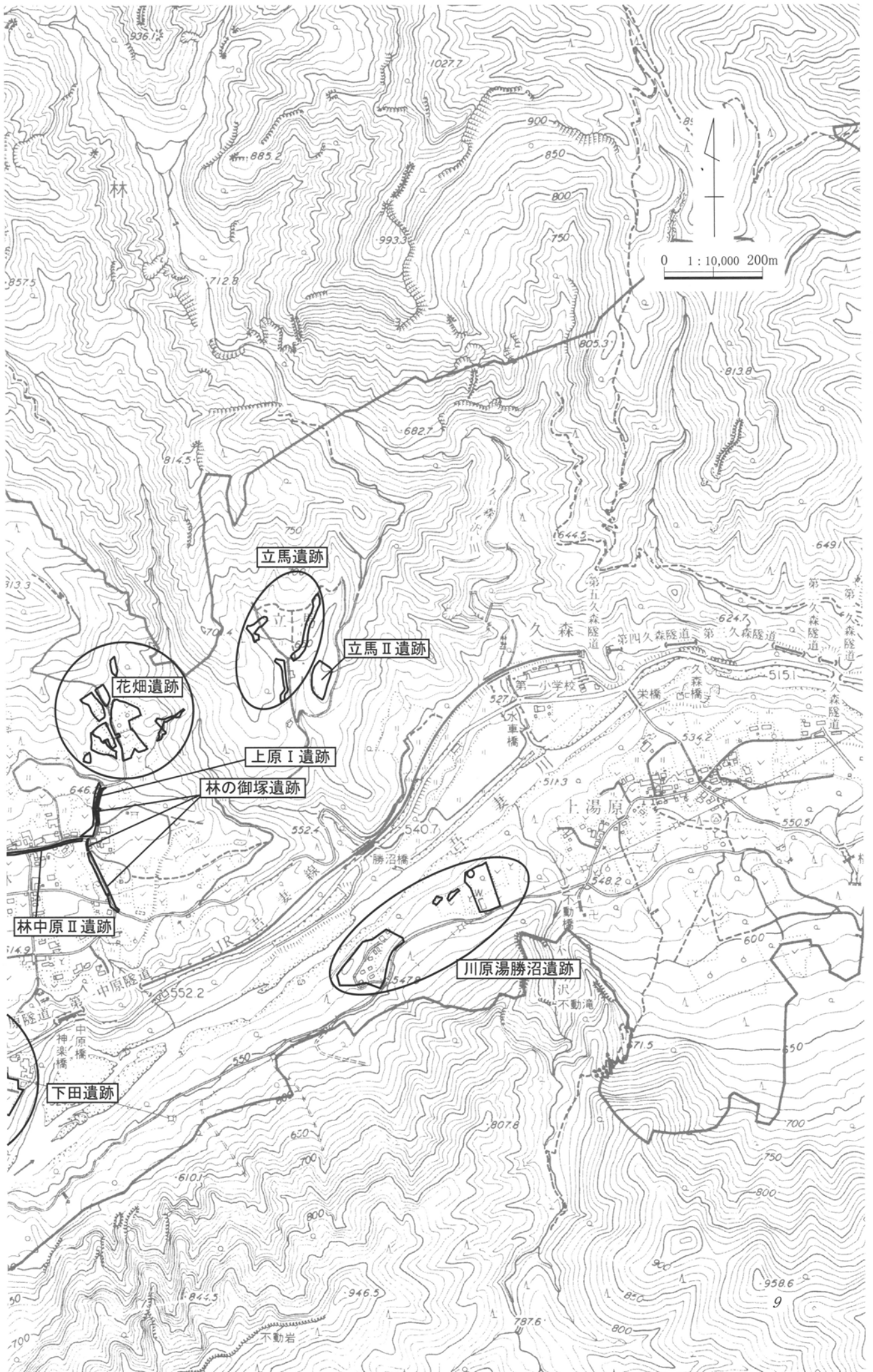
縄文時代 草創期～早期にかけての営みが確認されているのは、石畑I岩陰、楡木II遺跡、立馬I遺跡などである。前期の遺跡は、坪井遺跡、暮坪遺跡、長畝II遺跡、楡木II遺跡、立馬I遺跡などである。また、本遺跡でも先行調査で土坑が確認されている。中期は、楡木II遺跡、立馬II遺跡、西久保I遺跡、幸神遺跡、坪井遺跡、向原遺跡などで多くの遺跡が知られている。「勘場木石器時代住居跡」はこの時期のものである。ハツ場ダム建設工事関連で大規模な集落跡が確認されたのが、横壁中村遺跡や長野原一本松遺跡である。やや遺跡数が減る後期の遺跡は、櫛II遺跡、向原遺跡、上原IV遺跡、林中原I遺跡などである。前述の横壁中村遺跡や長野原一本松遺跡でも注目される敷石住居などが見つかっている。晩期は、横壁中村遺跡、立馬I遺跡、上原IV遺跡などで確認されている。境界線上に位置する本遺跡は、この時期に該当するものとして報告していく。

弥生時代 立馬I遺跡、長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、坪井遺跡、向原遺跡、外輪原I遺跡、上ノ平遺跡、石畑遺跡などで確認されている。

古墳時代 古墳時代の遺跡の存在は、これまでほとんど知られていなかった。近年、林宮原遺跡や下原遺跡で見つかっている。本遺跡においても遺構が確認され、少しずつ資料の蓄積がなされている。







I 調査に至る経過と経緯

ダム建設工事に伴う発掘調査では、さらに検出数が増加するものと考えられる。

(3) 天明三年浅間災害と被災遺跡

天明三年（1783）浅間山大噴火は群馬の風土を考える上でも大きな出来事であった。新暦8月5日に発生し、吾妻川を流下した天明泥流によって本遺跡は被災していた。史料から遺跡の所在する川原湯村の被害を抜き出せば、富沢久兵衛の「浅間山津波実記（浅間記）」では「川原湯：19軒流失14人死」となっている。また、付近には不動院と呼ばれた寺院や住職の被災に遭遇した様子なども記述されている。今後の発掘調査の進展でこれらの被害の状況が確認されることと考えられる。

遺跡が所在するハッ場ダム建設予定地域は、浅間山火口から見て直線距離で、北東方向に20km離れた吾妻川右岸に立地する。

これまでの天明三年浅間災害遺跡の発掘調査などの成果から判明している、この地域の天明三年浅間災害の状況と発掘調査に関連する経過を以下に記述しておく。

天明三年の浅間噴火は、5月9日に始まり、8月5日の大噴火で終息にむかう3か月の出来事であった。全体の噴火の中では極ローカルなものとする新暦6月26日降下の火山灰（概ね1mm厚）や、7月27日～29日にかけて降下した浅間A軽石（概ね1～3cm厚）が、遺構面に降下している。

8月5日の昼前頃の噴火に伴って発生した火砕流は、土石なだれ（岩屑なだれ）に変化し、旧鎌原村を埋め尽くし、吾妻川に流れ込んだ。そして、泥流と化して、吾妻川流域を呑み込み田畑を埋め尽くす未曾有の被害を発生させた。本遺跡はこの途中で被災したものである。泥流は渋川で利根川に合流し、銚子沖の太平洋にまで到達している。分流した後に、江戸川を流れ江戸湾へも流れ下った。これが「天明泥流」である。途中、県内で1,490人を超す犠牲者を出している。

噴火の最大の出来事であった8月5日の泥流被災

は、この発掘調査の根幹となる出来事で、当時の遺構面を厳封した。発生した災害は不幸であったが、降灰にも関わらず時節に則った農事が営まれた跡などが鮮明に残されている。

詳細な史料による期日の記録が残されており、これまでに発掘調査の成果から日付の単位で時節と農事の営みの復元を可能にしている。発掘調査と史料を農事暦からクロスチェックすることで、これまでに降下日時を検証するに至っている。

参考文献

（発掘調査報告書については、以下本文中は原則「群埋文第〇集」で表記する。）

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002「ハッ場ダム発掘調査集成（1）」第303集

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」第319集

II 遺跡の調査記録

1. 調査の概要

本遺跡では、先行して平成9年度に仮設道路及び上湯原橋建設に伴う発掘調査がおこなわれている(群埋文第303集)。本書で扱う調査区は、その東西に位置している。

平成15年度調査で、付替国道145号川原湯地区改良工事業に伴う部分Ⅰ区(旧A区、旧C区)と県道林吾妻線2号橋下部工事業に伴う部分Ⅱ区(旧B区)の2か所で調査を実施した。

Ⅰ区の調査では泥流面と一部下位面に畠などの遺構が確認された。調査区は住宅撤去に際して発生した廃棄物が放置されており、調査工程上難航を余儀なくされた。該当年度内には、上湯原橋の上流側のⅠ区と、下流に位置するⅡ区泥流面のみの調査が終了した。平成16年度は、残されたⅡ区第2面の調査が終了した。

本書で扱うⅠ・Ⅱ区は、「ハッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づく、26地区55・56・65・62・63・73区に該当する。

Ⅰ区では、天明泥流堆積物が1m前後の厚さで遺構面を被覆していた。畑・畠、ヤックラ、道、溝などを順次確認し、最終的に本書で集約した。いくつかの畑には堆肥置場と推定される平坦面が確認されている。川原湯と横壁を結ぶ街道と推定できる古道も確認されている。泥流面の下位には、時期不明の溝、さらに下位には、平安時代に降下した浅間山起源の火山灰(浅間粕川テフラ=As-Kk, 1128年)を耕作により攪拌した畠跡が見つまっている。しかし、廃棄物の処理と競合して、範囲やその性格について、詳細に調査することは出来なかった。

Ⅱ区の天明泥流面では、大きく3筆の泥流畑が見つかり、その境界は不要な礫や踏分道で明確に区画されていた。調査区の北の吾妻川寄りの、径10mほどの円形範囲は、橋脚建設予定地で、既に調査終了の判断がなされていたために、畑の範囲確定には

不十分な調査となってしまっている。

下位面の第2面は縄文時代～平安時代の遺構と遺物が確認された。発掘調査では、埋甕、土坑、ピット、焼土、平安住居などを確認した。各時代が僅かな土層の中に存在していて、上記すべての時代が第2面として検出された。

特に、縄文時代の遺構として、埋甕3基を検出したがそのうち2基はわずか30cmで隣接する状態で見つかった縄文時代晩期終末期のものである。これまで、県内での出土例も少なく、資料的な価値が高い。また、この時期に関連する土坑も数基確認されている。

古墳時代の土坑から出土した土師器や河道付近から出土した剣形石製模造品は5世紀代に帰属するものと見られ、長野原町内の周辺遺跡では、これまでほとんど見つかっていない時期の遺物である。近接した時期の遺物は、最近少しづつ確認され始めてきており、調査事例の蓄積として注目できる資料が見つかったことになる。

平安時代の住居のうち1軒は、拡張されたものである。いずれの住居も、甕や坏といった遺物の特徴から、9世紀代に帰属すると考えられる。

2. 基本土層

Ⅰ区基本土層

- 第Ⅰ層 天明泥流堆積物。
- 第Ⅱ層 浅間A軽石 黄白色。最大径16mm、層厚2cm。粒径2～4mmを中心とする軽石。
- 第Ⅲ'層 褐色土 砂質。粒径細かく、粘性なし。やや締まりあり。泥流畑作土。
- 第Ⅳ層 暗褐色土 2～5cm大の角礫を少量含む。粘性ややあり。粒径ややあらい。
- 第Ⅴ層 暗褐色土 粒径ややあらい。やや粘性あり。締まりあり。
- 第Ⅵ層 褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(2～5cm大)を多く含む。
- 第Ⅶ層 浅間粕川テフラ。
- 第Ⅷ層 黒褐色土 粒径やや小さい。やや粘性あり。

II 遺跡の調査記録

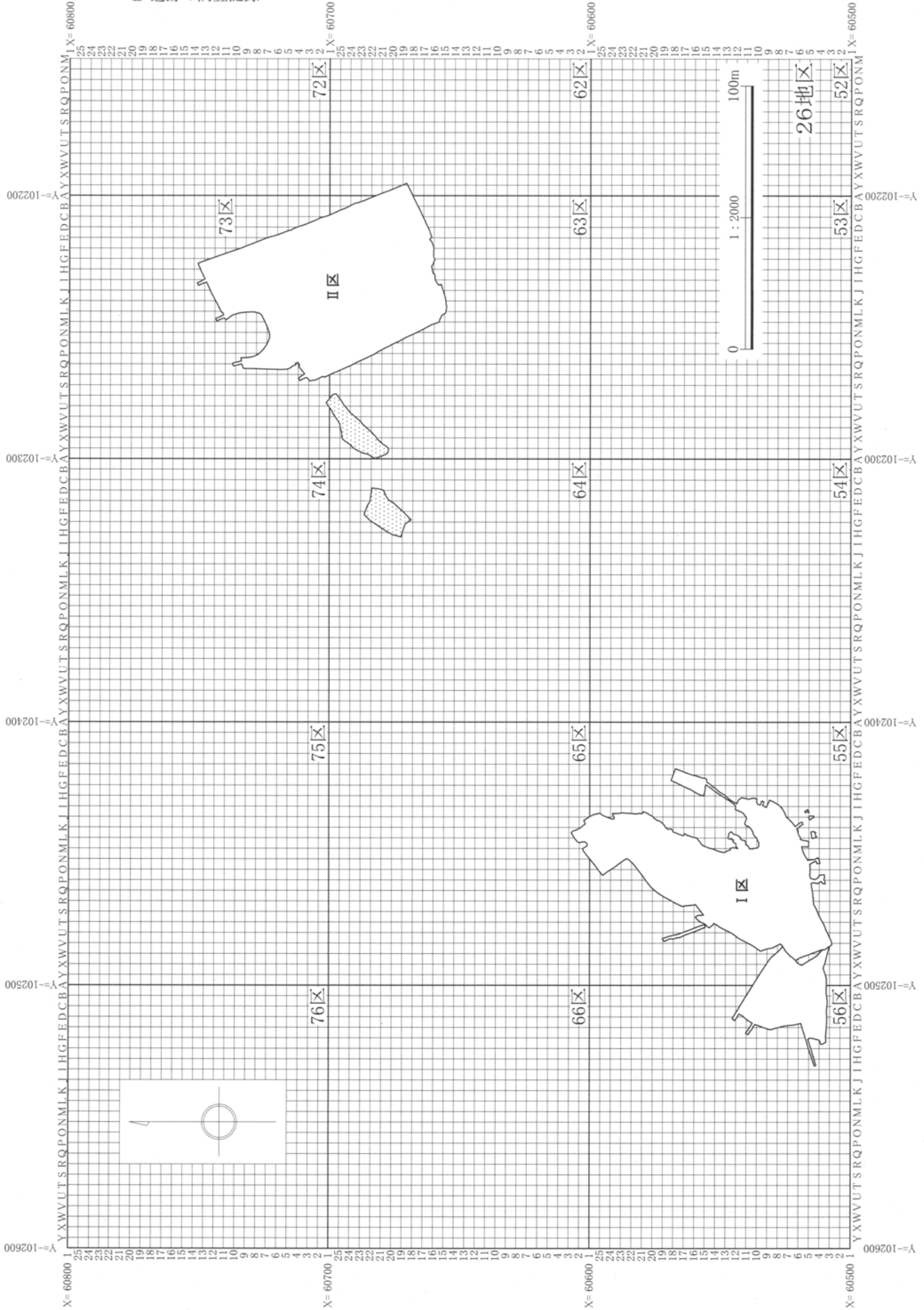


図4 川原湯勝沼遺跡グリッド設定図 (網掛けは群理文発掘調査報告書第303集による)

川原湯勝沼遺跡

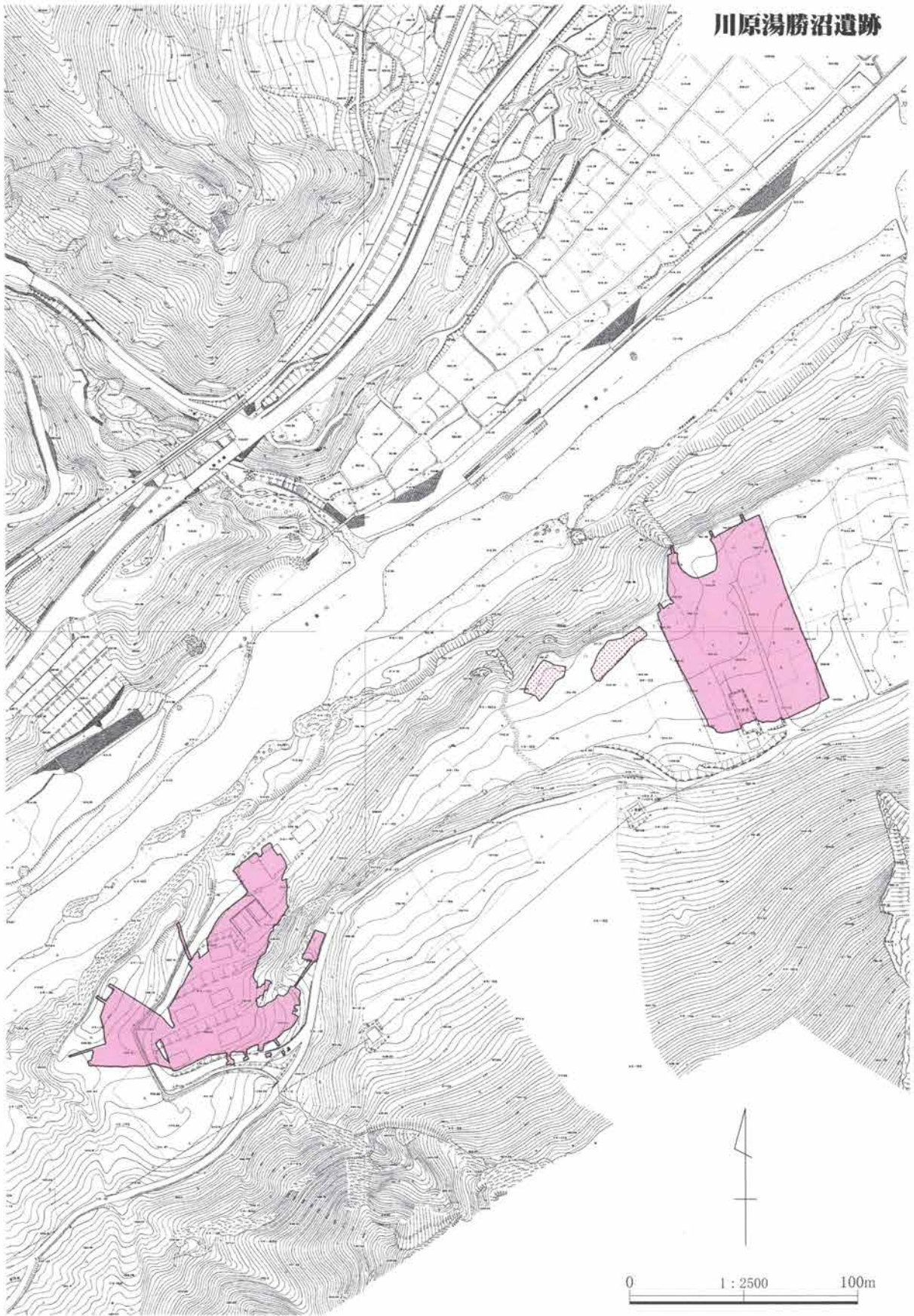


図5 川原湯勝沼遺跡位置圖 (1:2500)

II 遺跡の調査記録

締まりあり。

第IX層 黄褐色土 粒径あらい。粘性なし。5～10cm大の角礫を多く含む。

第X層 砂層 上位より褐色、灰褐色、褐色の色調異なる互層。粒径細かく、全体的に鉄分の沈着あり。粘性なし。

第XI層 黄褐色土 円礫（径5～10cm）を伴う砂礫層。

II区基本土層

第I層 表土

第II層 天明泥流堆積物。

第III層 As-A軽石 粒径の観察から、黄白色の軽石は①大（径20mm）②中（径10mm）③小（径5mm以下）で3区分は可能と考える。径1mm程度の発泡しない黒色味のあるスコリア状の火山灰を含んでいる。

第IV'層 暗褐色土（7.5YR 3/4）締まりあり。礫少ない（5%未満）。鉄分の沈着が見られる。多少粘性あり。泥流畑作土。

第IV層 暗褐色土（7.5YR 3/4）締まりあり。IV'より多少礫多い（5～7%）。

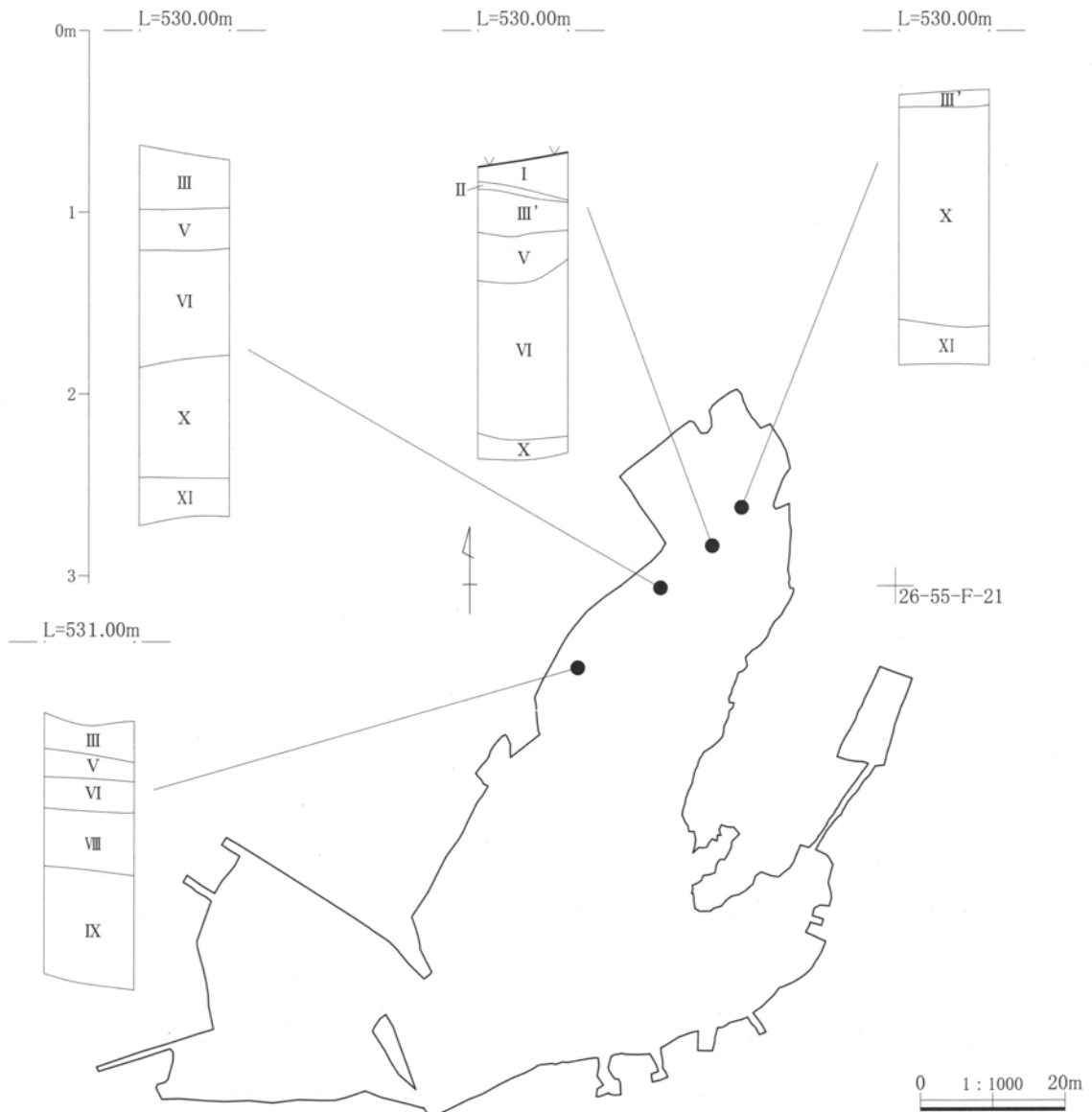


図6 I区 基本土層図

3. 泥流面の調査

第V層 黒褐色土 (7.5YR 2/2) 締まりあり。やや砂質味強く、ザラつく。

第V'層 黒褐色土 (7.5YR 2/2) 礫少ない (5%未満)。泥流畑作土。

第VI層 極暗褐色土 (7.5YR 2/3) 稀に浅間柏川テフラを上位に含み、黄色パミスを少量含む。

第VII層 やや粘性の強い黒色土。

第VIII層 調査区西側には見られない黄色軽石を少量含む。

第IX層 固く締まり黄色・白色軽石を含む。

第X層 礫層。

3. 泥流面の調査

(1) 畑の全体構造

発掘調査段階で、単位畑を含めて畑49、畠1を確認していたが、最終的に本書で遺構番号を含め、整理集約した。特に、畑遺構に関しては、これまでの調査で「単位畑」の視点を用いて、個別に遺構番号を付し、整理段階で表記の通り改めた。

平坦面はI区で3か所、II区で26か所確認され、いずれも、単位畑に1か所ずつ配されている。「単位畑」の集合を「中単位」とし、単位畑や中単位の集合により1筆の畑が構成されている。このことを、枝番号を用いて整理する方法で整理した(『群埋文第319集』367頁)。また、各単位畑では、耕作の状態を畝の断面形状から集約できる、というこれまでの泥流畑の調査成果による「1類から9類の畝断面状況説明一覧」を適用した(『群埋文第319集』359頁)。また、あわせて適宜「長野原地区の農事暦」を参照されたい(『群埋文第319集』357頁)。

調査区は、I区及びII区のはほぼ全面で泥流畑を確認した。前述したとおりI区は、廃棄物の投棄がなされ発掘調査と競合し調査区内に浮島状の未着手部分が出来てしまい、十分な畑構造の解釈をおこなえるだけの成果を得るには至らなかった。II区においても、試掘により「今後本格的な発掘調査の必要なし」の措置がとられている部分があり、KA10号畑の全体構造を把握するだけの十分な成果を得るには

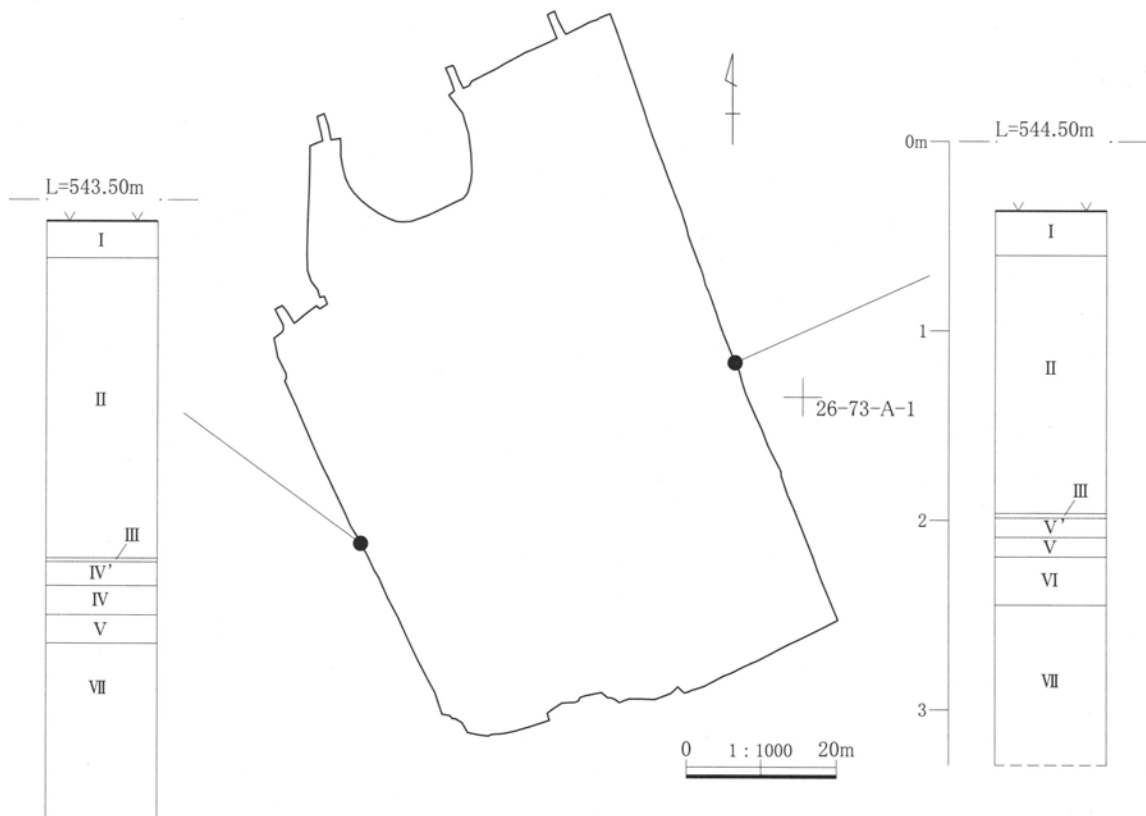


図7 II区 基本土層図

II 遺跡の調査記録

至らなかった。

各畑の計測値等の一覧は、表2を参照頂きたい。
 なお、面積の算出については、デジタル化した遺構平面図を用いてCADソフトによる計測をおこなった。また、畝幅については、直接現地で適切と判断する範囲を定め、巻き尺を用いて計測し、該当の条数で除して求めた。

等高線耕作が基本であるが、KA 6号畑では、異なるサクキリがおこなわれている。また、畝幅は他と異なる。これは、既に報告されている下原遺跡のS 4号畑の例とよく似ている。

(2) 畑

I 区でKA 1～8号畑を、II 区でKA 9～11号畑をそれぞれ確認した。

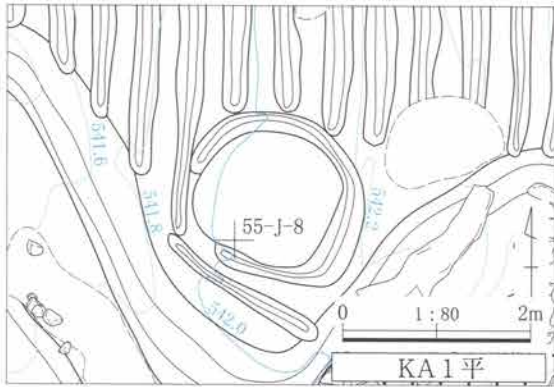
KA 1号畑では、平面台形を呈し、一部調査区際になるため、拡張トレンチにより範囲推定をおこなった。面積は推定部分を含んでいる。最大斜度11°を計測する。もとの形はおよそ100㎡=30坪にあてはまる面積を計測した。耕作状況は、2類である。この畑にあるKA 1号平坦面（断面図は図31を参照）は、1.5m×1.3mのほぼ円形を呈し、幅12～38cmの溝が廻る。溝は全周しない。KA1号畑の南端、1号道寄りに配置されている。このことは、堆肥を運び込むなど、作業性を重視する遺構の機能を解釈するのに分かり易い。また、畝断面図で確認するように浅間A灰と仮称してきた浅間山起源の火山灰を厚さ約1mmで確認する。注記や土色については、KA 2-2号畑 a-a' を、分析結果は、III章を参照

表2 畑計測値等一覧表

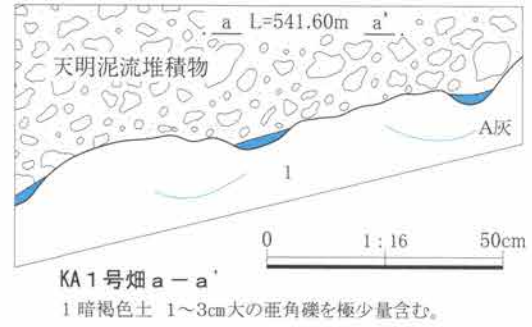
*1 尺換算は曲尺:1尺=10/33mを用い、「参考」は同畑内の別計測地点を指す。

畑名	単位畑名	単位畑			畑面積			分類	平坦面 平坦面名	畑名	*1				
		面積㎡	畝	歩	斜度	面積㎡	反				畝	歩	畝幅:m	相当尺寸	
KA 1畑	KA 2-1畑	177	1	23	11	101	1	0	2類	KA 1平	KA 1畑	0.50	1.66		
	KA 2-2畑	254	2	16	11	(1244)	1	2			16	KA 2-1畑	0.54	1.77	
	KA 2-3畑	330	3	9	13							KA 2-2畑	0.52	1.70	
	KA 2-4畑	(423)	4	7	7							KA 2-3畑	0.57	1.88	
	KA 2-5畑	(60)	-	-	5							KA 2-4畑	0.54	1.77	
KA 3畑	-	-	-	6	(216)	-	2	5	8類	KA 2-5畑	0.52	1.72			
KA 4畑	-	-	-	5	(270)	-	2	21	8類	KA 3畑	0.53	1.73			
KA 5畑	-	-	-	-	-	-	-	-	6類	KA 4畑	-	-			
KA 6畑	-	-	-	12	(71)	-	-	21	-	KA 5畑	-	-			
55区1畝	-	-	-	7	(50)	-	-	15	-	KA 6畑	0.83	2.75			
KA 8畑	KA 8-1畑	167	1	20	2	(291)	-	-	28	2類	KA 8-1平	KA 8-1畑	0.48	1.58	
	KA 8-2畑	(110)	1	3								3類	KA 8-2平	0.45	1.49
	KA 8-3畑	(14)	-	4								KA 8-3畑	0.49	1.62	
	KA 8-4畑	(4)	-	1								2類	KA 9-1畑	0.45	1.49
KA 9畑	KA 9-1畑	(4)	-	1	2	(332)	-	-	10	9類	KA 9-2平	KA 9-2畑	0.46	1.53	
	KA 9-2畑	(320)	3	6								4類	参考	0.48	1.57
	KA 9-3畑	-	-	-								KA 9-3畑	0.48	1.58	
	KA 9-4畑	-	-	-								KA 9-4平	0.48	1.59	
	KA 9-5畑	(8)	-	2								4類	KA 9-5畑	-	-
KA 10畑	KA 10-1畑	(140)	1	12	3	(2806)	2	8	8	1類	KA 10-2平	KA 10-1畑	-	-	
	KA 10-2畑	(91)	-	27								1類	KA 10-2畑	0.49	1.62
	KA 10-3畑	-	-	-								1類	KA 10-3平	0.46	1.53
	KA 10-4畑	385	3	26								1類	KA 10-3畑	0.46	1.52
	KA 10-5畑	-	-	-								9類	参考	0.46	1.52
	KA 10-6畑	-	-	-								KA 10-4平	0.47	1.56	
	KA 10-7畑	180	1	24								9類	参考	0.47	1.54
	KA 10-8畑	-	-	-								6類	KA 10-5平	0.47	1.54
	KA 10-9畑	-	-	-								5	KA 10-5畑	0.47	1.54
	KA 10-10畑	204	2	1								4類	KA 10-6畑	0.50	1.65
	KA 10-11畑	-	-	-								3類	KA 10-7畑	0.49	1.61
	KA 10-12畑	87	-	26								4類	KA 10-8畑	0.50	1.65
	KA 10-13畑	(75)	-	22								3類	KA 10-9平	-	-
	KA 10-14畑	-	-	-								2類	KA 10-10平	-	-
	KA 10-15畑	-	-	-								2類	KA 10-11平	-	-
	KA 10-16畑	(321)	3	7								2類	KA 10-12畑	0.53	1.75
	KA 10-17畑	-	-	-								1類	KA 10-13畑	0.51	1.68
	KA 10-18畑	-	-	-								5類	KA 10-14畑	0.46	1.52
	KA 10-19畑	-	-	-								2類	KA 10-15畑	0.47	1.53
	KA 10-20畑	90	-	27								1類	KA 10-16畑	0.56	1.85
KA 10-21畑	109	1	2	5類	KA 10-17畑	0.46	1.52								
KA 10-22畑	(103)	1	1	9類	KA 10-18畑	0.48	1.57								
KA 10-23畑	-	-	-	9類	KA 10-19平	0.47	1.55								
KA 10-24畑	-	-	-	2類	KA 10-20畑	0.53	1.73								
KA 10-25畑	(393)	3	28	1類	KA 10-21畑	0.46	1.52								
KA 10-26畑	-	-	-	5類	KA 10-22畑	0.43	1.42								
KA 10-27畑	-	-	-	5類	KA 10-23平	0.45	1.47								
KA 10-28畑	314	3	4	9類	KA 10-24平	0.49	1.62								
KA 10-29畑	-	-	-	9類	KA 10-25平	0.50	1.65								
KA 10-30畑	(314)	3	4	2	KA 10-26平	0.49	1.62								
KA 10-31畑	-	-	-	9類	KA 10-27平	0.51	1.69								
KA 11畑	KA 11-1畑	-	-	-	5	(578)	-	-	24	2類	KA 11-1平	KA 10-28畑	0.51	1.68	
	KA 11-2畑	(311)	3	4								3類	KA 10-29畑	0.49	1.62
	KA 11-3畑	-	-	-								8類	KA 10-30畑	0.45	1.49
	KA 11-4畑	(202)	2	1								KA 10-31畑	0.44	1.46	
	KA 11-5畑	(65)	-	19								KA 11-1畑	0.43	1.40	
	KA 11-6畑	-	-	-								KA 11-2畑	0.53	1.73	

3. 泥流面の調査

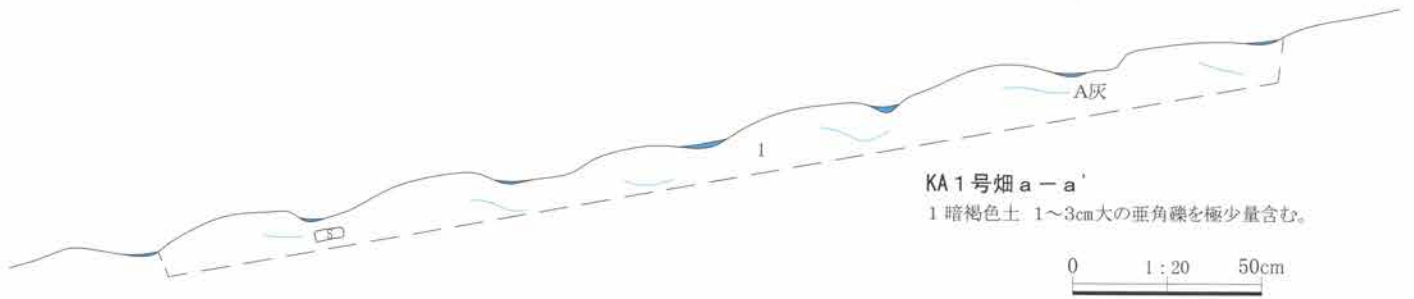


a L=542.00m a'



KA 1号畑 a-a'

1 暗褐色土 1~3cm大の亜角礫を極少量含む。



KA 1号畑 a-a'

1 暗褐色土 1~3cm大の亜角礫を極少量含む。

図8 KA 1号畑

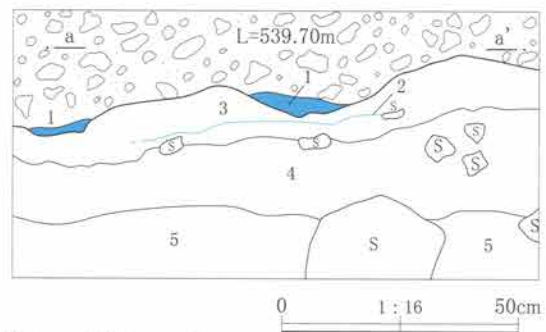
されたい。畝の変遷と降灰の過程は、間作の農事で説明される（『群埋文第303集』）。

KA 2号畑は、耕作状況からKA 2-1~5号畑に区分けした。途中、攪乱や未調査部分が多く、詳細については確認しきれない。原形は、8号ヤックラや11号ヤックラ付近で、南北に分断される形態であったかもしれない。畝サクの方向の変換点の存在のみではなく、地形の傾斜角度の異なりやヤックラの存在などもその推定の理由と考えた。このことは、礫層で構成される5号ヤックラやKA 6号畑を取り除いて考えると、うまく説明できるという視点をもった。

KA 2号畑は、平坦面が未検出である。KA 2-5号畑は、さらに調査区外へと延びていく。KA 2号畑は、泥流中の礫による攪乱が顕著である。耕作状況は2類である。

KA 2-2号畑 a-a' の2層に示されるのは、浅間A灰層である。これについては平坦な場所に堆積した僅かな厚さの火山灰であることがわかる。

KA 3号畑は、微妙な高低差による畝の痕跡と判断した畑跡である。畝サクの走行は、等高線耕作を示している。KA 4号畑やKA 8-1号畑との平面比較すると、等高線に直行する方向への短冊状の区割りが確認できるが、未調査部分が多く詳細は不明

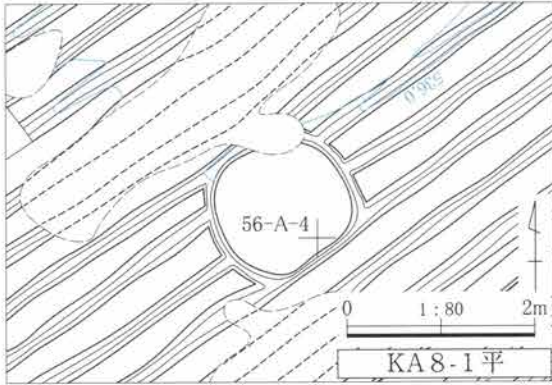


KA 2-2号畑 a-a'

- 1 As-A軽石 最大径18mm。径2~5mm大を中心とする。
- 2 As-A灰(5R7/1明赤灰) 3層中に厚さ1mmで不規則に堆積する。
- 3 暗褐色土 3~5cm大の亜角礫を少量含む。KA2-2畑作土。
- 4 黒褐色土 やや粘性あり。亜角礫は3層より少ない。
- 5 黄褐色土 砂質味強く、締まりやや強い礫層。最大30cm大の亜角礫を多く含む。

図9 KA 2号畑

II 遺跡の調査記録



である。耕作状況は8類と判断した。

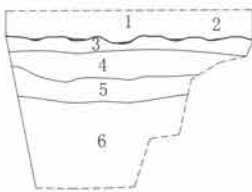
KA 4号畑は、KA 3号畑での記述と同様である。KA 3号畑とは、9号ヤックラにより明確に区分けされている。耕作状況は8類と判断した。

KA 5号畑は、3号道に区画され、その西側に位置している。畝サクは確認されない。大きな礫は残されているが、全体的に礫の少ない原野のような状態から畑としたが、検討を要するかもしれない。なお、3号道に面して、55区O-20グリッド付近には、径70cm内外で深さ70cm以上の規模の樹根痕と思われる空洞を確認した。耕作状況は、6類とする。

KA 6号畑は、唯一等高線耕作がなされていない

A L=537.00m

A'



KA8-1号畑A-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 天明泥流堆積物。
- 2 As-A軽石 厚1cm程度。
- 3 褐色土(10YR4/4) 粒径ややあらい。縮まりあり。粘性なし。1~5cm大の角礫を5%含む。泥流畑作土。
- 4 褐色土(10YR4/4) 粒径ややあらい。縮まりあり。粘性なし。5~20cm大の角礫を30%含む。
- 5 黒褐色土(10YR2/3) 粒径細かい。縮まりあり。粘性なし。泥流面の下位土壌に相当。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粒径細かい。縮まりあり。粘性なし。2~20cm大の角礫を30%含む。

B L=539.00m

B'

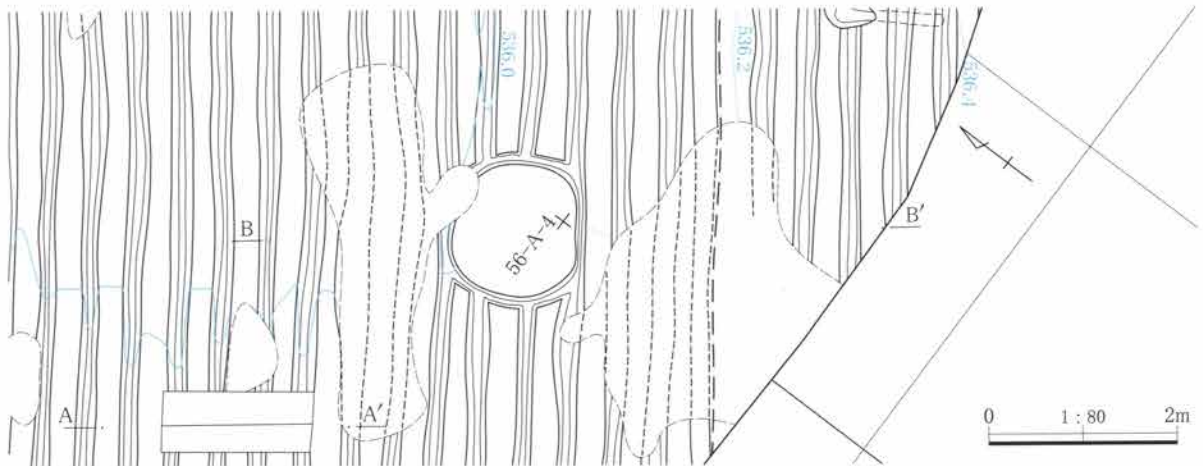
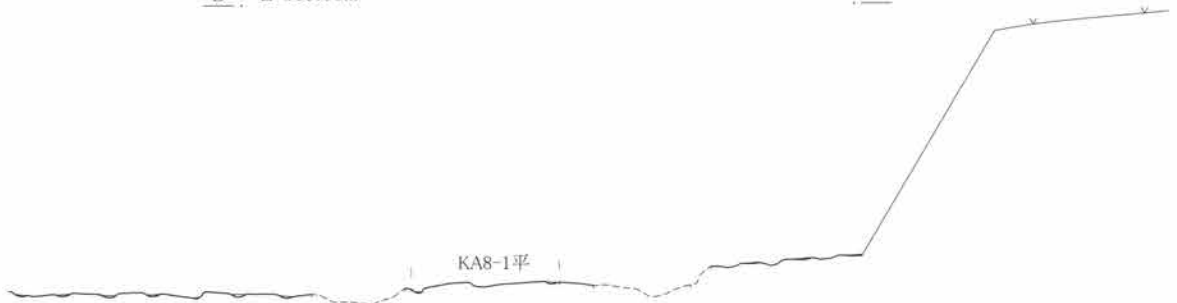


図10 KA8号畑(1)

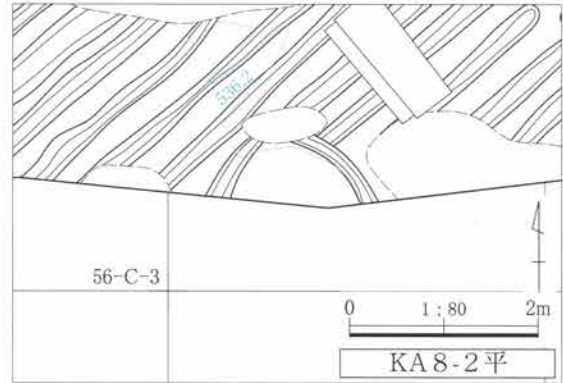
3. 泥流面の調査

形状の畝サクが確認されているが、残存状況は不良で走行を確認するに留まった。耕作状況は9類の可能性もあるが、不確定としておく。

KA 8号畑は、南が調査区外となるために詳細は不明であるが、3枚以上の単位畑で構成されている。KA 8-1号畑は2類、KA 8-2号畑（出土遺物：3）とKA 8-3号畑は畝の断面形状から3類であることを確認している。KA 8-1号平坦面は、1.4m×1.3mのほぼ円形を呈し、KA 8-1号畑のサクと直結する。幅12cmの溝が廻る。これは、民俗的な「コヤト」の復元と重ね合わせても、平坦面を構築する際の溝を一周させた農具の幅に制約された、という追証になるものかもしれない

（『群埋文第319集』364頁）。サクが溝と重なっている。平面部分は、概ね4cmの高低差に収まっている。

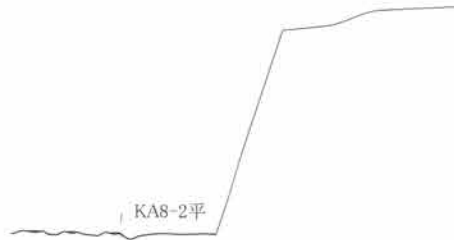
KA 8-2号平坦面は、調査区外へと延びるため平面形状を確認することは出来ないが、幅16~24cmの溝が廻り、径は1.4m以上である。



A L=537.00m A'



B L=539.00m B'



KA 8-2号畑A-A'

- 1 褐色土(10YR4/4) 粒径ややあらい。縮まりあり。粘性なし。泥流畑作土。1~5cm大の角礫を5%含む(1'は培土)。
- 2 As-A軽石 厚1cm程度。
- 3 褐色土(10YR4/4) 粒径ややあらい。縮まりあり。粘性なし。5~20cm大の角礫を30%含む。
- 4 赤褐色土(2.5YR4/8) 粒径ややあらい。縮まりあり。粘性なし。5~10cm大の角礫を50%含む。
- 5 黒褐色土(10YR2/3) 粒径細かい。縮まりあり。粘性なし。泥流面の下位土壌に相当。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粒径細かい。縮まりあり。粘性なし。2~20cm大の角礫を30%含む。礫層。
- 7 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粒径細かい。縮まりあり。粘性なし。砂層。

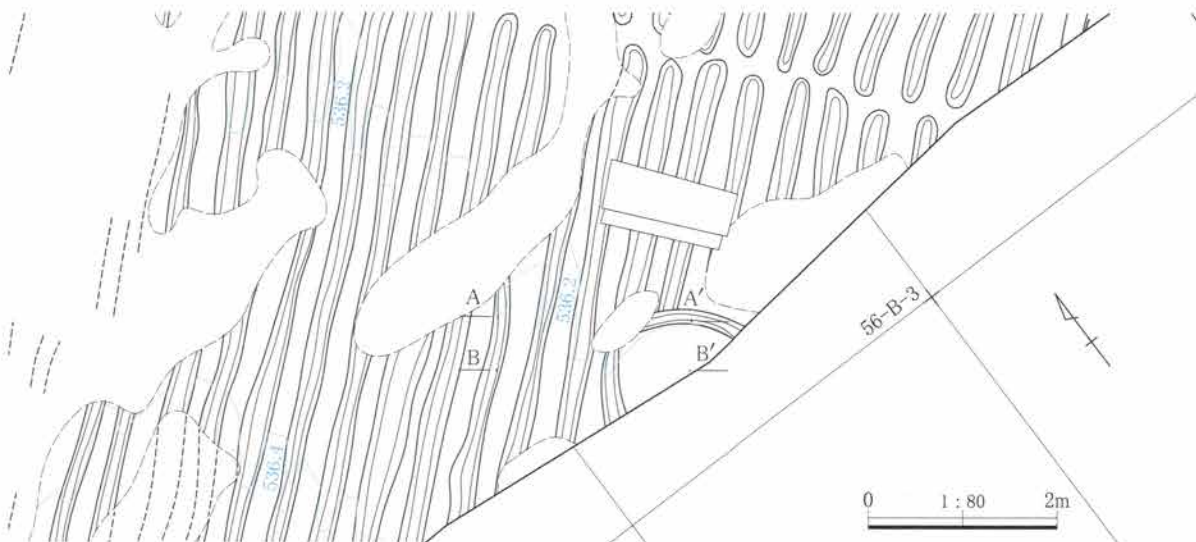
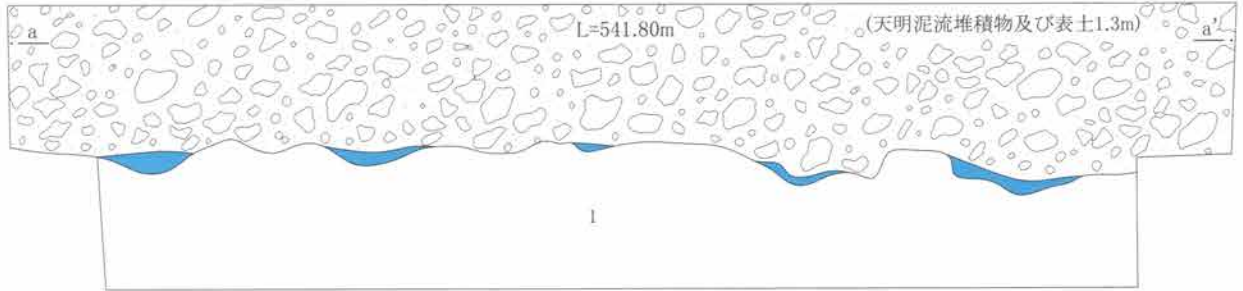


図 11 KA 8号畑 (2)

II 遺跡の調査記録

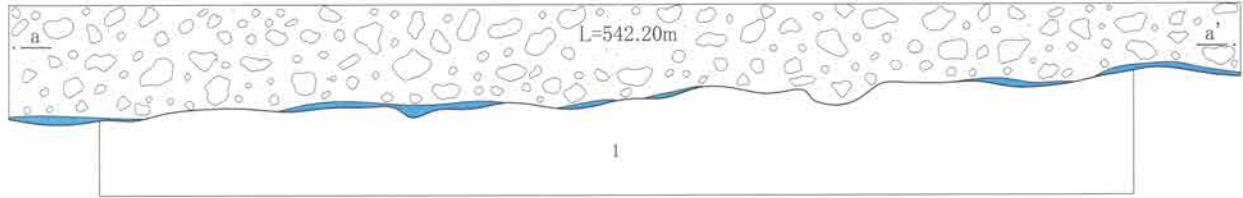
KA 9-1号畑は、その大半が調査区外となっているために、詳細は不明である。畝の断面形状からは、2類である。KA 9-2~4号畑は、やや残存状況は不良であるが、耕作状況は9類と考えられる。

KA 9-5号畑（出土遺物：9）は、荒起こしがおこなわれた4類である。KA 9号畑では、いずれも詳細は東側周辺調査の結果を待つ必要がある。KA 9-2号平坦面は、1.4m×1.3mの円形を呈



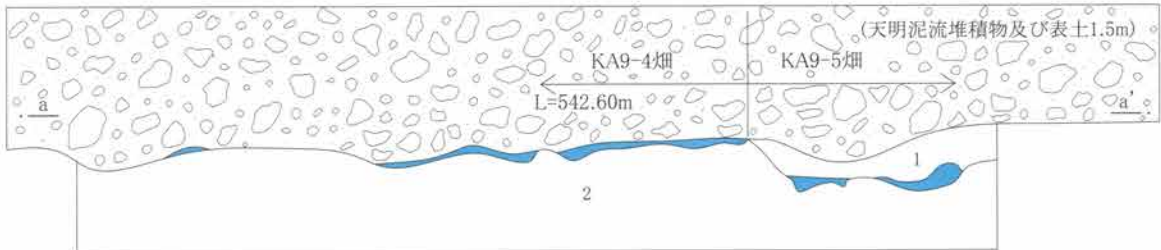
KA 9-1号畑 a-a'

1 黒褐色土 礫僅かに含む。A軽石とは異なる白色軽石を僅かに含む。



KA 9-3号畑 a-a'

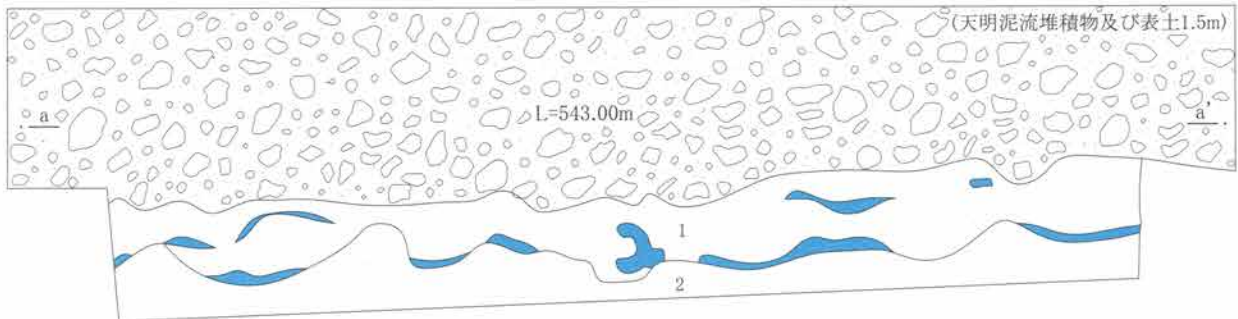
1 暗褐色土 やや締まりあり。小礫を15%含む。



KA 9-4号畑 a-a'

1 暗褐色土 締まり強い。小礫を5%とA軽石を1~2%含む。

2 暗褐色土 締まり強い。小礫を5%含む。



KA 9-5号畑 a-a'

1 暗褐色土 A軽石を含み、締まりなし。

2 暗褐色土 やや締まりあり。小礫を5%含む。

0 1:16 50cm

図 12 KA 9号畑 (1)

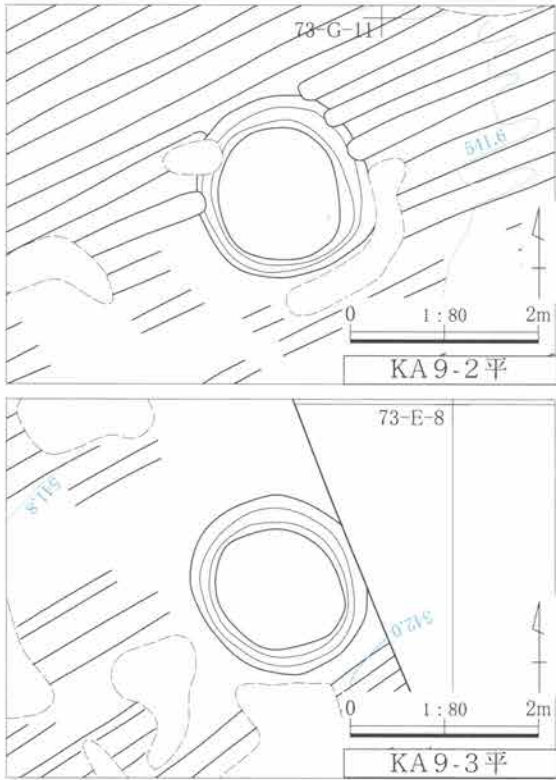


図13 KA9号畑(2)

し、幅18～34cmの溝が廻る。平坦部分の高低差は2cmの範囲に収まっている。KA9-3号平坦面は、1.3m×1.3mの円形を呈し、幅22～34cmの溝が廻る。KA9-4号平坦面は、その大半が調査区外に延びており詳細を確認することが出来なかった。全体構造把握のために、平坦面が畑内に所在していたことだけを確認しておく。

15号ヤックラやそれに伴う踏分道で区画された西側がKA10号畑である。KA10-1号畑(出土遺物:10)は、耕作状況は4類である。北側はトレンチで範囲確認をし、140㎡の計測値を推定した。KA10-2号畑(出土遺物:60)は、今回調査に至らない部分に該当し、不詳である。おそらく、2ないしは3筆の単位畑に分かれ、平坦面を配していたものと考えられる。畝断面の実測は不明確であるが、耕作状況は1類である。部分的な検出作業ではあるが、栽培作物の倒伏痕跡を確認した。長葉脈をもち最大で50cm内外に生長しており、根部に至る空洞も確認され、株痕跡も把握できた。泥流被災時には、畝

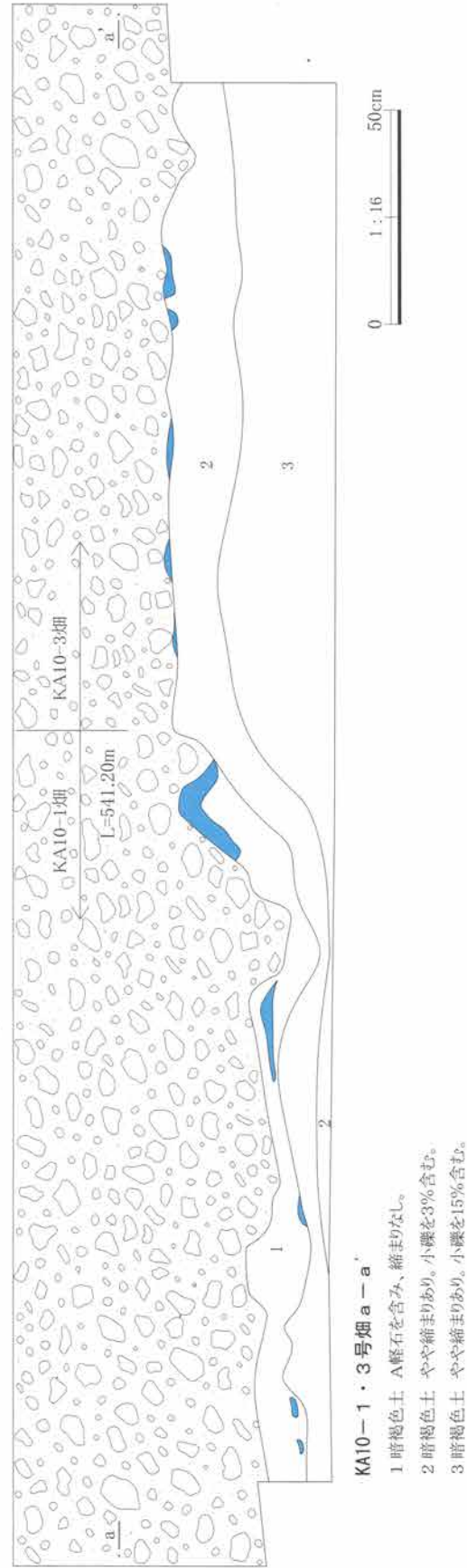


図14 KA10号畑(1)

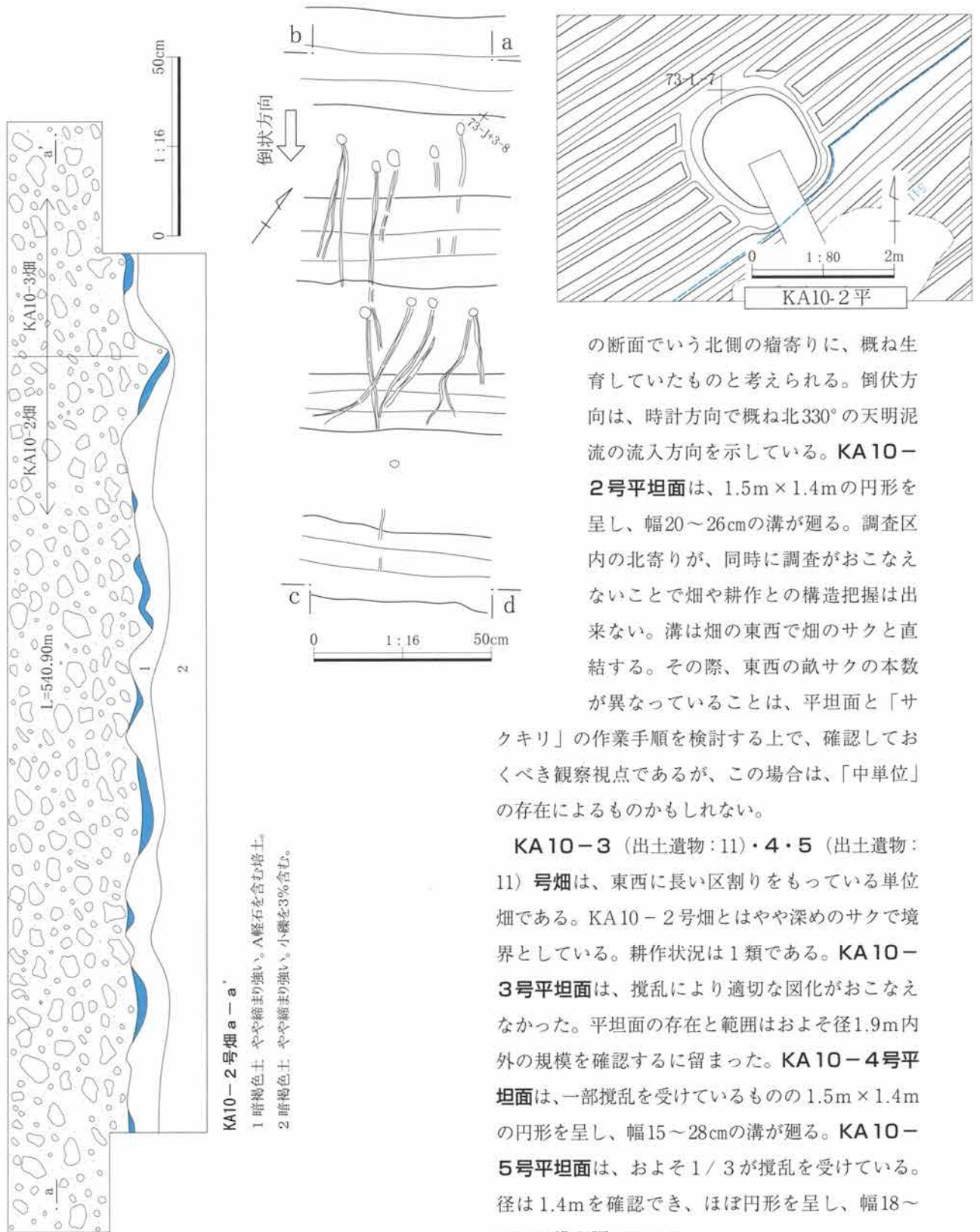


図 15 KA10 号畑及び作物痕跡の倒伏方向

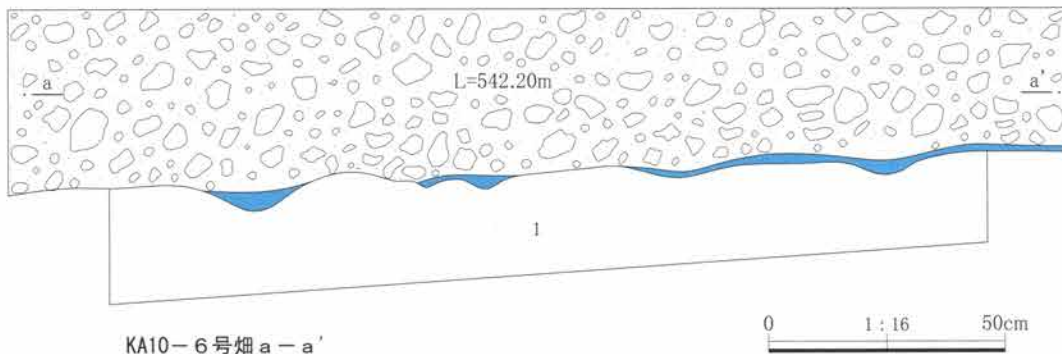
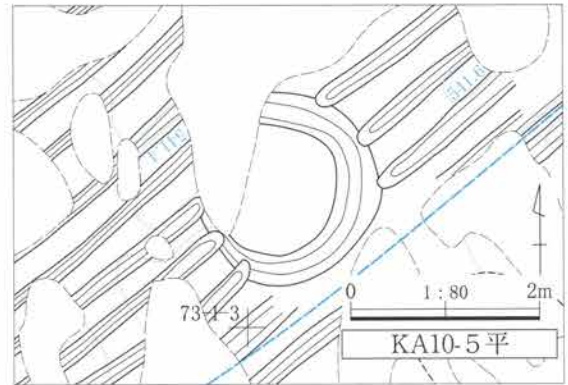
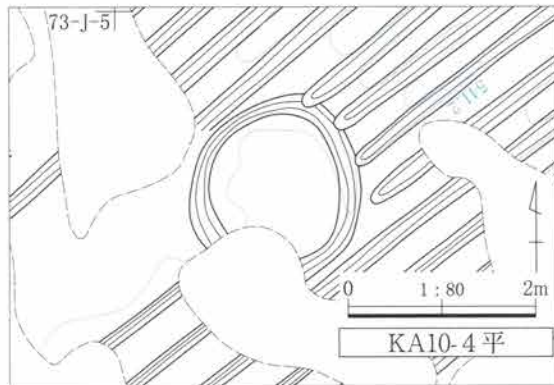
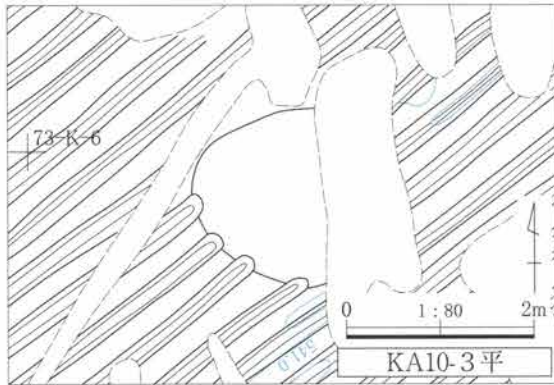
の断面でいう北側の瘤寄りに、概ね生育していたものと考えられる。倒伏方向は、時計方向で概ね北330°の天明泥流の流入方向を示している。KA10-2号平坦面は、1.5m×1.4mの円形を呈し、幅20～26cmの溝が廻る。調査区内の北寄りが、同時に調査がおこなえないことで畑や耕作との構造把握は出来ない。溝は畑の東西で畑のサクと直結する。その際、東西の畝サクの本数が異なっていることは、平坦面と「サクキリ」の作業手順を検討する上で、確認しておくべき観察視点であるが、この場合は、「中単位」の存在によるものかもしれない。

KA10-3 (出土遺物:11)・4・5 (出土遺物:11) 号畑は、東西に長い区割りをもっている単位畑である。KA10-2号畑とはやや深めのサクで境界としている。耕作状況は1類である。KA10-3号平坦面は、攪乱により適切な図化がおこなえなかった。平坦面の存在と範囲はおおよそ径1.9m内外の規模を確認するに留まった。KA10-4号平坦面は、一部攪乱を受けているものの1.5m×1.4mの円形を呈し、幅15～28cmの溝が廻る。KA10-5号平坦面は、およそ1/3が攪乱を受けている。径は1.4mを確認でき、ほぼ円形を呈し、幅18～48cmの溝が廻っている。

KA10-6～8号畑では、西側が泥流による攪乱で不明瞭であり、東側からの畝サクの終点が不明確である。KA10-8号平坦面は、1.5m×1.5m

3. 泥流面の調査

のほぼ正円形を呈し、幅13~32cmの溝が廻っている。平面的な分布から、KA10-6~8号畑には、他の平坦面が存在する可能性もあるが、攪乱により存在を検出するには至らなかった。また、この平坦面が、KA10-8号畑とKA10-12号畑のどちらに対応するものか検討する必要があるだろう。KA10-8号畑とKA10-12号畑では境界は多少の段差が生じていた。耕作状況は9類である。



KA10-6号畑 a-a'
1 暗褐色土 縮まり強い。小礫を5%含む。

図 16 KA10号畑 (2)



II 遺跡の調査記録

KA10-9~11号畑は、泥流による攪乱の影響を加味しても、畝サクの痕跡は確認できない6類の耕作状況である。KA10-9号平坦面では、攪乱のため詳細な図化をおこなえなかったが、軽石の分布や平坦な地形的な特徴から、平坦面の存在を確定したもので、存在位置の確認のみを図化した。

KA10-10号平坦面は、径1.3mのほぼ正円形を呈すると判断したが、遺構面の残存状態が不良で、東側範囲は不確定である。KA10-11号平坦面は、軽石の残存状態も明確で、1.8m×1.7mのほぼ正円形を呈している。溝は確認できなかった。

ここまで、KA10-3~11号畑の3つの中単位は、KA10号畑内で単位畑や中単位をもとに短冊状の畑を細分した手順を辿るヒントとなろう。足し上げると769㎡となり、想定9枚の単位畑を類推すると、単位畑の平均面積は、約85㎡となる。

KA10-12号畑とKA10-13号畑は、ほぼ同様な規模と形状の単位畑といえる。しかし、耕作状況は4類と3類を示し、耕作の順序や、畑地利用

の差が明瞭に写し出されている。

KA10-14（出土遺物：12、13）・15（出土遺物：14、25）・16~19号畑は、前述のKA10-

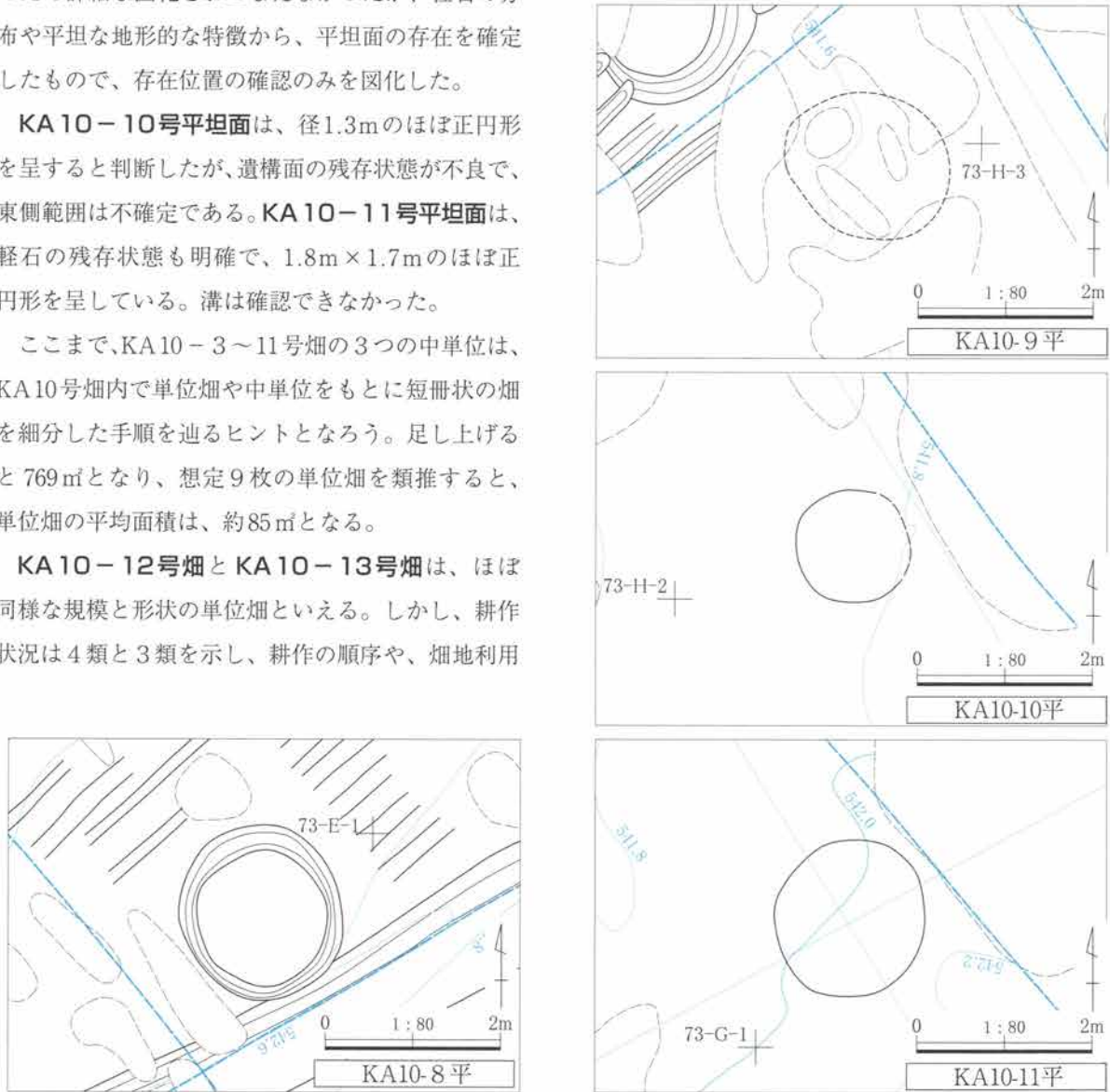
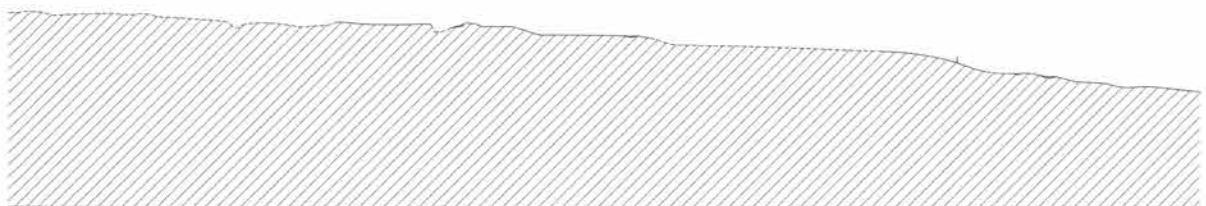
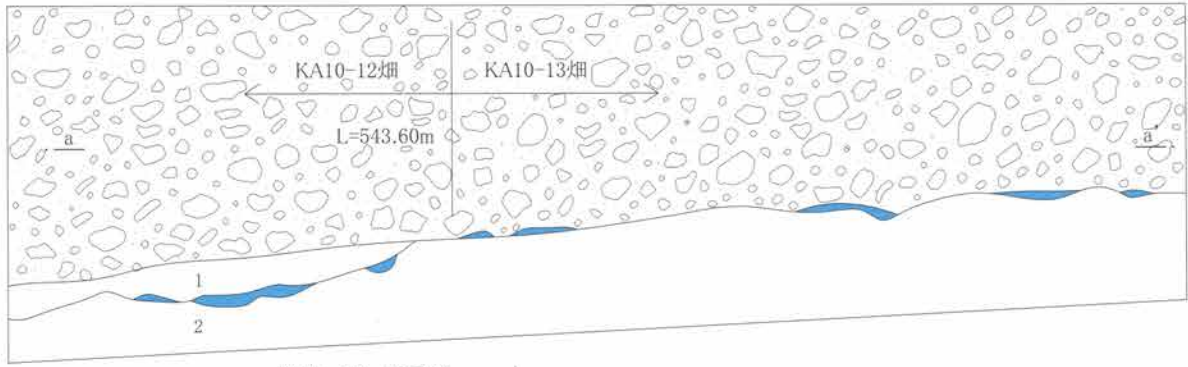


図17 KA10号畑(3)

L=544.00m



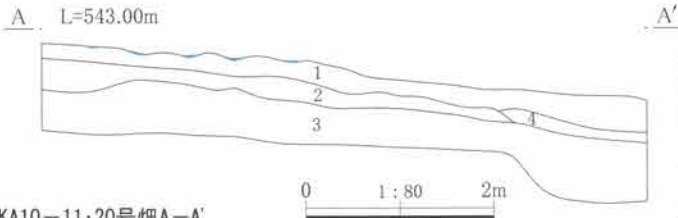
3. 泥流面の調査



KA10-12・13号畑 a-a'

- 1 暗褐色土 やや縮まりあり。A軽石を1~2%、小礫を3%含む。
- 2 暗褐色土 やや縮まりあり。小礫を3%含む。

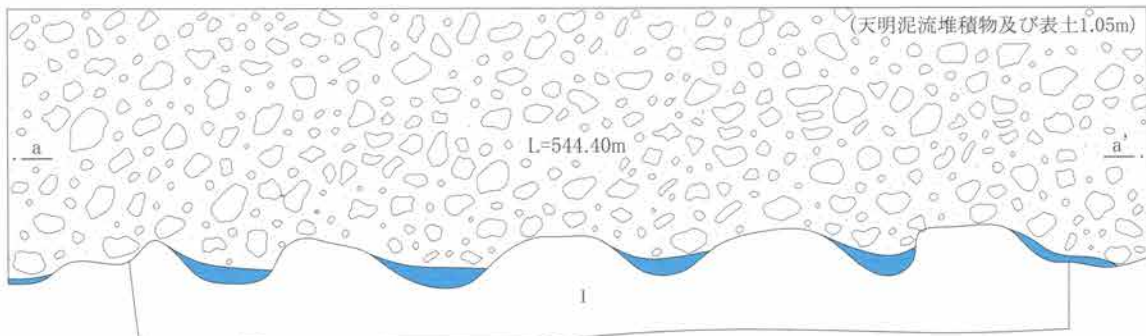
0 1:16 50cm



KA10-11・20号畑 A-A'

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 泥流畑作土。粘性なし。縮まりあり。1~5cm大の角礫を3%含む。
- 2 褐色土(10YR4/6) 粒径ややあらい。粘性なし。縮まりあり。1~20cm大の亜角礫を25%含む。
- 3 褐色土(10YR4/6) 粒径細かい。縮まりあり。粘性なし。シルト層。
- 4 黒褐色土(10YR2/3) 泥流畑作土。粘性なし。縮まりあり。1~5cm大の角礫を5%含む。

12号畑とKA10-13号畑との配置と状況を判断し、東側の未調査部分の調査結果を踏まえてみていく必要がある。KA10-19号畑の南端は、図化できなかったが、畑の境界を確認している。地境は南に高くなり、おそらく、現道の下位に4号道が川原湯温泉に向かって延びていたものと推定できる。耕作状況は2類である。KA10-16号平坦面は、1.3m×1.3mのほぼ正円形の範囲で確認でき、溝はない。こ



KA10-15号畑 a-a'

- 1 暗褐色土 やや縮まりあり。小礫を5%含む。

0 1:16 50cm

図18 KA10号畑(4)



II 遺跡の調査記録

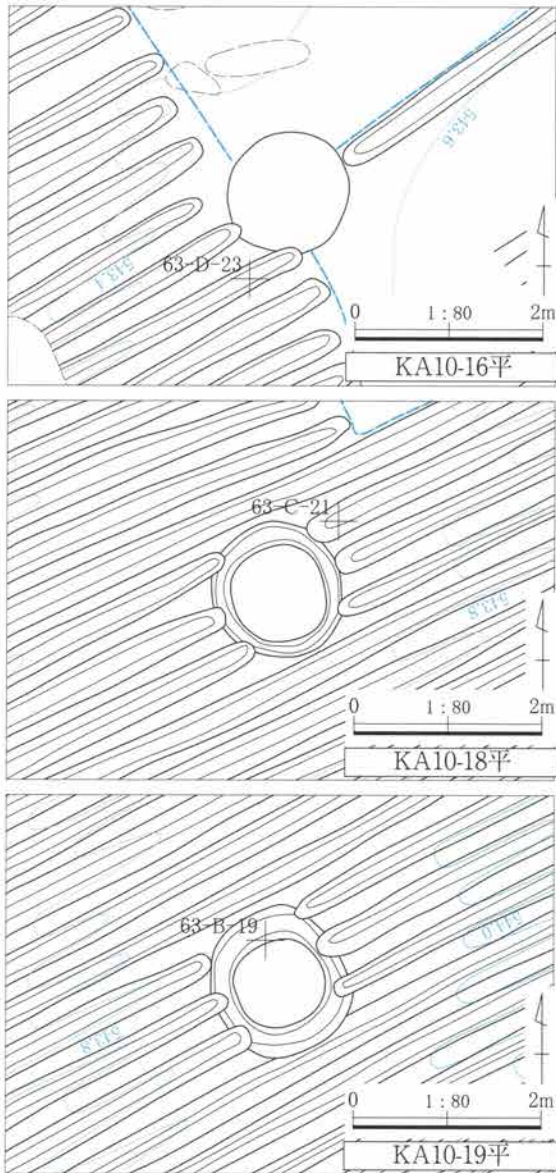


図19 KA10号畑(5)

の平坦面は、KA10-16号畑に対応するものかは不確定な要素を含んでいる。本平坦面がKA10-13号畑に対応し、前述のKA10-8号平坦面がKA10-12号畑に対応する可能性もある。KA10-18号平坦面は、径1.0mの正円形を呈し、幅16~28cmの溝が廻る。同様にやや規模の小さいKA10-19号平坦面でも、1.0m×0.9mのほぼ正円形を呈

L=542.00m



し、幅22~34cmの溝が廻っている。

KA10-20号畑とKA10-16号畑の境界部分の齟齬は何らかの理由がありそうだが、不明である。耕作状況は2類である。KA10-21号畑の耕作状況は1類で、周囲の状況と異なり、平坦面がかつて存在していたと考えられる畝サクの歪みに着目すると、この2枚の単位畑では、軽石の降下前後に作業をおこなったためと解釈できる。KA10-22号平坦面とKA10-23号平坦面との均等な間隔が根拠となる。

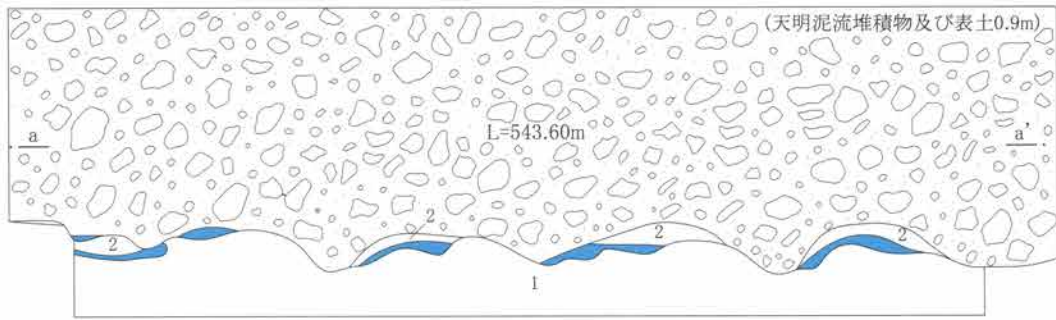
これまでの例にないのが、KA10-23号畑の耕作状況である。N11号畑(『群埋文第319集』)の例からすれば、耕作状況は4類のうちでも畝の凸部を均す程度の荒起こしで、元のサクを残存させている状況を呈した5類とも考えられる。断面形状の違いから、厳密に平坦面から南がKA10-22号畑であると確認できる(図71)。

一連の中単位の作業行程上最初に作業がおこなわれた単位畑なのかもしれない。

KA10-22号平坦面は、2.0m×1.6mの不定形を呈し、溝は確認できなかった。KA10-23号平坦面でも、溝は確認されず、1.6m×1.4mのやや歪んだ円形を呈している。

KA10-24(出土遺物:15)・25(出土遺物:16)・26号畑は、耕作状況は5類である。KA10-23号畑で記述した場合と同様、人為的な耕作土の移動が確認されている。平面図では、明瞭な畝サクを表現しているが、厳密には、東に接するKA10-2~5号畑の耕作状況とは、明かに異なった耕作状況を呈している。

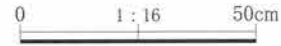
KA10-24号平坦面は、径1.3mの円形を呈し幅28~34cmの溝が、KA10-25号平坦面は、径1.6mの円形を呈し、幅18~28cmの溝が、KA10-26号平坦面では、攪乱のため径1.1mの円形を



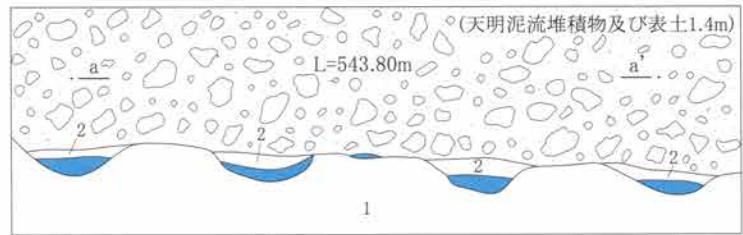
KA10-21号畑 a-a'

1 暗褐色土 やや締めあり。A軽石を15%含む。

2 暗褐色土 やや締めあり。小礫を5%含む。



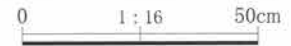
呈し、幅20cm内外の溝が廻る。3か所の平坦面では、幅16mで短冊状な単位畑に等間隔で配置された状況をうかがうことができるが、今回調査の及ばない範囲のため、詳細を確認することは出来なかった。表2中の、計測値(393㎡)は検出部分のみの値である。



KA10-23号畑 a-a'

1 黒色土 粘性ある均質な耕作土。

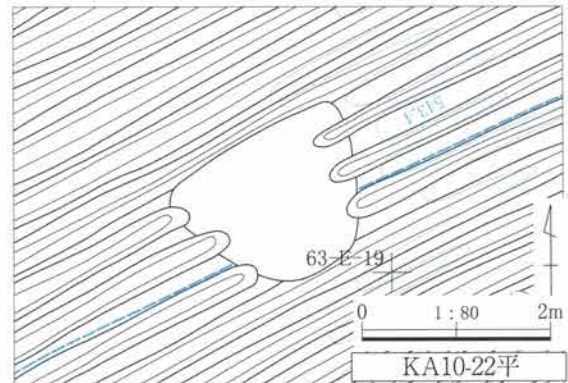
2 黒色土 A軽石を含む均質土。



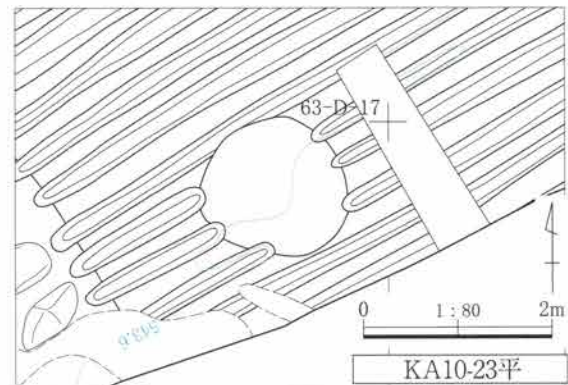
KA10-27号畑 (出土遺物:139)

とKA10-28号畑で2か所の平坦面が確認できるが、前述のKA10-24~26号畑とKA10-27・28号畑の平坦面の間隔が近似する。そのため、2つの中単位の枠を超え、5枚の単位畑と考えると、概ね幅14m×奥行12m程度の耕作状態を示す単位畑を推定することができる。耕作状況は9類である。KA10-27号平坦面は、一部で攪乱を受けているが、径1.5mの円形を呈し、溝はない。KA10-28号平坦面も同様に、径1.5mの円形を呈し、溝はない。「中単位」にあてはまる両平坦面の形状が似通うという特徴は、耕作の形態に伴う要因を想定することができる。

KA10-29~31号畑では、平坦面の検出がなされていない。泥流による攪乱や微妙な地形の変換点にもなっていることから、畝サクの走行を十分に把握するには至らなかった。また、地形の高



KA10-22平



KA10-23平

図20 KA10号畑(6)



図21 KA10-24~31号畑断面図

II 遺跡の調査記録

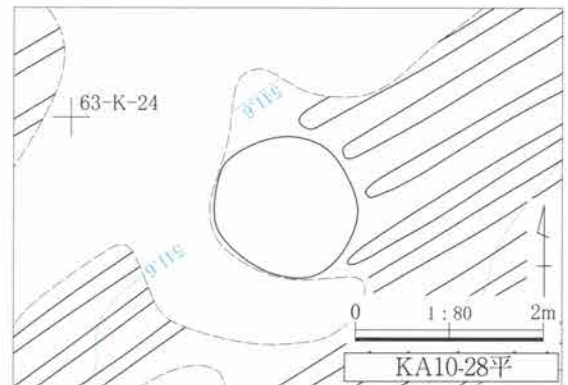
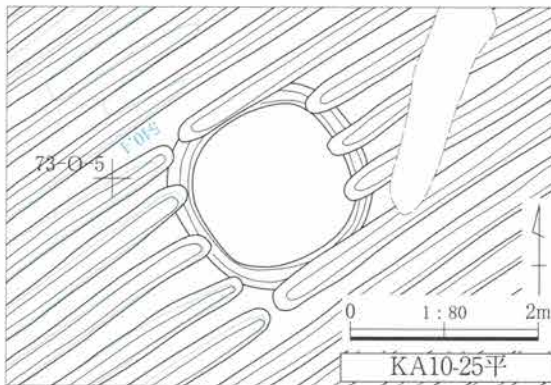
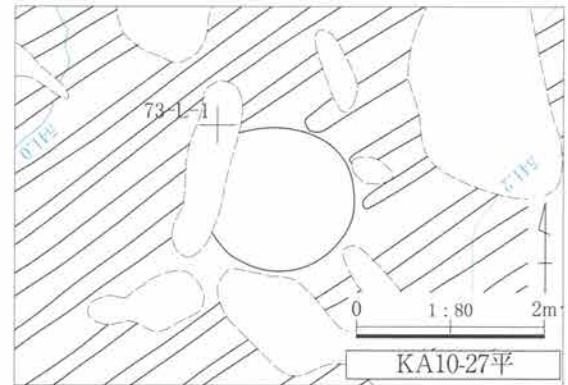
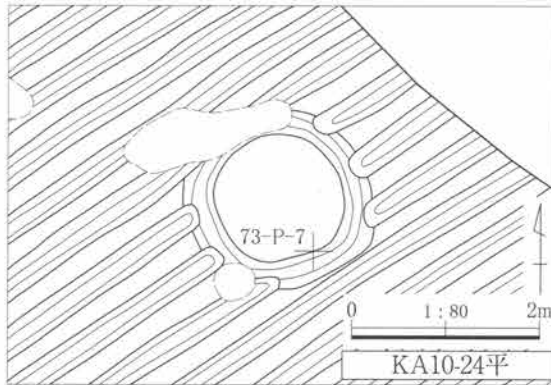


図22 KA10号畑 (7)

まっている16号ヤックラ付近で柱穴列を確認したが、覆土の締まりのない状況と10~20cm程度の掘り込みしか確認されない点、さらに畝サクを切っていることから、泥流堆積後、比較的現代に近い時期の作業小屋などを想定し、1/250全体図に平面配置を示すに留めた。なお、63区H-22グリッド付近の現況標高は、543.82mを発掘調査時に計測しており、泥流面の542.96mの計測点とが確認できる。南に元地権者の掘った池があったため、現況地形の変更が考えられ、付近の表土と天明泥流堆積物の厚さは一定ではなかった可能性がある。耕作状況は、

9類である。

17・18号ヤックラが境界となるKA11-1~6号畑は、KA11-1~3号畑で南に平坦面を配置する3枚の単位畑であり、平坦面の間隔がほぼ均しいことから、間隔を意図して配置されたことが読み取れる。北側の拡張トレンチにより南北の広がりを確認したが西側が調査区外となるため不詳である。耕作状況は2類である。KA11-1号平坦面で、1.7m×1.4mのやや歪んだ円形を呈し、幅16~34cmの溝、KA11-2号平坦面で、1.2m×1.1mの不定形を呈し、幅28~38cmの溝、KA11-3号平坦面で、1.8m×1.7mの円形を呈し、幅12~20cmの溝が、それぞれ廻る。KA11-2号平坦面では、平坦面の東西で畝サクの本数が異なっている。KA11-3号平坦面の平面図中に示したのは、鉄分の凝集層で作物の倒伏痕跡である。平坦面のほぼ全面で確認されたが、図化したのは一部分である。倒伏方向は、時計回りで北327°方向の進入角である。KA10-2号畑における、長葉脈をもった50cm内

外の作物痕跡の倒伏方向ともほぼ一致している。

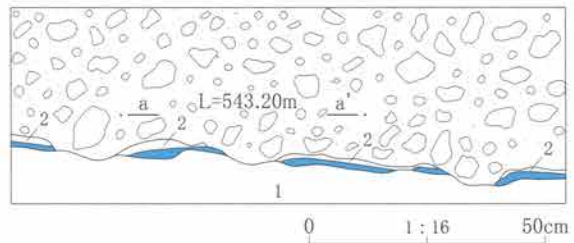
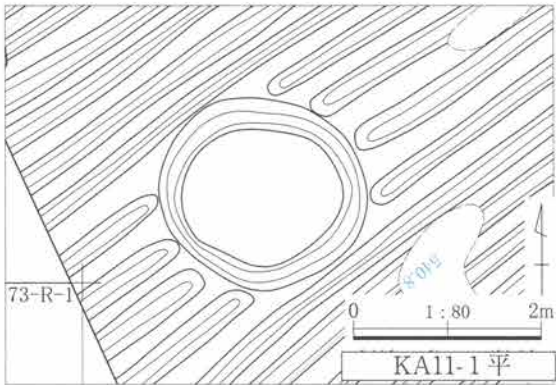
KA11-4・5号畑においても、KA11-1～3号畑との関連がありそうだ。KA11-4号平坦面は、KA11-1～3号平坦面と平面位置がライン上に揃う。11-5号平坦面の位置がずれてくるのは、単位畑の形状が異なることに因るのであろう。KA11-4号畑（出土遺物：17）・5号畑（出土遺物：18）は、耕作状況が3類と明らかに南北の中単位と異なっている。KA11-4号平坦面は、1.7m×1.6mのほぼ正円形を呈し、幅26～42cmの溝が廻る。KA11-5号平坦面は、KA11-4号平坦面とほぼ同規模

と形状で、幅22～28cmの溝が廻る。ここでも「中単位」内で平坦面が同形状を呈していることに着目しておく必要がある。

KA11-6号畑（出土遺物：22）では、平坦面は検出されていない。また、範囲確定のための拡張作業も不十分で、本畑の広がりや範囲確定も推定には至らない。耕作状況は8類とした。

(3) ヤックラ

本遺跡では、泥流面の1～14号ヤックラがI区で、15号ヤックラ以降がII区で確認されたものである。計測値等については、表3を参照頂きたい。「ヤッ



KA11-5号畑 a-a'

- 1 暗褐色土 3cm大の角礫を少量含む耕作土。やや粘性ある均質土。
- 2 暗褐色土 やや粘性ある均質土。A軽石含む。

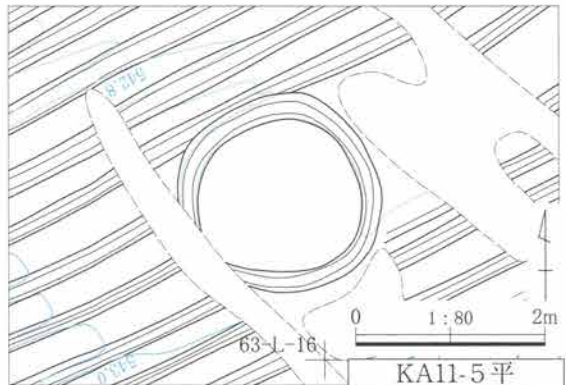
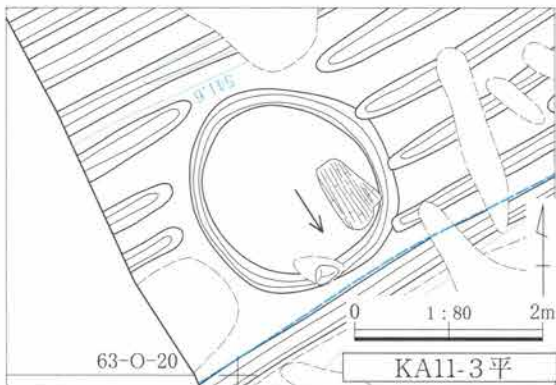
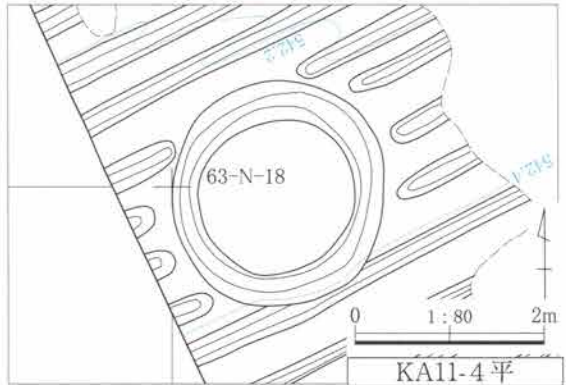
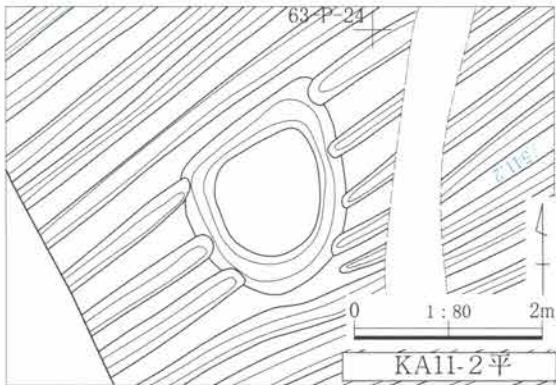
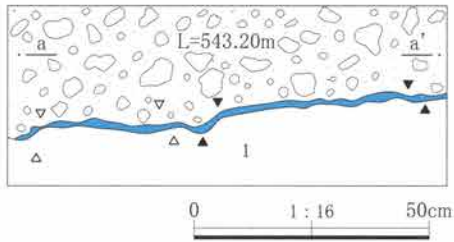


図23 KA11号畑 (1)

II 遺跡の調査記録



KA11-6号畑 a-a'

1 暗褐色土 1~3cm大の角礫をわずかに含む粘性ある耕作土。

図24 KA11号畑(2)

クラ」とは、耕作に不要な礫を放し出して集めておいた場所であり、現在当地でも民俗的に用いられている言葉である。遺構断面図の平面ポイントは、1/250遺構全体図に示している。

1号ヤックラは、KA 1号畑の耕作により放し出されたものと考えられる。理由は、北の岩盤と東と南の地形が迫り上がることなどによる。おそらく、東は4号道に面する法面へと続くものと推定される。南側は未検出である。**2号ヤックラ**は、配置具合からみて、1号ヤックラと同じくKA 1号畑の耕作により放し出されたものと考えてよいだろう。構成された礫は、北にある盤状節理の発達した岩盤を起源とする礫が中心であった。

3・4 (出土遺物: 1)・**5号ヤックラ**の構築は、KA 2号畑の耕作に起因するものと考えられる。KA1号畑や岩盤側には、1号道が等高線に直行するように調査区外の北へと延びている。3号と4号ヤックラ、4号と5号ヤックラの途切れ目は、1号道からKA 2号畑へのスロープと考えられる。5号ヤックラは、4号ヤックラ側が南側を中心に入念に石垣状に積み上げて礫を片付けている。また、55

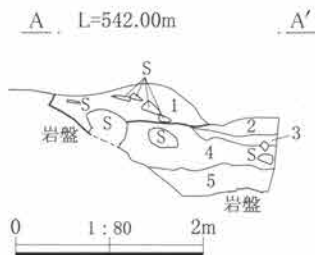
区M-16グリッド付近では、西へ突出した広がりを確認できる。北側の面は、泥流直下の状態では土砂が乱れ、石積みの上を覆っていたが、精査をおこなった結果、礫を積み上げ、土留めとしている様子を確認した。さらに、この突出部分は、岩盤側からの土砂が覆っていたことが確認された。この土砂移動がなければ、ほぼ直線上に5号ヤックラが岩盤際を廻る景観があったことになり、図67・68・69にその変遷をたどり、「ツカ」と泥流畑に関するまとめをおこなったので、そちらを参照頂きたい。

6・8号ヤックラは、KA 2号畑の耕作に起因するものと考えられる。いずれも土中にある大きな礫を核にして礫が集められていることがわかる。6号ヤックラは廃棄物のために未検出な部分がある。

7号ヤックラは、KA 2-1号畑とヤックラの広がりを確認するために周辺を拡張したが、調査区域外となるため、不詳である。7号ヤックラのさらに南に、礫の密度の濃くなる部分があり、その間は礫が片付けられていた様にも観察されたが、それ以上は未確認である。

9号ヤックラは、KA 3・4号畑の境界に亜角礫が集められたものである。西向きの面は最大で3段に礫が積まれて石垣状に整えられていた。南北は廃棄物のため、調査できなかった。

10~12号ヤックラは、KA 2号畑と区画し、特に11号ヤックラは、奥行き6m前後のテラス状の平坦な面をつくっているように観察された。A軽石が全く確認されなかったことから、作業小屋などの構造物が存在していた可能性や部分的に削平されていたと考えられるが、廃棄物やその後の攪乱によ



2号ヤックラA-A'

- 1 褐色土 ヤックラ。粒径ややあらくザラザラしている。粘性なし。5~15cm大の角礫を多く含む。上部にA軽石が堆積している。最大径17mm。2~4mmが中心。
- 2 黒褐色土 泥流畑作土部分。粒径やや小さい。縮まりややあり。粘性あり。
- 3 暗褐色土 部分的に黄色が強い。やや粘性あり。縮まりあり。2層に対応する耕作土と思われる。
- 4 黒褐色土 粒径やや小さい。縮まりあり。やや粘性あり。
- 5 黄褐色土 5~20cm大の角礫を多量に含む。縮まりあり。やや粘性あり。

図25 2号ヤックラ

3. 泥流面の調査

表3 ヤックラ計測値等一覧表

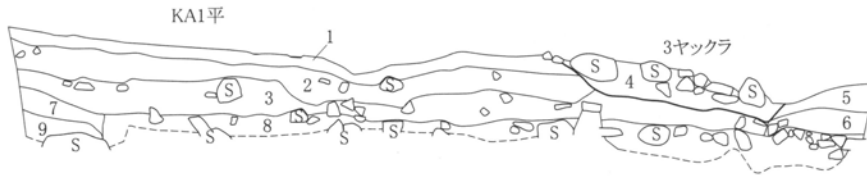
※1 構成する礫の最大値cm

遺構名称	位置	全長 m (長径)	幅 m (短径)	高さ m (深さ)	形態	平面形状	※1	備考
1号ヤックラ	55区 I-7~J-7	(5.2)	(1.7)	-	乱雑積上	楕円	40	円礫の混入が多い。
2号ヤックラ	55区 L-10~K-9	5.4	1.8	0.4	乱雑積上	長楕円	40	柱状の岩盤に沿って KA-1号畑との境に細長く設けられている。
3号ヤックラ	55区 J-6~J-7	(4.7)	2.6	0.4	乱雑積上	長楕円	60	5~60cmの礫が集められている。1号ヤックラ同様、円礫の混入が多い。
4号ヤックラ	55区 K-8	5.2	1.2	0.4	乱雑積上	不整形	100	KA1・2号畑地境には大きな礫(30~100cm大)が石垣状に並んでいる。その東側に裏込状に5~20cmの亜角礫が集められている。
5号ヤックラ	55区 L-9~J-20	51.3	2.3 (突出部は7.5)	0.6	乱雑積上	不整形	60	岩盤・1号道に沿って形成される。2-1・2-3・2-4号畑との境には石垣状の大きな石がある。また1号道との境にも比較的大きな礫が列状に並ぶ。5~20cm大の亜角礫が多い。11号ヤックラの延長上に突出部あり。
6号ヤックラ	55区 M-7	(3.2)	1.6	0.6	乱雑積上	楕円	70	周囲には大きな礫(30~70cm)を廻らし、亜角礫(5~20cm)が集められている。
7号ヤックラ	55区 M-5~O-4	(11.3)	2.5	0.6	乱雑積上	半月形?	70	周囲には大きな礫(30~70cm)を廻らし、亜角礫(5~20cm)が集められている。
8号ヤックラ	55区 O-9	2.5	1.4	0.5	乱雑積上	楕円	60	周囲には比較的大きな礫(20~60cm)を廻らし、亜角礫(5~20cm)が集められている。
9号ヤックラ	55区 V-6~Y-9	(18.4)	(4.8)	0.5	乱雑積上	楕円	30	5~30cmの亜角礫が集められている。
10号ヤックラ	55区 P-13~P-15	(8.0)	1.7	0.2	乱雑積上	長楕円	70	2-3号畑と6号畑の地境となっている。5~15cmの亜角礫が多い。
11号ヤックラ	55区 P-16~R-16	(8.4)	2.2	0.3	乱雑積上	長楕円	70	舌状に伸びたガケ崩れの先端に位置する。南壁・西壁には石垣状の大きな石が組まれている。5~20cmの亜角礫が多い。
12号ヤックラ	55区 Q-12~Q-13	2.6	(1.6)	0.3	乱雑積上	楕円	60	5~30cmの亜角礫が集められている。周囲には30~60cmの大石が廻らせてある。
13号ヤックラ	55区 R-11~R-12	(3.6)	2.4	0.3	乱雑積上	長楕円	40	5~20cmの亜角礫が集められている。
14号ヤックラ	56区 E-4~D-6	(12.4)	(4.4)	0.6	乱雑積上	不整形	80	KA8-2畑との境に、一部、石垣状に礫が組んである部分が見られる。
15号ヤックラ	73区 F-5~G-7	(11.0)	1.1	0.3	乱雑積上	不整形	30	筆の違う2枚の畑の地境上に筋状に不要な礫を集めている。
16号ヤックラ	63区 H-22~H-23	3.7	2.9	0.6	乱雑積上	長楕円	20	表土面から浅く、攪乱を受けているの可能性有り。頂部に As-A 軽石の堆積は見られない。
17号ヤックラ	63区 F-16~73区 P-3	19.6	2.0	0.2	乱雑積上	不整形	20	筆の違う2枚の畑の地境上に筋状に不要な礫を集めている。
18号ヤックラ	63区 H-16~73区 P-3	19.6	2.0	0.2	乱雑積上	不整形	20	筆の違う2枚の畑の地境上に筋状に不要な礫を集めている。
19号ヤックラ	73区 C-3~D-4	5.6	(2.2)	0.3	土坑状	長楕円	20	泥流畑を開墾する際、または農作業中に地面を掘り込み、土坑状にして、不要な礫を投げ入れたものか?

II 遺跡の調査記録

A L=543.00m

A'

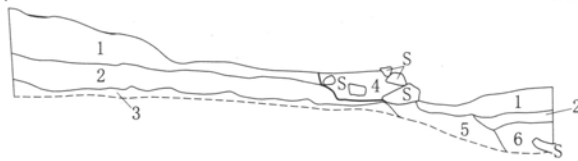


3号ヤックラA-A'

- 1 暗褐色土 粒径やや小さい。やや粘性あり。縮まりあり。
- 2 褐色土 粒径ややあらい。粘性ややあり。角礫(5~15cm大)を多く含む。
- 3 暗褐色土 粒径ややあらい。縮まりあり。やや粘性あり。角礫(5~15cm大)を多く含む。
- 4 褐色土 3号ヤックラ。角礫(2~30cm大)を中心とする。
- 5 褐色土 KA2-1号畑。粒径小さい。やや粘性あり。縮まりあり。
- 6 黄褐色土 粒径やや小さい。粘性あり。縮まりあり。角礫(2~7cm大)を多く含む。
- 7 褐色土 粒径小さい。粘性あり。縮まりあり。
- 8 黒褐色土 粒径小さい。粘性強い。縮まりあり。
- 9 暗褐色土 粒径小さい。粘性強い。縮まりあり。

B L=541.00m

B'

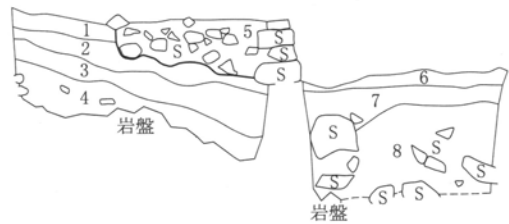


4号ヤックラB-B'

- 1 褐色土 縮まりあり。粒径やや小さい。角礫(2~5cm大)を少量含む。
- 2 黒褐色土 粒径ややあらい。ザラつく。粘性ややあり。縮まりあり。
- 3 黄褐色土 粒径あらい。粘性ややあり。縮まりあり。
- 4 褐色土 4号ヤックラ。粒径ややあらい。粘性なし。縮まりあり。角礫(5~10cm大)。
- 5 黄褐色土 粒径ややあらい。縮まりあり。粘性なし。
- 6 暗褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(5~20cm大)を多く含む。

C L=541.00m

C'



5号ヤックラC-C'

- 1 褐色土 耕作土(KA1号畑)。粘性あり。粒径小さい。縮まりあり。
- 2 暗褐色土 やや粘性あり。粒径小さい。角礫(5~10cm大)を少量含む。縮まりあり。
- 3 黒褐色土 粘性あり。縮まりあり。粒径やや小さい。
- 4 暗褐色土 粒径あらい。角礫(5~10cm大)を多量に含む。
- 5 黄褐色土 ヤックラ。角礫(2~20cm大)乱積。北面には大きな石を石垣状に積んでいる。
- 6 褐色土 作土(KA2-1号畑)。やや粘性あり。縮まりあり。角礫(2~4cm大)を少量含む。
- 7 黒褐色土 やや粘性あり。縮まりあり。角礫(2~5cm大)をやや多く含む。
- 8 黄褐色土 粒径ややあらい。角礫(2~10cm大)を多量に含む。中には30~50cm大の角礫も含まれる。

A L=541.00m

A'



6号ヤックラA-A'

- 1 褐色土 KA2号畑。やや粘性あり。縮まりあり。粒径小さい。
- 2 黒褐色土 粒径やや小さい。やや粘性あり。縮まりあり。
- 3 黄褐色土 ヤックラ。粒径あらい。粘性なし。5~20cm大の角礫乱積。
上部にA軽石堆積(厚層1~2cm、粒径2~4mm中心。黄白色)。
- 4 黒褐色土 ヤックラ。3層よりも角礫の堆積は少ない。やや粘性あり。
- 5 黄褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(2~5cm大)を多量に含む。
- 6 黄褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(2~15cm大)を多量に含む。

D L=541.00m

D'

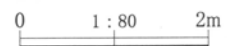
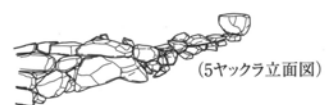
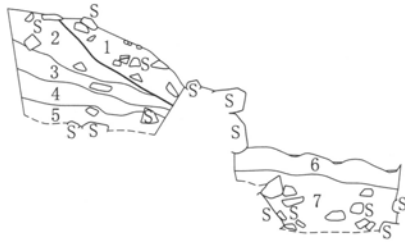


図26 3~6号ヤックラ

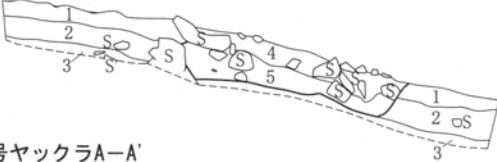
A L=542.00m



A' 7号ヤックラA-A'

- 1 暗褐色土 ヤックラ。角礫(2~20cm大)乱積。周縁部は石垣状に石を積み、ヤックラの範囲を区画している。
- 2 褐色土 粒径やや小さい。やや粘性あり。角礫(5~10cm大)を少量含む。
- 3 暗褐色土 粒径ややあらい。やや粘性あり。角礫(5~10cm大)を多量に含む。
- 4 黒褐色土 粒径あらい。ザラつく。粘性なし。角礫(5cm大ほど)を僅かに含む。
- 5 黒褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(5~10cm大)を多量に含む。
- 6 黒褐色土 粒径やや小さい。粘性あり。耕作土(KA2-2号畑)。角礫(5~7cm大)を少量含む。サク部分にA軽石の堆積(厚層2cmほど)、径2~5mmが中心。
- 7 黄褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(5~30cm大)を多量に含む。

A L=538.00m

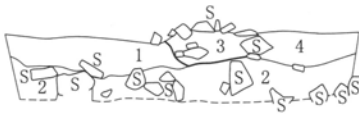


A'

8号ヤックラA-A'

- 1 黄褐色土 締まりあり。粒径ややあらい。角礫(1~3cm大)をやや含む。KA2号畑。サクにA軽石の堆積、厚層2cm、黄白色、粒径2~4mm中心。
- 2 黒褐色土 締まりあり。粒径小さい。やや粘性あり。
- 3 黄褐色土 1層よりも黄色が強い。やや粒径あらい。粘性なし。角礫(2~20cm大)を多く含む。
- 4 黄褐色土 ヤックラ。角礫(5~15cm大)を多く含む。径30~50cmの大きな石も含まれる。
- 5 黒褐色土 ヤックラ下位。角礫(5~40cm大)をやや含む。

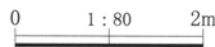
A L=537.00m



A'

9号ヤックラA-A'

- 1 黄褐色土 締まりあり。やや粘性あり。角礫(2~5cm大)を多く含む耕作土。
- 2 にぶい黄褐色土 粒径ややあらい。角礫(5~20cm大)を多く含む。径30~40cmぐらいの大きな石もある。
- 3 黄褐色土 ヤックラ。10~20cm大の角礫乱積。粒径やや小さい。粘性なし。
- 4 黄褐色土 KA4号畑。粒径やや大きい。ザラザラする。粘性なし。



り詳細を確認するには至らなかった。10・12号ヤックラに囲まれる傾斜部には、KA 6号畑が所在するが、等高線に直行する方向に畝サクが走行している。このことを含めて、南の廃棄物による未調査部分があるために不確定な要素が多い。13号ヤックラ(出土遺物：2)も同様な状況にある。KA 2-2号畑との段差を画する様に所在している。なお、出土遺物から、付近に住空間があったことも考えられる。

14号ヤックラは、一部で石垣状に礫が積み重ねられていた。吾妻川よりの北の高まる地形の土留ともなるように集められている。さらに西に続くものと考えられるが、調査には及ばなかった。

15~19号ヤックラはⅡ区の泥流面で確認されたものである。15号ヤックラは、KA 9・10号畑の境界となる踏分道に亜角礫が集められたものである。16号ヤックラは、概ね平坦なⅡ区の調査区のうちでも、僅かに突出した部分に所在する。KA 10号畑の耕作に伴って、放し出された礫であることが、畑の中央寄りに配置されていることから理解できよう。

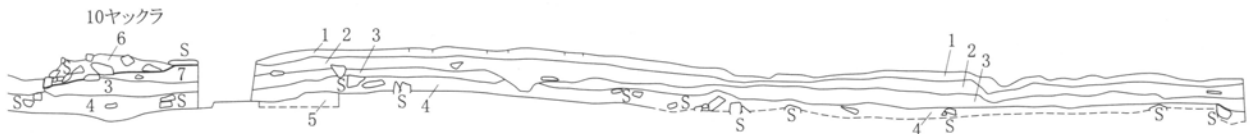
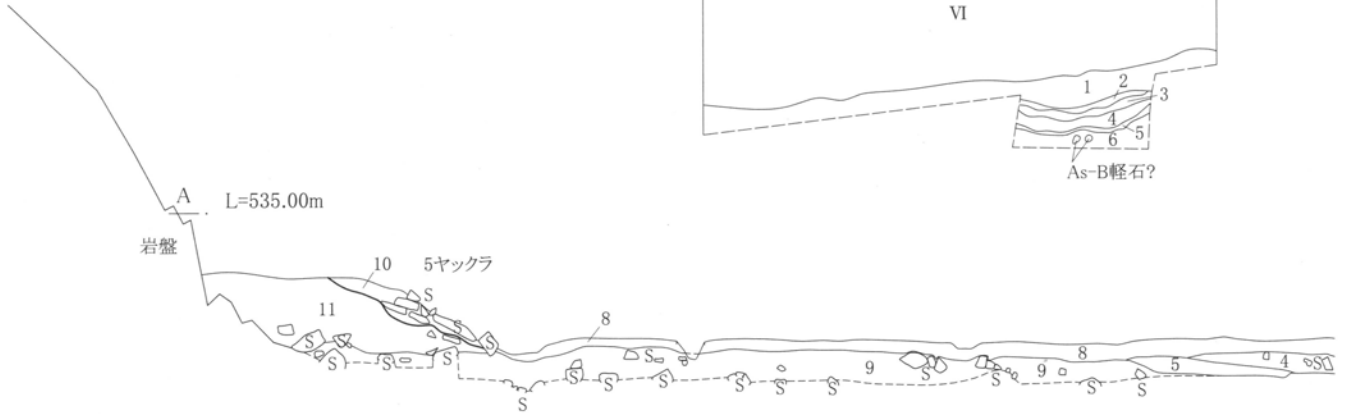
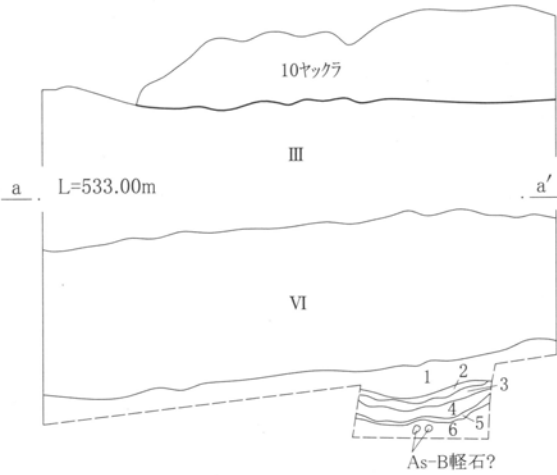
17号ヤックラ(出土遺物：8)と18号ヤックラは、並行して南北に走行する。最も東の溝状の窪みにより17号ヤックラは、一旦途切れる。東西の断面は二瘤状を呈し、頂部に礫が積み上げられているが、「不要な礫で構成されている」という明確な状況とはいえない。3条の窪みには、恒常的ではないが、雨水が流れたことを連想させるように、砂や小礫が確認されている。また、溝状の窪みが17号ヤックラを乗り越えていることから、人為的に雨

図27 7~9号ヤックラ

II 遺跡の調査記録

10号ヤックラ a-a'

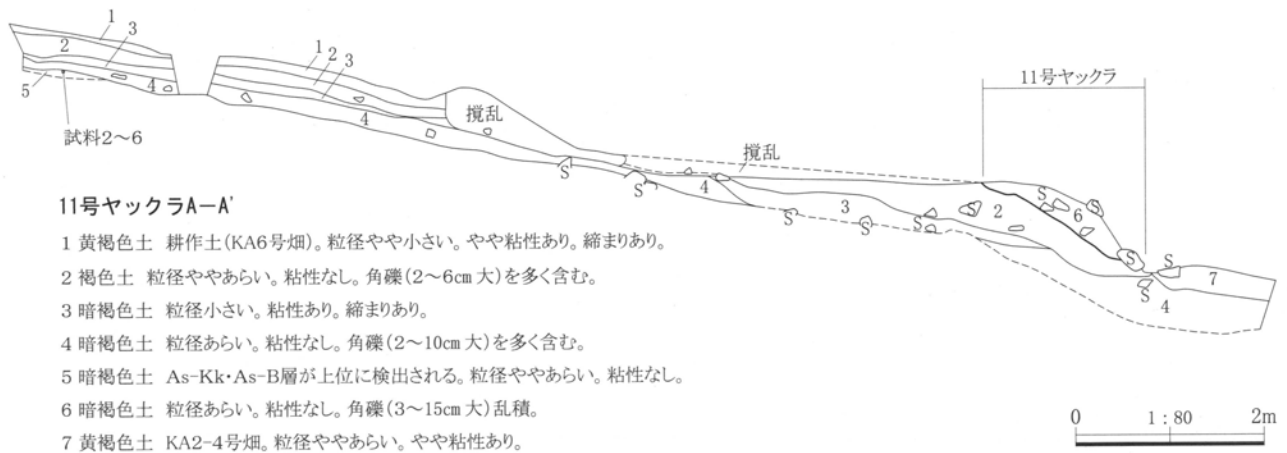
- 1~4 微細粒火山灰 As-Kkテフラの一次堆積層と考えられる。色調は、1 青灰、2 黒含む灰、3 黄褐色灰、4 桃灰を呈する。
 5 土壌 やや粘性がある。黒色味強く、均質。
 6 黒色土 上位に黄褐色灰(3とは異なりAs-Bテフラと考える)が僅かに含まれ、As-B軽石と考えられる軽石粒が上位に疎らに含まれる。



10号ヤックラA-A'

- | | |
|--|---|
| <p>1 黄褐色土 耕作土(KA6号畑)。粒径やや小さい。やや粘性あり。縮まりあり。
 2 褐色土 粒径ややあらい。粘性なし。角礫(2~6cm大)を多く含む。
 3 暗褐色土 粒径小さい。粘性あり。縮まりあり。
 4 暗褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(2~10cm大)を多く含む。
 5 暗褐色土 粒径ややあらい。粘性なし。As-Kk・As-B層が上位に堆積。</p> | <p>6 褐色土 10号ヤックラ。粒径あらい。粘性なし。角礫(5~15cm大)乱積。
 7 褐色土 粒径ややあらい。粘性なし。角礫(5~10cm大)を含む。
 8 暗褐色土 粒径ややあらい。やや粘性あり。縮まりあり。
 9 黄褐色土 粒径ややあらい。やや粘性あり。角礫(5~10cm大)を多く含む。
 10 暗褐色土 粒径ややあらい。粘性なし。角礫(2~10cm大)を多く含む。
 11 黒色土 粒径小さい。粘性あり。角礫(岩盤から崩落、5~20cm大)を少量含む。</p> |
|--|---|

A L=535.00m



11号ヤックラA-A'

- 1 黄褐色土 耕作土(KA6号畑)。粒径やや小さい。やや粘性あり。縮まりあり。
 2 褐色土 粒径ややあらい。粘性なし。角礫(2~6cm大)を多く含む。
 3 暗褐色土 粒径小さい。粘性あり。縮まりあり。
 4 暗褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(2~10cm大)を多く含む。
 5 暗褐色土 As-Kk・As-B層が上位に検出される。粒径ややあらい。粘性なし。
 6 暗褐色土 粒径あらい。粘性なし。角礫(3~15cm大)乱積。
 7 黄褐色土 KA2-4号畑。粒径ややあらい。やや粘性あり。

図28 10・11号ヤックラ

3. 泥流面の調査

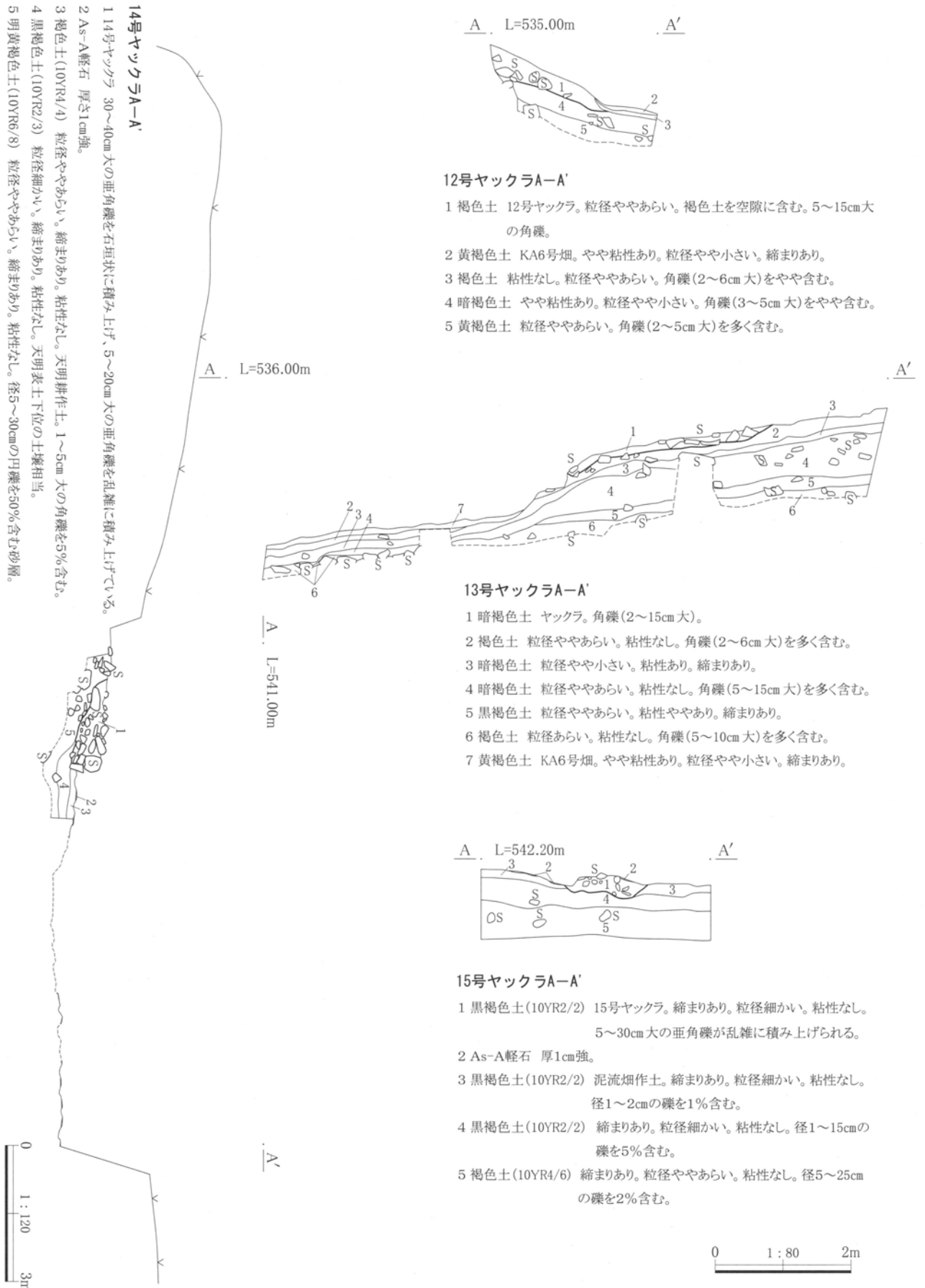


図29 12~15号ヤックラ

II 遺跡の調査記録

水溝とした可能性が高い。溝に対しては、敢えて遺構名称を付さなかった。

19号ヤックラ 亜角礫が耕作土の下位に集められ、その上位が耕作土となっている。KA 9号畑を開墾する際、または耕作途中に、地面を掘り込み、不要な石を投げ入れたものと判断した。平面形状は

長楕円形である。

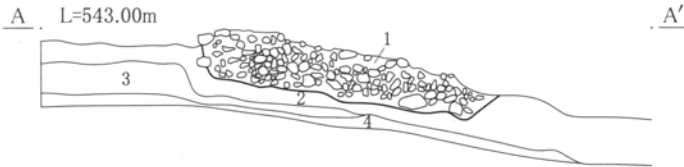
(4) 道

I区で確認された5条の道は、街道とそこから耕作地へのアプローチと考えられる景観の構成要素として写し出されている。4号道は、舗装された町道下に広がっているために、その幅員は検出できなかったが、路面部分は非常に硬化しており、被災当時の利用の状況を窺うことができる。

1号道は、55区J-6~23グリッドの範囲を南から北に下り標高差は13mに及び、長さ約76mにわたって検出されている。南は調査区際で街道に接し、北は畑に面してさらに延びていくものと考えられる。55区M-10グリッド付近で、最大幅1.3mを測る。南北に東の岩盤に沿って走行している。路面の状況は比較的硬化している。微細な角礫が多く、岩盤の崩落土砂であることが分かる。55区J-7、L-8グリッド付近でKA 2-1号畑へと通じている。さらに、5号ヤックラ付近の西へ突出する55区M-14、L-16グリッド付近でKA 2-3・4号畑へのスロープがある。平均勾配は、55区L-9グリッド付近で約30%を測る。

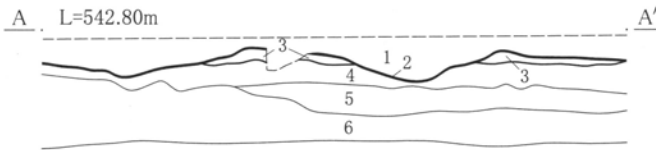
2号道は、55区Q-4~R-11グリッドにかけて、途中未検出部分を含み、長さは約28mにわたって検出された。幅は0.5~1.0mを測る。南北に走行する。10、12号ヤックラ付近で不詳ながら、3号道につながるものと考えられるが、未調査部分により確認できない。55区Q-7グリッド付近で、平均勾配は、約14%を測る。**3号道**は、55区R-16グリッドから北に下り、途中大きくKA 2-4号畑を回避するように廻り、M-23グリッド付近で消失する。延べ長さ約56mにわたって検出された。幅は0.5m~1.0mで55区M-22グリッド付近で最大幅を測る。平均の勾配は、55区P-13グリッド付近で約20%である。2・3号道は、本来、同一の道で、KA 2号畑の西を廻っていたものと考えられる。

4号道は、55区F-14~E-17グリッドに位置し、長さ約12mにわたって検出された。舗装された現道、町道横壁-川原湯線の直下にあたるため、



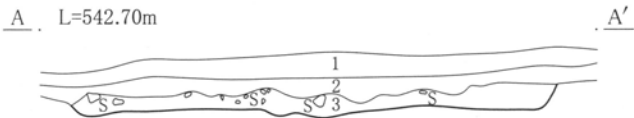
16号ヤックラA-A'

- 1 黒褐色土(10YR2/3) ヤックラ部。平面形は楕円形。5~20cm 大の亜角礫を乱雑に積み上げている。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 天明耕作土。粒径細かい。粘性なし。縮まりあり。径1~5cmの礫を3%含む。
- 3 褐色土(10YR4/6) 礫層。粒径ややあらい。粘性なし。縮まりあり。1~20cm 大の亜角礫を25%含む。
- 4 褐色土(10YR4/6) 粒径細かい。粘性なし。縮まりあり。シルト層。



17・18号ヤックラA-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 天明泥流堆積物。
- 2 As-A軽石 厚1cm強。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 5~15cm 大の亜角礫が乱雑に積み上げられている。
- 4 暗褐色土(10YR3/4) 粒径細かい。粘性なし。縮まりあり。径5~10cmの礫を3%含む。
- 5 黒褐色土(10YR2/2) 粒径細かい。粘性なし。縮まりあり。径1~5cmの礫を3%含む。
- 6 褐色土(10YR4/6) 礫層。粒径ややあらい。粘性なし。縮まりあり。1~20cm 大の亜角礫を25%含む。



19号ヤックラA-A'

- 1 暗褐色土(10YR3/3) 泥流畑作土。粒径細かい。粘性なし。縮まりあり。径1~3cmの礫を3%含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 耕土。粒径細かい。粘性少しあり。縮まりあり。径3~5cmの礫を5%含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/3) ヤックラ部。粒径細かい。粘性少しあり。縮まりあり。

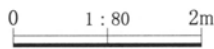


図30 16~19号ヤックラ

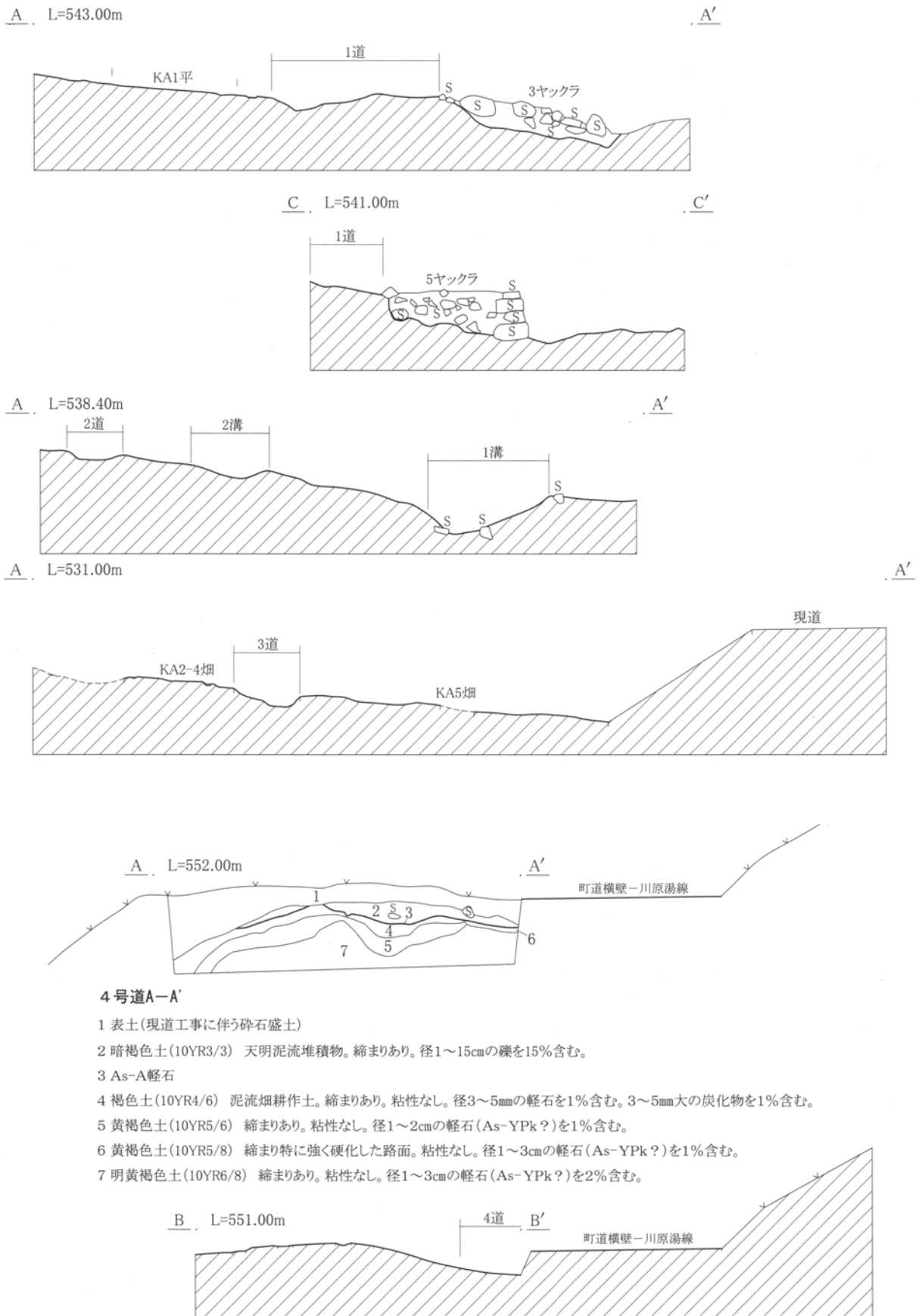


図31 1~4号道

0 1:80 2m

II 遺跡の調査記録

B L=535.00m

B'

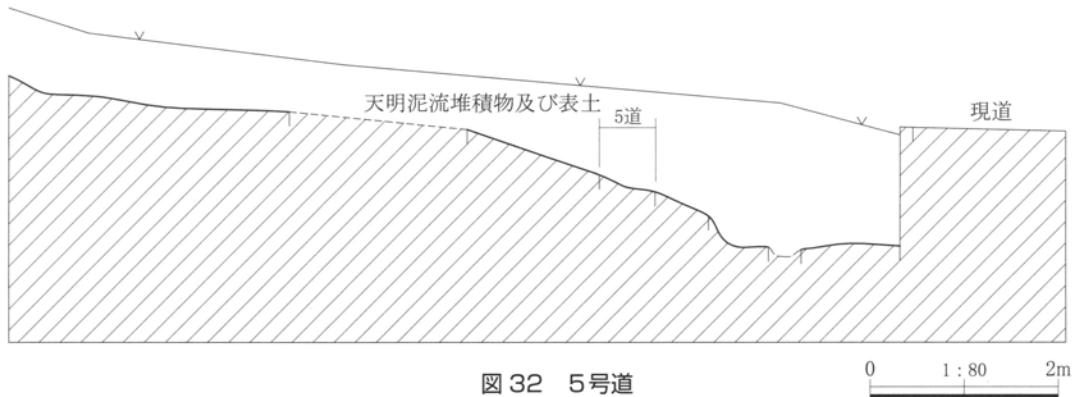


図 32 5号道

北縁辺部分のみを発掘調査した。そのため道幅の確定はなされていない。南北に近い走行をとる。厚さ1cm内外の浅間A軽石に一面覆われた路面の状況は、良好な硬化を確認しており、現道と同じく、被災当時の街道的な役割を果たしていた古道の一部分と考えられる。平均の勾配は、約11%である。

5号道は、55区T-12~S-15グリッドに位置し、長さ約14mにわたって検出された。幅は0.4m~0.7mで、ほぼ南北に走行し、55区T-12グリッド付近で最大幅を測る。路面の状況はやや窪んだ溝状であるが、やや硬化した状況を確認した。付近の畑や住空間の有無などは、調査区外となるため詳細は不明である。T-12グリッド付近の勾配は、約22%である。

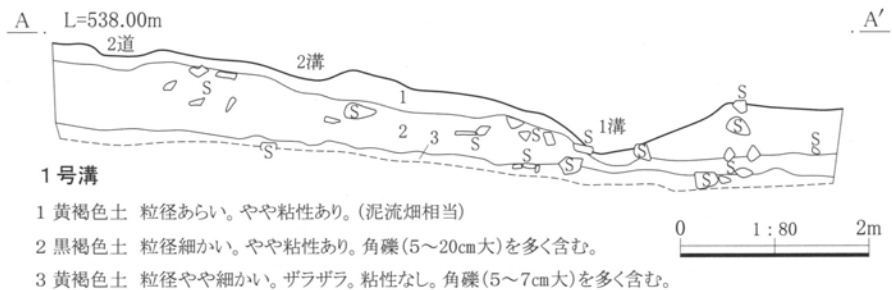
(5) 溝

1~3号溝は、I区で確認された。いずれもKA2号畑とKA3号畑の境界となる段差に沿って確認されるものである。並行する2号道とは、平面図で見ると同様に表現されるが、3条の溝については、

いずれも礫が露出し、礫のほとんどない踏分道的な2号道とは性格が異なるものと考え、溝と判断した。いずれの溝も、粒粗くやや粘性のある黄褐色土が表層となっていることから、恒常的な流水というより、雨水に対する機能を持つ程度の溝と考えられる。1号溝と2号溝は、攪乱部分で2又に分岐していたものと考えられるが攪乱部分が多く、交差付近については推定による。

1号溝は、55区R-4~S-9グリッドに位置し、長さ約25mが検出されているが、攪乱部分があるため詳細は不明である。幅は1.1m~1.9mで、ほぼ南北に走行する。断面から見た掘り込みは、約0.3mを測る。底面は粒粗くやや粘性のある黄褐色土である。2号溝との新旧は不明。出土遺物なし。平均勾配は、約12%である。

2号溝は、55区Q-4~R-8グリッドに位置し、長さ約18mが検出されているが、攪乱部分があるため詳細は不明である。幅は1.4m~2.6mで、1号溝の約2m東をほぼ並行し、南北に走行する。断



1号溝

- 1 黄褐色土 粒径あらい。やや粘性あり。(泥流畑相当)
- 2 黒褐色土 粒径細かい。やや粘性あり。角礫(5~20cm大)を多く含む。
- 3 黄褐色土 粒径やや細かい。ガラガラ。粘性なし。角礫(5~7cm大)を多く含む。

図 33 1号溝

3. 泥流面の調査

面から見た掘り込みは、約0.6mを測る。底面は粒粗くやや粘性のある黄褐色土である。1号溝との新旧は不明。出土遺物なし。平均勾配は、約14%である。

3号溝は、55区R-4～U-9グリッドに位置し、長さ約20mが検出されているが、攪乱部分があるため詳細は不明である。幅は0.9m～1.6mで、1号溝の西を、やや西勾配に走行する。断面から見た掘り込みは、約0.2mを測る。底面は粒粗くやや粘性のある黄褐色土である。1号溝との新旧は不明で、出土遺物はない。平均勾配は、約15%である。

(6) 天明泥流流下に関する記録

天明泥流の攪乱と遺構面の残存状況を把握するために、調査区内で確認した泥流の流下方向を示しておく。このことは、地形などに制約されて流下する泥流の流下過程を提示できる可能性もあり、作成し

た遺構図に加えて、図34・35を編集した。

発掘調査の時点で、いくつかの方向性を確認し、その主なものを図中に示した。十分な検討には至らないが、畑面に残された泥流流下に関する記録を抽出し、図化したものである。

I区のKA 2号畑は、南西からの泥流による攪乱痕跡が顕著であった。畑面に残された攪乱の進入角方向は、概ね時計回りでN210°と計測できる。

KA 1号畑は、同230°～240°の作物の倒伏方向、畑面に残された泥流中の礫の潜り込み状況は、同230°が確認された。

I区では、北に下るKA 2号畑と東へ上る傾斜をもつKA 1号畑、両者間にある岩盤の存在などの地形を確認の上、図34及び1/250全体図とあわせて参照頂きたい。



図34 I区天明泥流流下方向の痕跡

II 遺跡の調査記録

II区で示された泥流中の礫による攪乱方向は、概ね2方向に集約される(図35)。

一方は、同330°方向の進入角を測ることができる。これは、畑面に残された礫の潜り込み方向や、73区J-7グリッド付近で確認された作物の倒伏方向によるものである。

他方の畑面に残された攪乱方向は、概ね同30°ないしは210°と計測される。吾妻川の逆方向からの方向か、上流側からの斜面を下った方向なのかは、確定できなかった。しかしながら、泥流の到達に対して2浪以上の方向性が示せた場合は、その攪乱方向の切り合いによる順序などが今後の検討材料とな

ろう。

これらの泥流中の礫による攪乱方向は、1.5kmほど上流の中棚II遺跡・下原遺跡(『群埋文第319集』)などで記録化されている。吾妻川の流下方向と周辺地形とを勘案の上、参照頂きたい。

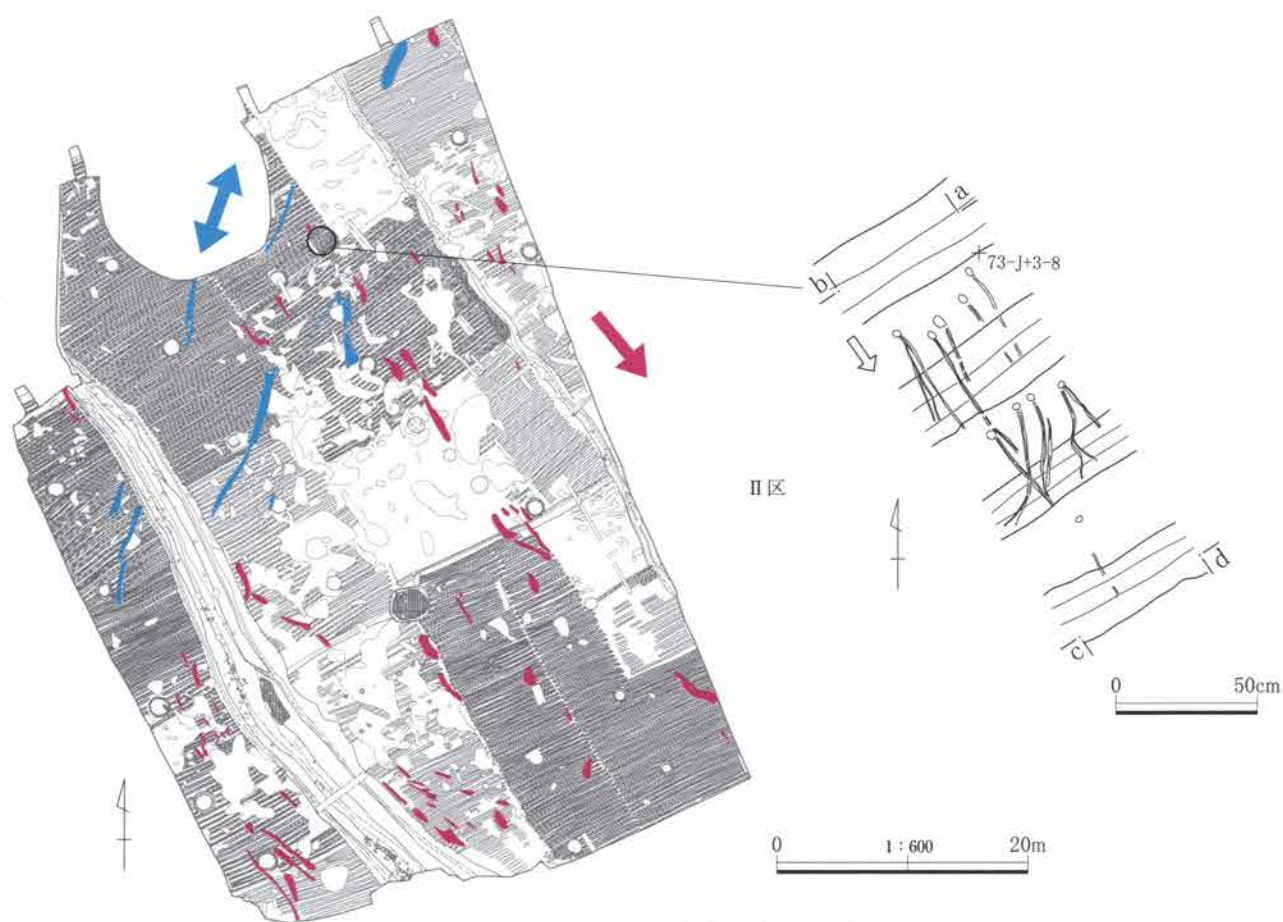


図 35 II区天明泥流流下方向の痕跡

4. 第2面の調査

(1) 溝

55区1号溝は、I区の55区R-8～S-9グリッドに位置し、55区1号畠を切っている。長さ約8mが検出されているが、部分的な検出で詳細は不明である。幅は0.6m～1mで、北西方向へ走行する。概ね20cmの掘り込みであるが、断面ポイント付近では、最大で0.6m程度の掘り込みとなっている。

底面には40cmを超える大きさの角礫を含み、覆土は、粒径粗く、締まりがやや強い。角礫(2～8cm大)を多く含み、出土遺物はない。平均勾配は、約12%である。帰属時期は、浅間粕川テフラ降下以降の畠を覆う礫層と泥流畑下位の2枚の礫層の間である。

(2) 畠

I区で検出された**55区1号畠**は、55区R-7～

S-9グリッドに位置し、検出面積は50㎡である。廃棄物等の撤去がなされず、これ以上の広さで拡張させることが出来なかった。

調査区内で確認できる範囲では、9条のサクが検出されている。概ね北西に7°の傾斜をもち、検出区内の高低差は、1.3mを確認する。

平面図の東寄りの破線で示した範囲は、畝頂部が削平した範囲を示すが、土層の色調の相違が良好に確認された。畝とサクの畝幅は、平均で97cmを計測する。全体的には残存状態は不良であるが、地点によっては、畝サクの比高は、最大で10cmを測る。図37、A-A'断面図中の7'層では、不規則に火山灰が混入し、火山灰降下後の耕作による作土と判断できる。

なお、この畠は礫層に覆われ、さらに55区1号溝がこれを切っている。

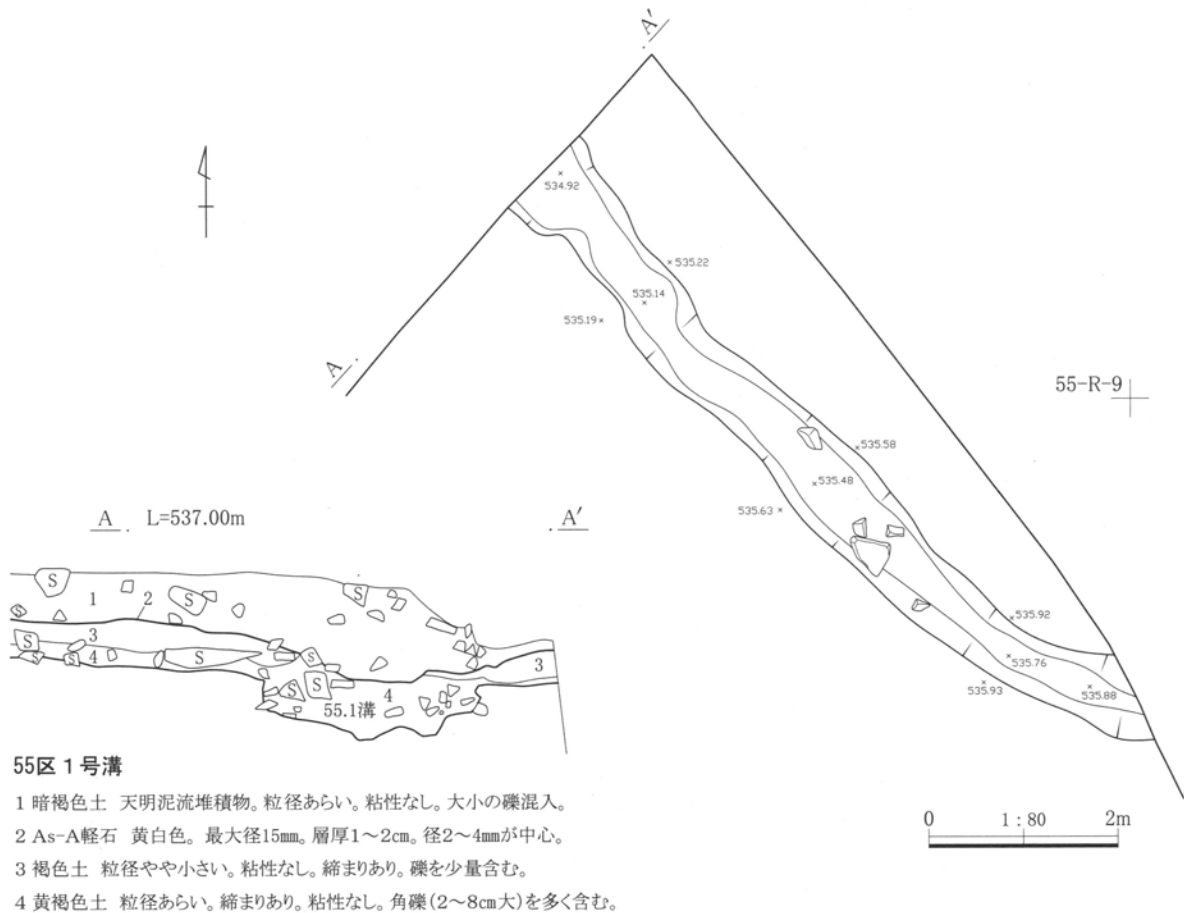


図36 55区1号溝

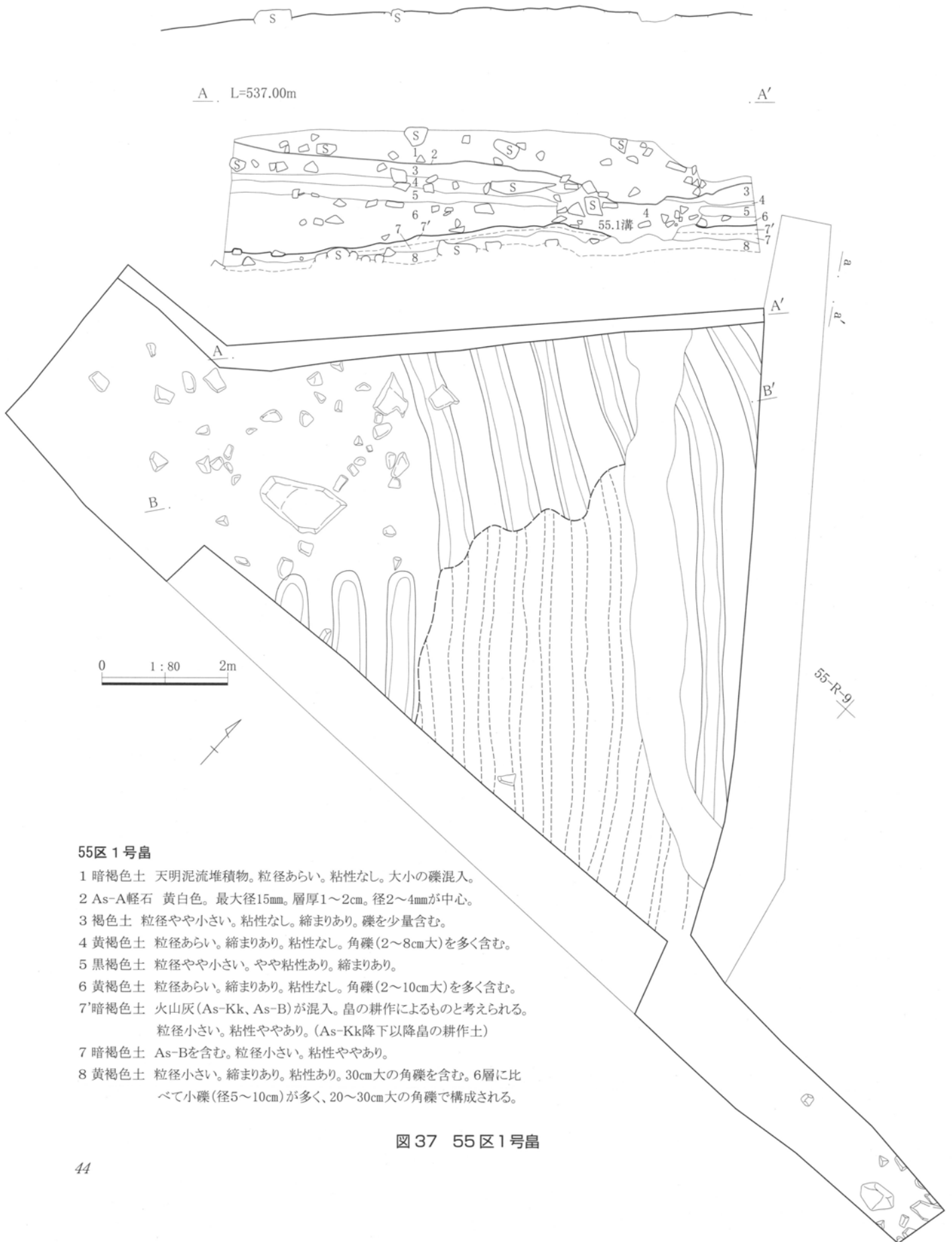
II 遺跡の調査記録

B L=536.00m

B'

A L=537.00m

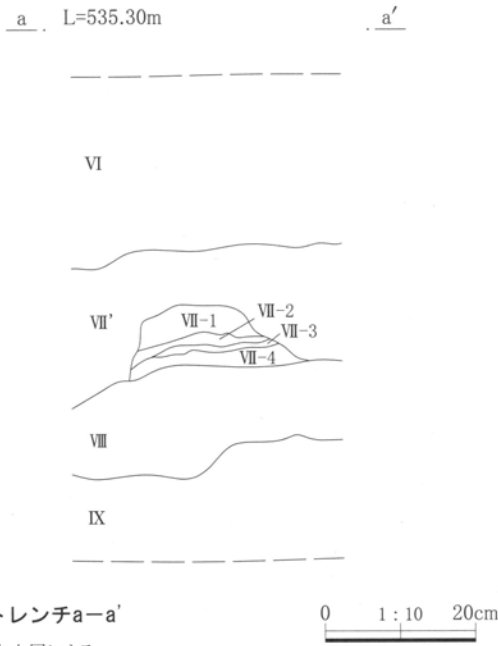
A'



55区1号畠

- 1 暗褐色土 天明泥流堆積物。粒径あらい。粘性なし。大小の礫混入。
- 2 As-A軽石 黄白色。最大径15mm。層厚1~2cm。径2~4mmが中心。
- 3 褐色土 粒径やや小さい。粘性なし。縮まりあり。礫を少量含む。
- 4 黄褐色土 粒径あらい。縮まりあり。粘性なし。角礫(2~8cm大)を多く含む。
- 5 黒褐色土 粒径やや小さい。やや粘性あり。縮まりあり。
- 6 黄褐色土 粒径あらい。縮まりあり。粘性なし。角礫(2~10cm大)を多く含む。
- 7' 暗褐色土 火山灰(As-Kk、As-B)が混入。畠の耕作によるものと考えられる。
粒径小さい。粘性ややあり。(As-Kk降下以降畠の耕作土)
- 7 暗褐色土 As-Bを含む。粒径小さい。粘性ややあり。
- 8 黄褐色土 粒径小さい。縮まりあり。粘性あり。30cm大の角礫を含む。6層に比べて小礫(径5~10cm)が多く、20~30cm大の角礫で構成される。

図37 55区1号畠



拡張トレンチa-a'

- VI 基本土層による。
- VII' 基本土層VII層及びVIII層を母体とする55区1号畠の耕作土。
- VII As-Kkテフラの一次堆積のユニットで、耕作の及ばなかった部分のみで僅かに確認される。
- VII-1 As-Kkテフラ一次堆積ユニット(青灰色)。
- VII-2 As-Kkテフラ一次堆積ユニット(黒含む灰色)。
- VII-3 As-Kkテフラ一次堆積ユニット(黄褐色灰色)。
- VII-4 As-Kkテフラ一次堆積ユニット(桃灰色)。
- VIII 基本土層による。上位に、黄褐色灰とAs-Bテフラ(最大径10mm程度の軽石)を不規則に確認する。
- IX 基本土層による。

図 38 55区拡張トレンチ a - a'

この火山灰は、色調が異なることで、肉眼でもユニットに分けることが出来た(図38、断面図 a - a')。

それほど深部ではないにも関わらず、耕作土の攪拌を受けていない火山灰層の降下ユニットが部分的に残存している、という観察からは、耕耘の回数が比較的少ない状態で礫を含んだ土砂層に覆われたことが理解できる。このことから、本島については、この火山灰の降下時にかなり近接した平安時代の帰属時期が考えられる。

なお、この火山灰は、浅間粕川テフラであることが、自然科学分析から判明している。また、ヒエが栽培されていた可能性が報告されている。あわせて、III章の自然科学分析の報告を参照されたい。

(3) 住居

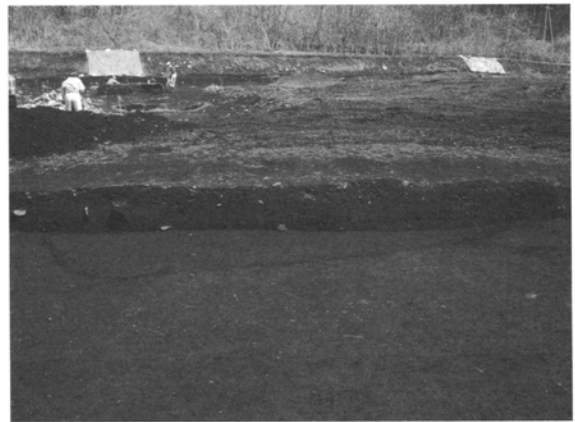
II区では、3軒の平安時代の住居を確認した。

特に、73区1・2号住居は平成15年度の調査終了時点で遺構確認がなされていたものである。

73区2号住居では、泥流畑の下位50cm内外の下位レベルで掘り込み面を確認している。本文写真2は、73区2号住居での、この状態を示す調査風景で、写真図版32写真2をあわせて参照されたい。この間の土層堆積は、住居廃棄から天明三年までの堆積を示すことになる。

また、本文写真3は、図42の断面B-B'で、左端の括れは、同写真2の名残りである。

出土遺物について、この地域の確定された編年は明確ではないが、県内の例と比較すれば、3軒とも9世紀後半に帰属するものと考えられる。73区3号住居は、73区2号住居の床下から検出された。

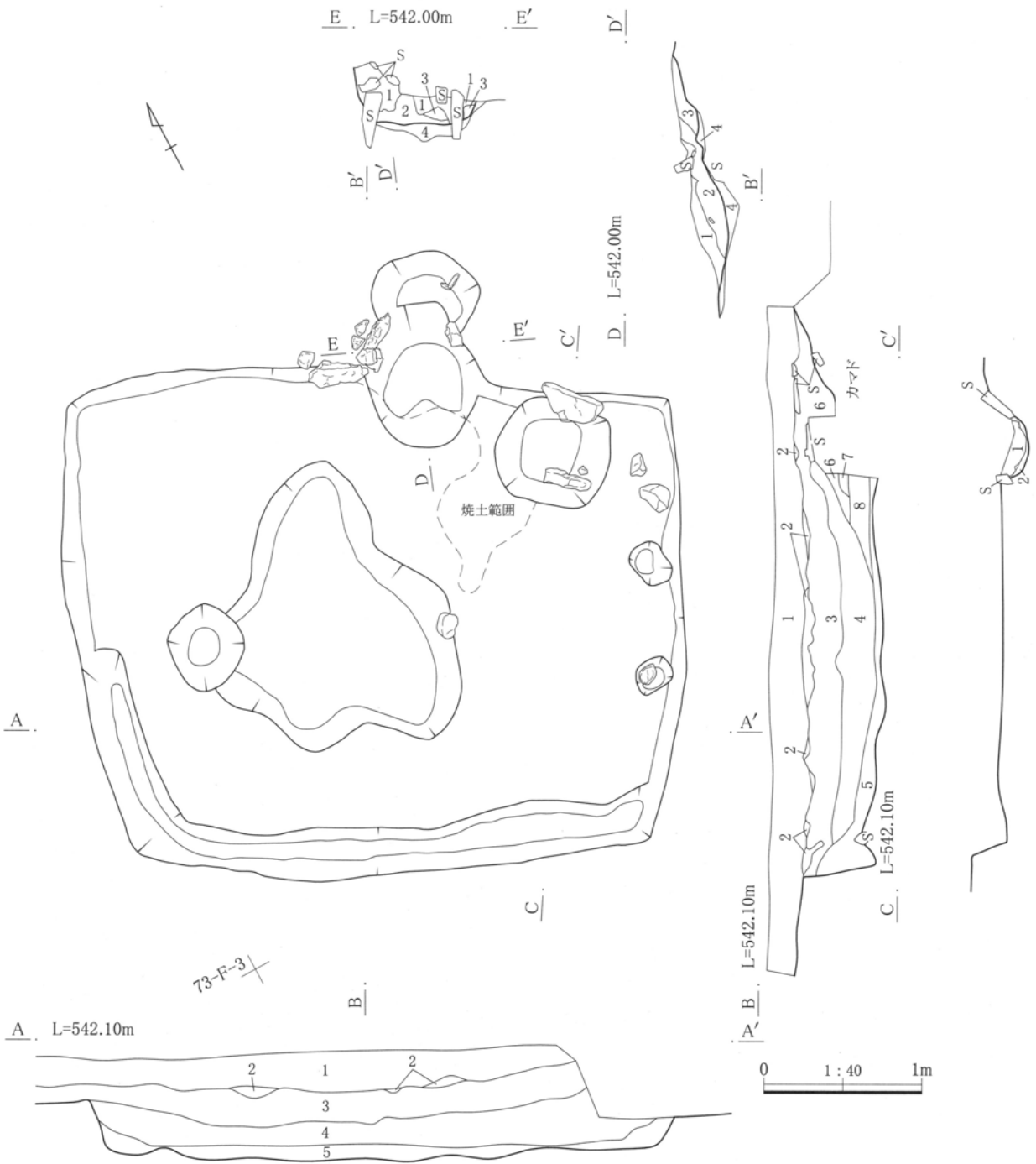


本文写真2 73区K+3ライン断面 西→



本文写真3 73区2号住居 断面B-B' 南→

II 遺跡の調査記録



73区1号住居

A-A'・B-B'

- 1 黒色土 畑耕作土。小礫、微小軽石が少量混入。
- 2 灰黄褐色土 乱れたAs-Kk。
- 3 黒色土 やや軟質で混入物少ない。
- 4 黒褐色土 小砂若干と炭化物を含む。
- 5 暗褐色土 若干のロームを含む。
- 6 暗褐色土 黄色軽石、ローム小ブロックを若干混入。
- 7 暗褐色土 6層に少量の焼土を含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒、炭化物若干混入。

C-C'

- 1 極暗赤褐色土(5YR2/4) 住居覆土。
- 2 褐色土(7.5YR4/6) ローム・礫層含む。

D-D'・E-E'

- 1 極暗赤褐色土(5YR2/4) カマド覆土。径1~3cmの礫を7~10%含む。
- 2 にぶい赤褐色土(5YR4/4) 焼土ブロックを1~3%含む。
- 3 明赤褐色土(2.5YR5/8) 焼土。
- 4 褐色土(7.5YR4/6) ロームと小礫含む。

図39 73区1号住居(1)

73区1号住居（出土遺物：26～35、48～51、133、156、193） 帰属年代は9世紀3/4期と考えられる。**位置** 73区E-2～E-3グリッド。**形状** 長辺4.0m×短辺3.2mの長方形。**貯蔵穴** 東隅寄りに位置し、扁平な磔を伴い、74×66×18cm（長×短×深さ）。**面積** 12.0㎡。**主軸方位** N-29°-E。

検出状況と覆土 泥流畑の表面から概ね30cm程度で掘り込み面を確認する。覆土には、浅間柏川テフラ（1128年）が確認できる。**床面** 中央やや窪み、若干硬化。**竈** 奥行き119cm×横幅72cm（袖焚口幅48cm）。**柱穴** なし（窪みは柱穴とは判断できない）。**周溝** 幅26～37cm、深さ3～4cmで南西壁付近で検出。

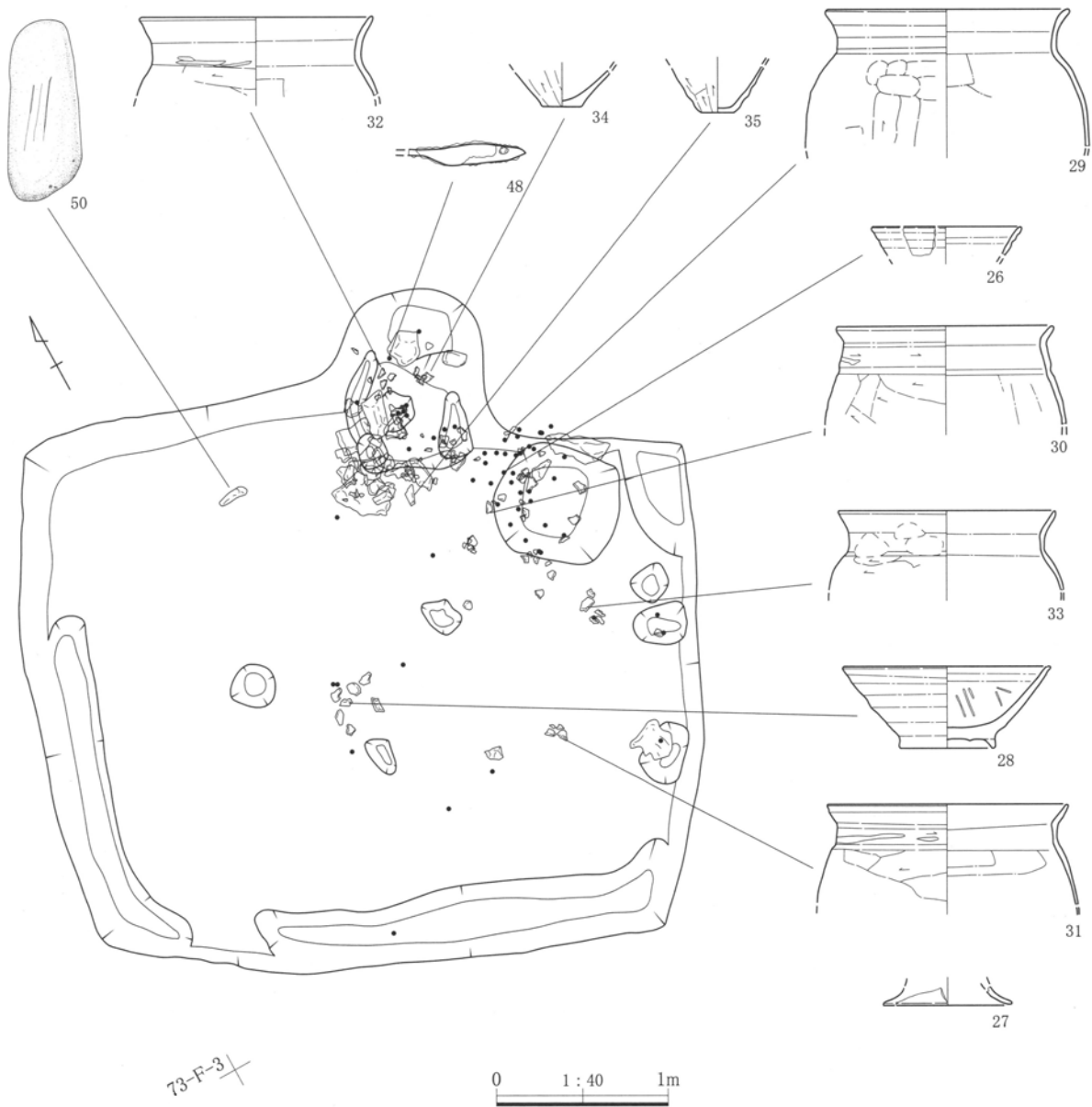
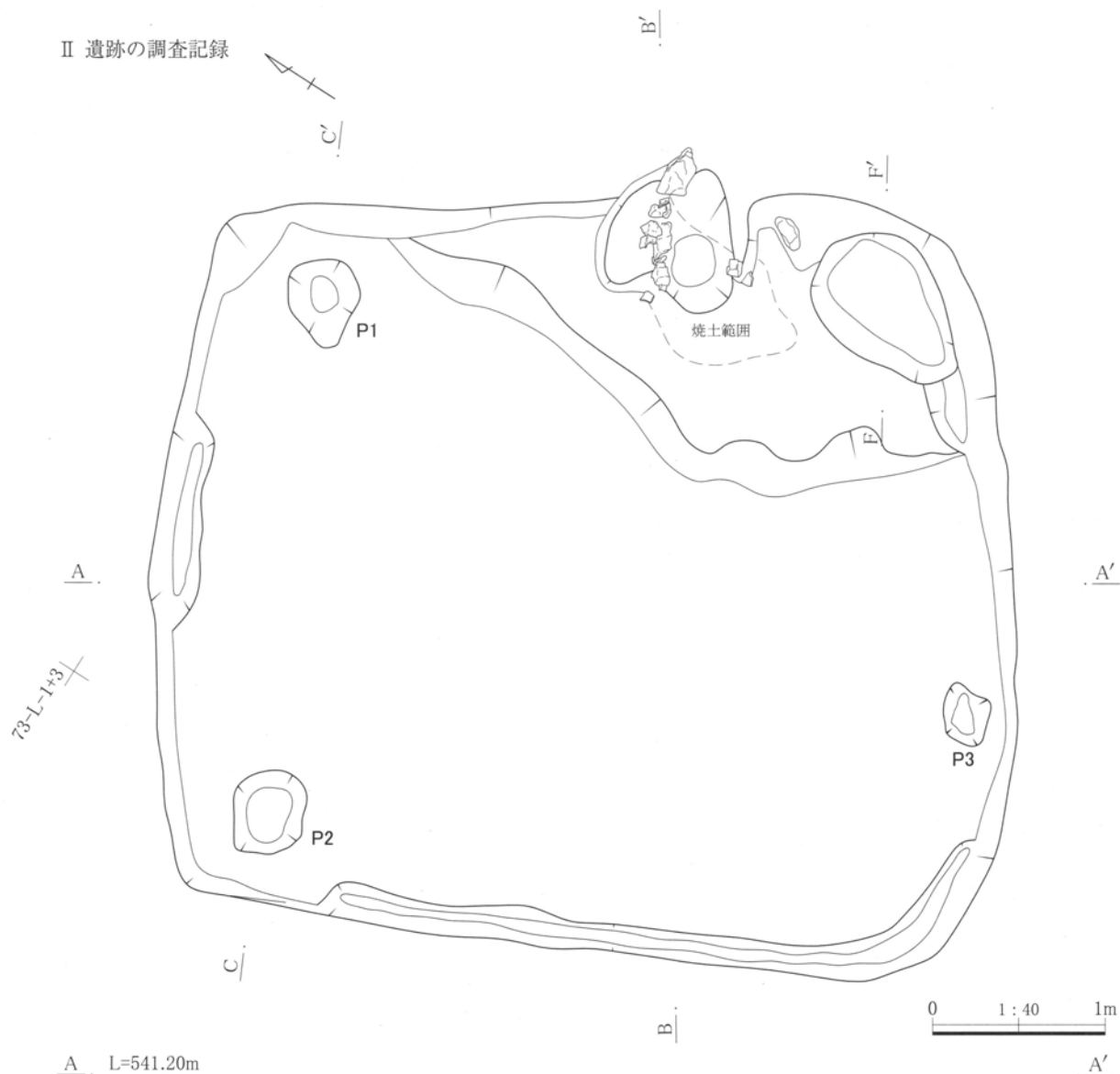
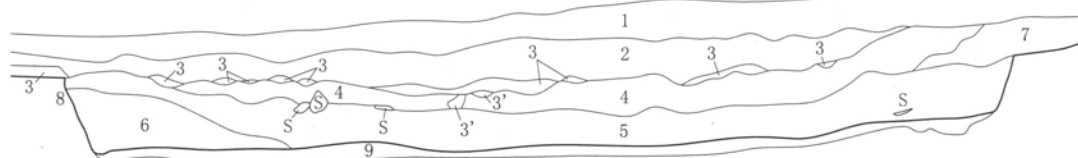


図40 73区1号住居(2)

II 遺跡の調査記録



A. L=541.20m



73区2号住居

A-A'・B-B'

- 1 黒褐色土 泥流畑作土。小礫、軽石混入。
- 2 黒色土 少量の軽石を含みやや縮まりあり。
- 3 灰黄褐色土 As-Kk(二次堆積)。
- 3' 灰黄褐色土 As-Kkが多く混入。
- 4 黒色土 黒味強くやや粘性示す。
- 5 黒色土 小礫、ローム小粒、炭化物、焼土ブロック混入。
- 6 暗褐色土 ロームを含む。
- 7 黒色土 小砂礫を若干含む。
- 8 暗赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 9 暗褐色土 ローム、小礫を含む。

F-F'

- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒子40%、細粒黒色土60%。

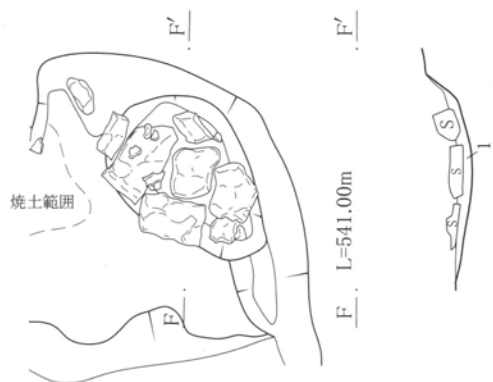


図41 73区2号住居(1)



C-C'

- 1 暗褐色土 径3cm大の礫を含む。ローム粒子10%、細粒黒色土90%。
- 2 にぶい黄褐色土 炭化物、2cm大のロームブロックを含む。ローム粒子20%、細粒黒色土80%。

D-D'・E-E'

- 1 黒色土(10YR2/1) 覆土。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 黒に焼土や炭化物が僅かに混じる。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 黒と焼けたローム(カマド材)が混じる。
- 4 明黄褐色土(10YR7/6) 焼けたローム(カマド材)。
- 5 にぶい赤褐色土(5YR5/3) 焼土、焼けたローム、黒色土が同率で混じる。
- 6 橙色土(2.5YR6/8) よく焼けた焼土。
- 7 黒褐色土(10YR1/3) 黒に灰が僅かに混じる。

73区2号住居 (出土遺物: 36~44、47、52、53、105、132、153~155)

帰属年代は9世紀4/4期と考えられる。

位置 63区K-25~73区K-1グリッド。**形状** 長辺5.0m×短辺4.5mの長方形。**貯蔵穴** 東隅に位置し扁平な礫が覆い、100×70×12cm(長×短×深さ)。**面積** 20.3㎡。**主軸方位** N-58°-E。**検出状況と覆土** 泥流畑の表面から概ね25cm程度で掘り込み面を確認する。覆土には、浅間粕川テフラ(1128年)が確認できる。**床面** やや硬化。**竈** 奥行き82cm×横幅75cm(袖焚口幅38cm)。**柱穴** P1:48×57×12cm、P2:50×42×18cm P3:37×12cm(径×深さ)。**周溝** 幅15~30cm、深さ1~7cmで、部分的に検出。

図42 73区2号住居(2)

II 遺跡の調査記録

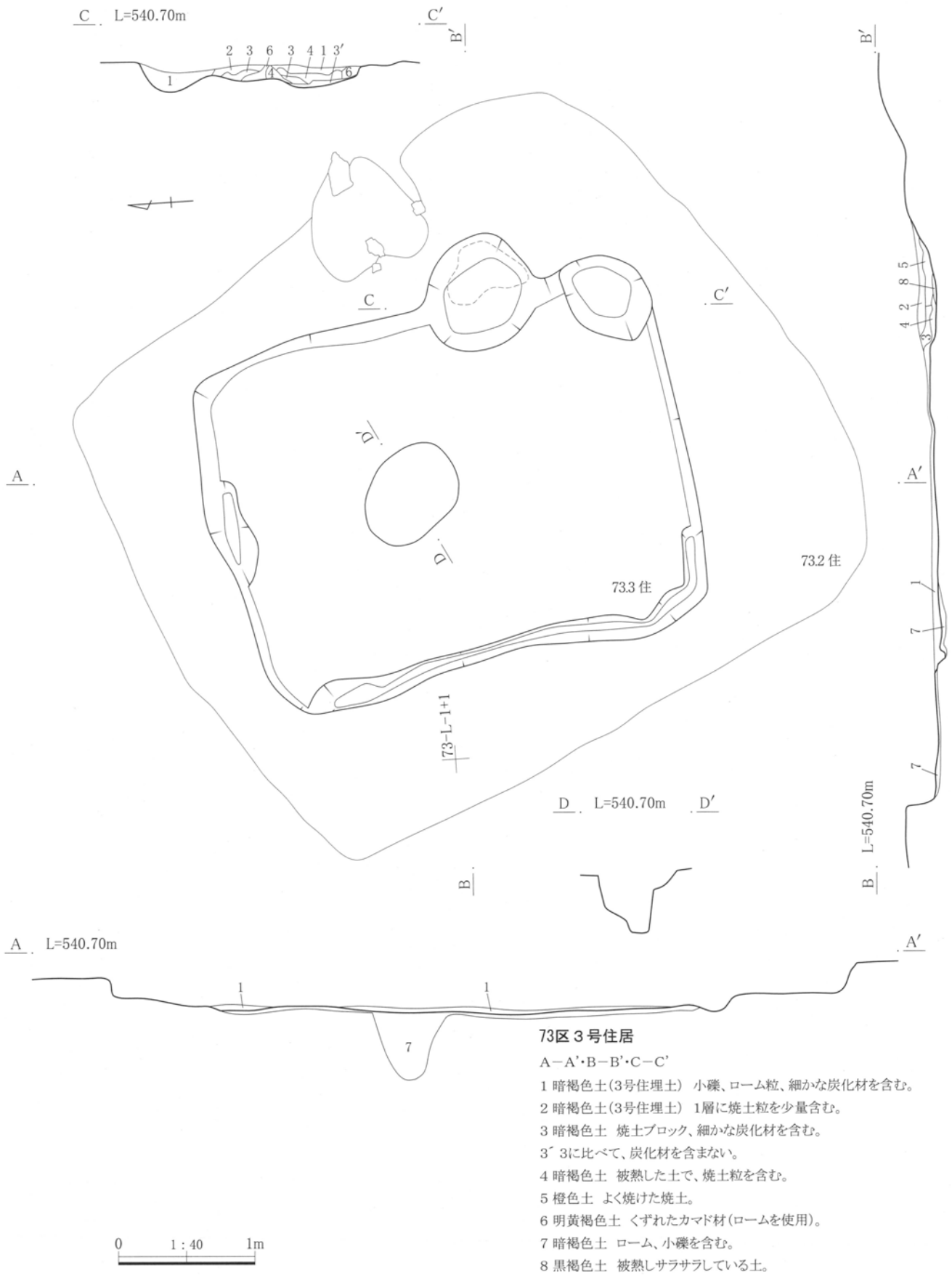


図43 73区3号住居

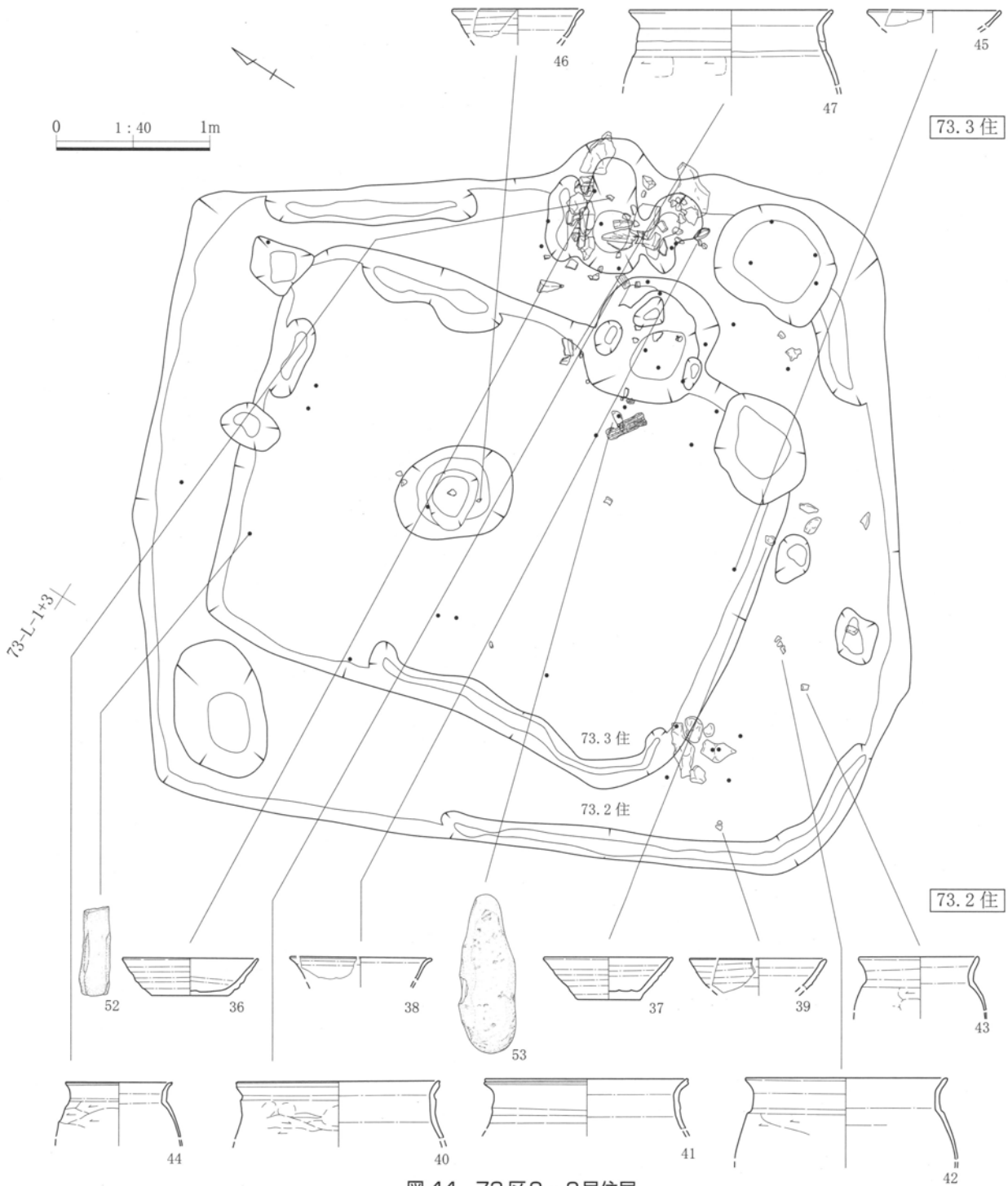


図44 73区2・3号住居

73区3号住居（出土遺物：45～47、102） 帰属年代は9世紀3/4期と考えられる。**位置** 63区K-25～73区K-1グリッド。**形状** 長辺3.6m×短辺2.7mの長方形。**床下土坑** 中央やや北に位置し、78×60×43cm（長×短×深さ）。**面積** 9.2㎡。**主軸方位** N-78°-E。**検出状況と覆土** 73区2号住居床

下約5cmの掘り方面で検出。**床面** 硬化状況不良。**竈** 奥行き82cm×横幅78cm。**柱穴** なし。**周溝** 幅10～27cm、深さ2～6cmで南壁付近で検出。

（4）埋設土器

本項で扱う3基の埋甕は、住居等の遺構とは共伴しない。また、帰属時期の問題やそれに伴う遺構の

II 遺跡の調査記録

性格付けなどから、クリアしなければならない諸問題も残されている。そのため、遺構の名称においても、ここではその議論を避け、調査時から用いていた「埋甕」の遺構名称を用い報告することにする。3基はいずれも、II区から出土したものである。

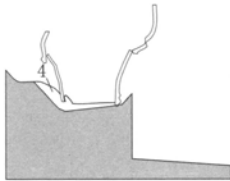
73区1号埋甕（出土遺物：115、159）のうち159は接合には至らなかった小破片である。73区3号埋甕（出土遺物：116、157、158、160）の157、158、160も同様である。

両遺構は、「1つの掘り込みに2基が同時に埋設されたのか」、「それぞれが別々の掘り込みで埋設されたのか」という点については、現場の土層確認を担当者間で充分検討したが、明確に提示できる結論には至らなかった。地山は、黄色軽石を含む厚さ25cmの暗褐色土とその下位にある3～5cm程度の礫を多く含む砂質土である。

両遺構については、併記しながら事実記載をおこなっていくことにする。

調査記録から、およその地形と土層状態をたどっておく。現況は、5%程度の緩い北面傾斜地で、調査前の現況標高は、542.75m内外である。表層から

B L=540.60m B'



73区1・3号埋甕

A-A'・B-B'

- 1 黒色土(10YR1.7/1) 粒細かく、軽石少ない黒土。やわらかく、パサパサ感あり。径1～3cmの礫を3～5%含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 粒細かく、締まり弱い。黄色軽石を含む。土器内均等に径3～7cmの円礫(川原石)を40～50%含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 黄色軽石を含む。径1～4cmの礫を1～3%含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 黄色軽石を含む。3層より少し褐色に近い。径3～5cmの礫を3～5%含む。炭化物を含む。締まりなく、やわらかい。

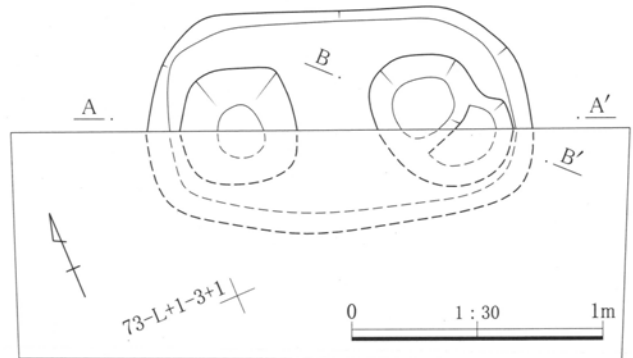
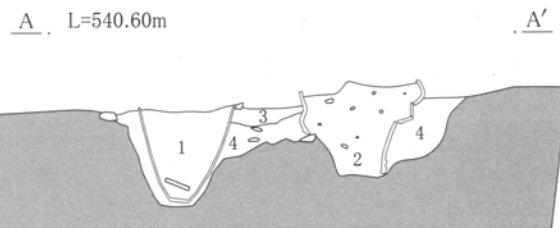
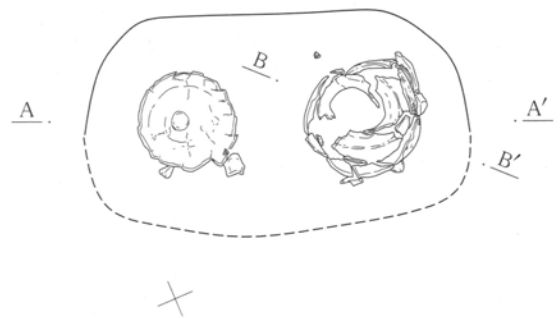
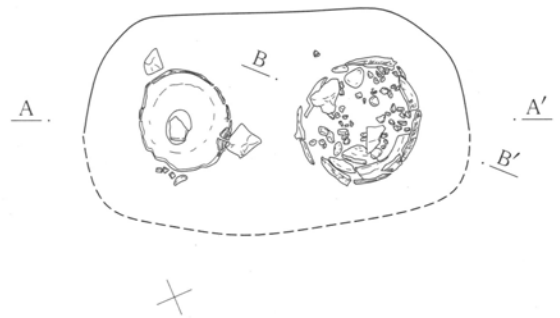
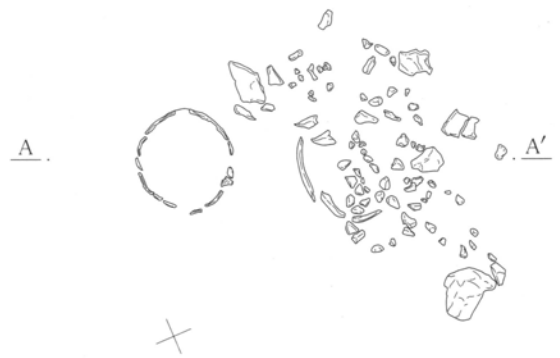


図45 73区1・3号埋甕

4. 第2面の調査

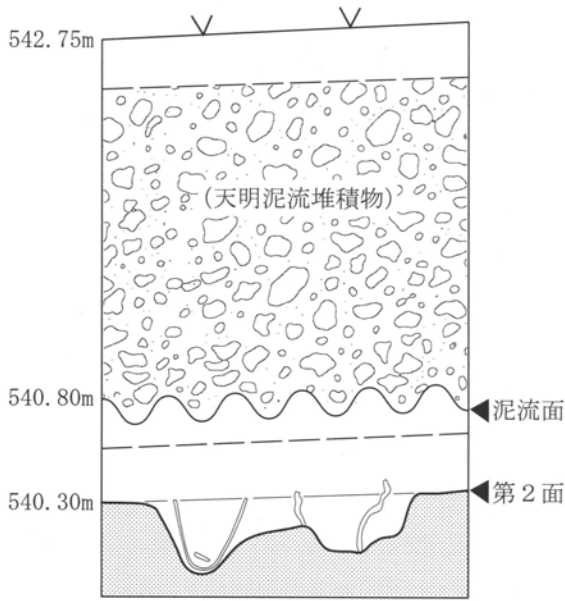


図46 73区1・3号埋甕検出状況

標高540.80mの泥流畑までは現況の耕作土と天明泥流堆積物が堆積し、埋設土器の検出面は540.30mである。泥流畑から検出面まで50cmの深さとなっている。

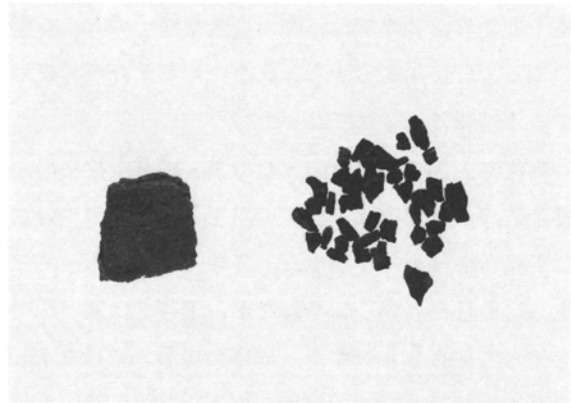
発掘調査では、まず1号が確認された。表土掘削や精査途中の土層中では、口縁に該当する土器片を確認することは出来なかった。泥流畑の耕作土として、人為的に天明三年までの耕作による破損を受けたか、或いは埋設された時点で既に口縁部分を欠損していたかという可能性もある。ちなみに、本調査区内の泥流畑で耕作土中の作土（恒常的に耕耘がなされたと考えられる部分）が判別できるのは、概ね20cm内外である。

いずれにしても、整理段階において、1号の口縁部分に該当する破片を1片も確認することができなかった。

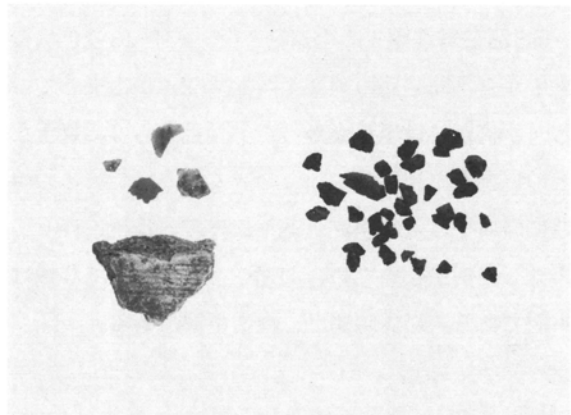
1号は、甕形の土器が口縁を欠損し正位で埋置されていた。埋土は地山と比較し黒色味が強い。骨片や歯などは、調査時点でも確認できなかった。底部には、扁平な礫1点が見つかった。

3号は、壺形の土器が胴部以下を欠損し逆位で埋置されていた。埋土中には、径3～7cm程度の亜円礫が非常に多く含まれていた。撮影した礫のスナッ

プを写真図版38に掲載した。いずれも、付近の地山に存在する形状の礫ではなく、意図的に持ち込まれているものと判断できる。その大半が粗粒輝石安山岩で、僅かにガラス質安山岩・細粒輝石安山岩・礫岩・石英安山岩が含まれているとの鑑定を受けている。また、確認した礫は総量で13.7kg、適当な20個の礫の平均が58.3gであった。235個以上の礫



本文写真4 73区1号埋甕内遺物



本文写真5 73区3号埋甕内遺物



本文写真6 73区1号埋甕検出状況 西→
(写真中央に73区1号埋甕を検出する)

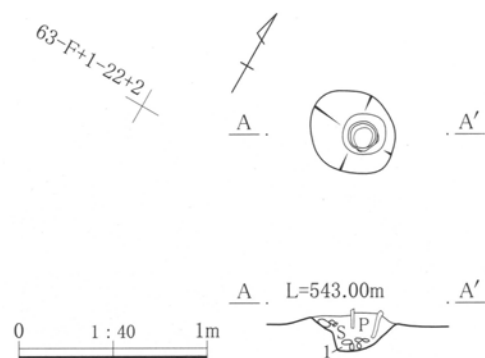
II 遺跡の調査記録

が込められていたことが確認できる。

両土器の検出面から、上位10～20cmの高さには、人頭大以下の礫がまとまって確認された。平面位置がやや北に離れるが、本文写真6にみるように、礫の含まれない土層中に、埋甕周辺で礫が集中していることがわかる。概して、礫はこの付近にしか存在していないことから、掘り込み面が検出面よりもさらに上位である可能性もある。これらの礫が存在することから、調査では、礫の投棄や埋土の方法を窺い知ることが出来るかもしれないと考えたが、提示できる情報は得られなかった。

両土器内部の埋土を篩った結果、細密条痕文の土器小破片がそれぞれ1点ずつ出土しているが、いずれも接合には至らなかった。3号では土器の一部である可能性が高いと判断したが、1号では別個体のもと考えられる。また、同様に1号からは0.7g、3号からは0.8gの炭化物、黒曜石の微小剥片を確認したが、骨片などを検出することはできなかった。

63区2号埋甕 (出土遺物: 61) 63区13号土坑覆土中から、同時期の縄文土器片(62)が出土しているが、接合には至らなかった。付近からは、焼土などの痕跡も確認されていない。本調査区で、この時期に帰属する遺物が流れ込み以外で、遺構に伴って出土した例がないため、関連や性格について詳細は不明である。帰属時期は、縄文中期である。



63区2号埋甕

1 黒褐色土(10YR2/2) 締めあり。亜角礫(3～5cm大)を5～7%含む

図47 63区2号埋甕

(5) 土坑

土坑は38基すべてが、II区の第2面から検出された。縄文晩期に帰属すると考えられる土坑の検出などがなされた。計測値等については、表4を参照頂きたい。以下、大まかな共通項をもとに記述していくことにする。

上位に焼土が位置していて、その関連が考えられるのが、次の3基の土坑である。**63区22号土坑**(出土遺物: 195)は、上位の63区5号焼土検出時には明確な掘り込みが確認できず、その後検出されたものである。しかしながら、平面的な範囲が重なるため、2つの遺構の関連が求められるが、土坑内からは時期決定をおこなえる遺物の出土はなく、詳細は不明である。63区5号焼土からは、縄文晩期の土器片が出土している。同様に、焼土の下位で検出された、**63区27号土坑**(出土遺物: 54、55、89、96、127、130、148～150、205)からは、縄文晩期土器片に混じって古墳時代の土師器が出土している。摩滅した細密条痕の極小破片3点は未掲載。地山4層は住居の床面の可能性を疑ったが、確認するには至らなかった。上位の63区4号焼土は、焼土ブロックが散在し、明確な範囲が63区4号焼土であり本遺構の断面図中の1層中に含まれる。出土遺物から本遺構の帰属時期は古墳時代以降と考えられる。

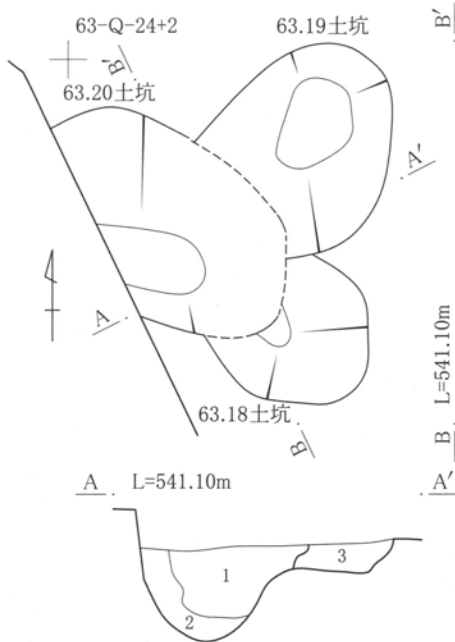
63区28号土坑(出土遺物: 109、111、151、152)は、63区27号土坑により切られている。摩滅した縄文土器片3点は未掲載であるが、4点の遺物は、いずれも縄文晩期の遺物で、63区27号土坑内の同期の遺物はこの土坑内にあった可能性がある。帰属時期は縄文晩期以降である。**63区18～20号土坑**の3基の土坑の重複関係は、63区18号土坑と63区19号土坑が古く、63区20号土坑が新しいとしか考えられない。63区18号土坑では、摩滅した縄文土器片1点と粗粒輝石安山岩の剥片状の礫が出土しているが未掲載とした。帰属時期の確定には至らなかった。この3基の土坑は、切り合った63区27・28号土坑と形態的に似通っている様にも思えるが、詳細は不明である。

表4 土坑計測値等一覧表

遺構名称	位置 主軸方向	長軸×短軸 (検出面) cm	深さ cm	平面形状 備考
		長軸×短軸 (底面) cm		
1 63区13号土坑	63区 F - 22 N - 0°	198 × 152	16	不整形 縄文中期以降
		154 × 100		
2 63区18号土坑	63区 P - 24 N - 48° - W	(122) × 100	32	楕円形
		(38) × (24)		
3 63区19号土坑	63区 P - 24 N - 41° - E	(158) × 120	53	楕円形
		62 × 46		
4 63区20号土坑	63区 P - 24 N - 62° - W	(196) × (120)	60	楕円形
		(88) × 38		
5 63区21号土坑	63区 C - 17 N - 37° - E	230 × 110	70	不整形 天明三年以前
		92 × 50		
6 63区22号土坑	63区 N - 22 N - 70° - W	232 × 166	38	楕円形 縄文晩期以前
		136 × 74		
7 63区23号土坑	63区 J - 24 N - 53° - W	128 × 92	26	楕円形
		104 × 76		
8 63区24号土坑	63区 K - 23 N - 12° - W	136 × 99	20	隅丸長方形 縄文晩期
		114 × 80		
9 63区25号土坑	63区 P - 22 N - 23° - W	125 × 116	90	円形 縄文晩期
		64 × 38		
10 63区27号土坑	63区 N - 25 N - 67° - W	252 × 132	60	不整形 古墳時代以降
		126 × 38		
11 63区28号土坑	63区 N - 25 N - 7° - W	(158) × 122	68	不整形 縄文晩期以降
		34 × 32		
12 63区30号土坑	63区 M - 24 N - 38° - W	106 × 70	32	楕円形
		80 × 50		
13 63区32号土坑	63区 K - 21 N - 60° - E	184 × 82	24	不整形
		82 × 45		
14 63区34号土坑	63区 L - 24 N - 5° - E	126 × 104	18	楕円形
		110 × 80		
15 63区38号土坑	63区 P - 22 N - 27° - E	(76) × 52	30	(楕円形)
		(48) × 32		
16 63区40号土坑	63区 K - 25 N - 14° - E	73 × 70	16	楕円形 古墳時代以前
		48 × 46		
17 73区3号土坑	73区 H - 10 N - 49° - E	158 × 122	24	不整形
		132 × 94		
18 73区4号土坑	73区 G - 10 N - 28° - E	154 × 114	31	不整形
		121 × 80		
19 73区5号土坑	73区 F - 10 N - 58° - E	238 × 100	34	不整形
		202 × 44		
20 73区6号土坑	73区 I - 9 N - 88° - E	350 × 192	74	不整形 縄文後期以降
		172 × 65		

21 73区7号土坑	73区 H - 8 N - 20° - E	130 × 122	40	円形 縄文中期?以降
		92 × 86		
22 73区8号土坑	73区 G - 8 N - 43° - E	118 × 104	21	不整形
		87 × 70		
23 73区9号土坑	73区 H - 6 N - 5° - W	141 × 128	58	楕円形 縄文中期以降
		80 × 74		
24 73区10号土坑	73区 G - 6 N - 13° - W	118 × 106	50	楕円形 縄文中期以降
		64 × 58		
25 73区11号土坑	73区 I - 6 N - 40° - E	100 × 84	38	楕円形
		52 × 50		
26 73区12号土坑	73区 M - 6 N - 27° - E	122 × 102	21	楕円形
		91 × 78		
27 73区14号土坑	73区 K - 6 N - 54° - E	118 × 92	30	楕円形
		78 × 21		
28 73区15号土坑	73区 O - 6 N - 64° - W	322 × 178	85	楕円形
		158 × 79		
29 73区16号土坑	73区 K - 2 N - 83° - E	174 × 134	28	隅丸長方形
		126 × 85		
30 73区17号土坑	73区 M - 6 N - 32° - E	90 × 86	48	円形 縄文晩期
		55 × 42		
31 73区26号土坑	73区 K - 3 N - 35° - W	146 × 128	34	不整形 縄文晩期
		120 × 88		
32 73区29号土坑	73区 J - 10 N - 16° - W	196 × 78	30	短冊長方形 縄文以降
		152 × 53		
33 73区31号土坑	73区 J - 2 N - 19° - W	114 × 102	17	不整形
		76 × 68		
34 73区33号土坑	73区 K - 3 N - 88° - E	170 × 136	22	楕円形
		144 × 116		
35 73区35号土坑	73区 J - 3 N - 83° - W	114 × 92	28	不定形
		84 × 66		
36 73区36号土坑	73区 K - 4 N - 85° - E	106 × 96	49	円形
		58 × 50		
37 73区37号土坑	73区 I - 4 N - 30° - W	146 × 124	51	楕円形 縄文中期以降
		84 × 61		
38 73区39号土坑	73区 K - 2 N - 47° - E	120 × 86	10	不整形
		61 × 32		

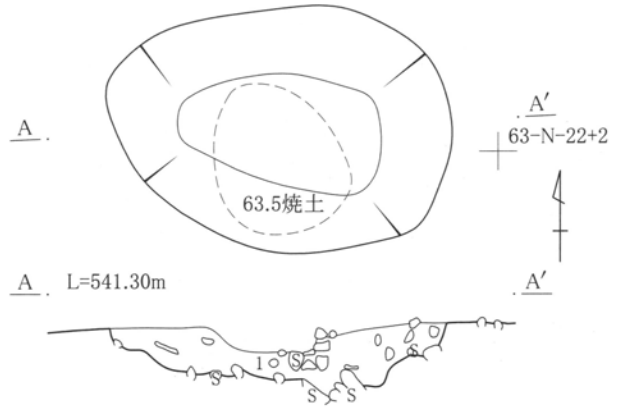
II 遺跡の調査記録



63区18・19・20号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 締まりあり。礫少ない。腐植の集積強い。
- 2 褐色土(10YR4/4) 締まりあり。礫少ない。ロームが混入している。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 締まりあり。歪角礫(3~5cm大)を5~7%含む。

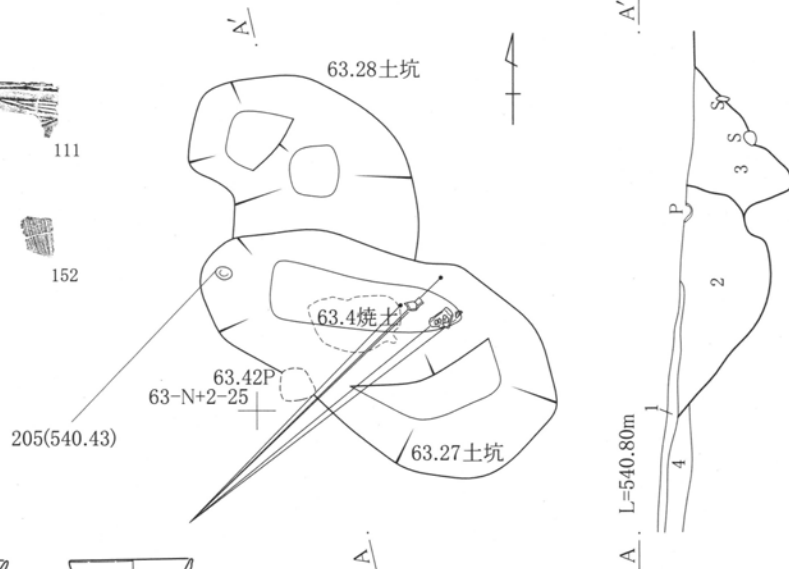
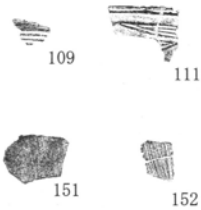
以下の3基は風倒木と判断した。**63区21号土坑**では、泥流畑下位の黒色土の下から掘り込み面が確認出来る。上位に扁平な礫が重なっていたが、人為的かどうかの判断は出来ない。時期は天明三年以前である。**73区5・6**(出土遺物:85)・**15号土坑**も風倒木痕と考えられ、73区6号土坑は土



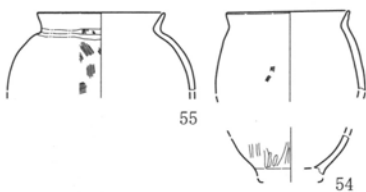
63区22号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 5~20cm大の歪角礫を20%含む。

63.28 土坑



63.27 土坑



63区27・28号土坑

- 1 極暗赤褐色土(2.5YR2/2) 締まりあり。粒細かい焼土ブロックを含む。軽石少量含む。
- 2 黒褐色土(7.5YR2/2) 土器片を含む。黄色軽石を含む。63区27号土坑覆土。
- 3 黒褐色土(7.5YR3/2) 63区28号土坑覆土。縄文晩期土器片と軽石を少量含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/4) 径2~5cmの円礫を1~3%含む。ロームブロックを少量含む。

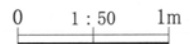
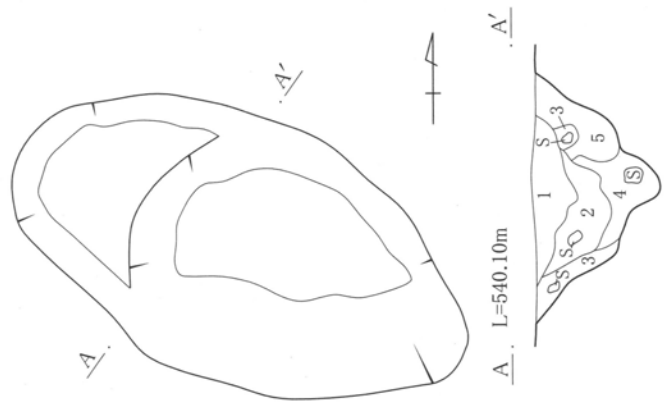


図48 63区18~20・22・27・28号土坑

器片が出土していることから縄文後期以降の倒木痕である可能性が高い。いずれも南か北方向の倒木の可能性が高く、遺構が営まれた周辺の環境を考える上で資料化出来る可能性もある。今後の周辺調査での視点として参照頂きたい。他にも数基の同様な痕跡を確認したが、記録には至らなかった。

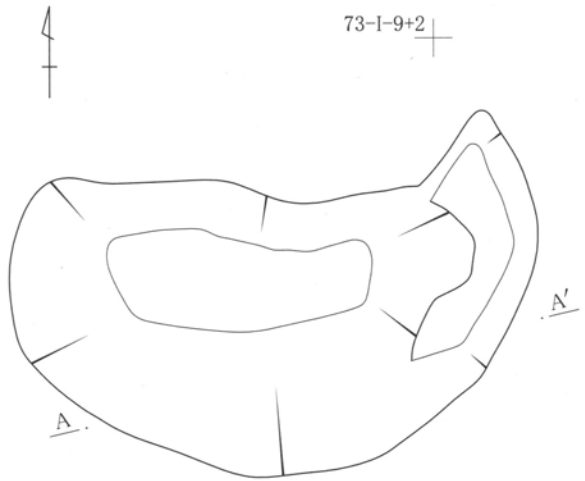
平面が円形を呈している土坑は次の通りである。**73区9号土坑**（出土遺物：58）、**73区10号土坑**（出土遺物：59）や**73区37号土坑**（出土遺物：77）からは、縄文中期の遺物が出土している。**73区7号土坑**では、未掲載の摩滅した縄文土器片1点（中期？）があるが、遺物の出土のない**73区8号土坑**



73-P-6+1

73区15号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。礫少ない。腐植の集積強い。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 4 暗褐色土(10YR3/4) 3層より少し黒みを帯びている。
- 5 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫(3~10cm大)を10~15%含む。



73-I-9+2

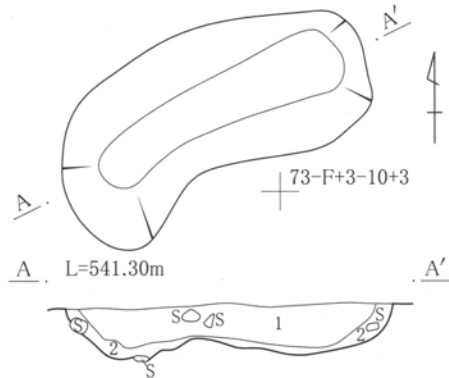
A. L=54.090m

73区6号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。

63区21号土坑

- 1' 黒褐色土(10YR2/2) 1層の作土(泥流畑)。
- 1 黒褐色土(10YR2/2) 白色軽石を含む均質土。やや粘性あり。3~5cm大の亜角礫を僅かに含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 乱れた1層。盤状の角礫を含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/6) 地山崩壊ブロック。地山ローム、礫層を1:1に含む。

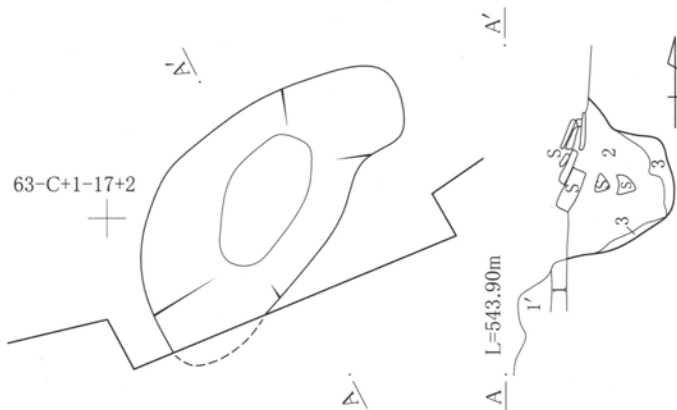


73-F+3-10+3

A. L=54.130m

73区5号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。



63-C+1-17+2

A. L=54.390m

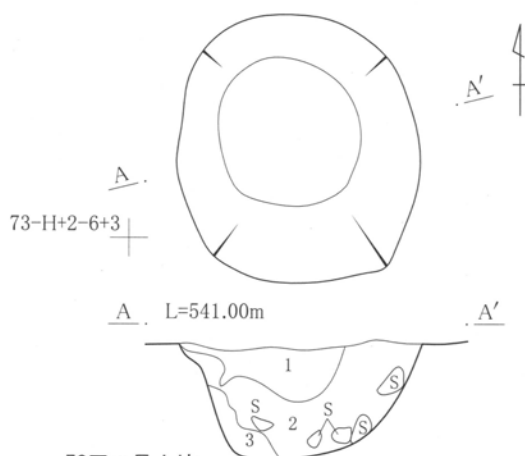
0 1:50 1m

図49 63区21号土坑、73区5・6・15号土坑

II 遺跡の調査記録

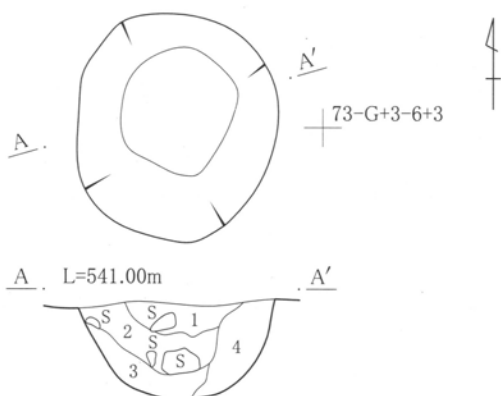
とあわせて、規模と形状が似通うことから、掘立柱建物などの可能性があるが、周辺ではそれ以上の関連を確認することが出来なかった。さらに、楕円形・円形などの平面形態を呈している **73区11・12** (摩滅した縄文土器片3点は未掲載) **号土坑**、**73区14・36号土坑**などが形態から近似している。

さらに、平面の形態は不整であるが、63区23・24・30・34号土坑、73区31・35・39号土坑の7基は、前述の8基と同様な規模を呈している。**63区23・30・34号土坑**、**73区35・39号土坑**は、遺物の出土がなく、時期決定には至らなかった。ただし、73区39号土坑では、土層中から僅かなベンガラが



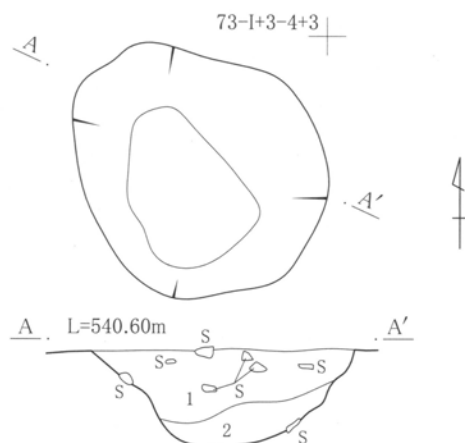
73区9号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。礫少ない。ローム質強い。



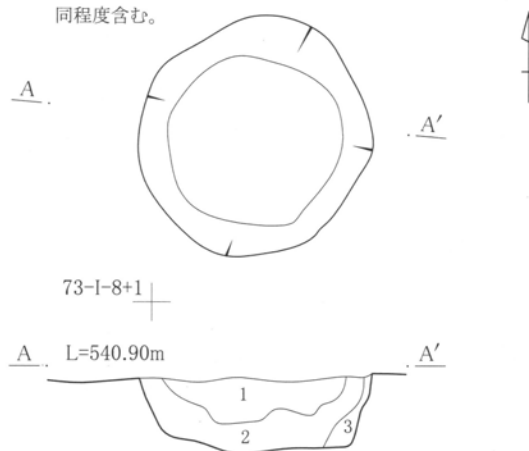
73区10号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。礫少ない。ローム質強い。
- 4 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫(3~10cm大)を10~15%含む。



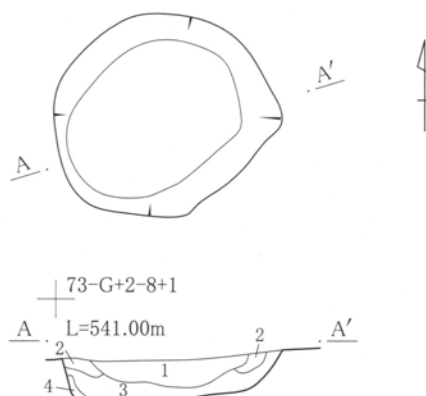
73区37号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 黄色軽石を含む。2~10cm大の亜角礫を20~30%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 1層より少し褐色の強い層。軽石、礫とも1と同程度含む。



73区7号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 3 褐色土(10YR4/4) 縮まりあり。礫少ない。ロームが混入する。

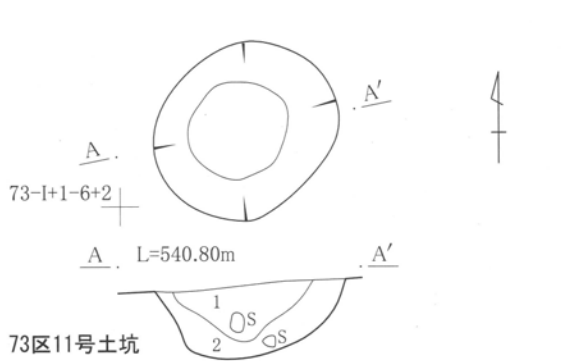


73区8号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 2 褐色土(10YR4/4) 縮まりあり。礫少ない。黒褐色土とロームの混入。
- 3 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫多い(3~10cm大)を10~15%含む。
- 4 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。礫少ない。ローム質強い。

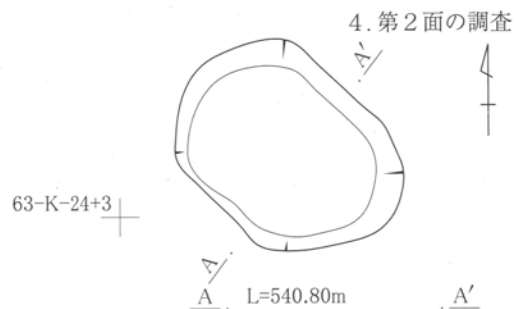
図50 73区7~10・37号土坑

0 1:40 1m



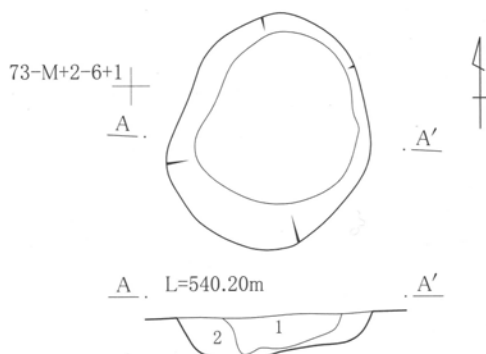
73区11号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。



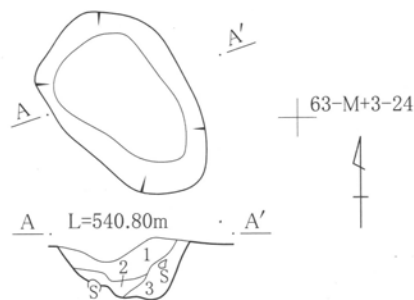
63区23号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。礫少ない。ローム質強い。
- 3 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫(3~10cm大)を10~15%含む。



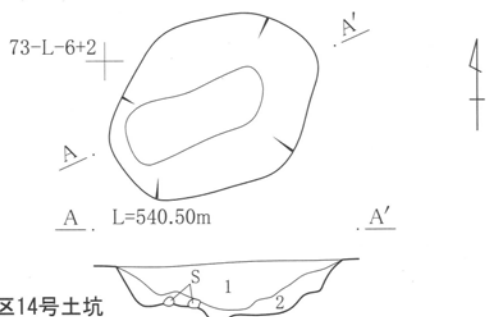
73区12号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。礫少ない。腐植の集積強い。
- 2 褐色土(10YR4/4) 縮まりあり。礫少ない。ロームが混入している。



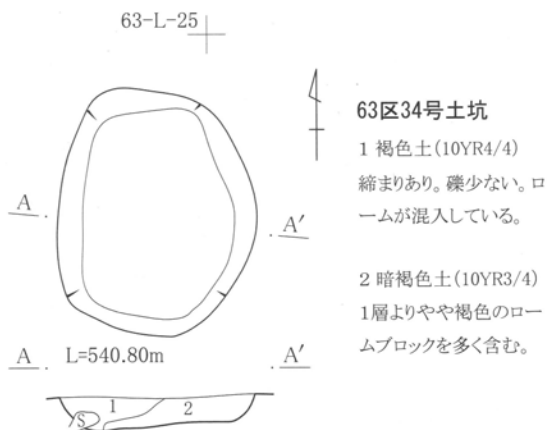
63区30号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 軽石を少量含む黒土。礫も少ない。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 1層より多少褐色が強い。軽石少ない。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 径2~4cmの礫を5~10%含む。



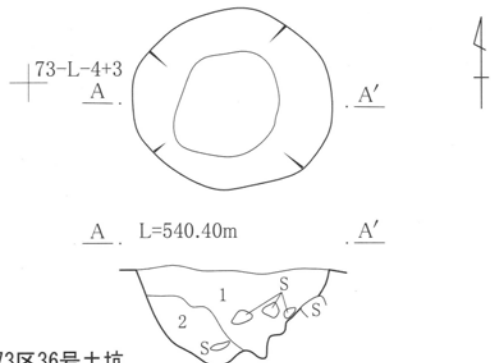
73区14号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫(3~10cm大)を10~15%含む。



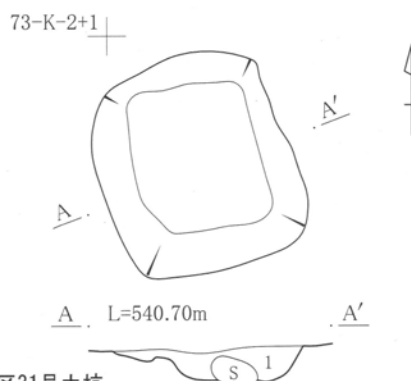
63区34号土坑

- 1 褐色土(10YR4/4) 縮まりあり。礫少ない。ロームが混入している。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 1層よりやや褐色のロームブロックを多く含む。



73区36号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 褐色味が強く、黄色軽石を含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 3~10cm大の亜角礫を30%含む。



73区31号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 軽石をほとんど含まない。やわらかい黒色土。
- 2 2~10cm大の亜角礫を5%含む。

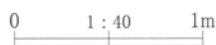
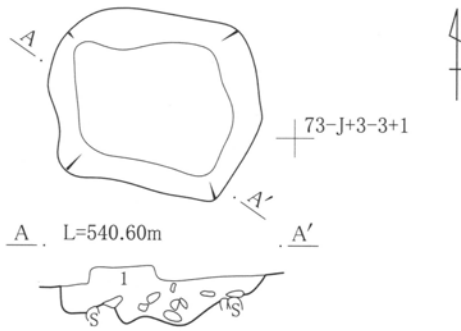


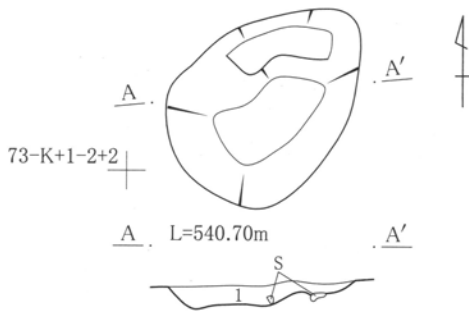
図51 63区23・30・34号土坑、73区11・12・14・31・36号土坑

II 遺跡の調査記録



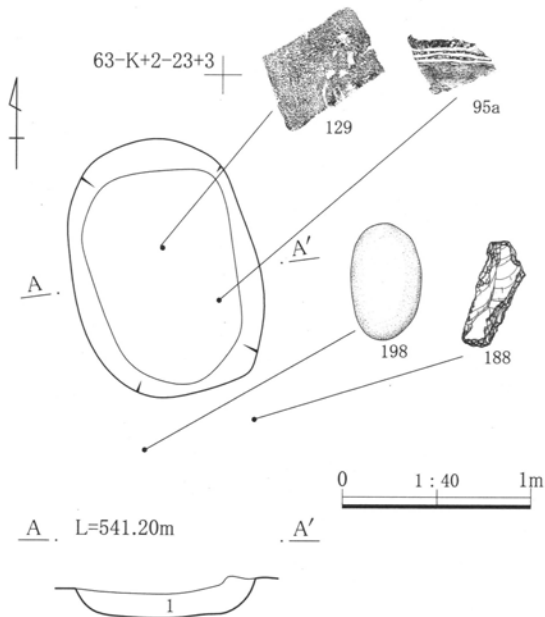
73区35号土坑

1 暗褐色土(10YR3/4) 2~10cm大の亜角礫を20~30%含む。



73区39号土坑

1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
僅かにベンガラを含む。

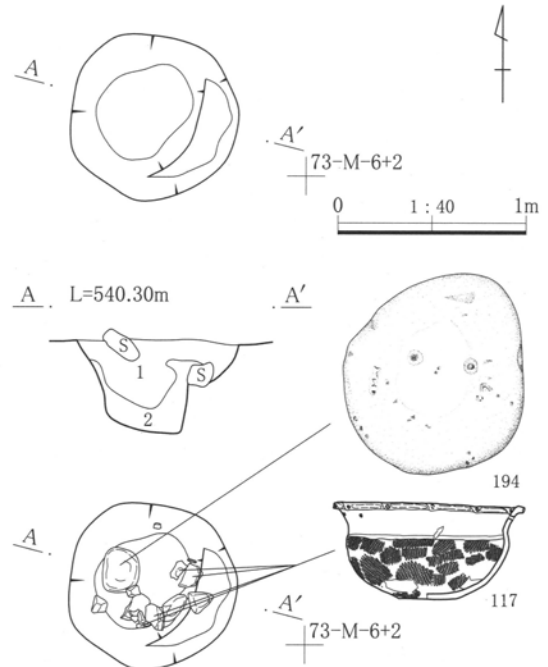


63区24号土坑

1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。

確認されている。73区31号土坑では、緑色味のある円礫(径25cm) 1個や板状の角礫(20~30cm大) 2個(いずれも未掲載)が底部で確認されているが、それ以外に遺物と判断されるものはなかった。63区24号土坑(出土遺物:95、129、188、196)では、縄文晩期土器片や黒曜石製の石匙が出土している。また、埋土からは炭化物が出土している。

以上の土坑とは、規模的に若干平面プランの規模が前後するが、晩期遺物の出土があったことが特徴なのが、73区17号土坑(出土遺物:117、194)である。出土した縄文晩期の浅鉢は約1/2が残存していた。埋土中の礫が比較的多く含まれる中に破片が散在して出土したものである。他に縄文中期土器小破片3点は、未掲載であるが、周辺の地山中からも縄文中期土器片が見つっている。73区26号土坑(出土遺物:86、198~204)においても、多くの礫が含まれる埋土中から、炭化粒、良好な磨面をもつ磨石や土器小破片、玉2点が出土し、また、底部で数mm程度の厚さの僅かな量の



73区17号土坑

1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。炭化物が少量混じる。

2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。

図 52 63区24号土坑、73区35・39号土坑

図 53 73区17号土坑

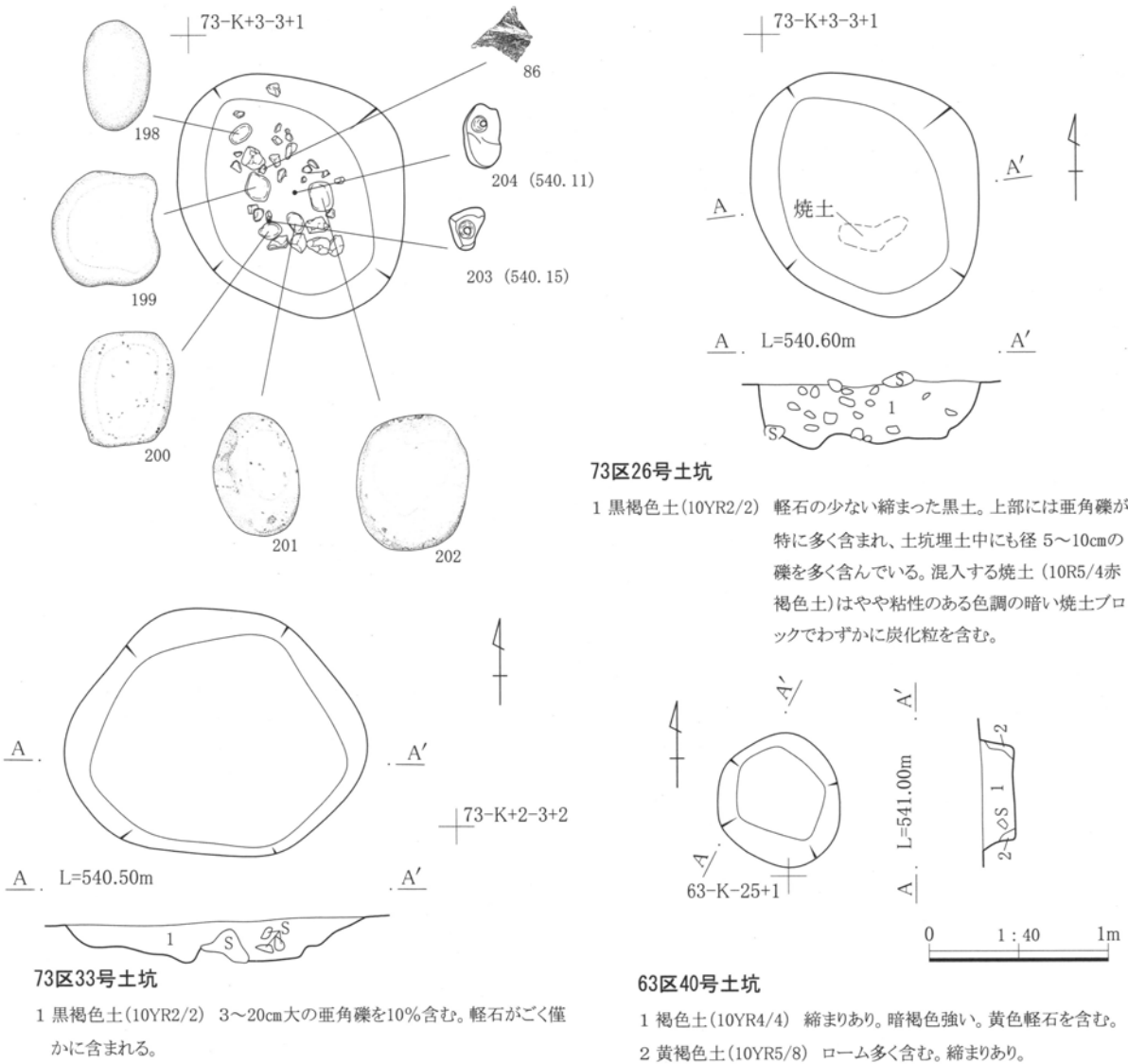


図54 63区40号土坑、73区26・33号土坑

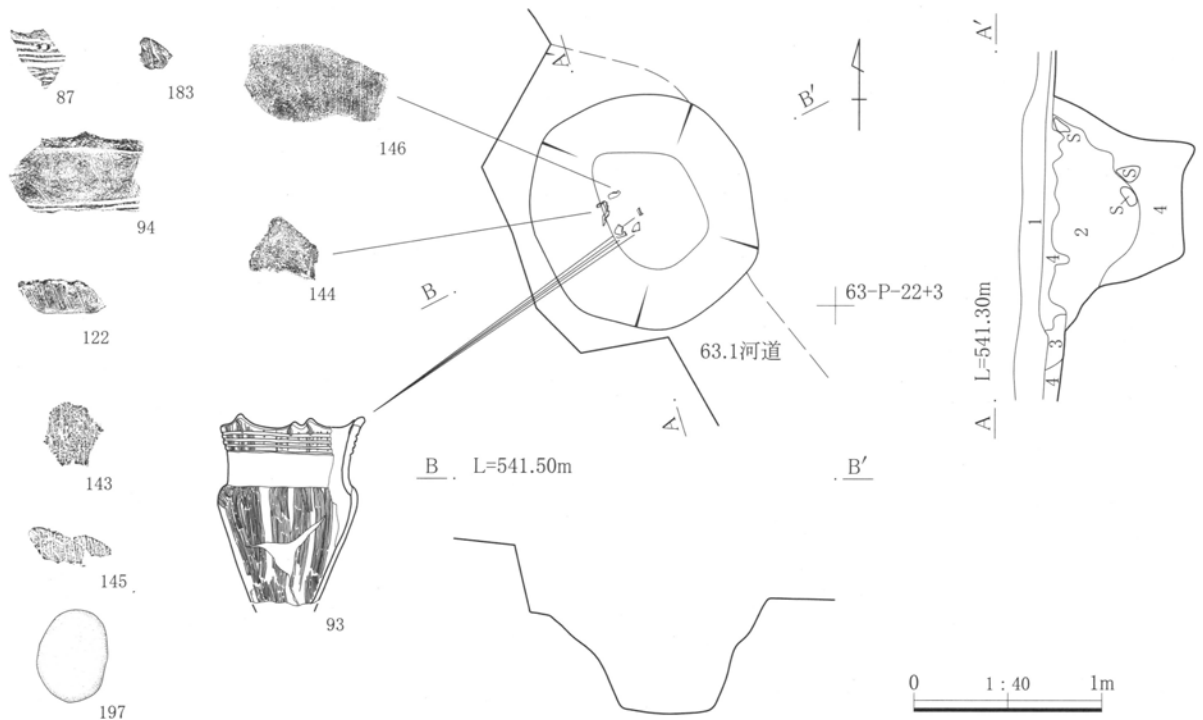
焼土ブロックが見つかった。出土した玉は、いずれも、両側から穿孔されている。図中の()中には、出土レベルを示した。73区1・3号埋甕が付近に所在することから、特にこの土坑の性格付けを慎重にする必要がある。73区33号土坑は、亜角礫が含まれるなど様相が73区26号土坑と近似したが、遺物が全く出土せず、共通点は、形態のみに留まっている。

その他に、縄文晩期の遺物を出土した63区25号土坑(出土遺物: 87、93、94、122、143~146、183、197)は、小破片9点は未掲載としたが、掲載土器はすべて縄文晩期に帰属するものである。泥流畑の作土が遺構面に及ぶかどうかの高さで、ほぼ掘

り込み面を示しているものと考えられる。調査区際で検出され、土層断面は泥流畑から図化されており、土層断面図の1層は、泥流畑の作土である。63区1号河道との切り合いは、本土坑が古い。なお、63区1号河道は、断面図中、1・2層の境界中にある砂礫が相当するものと考えられる。63区1号河道の範囲等については周辺調査の結果を見て確認されたい。この土坑から出土している遺物に関しては、上層の2層からの出土に限られていた。

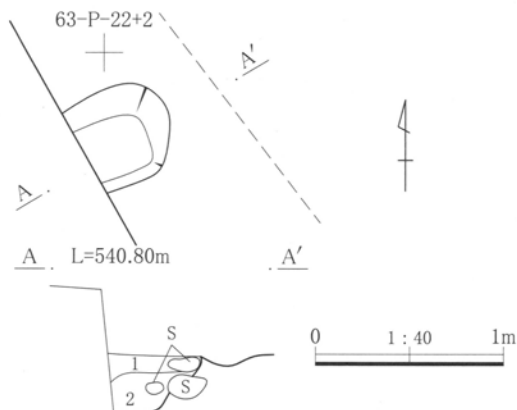
比較的規模が小さい63区40号土坑も63区1号河道と重複している。63区1号河道が新しく、帰属時期は古墳時代以前と考えられるが、詳細は不明である。63区38号土坑は、第2面の調査区外に

II 遺跡の調査記録



63区25号土坑

- 1 暗褐色土(10YR3/4) 泥流畑作土。締まりがあり、多少粘性ある。2~5cm大の垂角礫5%以下含む。
- 2 黒色土(10YR2/1) 締まりがあり、軽石は少ない。この層より、縄文晩期の土器片を多く出土している。2~5cm大の垂角礫を10~15%含む。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 泥流畑耕作土。1より多少礫多い。
- 4 褐色土(10YR4/6) 礫層。3~15cm大の垂角礫を50%以上含む。



63区38号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) やわらかい、バサバサした黒色土。軽石を少量含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 径5~10cmの礫を40%含む。軽石を少量含む。

図 55 63区 25・38号土坑

延びるために完掘がなされていない。遺物の出土も見られず、詳細は不明である。

平面プランが乱れ、遺物の出土が少ないか全くないのが、次の5基である。63区13号土坑(出土遺物: 62)の帰属時期は縄文中期以降と考えられるが、不定形を呈し、性格は不明である。63区32号土坑は、

珪質化した流紋岩質凝灰岩の剥片が出土したが未掲載とした。73区3・4号土坑は性格など詳細は不明である。73区16号土坑は平面形状が他とは異なり73区1号住居に隣接することから、この住居との関連が考えられるが遺物出土もないため詳細は不明である。

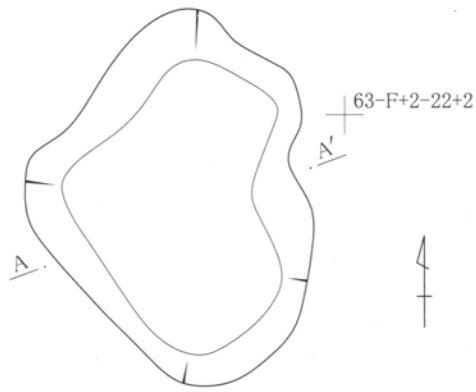
73区29号土坑では、摩滅した縄文土器片1点が出土したが未掲載。主軸を南北寄りにとり、調査区内で見ついている他の土坑とは、形態が異なっている。かなり明確な掘り込みと短冊長方形を呈している。

(6) 焼土

II区で確認された焼土は、以下の6か所である。いずれも、共伴する住居などの遺構検出には至らなかった。

63区1号焼土は、63区K-23グリッドに位置し、93cm×62cmの範囲、深さ5cmが確認された。同様

4. 第2面の調査

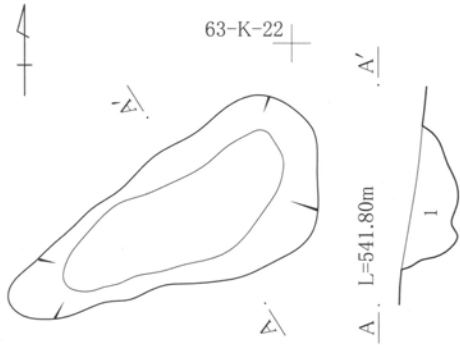


A. L=543.00m A'



63区13号土坑

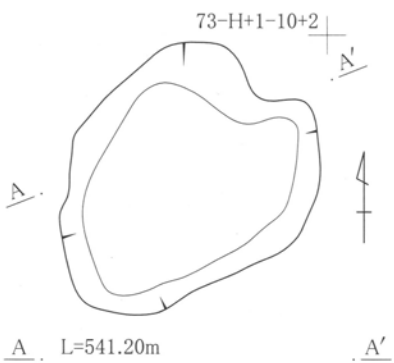
- 1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫(3~10cm大)を10~15%含む。



A. L=541.80m A'

63区32号土坑

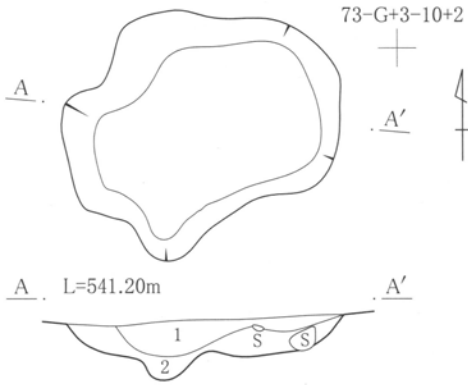
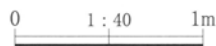
- 1 褐色土(10YR4/4) 軽石少量含む黒土。比較的やわらかく、パサパサしている。



A. L=541.20m A'

73区3号土坑

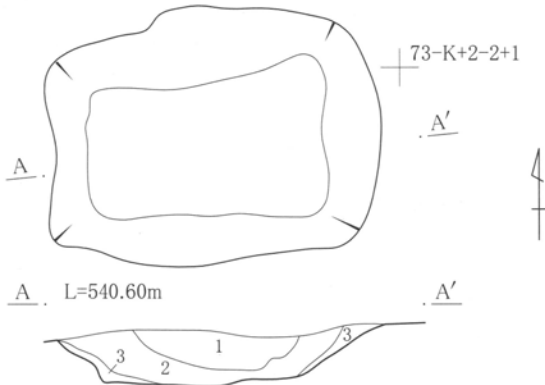
- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。礫少ない。腐植の集積強い。木根の侵入による黒土の可能性あり。
- 2 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。礫少ない。ローム質強い。



A. L=541.20m A'

73区4号土坑

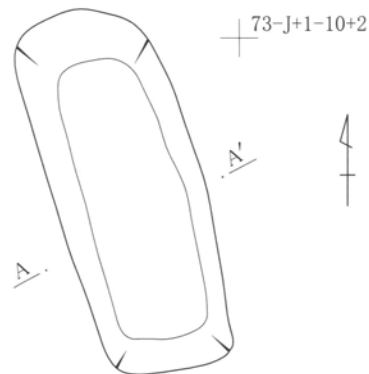
- 1 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。礫少ない。ローム質強い。



A. L=540.60m A'

73区16号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8) 縮まりあり。亜角礫(3~10cm大)を10~15%含む。



A. L=540.60m A'

73区29号土坑

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 縮まりあり。亜角礫(3~5cm大)を5~7%含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 縮まりあり。亜角礫(4~6cm大)を10~15%含む。

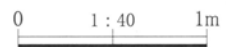


図56 63区13・32号土坑、73区3・4・16号土坑

図57 73区29号土坑

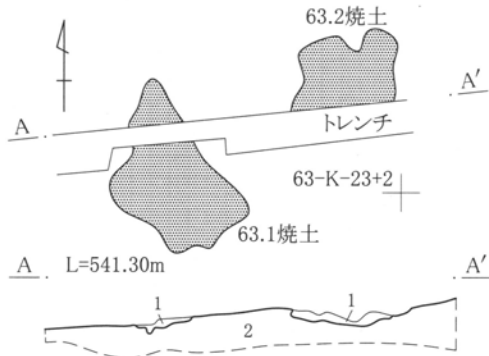
II 遺跡の調査記録

に**63区2号焼土**は、54cm×37cm、深さ6cmで確認され、63区1号焼土と隣接していたが、関連や性格については不明である。

63区4号焼土（出土遺物：189）は、63区N-25グリッドに位置し、58cm×37cmで、深さ6cmが

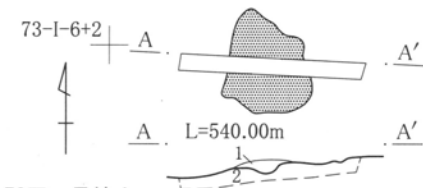
確認されている。下位には、63区27号土坑が、また付近には63区42号ピットが位置する。本遺構との関連が考えられるが、直接的な性格を示す遺物等は見つかっていない。189は有茎の石鏃である。なお、本焼土遺構は、散在する焼土層の中で、特に明瞭な焼土ブロックを63区4号焼土とした。そのため、二次的な焼土である可能性も考えられる。

63区5号焼土（出土遺物：126、206）は、63区N-22グリッドに位置し、104cm×83cmの範囲で、深さ19cmが確認されている。63区4号焼土と同様に下位に63区22号土坑が位置する。126は、縄文晩期土器片であることから、この時期に両遺構が帰



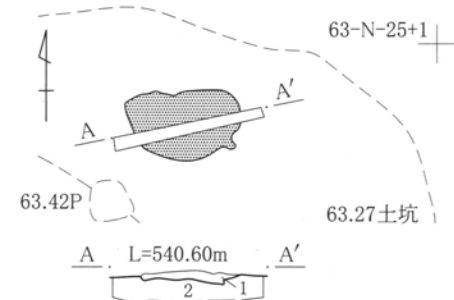
63区1・2号焼土

- 1 橙色土(7.5YR6/8) 色調の明るい焼土。地山黒褐色土を斑状(10%)に含む。縮まり弱く均質。
- 2 黒褐色土(7.5YR3/1) 縮まりを欠き、礫(3~5cm大)を極少量含み、やや粘性ある均質土(地山)。



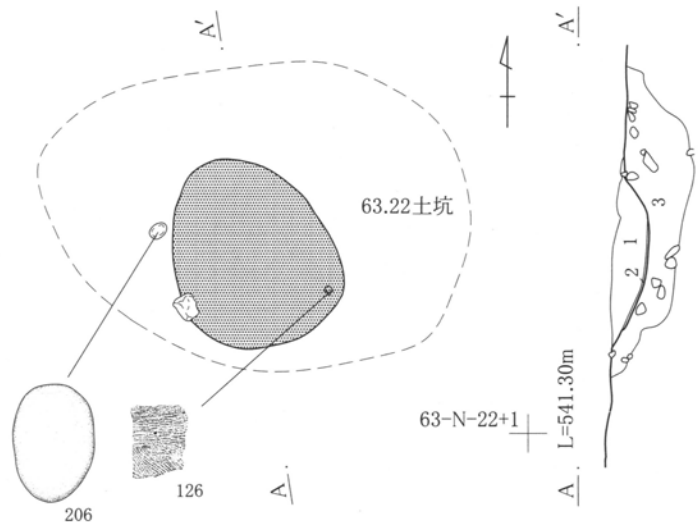
73区3号焼土

- 1 褐色土(7.5YR4/3) 縮まり欠く色調暗い焼土。炭化粒を僅かに含み、明褐色の焼土ブロックを10%程度混在する。
- 2 明褐色土(7.5YR5/6) 均質なローム漸移層。礫を含まない(地山)。



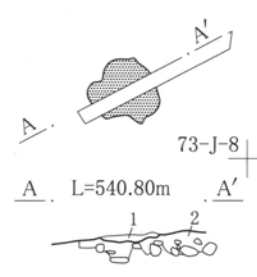
63区4号焼土

- 1 明黄褐色土(10YR7/6) 明黄褐色土ブロックを30%程度含み、全体に色調暗い焼土。縮まりやや弱く1cm大の赤色焼土を極少量、炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 縮まりやや弱い色調暗い均質土。2~3cm大の亜角礫を少量含む(地山)。



63区5号焼土

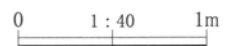
- 1 褐色土(7.5YR4/6) 橙色(7.5YR6/8)焼土ブロック10%と炭化物5%を乱れて層状に含む。礫を含まず土層縮まりを欠く。縄文晩期遺物を含む。
- 2 橙色土(7.5YR6/8) 色調明るい焼土。縮まり弱く炭化物混入する均質な焼土。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 5~20cm大の亜角礫を20%含む。



73区6号焼土

- 1 極暗褐色土(7.5YR2/3) やや縮まり強く、全体に焼土と炭化粒を含む。礫を含まず均質。全体にくすんだ色調を呈する。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4) やや縮まり弱い。ローム漸移層(?)。5cm大の亜角礫を多く含む(地山)。

図58 63区1・2・4・5号焼土、73区3・6号焼土



属する可能性があるが詳細は不明である。

73区3号焼土は、73区H-6グリッドに位置し、57cm×44cm、深さ7cmが確認された。周辺の73区9～11号土坑との関連を考え、調査にあたったがそれ以上の情報を得るには至らなかった。

73区6号焼土は、73区J-8グリッドに位置し、36cm×35cmの範囲で、深さ4cmが確認された。周辺にピットが数か所確認されているが、関連等是不明である。

(7) ピット

第2面目で検出されたピットは45基である。図59及び図61の断面図中のポイント位置「A-A'」は原則として、概ね「西-東」を示している。各ピットにおける平面ポイントは図60の中からは割愛した。埋土の土層注記は、発掘調査時に定形化した、以下の3種類の類別にしたがって掲載した。断面図中に用いたA～Cは、次の各注記を示す。

掘立柱建物などの想定もおこないつつ検出作業にあたったが、時期決定も含め、遺構の性格を確認す

るには至らなかった。**63区42号ピット**と、63区27号土坑との重複は、63区27号土坑が古く、本ピットが新しい。**73区20号ピット**(出土遺物:80)では、縄文中期の土器片1点が出土している。**73区39号ピット**では、土層中から極少量のベンガラが出土しているが、直接遺構の性格を示すものかどうかは不明である。

(8) 河道

63区1号河道(出土遺物:66、83、92、114、119)は、63区K-19～P-22グリッドに位置する。長さは約25m、幅1m～2.2mを測る。掘り込みは、最大で約35cmである。

覆土は、黒色の砂質土で、20～30cm大の亜角礫を含んでいる。地山底面は黄褐色の礫層である。

他遺構との新旧は、63区25号土坑、63区38号土坑が古い。ほぼ北西方向の走行で63区25号土坑付近で調査区外となる。2基の土坑の重複は確認できるが、本河道の北西側は、土坑付近で掘り込みが不明瞭になっていく。詳細は、周辺調査で確認されたい。

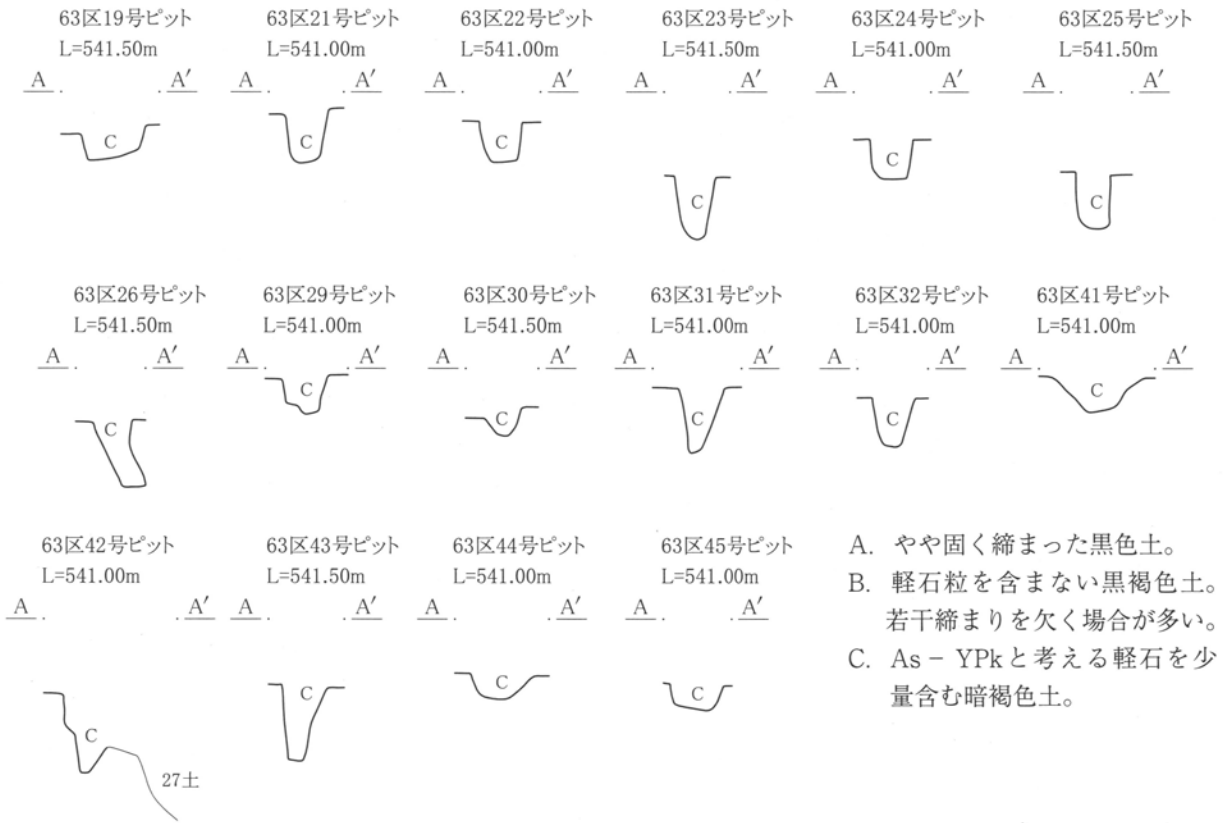


図59 63区19・21～26・29～32・41～45号ピット



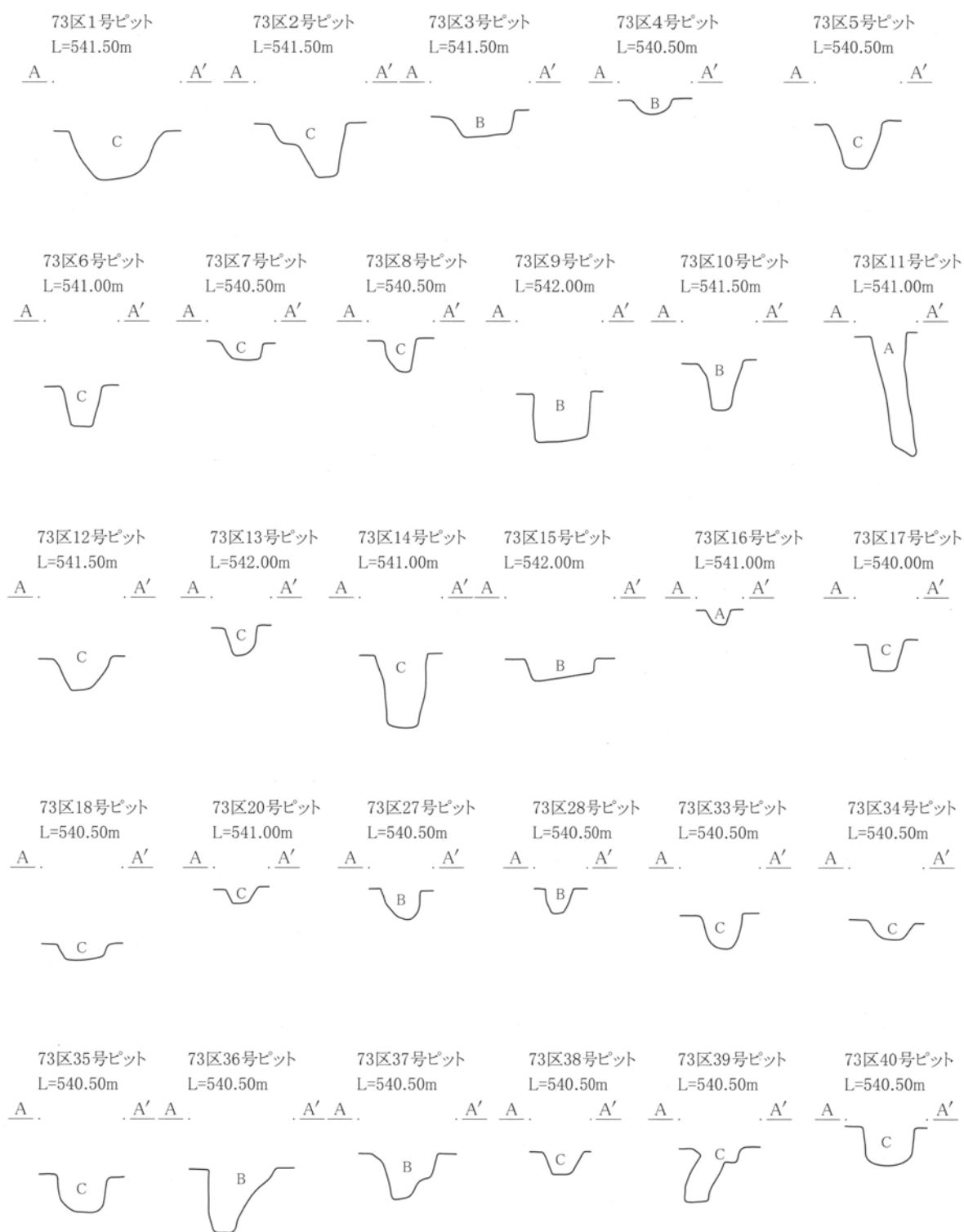
図 60 II区ビット

0 1 : 300 5m

73.
X=+60700
63区

Y=102200

66



- A. やや固く締まった黒色土。
- B. 軽石粒を含まない黒褐色土。若干締まりを欠く場合が多い。
- C. As - YPk と考える軽石を少量含む暗褐色土。

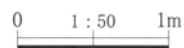
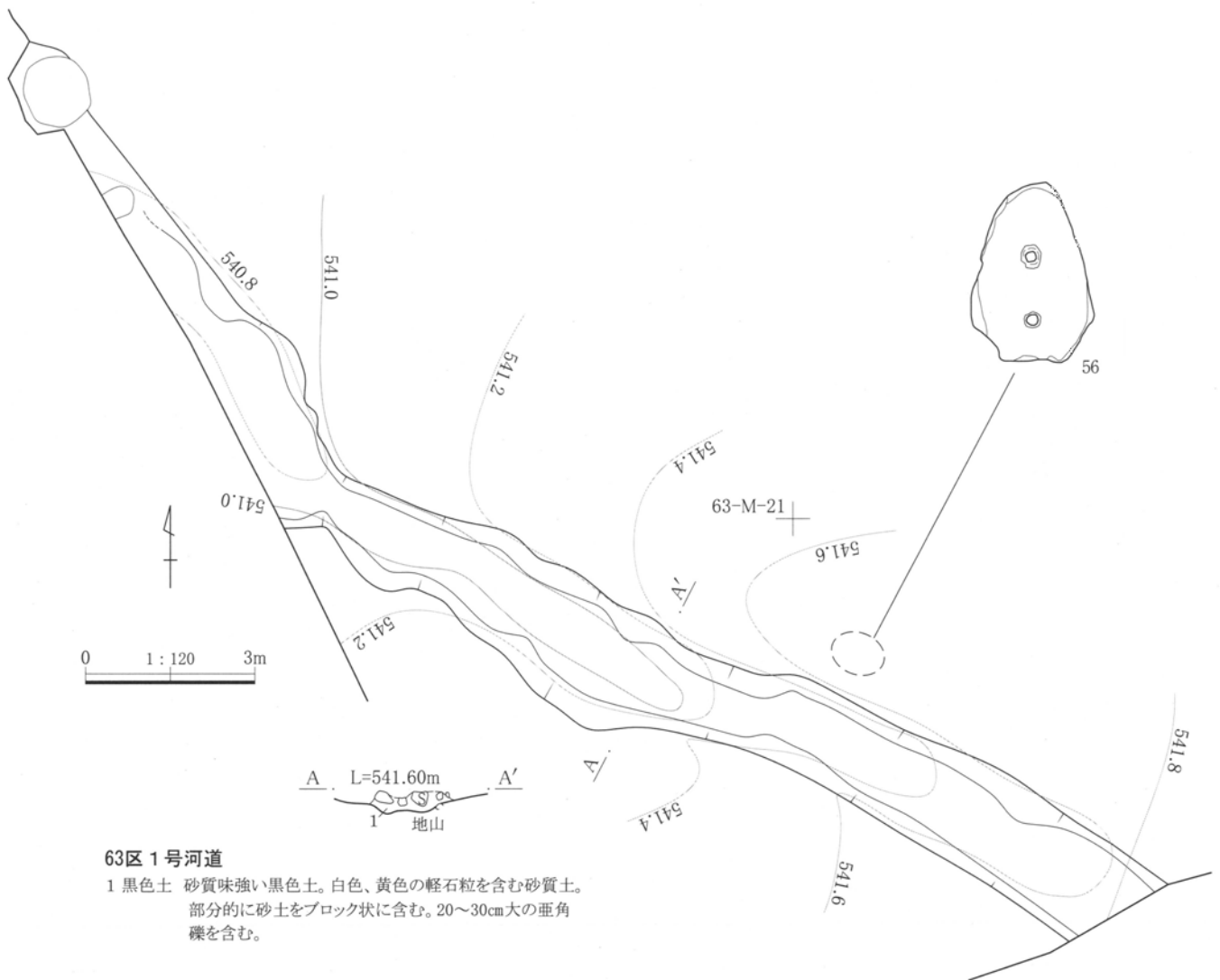


図61 73区1～18・20・27・28・33～40号ピット

II 遺跡の調査記録

河道の平均勾配は、約4%である。覆土中からの出土遺物は、縄文中期～晩期土器片で、磨滅した縄文晩期土器片3点は未掲載とした。帰属時期は縄文晩期以降である。63区N-20グリッド付近の地山から出土した古墳時代の剣形模造品(56)は、この遺構面に帰属するものと考えられることから、厳密には、帰属時期はこの時期に近づくものであろうと推定できる。なお、周辺からは、古墳時代の遺物を出土した63区27・28号土坑が東に10mの位置で見つっている。何らかの関連があるかもしれないが、この点も今後おこなわれる周辺調査の結果を待ちたい。

形状や人為的な痕跡がみられないことから自然流路であろうと考えられる。



63区1号河道

1 黒色土 砂質味強い黒色土。白色、黄色の軽石粒を含む砂質土。
部分的に砂土をブロック状に含む。20~30cm大の亜角礫を含む。

図 62 63区1号河道

5. 出土遺物

本遺跡で出土した遺物は、掲載遺物をすべて通番化した。遺物観察表の通りである。ここでは主要な遺物について若干の特徴を記述しておきたい。この他に、未掲載遺物としては、泥流面Ⅰ区陶磁15片45g、同Ⅱ区陶磁57片300g、Ⅱ区縄文土器片等8.7kg及び石材剥片が出土、平安住居では、73区1号住居で1.4kg、73区2号住居で0.56kg、73区3号住居で0.1kgの未接合資料が出土している。

なお、115（図79）、116（図80）については、その検出の意義から、本文末に別途、記述を行った。

天明泥流下での近世陶磁は、瀬戸美濃、肥前、志戸呂などの生産地のものが中心で、多くの天明三年遺跡の例と違いがない傾向である。20（図74）は、灰オリーブ色の釉の龍泉窯系の青磁片である。

29（図75）は、白色味が強い胎土と縦方向のヘラ削りが上位まで及んでいる特徴が見られる甕である。この土器は胎土の色調だけでなく胴部の削りも、一般的な「コ」の字甕が、「上位より、横方向・斜め方向・縦方向」であるの対し、上位の僅かな部分だけしか横方向の削りがなく、すぐに縦方向の削りとなる整形痕跡が確認できる。比較的定型化する時期に帰属する遺物である中で、他とは異なる様相が確認できる。52（図76）は、砥沢石の砥石である。

54、55（図77）はこれまで近隣では、あまり出土例が知られていない古墳時代の土師器である。特に55は、胎土も白色味が強く白色粘土の斑なども確認でき、県外にその出自を求める見方もされる。今後の類例の確認が望まれる。

また、56（図77）は石製の剣形模造品である。前出の遺物との関連の有無が問われるが、他にこの時期の前後に帰属する遺物は出土していないので、関連や詳細は今後の調査での課題となろう。

57（図77）は、縄文時代前期に帰属し、比較的出土例の少ない十三菩提式の土器片である。過年度調査でも同時期の土器が確認されている（『群埋文303集』）。

87～184（図79～81）は縄文晩期に帰属する

土器である。特にこれまでこの時期の遺物がまとも出土した例が少ないので、細密条痕文の施された小片まで極力掲載するよう努めた。すべてが、氷Ⅰ古～新段階に帰属、または、併行するものと考えられる。このうち、93（図79）は山形の小突起をもち、氷Ⅰ式古～中に併行する甕である。63区25号土坑から出土している。117（図80）は、頸部に2か所の穿孔がなされている氷Ⅰ式中～新併行の浅鉢である。

189、190（図82）は有茎石鏃で、縄文晩期に帰属する可能性が高いものと考えられる。195（図83）は、赤色のベンガラが付着が確認され、範囲を実測図中に示した。203・204（図84）は、26号土坑底部で僅かな焼土やベンガラとともに出土した玉で、それぞれ1か所に両方向から穿孔されている。遺構の性格を判断する上でも重要な遺物となろう。

115、116の埋設土器について

篠原 正洋

115・116は、縄文時代晩期終末（氷Ⅰ式中～新段階併行）に比定される大型土器である。

115（図79）は甕形土器で、口縁端部を欠損しているが、残存状態は良好である。肩部の文様帯は、沈線を4条廻らし、工具による刺突を施している。これは東北地方大洞系の土器に見られる匹字文の技法が簡略化されたものと考えられる。またその下部には、沈線による綾杉文を横位に2段施しているが、「<」の字状の文様単位が規則的に並ぶ綾杉文と比較すると、かなり形の崩れた綾杉文である。匹字文や綾杉文の技法は、大洞A式併行の段階で発達するとされている。したがって、それらの技法が、簡略化された本土器は、大洞A'式併行まで帰属時期が下ると考えられる。胴部は、木片の木口を用いたと思われる繊細な細密条痕文を施し、氷Ⅰ式の技法が取り入れられている。

116（図80）は、壺形土器で、胴部下半を欠損しているが、肩部以上は完形である。口縁部は外反せずにはほぼ直立し、肩部は強く張り出している。器面外面には115とよく似た繊細な細密条痕文を全体に施している。わずかに残存する胴部下半の一部には、その細密条痕文が縦位に施されていることから、おそらく、胴部から底部に向かって直線的に移行する長胴形の壺形土器である。口縁部が直立し突帯文が施されることなどに榿王式の特徴が見られるが、もちろんそれは純粋な榿王式ではなく、当該期、関東地方西部に西部東海系条痕文土器の影響で生成する在地型の突帯文壺形土器（設楽1985）、あるいは中部高地系突帯文壺形土器（設楽1995）である。また、本土器口縁部の突帯文は指頭押圧を施す2条の突帯文であるが、榿王式に口縁部2条押圧突帯文はないとされているから、篠ノ井遺跡群長野市宮塩崎体育館地点出土の氷式突帯壺＝「氷Ⅰ式新段階の甕が大型化、壺形化するにあたり、…口外帯と1条の浮線の2か所の装飾の部位に、…榿王式の影響で、

…口縁部2条突帯の氷式突帯壺が成立する。」（中沢1998）との技法的な関連もうかがわれる。

いずれにしても、群馬県西吾妻地方において、西部東海系条痕文土器やその影響を受けた大型の突帯文壺形土器の出土例はこれまでになく、遠賀川系土器を含めた西部東海系条痕文土器が、長野県東信地方から吾妻川流域経由で群馬県中央部へと波及する動きも想定できる。

縄文時代晩期終末から弥生時代前期の壺棺再葬墓（石川1981）に関連する県内の遺跡には、南大塚遺跡（渋川市）、押手遺跡（子持村）、沖Ⅱ遺跡（藤岡市）、上ノ久保遺跡（倉渟村）、注連引原Ⅱ遺跡（安中市）などがある。本土器には、外反しない口縁、頸部から肩部への移行部に施された突帯文、遺跡内での氷Ⅰ式浮線文土器との共伴など、上記遺跡出土の壺形土器より古い要素が色濃く残っている。壺棺再葬墓は、縄文時代晩期終末から弥生時代中期中葉まで継続したとされているから、本遺跡例が壺棺再葬墓だと仮定すれば、時期区分では最古段階に位置づけられることになる。

参考文献

長野市教育委員会

1990『篠ノ井遺跡群Ⅲ－長野市宮塩崎体育館地点－』

石川日出志

1981「三河・尾張における弥生文化の成立－水神平式土器の成立過程について－」『駿台史学』52号

設楽博己

1985「関東地方の〈条痕文系〉土器－西部東海系条痕文土器を中心として－」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ

1988「群馬県の再葬墓とその関連遺跡」『東日本の弥生墓制－再葬墓と方形周溝墓－』

1995「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』

中沢道彦

1998「氷Ⅰ式」の細分と構造に関する試論」『氷遺跡発掘調査資料図譜』第3冊（永峯光一編著）

Ⅲ 自然科学分析

1. 分析地点と試料について

川原湯勝沼遺跡において実施した自然科学分析の分析地点と試料は、図63に示すとおりである。

試料1は、KA 2-4号畑作土中に不規則に確認された火山灰の試料である。これまで他に、川原湯勝沼遺跡63-2号畑（『群埋文第303集』）や、本書で扱うKA 1号畑、KA 2-2号畑などで見つかった火山灰と同一のものである。採取地点は、11号ヤックラの北端付近である。

この自然科学分析は、これまでの長野原町における発掘調査で、史料の記録日時と農事暦から、天明三年の新暦6月26日に降下した火山灰である可能性が指摘されているテフラの分析である。先行する、『群埋文第319集』の中で、「浅間A軽石」と区別し、「浅間A灰」と仮称した火山灰で、農事暦との組み合わせなどを援用し、天明三年の降下日時を特定したものである（関2002）。

天明三年浅間噴火の火山史料による研究では、8月5日の朝方までの噴火の経過が「エピソード」として、詳細にまとめられている（Yasui・Koyaguchi 2004）。この中では、6月25日、南東方向に極僅かな火山灰が降下していることが示されている。

しかし本分析で扱う火山灰は、それとは降灰の方向が異なり、翌日の出来事という見方がなされる降下火山灰であり、人為的な行為により限られた条件下で土層中に残された、小規模な降灰被害だったと考

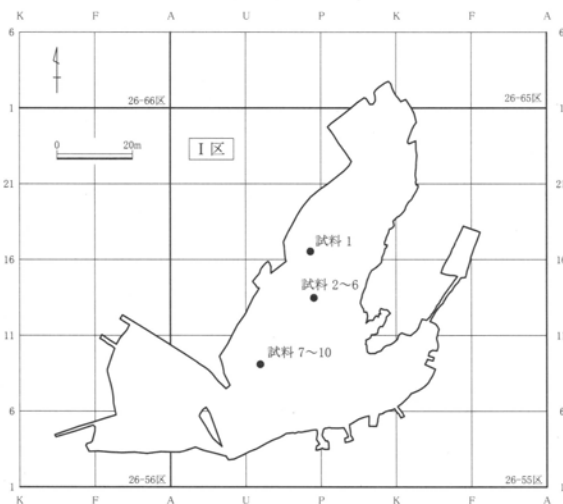


図 63 I区試料採取地点位置図

1. 分析地点と試料について

えられる火山灰の堆積の痕跡である。

過年度調査で採取した試料は、『群埋文第319集』中でも分析報告がなされている。また、本書では、KA 1号畑の断面を原図として、経過を説明したので、併せて、IV章を参照されたい。

試料2~6は、肉眼で観察する限りでは色調が異なる火山灰の互層である。11号ヤックラ~KA 6号畑~10号ヤックラにかけてのトレンチの断面で確認された試料である。採取地点は10号ヤックラ付近で、これまでの発掘調査で確認された経緯から浅間粕川テフラの可能性が考えられ、良好な残存状況から本分析の実施となった。

浅間粕川テフラは、浅間Bテフラとは区別され、「浅間B'テフラ」と同一である。図64にその分布図を引用しておく（宮原1991）。

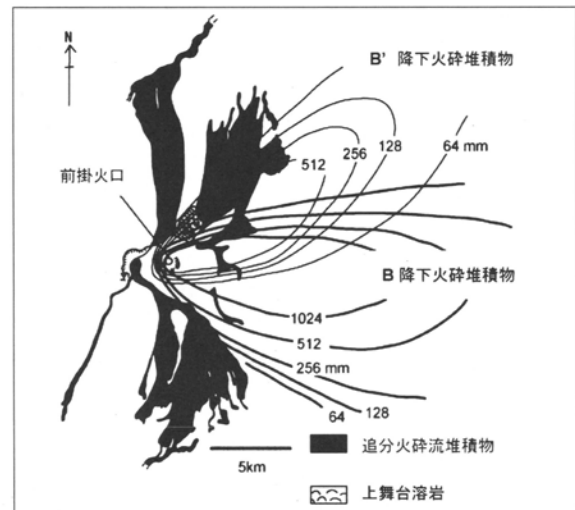


図 64 天仁噴出物の分布（宮原 1991、HP より引用）

試料7~10は、55区1号畠とその上位と下位の土層から採取した試料からの植物珪酸体分析である。特に、試料7は55区1号畠の作土中の試料であることから、栽培作物の検出が特徴づけられる可能性が高いと判断され本分析に至った。

参考文献

- 宮原智哉 1991 「浅間火山1108年噴出物における密度と化学組成の変化」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』 Vol.26
- 関俊明 2002 「農事「サクイレ」と降灰による川原湯勝沼遺跡の畝断面解釈」『ハッ場ダム発掘調査集成 (1)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第303集
- Maya Yasui・Takehiro Koyaguchi 2004 *Sequence and eruptive style of the 1783 eruption of Asama Volcano, central Japan: a case study of an andesitic explosive eruption generating fountain-fed lava flow, pumice fall, scoria flow and forming a cone.* Bull Volcanol 66.

2. 群馬県、川原湯勝沼遺跡の火山灰分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された川原湯勝沼遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象に屈折率測定を行って指標テフラとの同定を行い、土層などの層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、拡張トレンチ東壁および11ヤックラ6号畑トレンチの2地点である。さらに、浅間火山から1783（天明3）年6月26日に噴出したと推定されている火山灰試料についても分析を行った。

2. 土層層序

(1) 拡張トレンチ東壁

拡張トレンチ東壁では、下位より黄褐色土石流堆積物（層厚58cm以上、礫の最大径172mm）、角礫に富む暗灰色土（層厚10cm、礫の最大径113mm）、暗灰褐色土（層厚11cm）、成層したテフラ層（層厚4.6cm）、灰褐色土（層厚7cm）、黄褐色土石流堆積物（層厚10cm以上、礫の最大径208mm）が認められる（図1）。成層したテフラ層は、下位より橙褐色粗粒火山灰層（層厚1.5cm）、灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黒灰褐色粗粒火山灰層（層厚1.5cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚1.2cm）からなる。

(2) 11ヤックラ6号畑トレンチ

11ヤックラ6号畑トレンチでは、下位より暗灰褐色土（層厚1cm以上）、褐色軽石混じり黄色粗粒火山灰層（層厚0.8cm、軽石の最大径13mm）、暗灰色砂質土（層厚0.3cm）、成層したテフラ層（層厚3.4cm）、青灰色細粒火山灰層ブロック混じり灰褐色土（層厚4cm）、角礫を多く含む暗灰褐色土（層厚4cm以上）が認められる（図2）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より橙褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黒灰褐色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、暗灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.4cm）からなる。

3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ粒子の起源を明らかにするために、調査区内から採取された1783（天明3）年6月26日に噴出・降灰したと考えられている火山灰試料（試料1）と、11ヤックラ6号畑トレンチにおいて採取された火山灰試料（試料2～6）の合計6点を対象に、日本列島とその周辺のテフラ・カタログ（町田・新井、1992、2003）の作成にも利用された温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）により屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表1に示す。試料1に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.507 - 1.513 である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が少量含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.707 - 1.712 である。試料2には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.706 - 1.710 である。試料3に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.524 - 1.527 である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.706 - 1.710 である。

試料4に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.524 - 1.526 である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.706 - 1.710 である。試料5には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.706 - 1.710 である。試料6に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.525 - 1.530 である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.707 - 1.710 である。

いずれの試料にも、ほかに褐色のスコリアや暗灰色の岩片が含まれている。

4. 考察

試料1には、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、1783 (天明3) 年に浅間火山から噴出した浅間 A 軽石 (As - A、荒牧、1968、新井、1979) が含まれていると考えられる。また褐色のスコリアや暗灰色の岩片などは、岩相から浅間 B テフラ (As - B、1108年、荒牧、1968、新井、1979) あるいは浅間 - 粕川テフラ (As - Kk、1128年、早田、1991、1995、1996、2004) に由来すると考えられる。

試料2～5が採取された成層したテフラ層は、層相や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、As - Kkと考えられる。また試料6が採取されたテフラ層は、層位や層相、さらに火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、As - Bと考えられる。

5. まとめ

川原湯勝沼遺跡において、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、浅間 B テフラ (As - B、1108年) および浅間粕川テフラ (As - Kk、1128年) や、浅間 A 軽石 (As - A、1783年) に由来するテフラ粒子を検出することができた。

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定 - テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254 - 269.
 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41 - 52.
 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法 - 研究対象別分析法」, p.138 - 148.
 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質. 地研専報, no.45, 65p.
 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
 町田 洋・新井房夫 (2003) 新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.
 早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.53, p.2 - 7.
 早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史. 御代田町誌自然編, p.22 - 43.
 早田 勉 (1996) 関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴 - とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて -. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256 - 267.
 早田 勉 (2004) 火山灰編年学からみた浅間火山の活動史 - とくに平安時代の噴火について - かみつけの里博物館編「1108 - 浅間山噴火 - 中世への胎動」, p.45 - 56.

III 自然科学分析

表1 屈折率測定結果

試料	地 点	火山ガラス (n)	組成	斜方輝石 (γ)
1	-	1.507 - 1.513	(opx, cpx)	1.707 - 1.712
2	11 ヤックラ 6号畑トレンチ	-	opx, cpx	1.706 - 1.710
3	11 ヤックラ 6号畑トレンチ	1.524 - 1.527	opx, cpx	1.706 - 1.710
4	11 ヤックラ 6号畑トレンチ	1.524 - 1.526	opx, cpx	1.706 - 1.710
5	11 ヤックラ 6号畑トレンチ	-	opx, cpx	1.706 - 1.710
6	11 ヤックラ 6号畑トレンチ	1.525 - 1.530	opx, cpx	1.707 - 1.710

屈折率の測定は、温度一定型測定法(新井、1972、1993)による。opx:斜方輝石、cpx:単斜輝石。()は量が少ないことを示す。

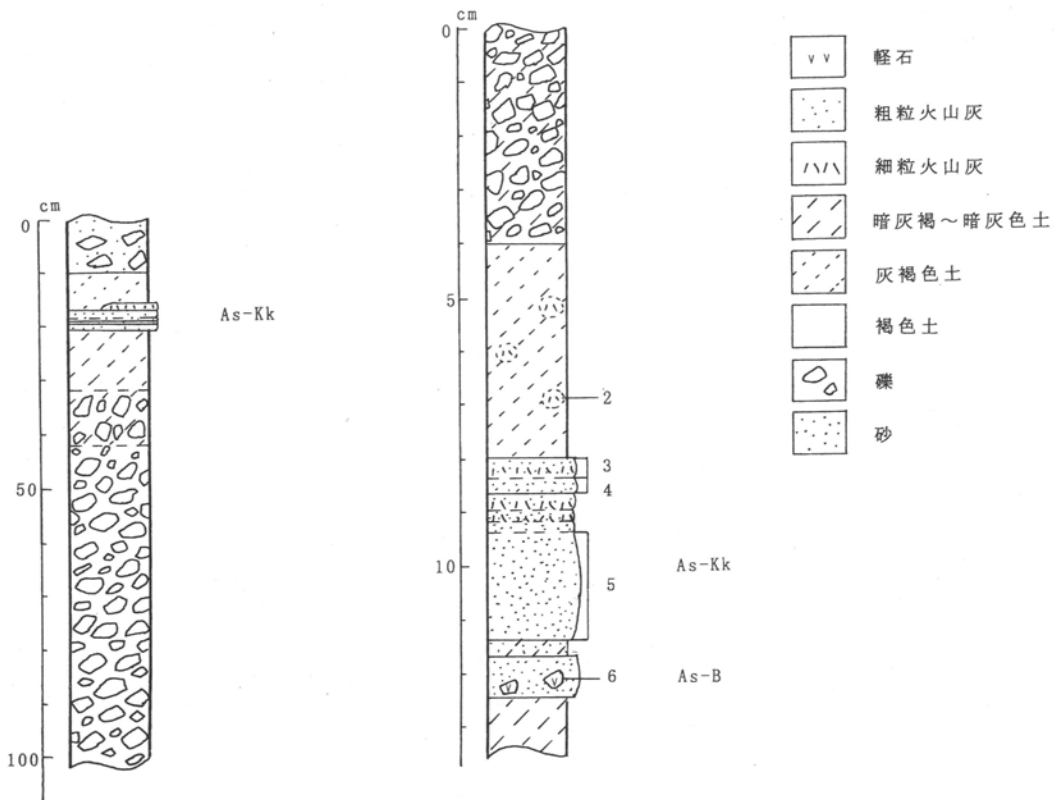


図1 拡張トレンチ東壁の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

図2 11 ヤックラ6号畑トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

3. 群馬県、川原湯勝沼遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO₂) が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山、2000)。

2. 試料

分析試料は、川原湯勝沼遺跡 A区7号畑=55区1号畠 (VI層~VIII層) から採取された計4点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原、1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃で 24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加 (電子分析天秤により 0.1mg の精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550° C・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵g) をかけて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は 2.94 (種実重は 1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は 8.40、ヨシ属 (ヨシ) は 6.31、ススキ属 (ススキ) は 1.24、メダケ節は 1.16、ネザサ節は 0.48、クマザサ属 (チシマザサ節・チマキザサ節) は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である (杉山、2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1 および図 1 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族

Ⅲ 自然科学分析

A (チガヤ属など)、ウシクサ族 B (大型)、Aタイプ (くさび型)、Cタイプ

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[カヤツリグサ科]

[樹木]

多角形板状 (ブナ科コナラ属など)、その他

5. 考察

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはヒエ属型が検出された。以下に栽培の可能性について考察する。

(1) ヒエ属型

ヒエ属型は、川原湯勝沼遺跡 A 区の 7 号畑 (Ⅶ' 層、畑の作土) から検出された。密度は 700~1,400 個/g と比較的低い値であるが、ヒエ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、植物体量としては過大に評価する必要がある。ヒエ属には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である (杉山ほか、1988)。ただし、ここでは畑跡の試料から検出されていることから、栽培種に由来するものである可能性が考えられる。

(2) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族 B の中にはサトウキビ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、川原湯勝沼遺跡 A 区の 7 号畑 (Ⅶ' 層) では、ヒエ属型 (ヒエが含まれる) が検出され、ヒエが栽培されていた可能性が認められた。

文献

- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用-古代農耕追究のための基礎資料として-。考古学と自然科学、20、p.81-92。
杉山真二・石井克己 (1989) 群馬県持村、FP直下から検出された灰化物の植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析。日本第四紀学会要旨集、19、p.94-95。
杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社、p.189-213。
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-。考古学と自然科学、17、p.73-85。

3. 群馬県、川原湯勝沼遺跡における植物珪酸体分析

表1 群馬埋文、植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

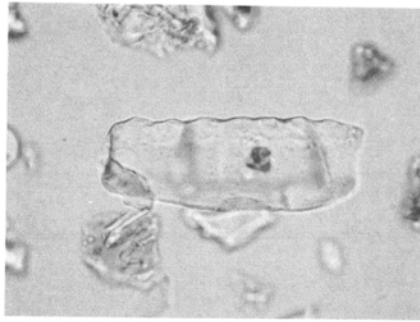
分類群	学名	地点・試料			
		7	8	9	10
イネ科	Gramineae (Grasses)				
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)				
ムギ類(穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)				
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		14		
キビ族型	Paniceae type	8	7		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		7		
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	23	36	37	7
ウシクサ族B	Andropogoneae B type				
Aタイプ(くさび型)	A type				
Cタイプ	C type				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>				
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	8			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	8			7
未分類等	Others	23		7	
その他のイネ科	Others				
表皮毛起源	Husk hair origin	8	7		
棒状珪酸体	Rod-shaped	45	93	30	22
未分類等	Others	159	180	105	15
カヤツリグサ科(スゲ属など)	Cyperaceae(<i>Carex</i> etc.)	8			
樹木起源	Arboreal				
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (<i>Quercus</i>)		7		
その他	Others		36		
植物珪酸体総数	Total	288	388	179	52

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

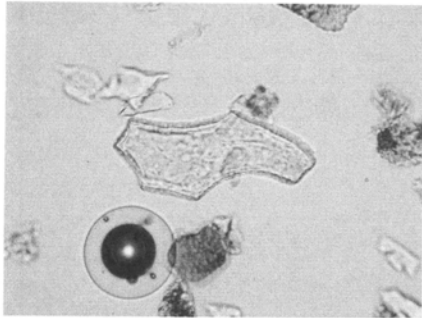
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)				
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		1.21		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		0.09		
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>				
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	0.06			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	0.02			0.02

タケ亜科の比率 (%)

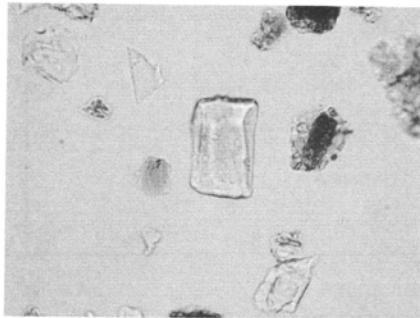
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Medake</i>				
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>				
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	71			
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	29			100



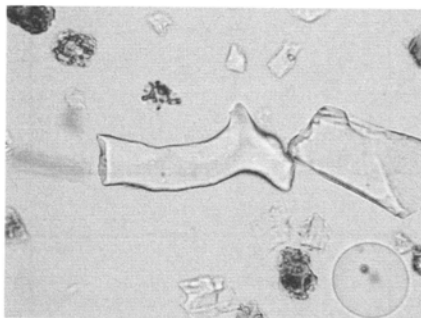
ヒエ属型
試料8



多角形板状(ブナ科コナラ属など)
試料8



ウシクサ族A
試料9



マンサク科(イスノキ属)?
試料8

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μm

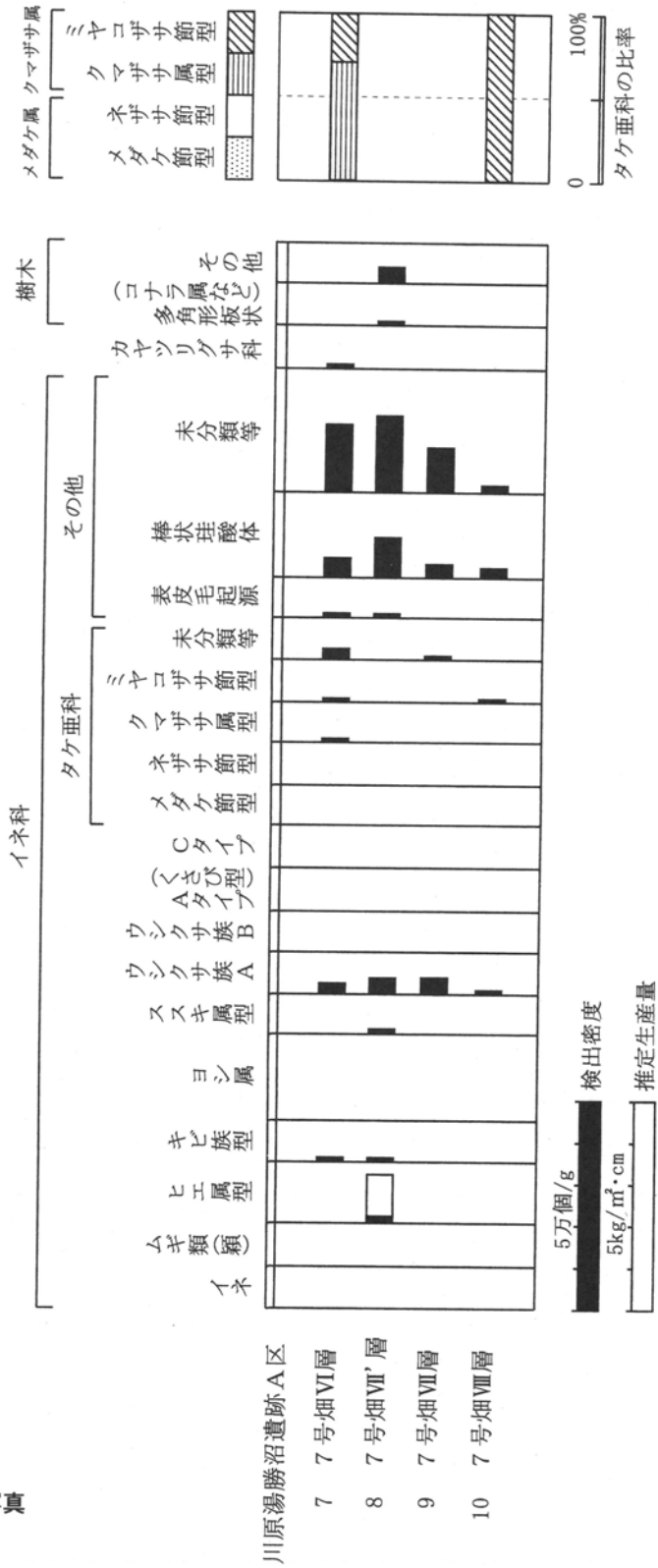


図1 群馬県、川原湯勝沼遺跡における植物珪酸体分析結果

IV まとめと課題

本遺跡の調査成果から、今後の問題点へつなげていくために、若干の記述を試みてまとめとしておきたい。天明泥流面については、これまでの一連の新知見に結びつけて記述しておくことにする。

1. 第2面

縄文時代 本遺跡で見つかった縄文時代晩期の遺物については、県内では、標高320m烏川左岸に位置し本遺跡から南東に直線距離20kmの群馬郡倉渕村に所在する三ノ倉落合遺跡の報告に似た系統の土器が散見できる。同遺跡では、「雑な磨きのある無文・撚糸文・条痕文に分けられる」と報告され、その比率からは、「条痕文が多い水Ⅰ式より撚糸文が多いという千網式に近い」とされている。本遺跡でも、精製無文・粗製無文・浮線文・細密条痕文などの施文方法に、同遺跡のような組成が確認でき、赤色塗彩の施されたものや2か所の穿孔がなされた浅鉢も出土しており、比較分析対象として今後の検討がなされることを課題の一つとしたい。

また、近年報告がなされた新潟県の青田遺跡では、大量の同時期の遺物が扱われ、緻密な分析が報告されている。器形やその編年観など、本遺跡出土の埋設土器の理解には比較検討することも有効となる。また、玉類をはじめとする石製品などにおいても同遺跡との同様な検討がなされる必要があり、本遺跡を解釈する上での資料比較として取り入れていくべきであろう。

本遺跡においては、本報告の調査区はさらに周辺に広がることから、その成果を待って検討される必要もある。いずれにせよ、群馬県北西部に位置する本遺跡の地理的な問題点や地域的な交流をもとに当時の実態解明がなされることが望まれよう。

古墳時代 これまでに西吾妻の地域では、古墳時代の遺物が確認された例はほとんどなかった。『草津温泉誌』第壹巻には、長野原町大津の金丸製材所の西地点で出土した壺形土器と高坏が掲載されてお

り、吾妻川流域の最奥の古墳文化として紹介されている。

本遺跡では、この時期の土師器甕が見つかっており、剣形石製模造品の出土との関連の有無にあわせて、今後の周辺調査でさらなる進展が見られることであろう。近年、町内の林宮原遺跡や下原遺跡でこの時代の住居跡の確認もなされており、本遺跡内周辺調査での遺構の広がりや今後の調査事例の提示が望まれる状況にある。

平安時代 これまで、平安時代の集落は、町内で林宮原遺跡、坪井遺跡、向原遺跡、長畝Ⅰ遺跡、楡木Ⅱ遺跡、花畑遺跡、下原遺跡、横壁中村遺跡、長野原一本松遺跡などで発掘調査されている。本遺跡と同時期の調査例の中では、楡木Ⅱ遺跡などで20軒以上が確認されている。西吾妻地域のこの時期の景観を考える上でも、本遺跡の事例がこの地域の土器編年観や他地域間との比較検討がなされていく上での資料として数えられるものとなろう。

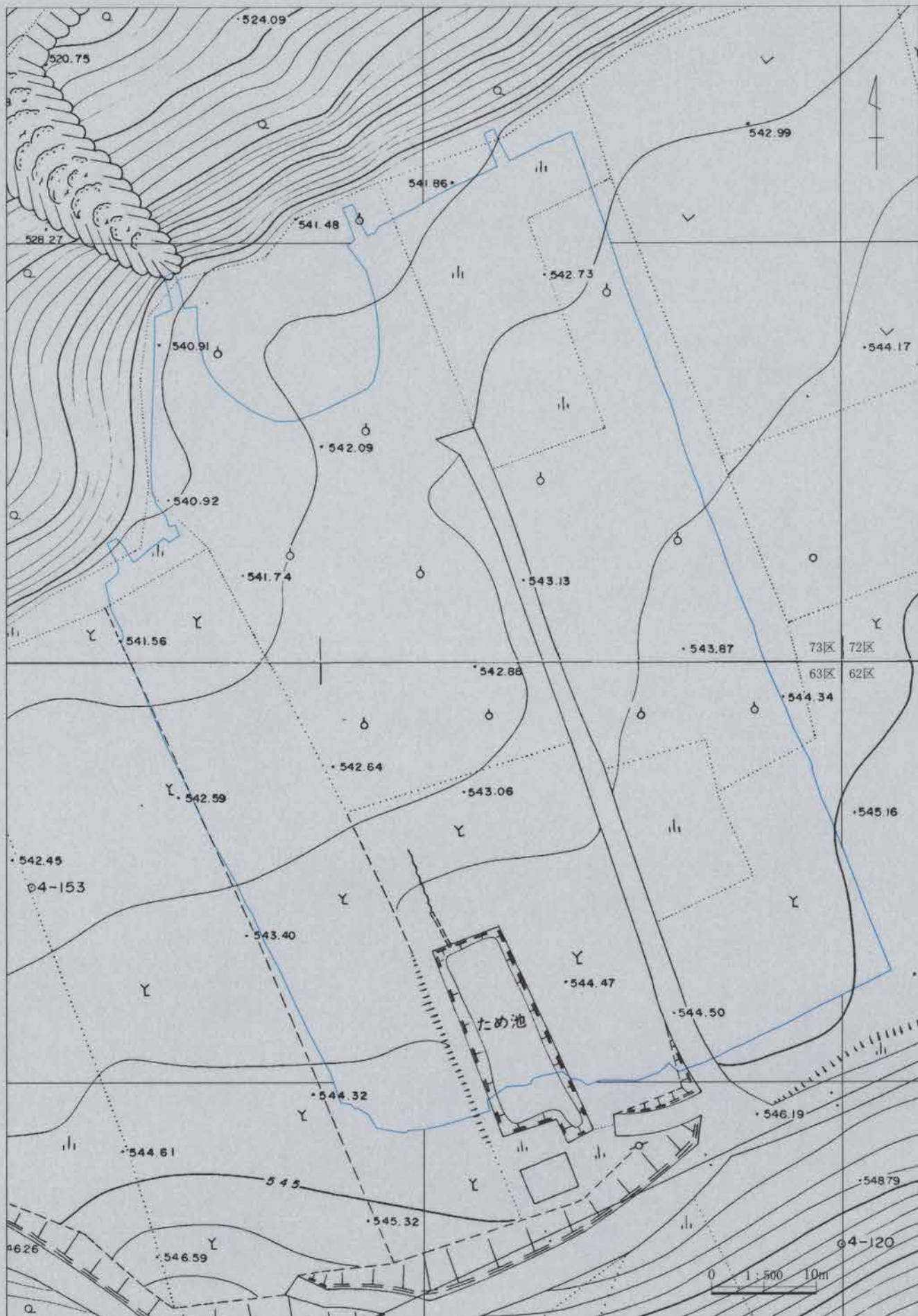
2. 泥流畑

泥流畑の地割り 天明泥流被災後の復旧過程の検証を資料化できないかという視点では、これまでに中棚Ⅱ遺跡で、復旧前後の石垣がそれらを確認するに値する資料となっている。また、現在の地割りと泥流畑の地割りが一致する場合が多々見られる。それは、被災後、復旧がなされる過程で、被災前の状態に復する行為がおこなわれたことによるものと考えられる。その意味では、幾度かにわたる所有者の変遷や筆の分筆などがおこなわれた現在の地積を示しておくことが、必要な観点とされる。そこで、現況図と遺構全体図とを対比させる図65を示した。

泥流被災後の耕地復旧には、これまで史料による研究が存在しているが、実際の復旧痕跡や実資料の提示という面をあわせて、総合的に資料化する必要があろう。

例えば、幕府の「御救御普請」では、吾妻郡は概ね3分され管轄された。八ッ場ダム建設工事予定地内でも吾妻川の右左岸では異なった管轄内に該当





し、その地内で発掘調査がなされることになる。今日的な地域をみる眼とは異なった見方が必要で、復旧の対応の違いなど、調査域内の右左岸での相違点などが抽出される可能性があり、今後の発掘調査資料の蓄積が求められる。

平坦面の推定痕跡 KA 2号畑とKA10号畑では、畑跡の畝サクに歪みの確認できる地点を図66として示した。特に、KA 2-2号畑では、遺構面保護の為のシート養生された面に雨水のたまる状況が確認された(写真図版16写真1)。これは、8月5日の時点では、消失した平坦面の名残である可能性が高いと考えた。この点については、7号ヤックラの

北隣接地点においても同様な視点がもてる。KA 2-2号畑に残された浅間 A 灰のやや平坦な堆積がこのことを示しているかもしれない。また、KA10-20~23号畑において、KA10-22~23号平坦面の存在とのKA10-20~21号畑に存在する畝サクの歪みは、かつてここに平坦面が存在した可能性が指摘される。

これらのことは、既刊の発掘調査報告書第319集(365頁)で扱ったN29-2号畑の例と同じである。このことは、泥流畑の平坦面が、耕作の途中で消失(人為的に片付けられた)したものであるのに十分な根拠となる。さらに、この、KA10-20~23号畑では、平面図に示すと同一な畑に観察されてしまうが、断面形状から判断した耕作状況の分類は、北から2類・1類・5類・5類(図70)とが確認できることでこの推定の傍証となる。

さらに、このことは、天明三年の単年度の耕作のうちで平坦面が消失するという、農事暦の解釈に及ぶものである。

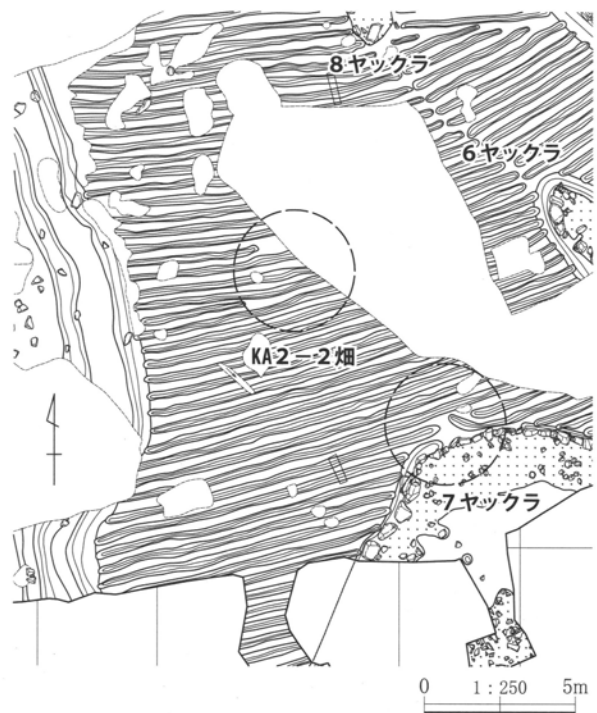


図66 KA 2号畑とKA10号畑

IV まとめと課題



図 67 5号ヤックラの変遷

開墾時の畑の復元 I区5号ヤックラの変遷を、①→②→③の経過を経て天明三年を迎えていたことが発掘調査で確認できた(図67)。このことは、5号ヤックラが1号道と並行して所在していた(①)後、南斜面からの土砂崩落により5号ヤックラの部分がはみ出し石積みが築かれた(②)、その後石積みが崩れ天明三年の畑(③)となったという想定がなされる。

さらに、調査時点で確認してきた山碎石の多く混入する黄褐色土の分布は、図68の通りである。これも現場地形から見て、北側斜面の土砂崩落を起源と考えることが可能である。

この2つの条件を想定したことで、KA 2-3号畑の原形となる畑跡を推定してみたい。図69は、上記から推定したKA 2-3号畑の原形である。まず、a~cの3か所で2号道と3号道がほぼ直線の

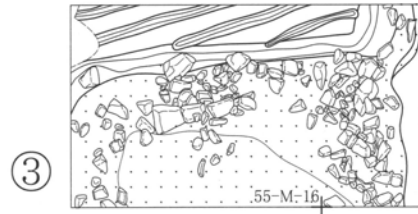
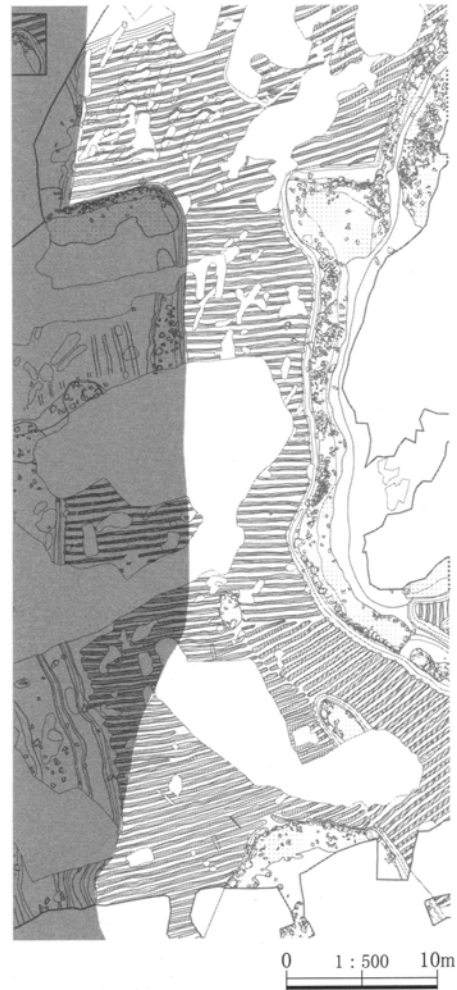


図 68 黄褐色土の分布

に並ぶ。このことで西側の範囲を、東は岩盤の際の5号ヤックラと1号道とで確定する。そして、KA 2-2・4号畑とは、畝サクの耕作上のズレ、さらに、地形勾配の変換などが単位畑区分けの根拠であるので、ほぼ長方形と推定できるKA 2-3号畑の原形が示せる。

ここで、計測値により、土砂流入前の推定畑面積を、 $18\text{m} \times 27.5\text{m} = 495\text{m}^2$ と仮に算出すると、 $30\text{歩} \times 5 \div 495\text{m}^2$ という数値と近似する。このことは、以下に示す、本遺跡で確認される「ヒトツカ」=30



歩（1アール（30坪強））の単位面積の算定の追検証となるのである。

KA 1号畑 101㎡を計るKA 1号畑の面積計測値を上記とあわせて、I区の泥流畑から抽出した計測値としたい。この畑では、浅間A灰の痕跡を含め、単一の耕作形態が検出される。平面形状は三角形で、拡張トレンチで範囲確認をおこなった結果、ほぼ正確な面積算出がなされた畑として、算出した面積が確定される。

KA10号畑での推定 II区においては、調査区との兼ね合いから不十分な成果しか示せない。しかし、敢えてKA10号畑について考えておきたい。

北側の平面図に盛込めない部分と南の現道により厳密な面積確定の作業をおこなうには不十分であることは、本文中に記載した通りである。KA10-23

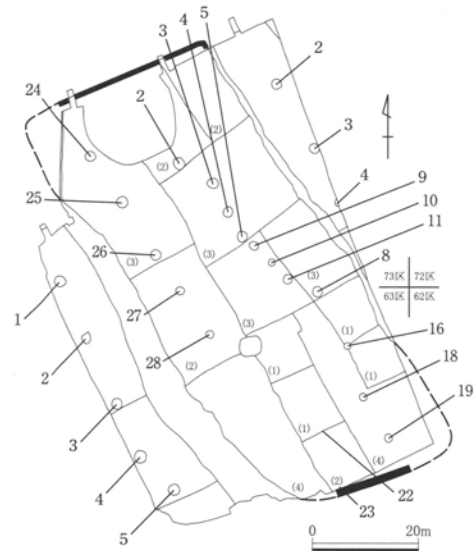


図70 KA10号畑

号畑付近は、表土掘削をおこなった建設重機の退出口となった部分のみで範囲確認をおこなった。残念ながら、図化をおこなうまでには至らなかったが、南に2条ほど残して礫が集まり、段地形となっていたことで、畑の南境界を確定した。

さらに、KA 9号畑との境界は、畑の短冊形状と踏分道の延長で推定した。北西隅は地形からの推定をおこなった。このことで概略の面積想定をおこなったKA10号畑は、図70で示す通りである。

以上から、やや想像を逞しくしたKA10号畑の景観復元をおこなってみたい。KA10号畑の平坦面の分布とそれに見合った推定単位畑の数（図70に示した（数））を32と算出した。このことから、 $3,257 \text{ m}^2 \div 32 \approx 100 \text{ m}^2$ を抽出し、30歩の単位に則っている可能性を補足することが出来るが、若干の不安要素を含む。

川原湯勝沼遺跡の100㎡=30歩 以上みてきたように、5号ヤックラとKA 2-3号畑の原形の推定値、KA 1号畑の実測値、KA10号畑での概測値推定の3点の根拠から、概ね「 $100 \text{ m}^2 \approx 30 \text{ 歩}$ 」を川原湯勝沼遺跡の泥流畑で抽出した畑の単位面積の値としておく。

また、上湯原地区の「ヒトツカは1アールの広さ」という聞き取りによる民俗的な視点ともうまく一致



図69 5号ヤックラの変遷とKA 2-3号畑

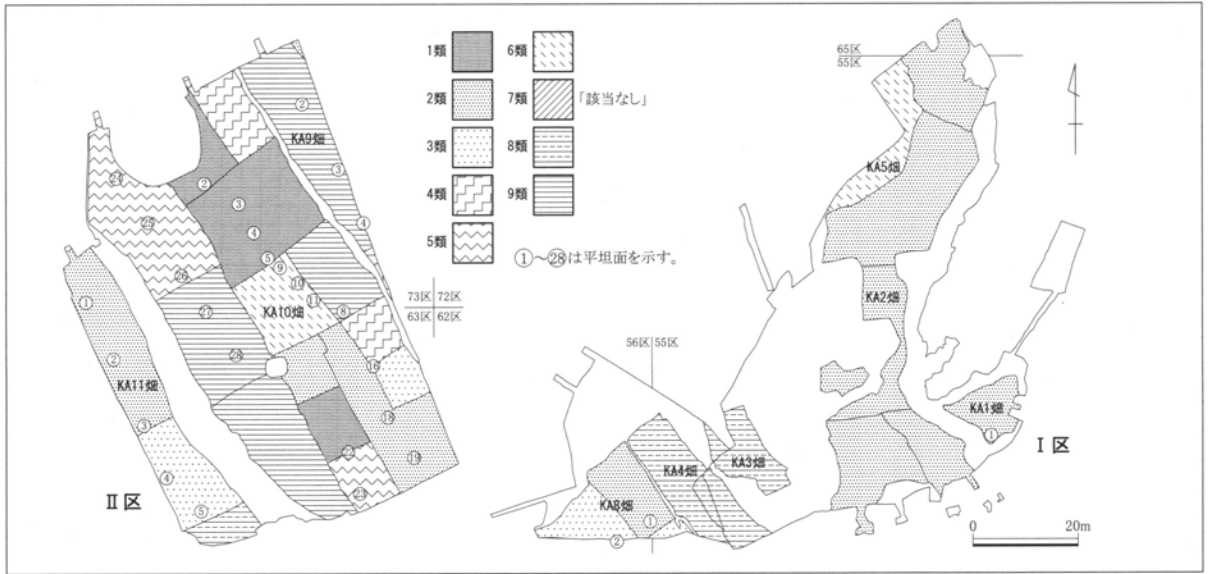


図 71 畝断面状況区分け図

する。このことは、今後、泥流畑の耕作形態の解明につながる事項である。

畝断面状況区分け図 『群埋文第319集』で扱った、畝断面から想定された1類から9類までの耕作状況を3遺跡の面積比で算出した約1.7万㎡の判読可能な畑の耕作状況は、「土用の培土が行われたか・行われずに泥流に被災したか」という当時の耕作状況を読み取ることが前提とした。

その結果、見積の最大で53%、最小で30%の面積の畑で「耕作が続けられていない（泥流被災までに土用の培土がおこなわれていない）」という数値が得られ、季節に従えば土用の培土が完了しているはずなのだが、それを確認できない畑の面積の割合ということになる。そして、そのことは作物が枯れてしまったという理由が想定されている。

今回はそれに追加する形で資料提示としたい（図71）。最終的な判断想定は、今後の資料の蓄積を必要とし、さらに、この地域の泥流畑調査段階での調査視点を継続させていく必要がある。

A灰の降下 天明三年浅間山噴火で降下した軽石は「浅間A軽石」と総称されるが、これとは粒径の区分や観察から「浅間A灰」と仮称してきたものがある（『群埋文第319集』）。これについては、間作の農事によりその変遷が確認され、特に、残存

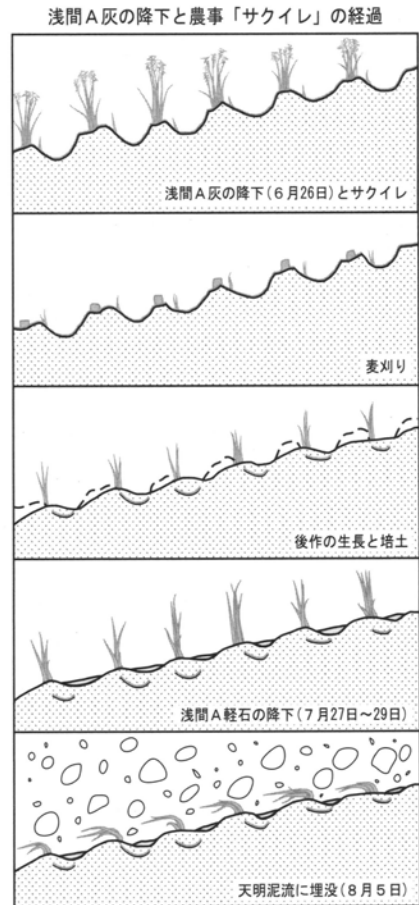


図 72 KA 1号畑の変遷

【出土遺物觀察表】

泥流面遺物

遺物番号	出土位置	種類	法量 ()は推定 単位mm			残存状況 と部位	釉の特徴	胎土とその他の特徴	生産地等	時期等
			口径	器高	台径					
1	I区4ヤックラ	磁器 碗	(95)	(47)	(40)	1/3	透明。釉に細かな気泡あり。	灰白色。夾雑物僅かに含む。染付。外面草花文、内面無文。底部に1条、高台に2条の圏線。高台内に不明銘。腰部以下やや肉厚。	肥前磁器(波佐見系)	江戸(18C)
2	I区13ヤックラ3層	陶器 香炉				口縁部	黄褐色。褐釉。	灰白色。口縁部やや肥厚し端部は平になり内傾する。	瀬戸美濃	江戸
3	I区KA8-2畑	陶器 碗				口縁部	黄褐色。褐釉。	灰白色。気泡縦方向に多い。	瀬戸美濃	江戸
4	I区泥流中	磁器 仏器具			(35)	脚部	透明。釉に僅かに気泡あり。	灰白色。夾雑物極僅かに含む。轆轤目残る。台部分は露胎。上げ底。		江戸
5	I区泥流中	陶器 碗				腰部	暗褐色。褐釉。	灰白色。小気泡夾雑物有。	瀬戸美濃	江戸
6	I区泥流面	磁器 碗				口縁部	透明。釉に僅かに気泡あり。	灰白色。染付。外側二重網目文、内側無文。腰部以下やや肉厚。	肥前磁器(波佐見系)	江戸(18C)
7	I区泥流中	磁器 碗	(75)			口縁部	透明。	灰白色。夾雑物僅かに含む。染付。外面口縁部に鋸歯状の連続文様、内面無文。呉須は藍。	肥前磁器(波佐見系)	江戸(18C)
8	II区17ヤックラ	陶器 碗			45	底部	黒色。鉄釉。	灰色。夾雑物極僅かに含む。高台以下は露胎。高台内は削り出し中心やや膨らむ。	瀬戸美濃	江戸
9	II区KA9-5畑	陶器 碗				口縁部	青薄半透明。少量の気泡と貫入。	灰白色。陶胎染付。夾雑物僅かに含む。外面口縁に強弱2本の圏線。呉須はやや褐色味帯びる。内面無文。	肥前陶器波佐見系	江戸
10	II区KA10-1畑	磁器 皿			(75)	底部	二次被熱ではなく焼成不良。	灰白色。内外面に染付。外面高台内1条外2条、高台縁1条の圏線。内面ワリガキ、ダミは植物意匠か?		江戸
11	II区KA10-3、5畑	陶器 德利?				腰~底部	黒褐色。鉛釉。内面に釉の流れ溜まる。	灰白色。小気泡、夾雑物含む。底部と側部の面取りなし。轆轤目残る。濁ったうのふ釉掛かる。	瀬戸美濃	江戸
12	II区KA10-14畑	陶器 小皿				口縁部	灰赤色。錆釉。内面釉厚い。	灰色。外面回転篋削り。内面乳白色の長石釉掛。	肥前陶器	江戸
13	II区KA10-14畑	陶器 皿			(75)	底部	オリーブ色。灰釉。	灰白色。夾雑物含む。	美濃大窯	16c
14	II区KA10-15畑	陶器 灯明皿?	(105)			口縁部	灰赤色。錆釉。	にぶい赤褐色。口縁部外面下回転篋削り。	志戸呂	江戸
15	II区KA10-24畑	陶器 小碗	(55)			口縁部	明黄褐色。褐釉。	灰白色。小気泡、夾雑物含む。腰部以下やや肉厚。	瀬戸美濃	江戸
16	II区KA10-25畑	陶器 丸碗				口縁部	オリーブ褐色。褐釉。	灰白色。口縁内面掛け分け。小気泡夾雑物有るか焼成良。	瀬戸美濃	江戸
17	II区KA11-4畑	陶器 碗			(45)	1/5	オリーブ褐色。褐釉。底部~高台上是露胎。	灰白色。小気泡、夾雑物含む。轆轤目残る。底部~高台上是露胎、釉垂れる。	瀬戸美濃	江戸
18	II区KA11-5畑	陶器 播鉢				口縁部	暗赤褐色。錆釉。釉垂れ鈍い光沢。	灰白色。夾雑物多く含む。口縁部外側へ折り返し厚い仕上げ。	瀬戸美濃	江戸
19	II区泥流面	陶器 皿			(60)	底部	長石釉。高台内は露胎。釉厚く気泡入る。	灰白色。小気泡、夾雑物多く含む。高台内は轆轤目顕著に残る。志野。	美濃	江戸
20	II区泥流中	青磁 碗				胴部	灰オリーブ色。	灰白色。小気泡、夾雑物含むが焼成良。鍋蓮弁文。焼成堅牢。	龍泉窯系	13C後~末
21	II区73区J-1	磁器 小鉢	(70)			口縁部	透明。	灰白色。夾雑物含む。染付。口縁外へ開く。外面不明文様、内面無文。	肥前磁器	江戸
22	II区KA11-6畑	陶器 丸皿	(120)			口縁部	灰釉。	灰白色。夾雑物僅かに含む。型紙摺鉄絵。	瀬戸美濃	江戸

遺物番号	出土位置	種類	①直径②厚③重④穿径 mm・g	残存状況	特徴
23	I区泥流中	古銭	①24.3②1.4③3.0④1.9	完形	元祐通宝(背不明摩滅)。私鑄銭?
24	II区KA10-1、2畑地境	古銭	①23.5②1.4③2.6④2.7	完形	寛永通宝。萩原銭(草点永進永)。永禄13年(1700)。

遺物番号	出土位置	種類	①長②接合部径③火皿径④重量 mm・g	残存状況	特徴
25	Ⅱ区 KA10-15 畑	雁首	①(50) ③(14) ④2.7	火皿潰れ。火皿1/3煙管1/2欠損。	煙管の接合部残存。

第2面遺物

遺物番号	出土位置	種類	①胎土②焼成③色調	残存状況と部位mm	その他の特徴	備考	
26	Ⅱ区 73. 1 住No.6	須恵器	坏	①白色長石含み緻密②還元③明褐灰色	口縁 (口径130)	ロクロ整形。	
27	Ⅱ区 73. 1 住	土師器	台付甕	①白色長石の他細粒砂含む②酸化③明赤褐色	脚部 (脚部径105)	脚部横ナデ。	
28	Ⅱ区 73. 1 住 No.26、28、29、54	土師器	甕	①白色長石の他粗粒砂含む②酸化③橙色	4/5 口径180 高台径(85) 高さ72	ロクロ整形。外面底部右回転糸切り後、高台後付け。内面ミガキと黒色処理。	
29	Ⅱ区 73. 1 住No.41、42、43、91、92、93、94、97	土師器	甕	①粗粒砂含む②酸化③浅黄褐色	口縁 (口径210)	外面：口縁部横ナデ、胴部上位僅かな横ヘラ削り、その下縦方向のヘラ削り。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	
30	Ⅱ区 73. 1 住No.12、45、46、73、75	土師器	甕	①粗粒砂含む②酸化③にぶい橙色	口縁 (口径190)	外面：口縁部ヘラ撫で、胴部上位強いヘラ削り。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	内外面煤付着
31	Ⅱ区 73. 1 住No.7、13、22、57、75	土師器	甕	①白色長石の他粗粒砂含む②酸化③橙色	口縁 (口径210)	外面：口縁部横ヘラ削り、胴部上位横ナデ。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	
32	Ⅱ区 73. 1 住No.14、75、80	土師器	甕	①白色長石の他粗粒砂含む②酸化③明赤褐色	口縁 (口径200)	外面：口縁部～胴部上位横ナデ。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	内外面煤付着
33	Ⅱ区 73. 1 住No.19、36	土師器	甕	①白色長石の他粗粒砂含む②酸化③橙色	口縁 (口径190)	外面：口縁部横方向の強いヘラ削り、胴部上位横ナデ。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	内外面煤付着
34	Ⅱ区 73. 1 住No.17、75	土師器	甕	①白色長石の他1mm大の粗粒砂含む②酸化③橙色	底 底径35	底部ヘラ削り。	外面煤付着
35	Ⅱ区 73. 1 住No.49、75	土師器	甕	①白色長石の小黒斑他含む②酸化③にぶい褐色	底 底径35	底部ヘラ削り。	外面煤付着
36	Ⅱ区 73. 2 住No.30、31、34、40、49	須恵器	坏	①小黒斑含む②還元③灰白色	1/2 口径132 底径73 高さ37	ロクロ整形。外面底部右回転糸切り。二次被熱。	
37	Ⅱ区 73. 2 住No.4	須恵器	坏	①小黒斑含む②還元③明褐灰色	2/3 口径128 底径60 高さ43	ロクロ整形。外面底部右回転糸切り。	
38	Ⅱ区 73. 2 住No.23	須恵器	甕	①白色長石含み緻密②酸化③にぶい黄褐色	口縁 (口径140)	ロクロ整形。	
39	Ⅱ区 73. 2 住No.1	須恵器	坏	①白色長石に小黒斑僅かに含む②還元③明褐灰色	口縁 (口径135)	ロクロ整形。	
40	Ⅱ区 73. 2 住No.23、25、26	土師器	甕	①小黒斑僅かに含む②酸化③橙色	口縁 (口径200)	外面：口縁部横ヘラナデ、胴部上位横ヘラ削り。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	
41	Ⅱ区 73. 2 住	土師器	甕	①粗粒砂含む②酸化③明黄褐色	口縁 (口径200)	外面：口縁部横ヘラナデ。内面：口縁部横ナデ。	
42	Ⅱ区 73. 2 住No.3	土師器	甕	①小黒斑僅かに含む②酸化③橙色	口縁 (口径200)	外面：口縁部横ヘラナデ、胴部上位弱い横ヘラ削り。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	
43	Ⅱ区 73. 2 住No.2	土師器	小型甕	①白色長石に粗粒砂含む②酸化③明黄褐色	口縁 (口径120)	外面：口縁部横ナデ。胴部上位弱い横ヘラ削り。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	内外面煤付着
44	Ⅱ区 73. 2 住No.32、33	土師器	小型甕	①白色長石の他1mm大の粗粒砂含む②酸化③橙色	口縁 (口径105)	外面：口縁部～胴部上位横ナデ。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。	
45	Ⅱ区 73. 3 住No.14	須恵器	坏	①小黒斑含む②還元③灰白色	口縁 (口径130)	ロクロ整形。	
46	Ⅱ区 73. 3 住No.22	須恵器	甕	①白色長石と小黒斑を含む②還元③浅黄褐色	口縁 (口径130)	ロクロ整形。	外面煤付着
47	Ⅱ区 73. 2 住No.22、73. 3 住No.1、3、10、12、63区 J-23	土師器	甕	①白色長石の他1mm大の粗粒砂含む②酸化③橙色	口縁 (口径200)	外面：口縁部横ヘラナデ、胴部上位強い横ヘラ削り。内面：口縁部～胴部上位横ナデ。輪積み痕。	内外面煤付着

遺物番号	出土位置	種類	①長さ②厚さ③幅④重量 mm・g	形状・特徴	備考
48	Ⅱ区 73. 1 住No.1	刀子	①63②6.5③13④6.3	中茎の末端を欠損する。	錆付着
49	Ⅱ区 73. 1 住覆土	錐状鉄製品	①56②5.5③4.8④2.1	断面正方形に近く、先端と基部を欠損する。	錆付着

遺物番号	出土位置	種類	①長さ②幅③厚さ④重量 mm・g	形状・特徴	備考
50	Ⅱ区73.1住S-1	砥石菰編石	①153②61③42④680	3面に磨面。菰編石からの転用?縦方向に最大幅約1mmの擦り溝。一部に煤付着。	粗粒輝石安山岩
51	Ⅱ区73.1住覆土	砥石	①101②32③31④193	4面に磨面。	粗粒輝石安山岩
52	Ⅱ区73.2住No1	砥石	①56②19③13④19	4面に磨面。	デイサイト(砥石)
53	Ⅱ区73.2住S-1	菰編石?	①155②55③38④450	凹凸のある自然面。	粗粒輝石安山岩

遺物番号	出土位置	種類	①胎土焼成③色調	残存状況と部位mm	その他の特徴	備考
54 ab	Ⅱ区63.27土No3、5、8、9、10、11	土師器 甕	①5mm大の粗粒砂僅かに含み、白色微細粒砂と小黑斑含む②酸化③橙色	2/3口縁～底部(口径165)	外面:口縁～胴上部にかけて横方向、胴中位は縦方向の刷毛目(単位は9本15mm)がナデで消されて僅かに残る。一部に煤付着。内面:横方向のヘラナデ。底部外面:縦方向のミガキ。	5C?
55	Ⅱ区63.27土	土師器 甕	①3mm大の粗粒砂僅かに含み、白色微細粒砂含む②酸化、軟質、不良③明黄褐色	口縁～胴部(口径170)	外面:口縁に縦、胴上部に右下がり、胴中位縦と一部に横方向の刷毛目(単位は9本15mm)がナデで消されて部分的に不明瞭に残る。口縁～頸部は施文後、明瞭な横ナデ。一部に煤付着。内面:荒れているが、混ざりきらない白色粘土の斑が確認できる。	4～5C?

遺物番号	出土位置	種類	①長さ②厚さ③幅④重量 mm・g	形状・特徴	備考
56	Ⅱ区63区N-20 2面	剣形模造品	①28②3.5③18.5④3.1	穿孔後両面にバリ取り状の痕跡。2箇所穿孔φ1.5mm。基部の穿孔に至り有。	雲母片岩 5C後半～6C前半

遺物番号	出土位置	残存部位	器形	口縁	①胎土②焼成③色調	残存状況と法量 ①口縁②底径③高さcm	その他の特徴	備考
57	Ⅱ区63区P-25 2面	口縁	深鉢	波状	①白色細砂粒を含む②良好③にぶい黄褐色		口縁内側良好なナデ。4mm幅の半裁竹管文による平行沈線。三角形の無文部分は削り取り。	十三善提式
58	Ⅱ区73.9土				①最大2mmの粗砂粒をやや多く含む②良好③赤褐色		RLの単節縄文を横位に施文後、沈線による区画と不十分な磨消し。	五領ケ台式
59	Ⅱ区73.10土、73区G-5 2面	胴部	深鉢		①1mm大の石英・砂粒をやや多く含む②良好③明赤褐色		縄文LR横位に施文後、半裁竹管による蛇行する垂線が並行する。	五領ケ台式
60 ac	Ⅱ区KA10-2畑、73区J-5 2面、73区K-6 2面	胴部	深鉢		①最大2mmの石英・砂粒をやや多く含む②良好③橙色		縄文LR横位に施文後、半裁竹管による蛇行する2本の垂線が並行する。	五領ケ台式
61	Ⅱ区73.2埋甕	胴部	深鉢		①最大4mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③明赤褐色	①(16)	横位と交流波形様に断面三角の隆線に区画され、ヘラ状工具による連続する刺突列と丸ペン様の刺突列、及び沈線により意匠される。	勝坂1式
62	Ⅱ区63.13土	口縁			①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③明赤褐色		内面に肉厚する口縁。口縁平坦に面取り。断面三角の流線の区画に、ヘラ状工具による連続する刺突列と丸ペン様の刺突文。	勝坂1式
63 abc	Ⅱ区73区K-5 2面、73区K-6 2面、73区J-5 2面	胴部～底部	深鉢		①最大4mmの砂粒をやや多く含む②良好③にぶい赤褐色	②(11)	断面三角の縦位と横位の隆帯により区画され、3～4本の沈線が区画する隆帯の内外をめぐる。隆帯の貼付とナデは左→右方向。網代底?	勝坂1式
64	Ⅱ区73区K-3 2面	口縁	深鉢	波状	①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③橙色		口縁内彎、頸部著しく開き、下部には平行沈線がめぐる。口縁部に大小の円環状のモチーフを刻みの施された隆帯で結ぶ。枠内は、ペン先状の刺突列とキャタピラ文で構成される。	勝坂1式
65	Ⅱ区63区I-23 2面	底部	深鉢		①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③明赤褐色	②(9)	枠内は、ペン先状刺突文とキャタピラ文で構成される。外面底部付近にはナデによる紋り込み。	勝坂1式
66	Ⅱ区63.1河道	把手			①最大1mmの白色砂粒・石英を少量含む②良好③明赤褐色		中央に穴があき上下が本体に付く広い橋状の把手破片。文様は、ペン先状刺突文とキャタピラ文、ロッキング様の沈線で構成される。	勝坂2式
67	Ⅱ区73区J-3 2面	突起			①細砂粒を極僅か含む②良好③橙色		径35mmの円環状突起。幅8mmの半裁竹管による平行沈線による施文。	勝坂2式
68	Ⅱ区73区E-6 2面	口縁			①白色細砂粒を極僅か含む②良好③にぶい褐色		口縁肥厚し、口唇の断面尖る。外面の文様は棒状の工具による2本の平行する沈線で構成する意匠。内面ヘラによるナデ。	勝坂式

69	Ⅱ区63区I-23 2面	口縁	深鉢		①最大2mmの砂粒をやや多く含む②良好③明赤褐色		外に張り出し平坦に面取り調整された口唇。口縁の突起に刺突。幅10mmの半裁竹管による上→下の押し文。	勝坂式
70	Ⅱ区73区K-5 2面	胴部	深鉢		①最大4mmの粗砂粒を僅か含む②良③橙色		縦位の断面緩い三角の隆帯に刻み目が付く。	勝坂式
71	Ⅱ区63区I-24 2面、63区J-24 2面	口縁			①最大2mmの粗砂粒をやや多く含む②良好③赤褐色		口縁外広し折り返した下顎に刻み目が施される。全体に横位のナデ。	勝坂式
72	Ⅱ区73区K-4 2面				①最大2mmの粗砂粒を多く含む②良好③明赤褐色		横位の断面三角の隆起線と平行するキャタピラ文。	勝坂式
73	Ⅱ区73区K-3 2面	口縁			①細砂粒を極僅か含む②良好③橙色		口縁突起。口唇部は整形により凸状に肉厚する。外面隆帯剥落痕。	勝坂式
74	Ⅱ区73区H-9 2面	口縁	深鉢	波状	①最大2mmの砂粒・雲母片をやや多く含む②良③明赤褐色		波状口縁の破片。隆帯で区画された内部に不規則な沈線と刻み目により文様を構成。	勝坂式
75	Ⅱ区73区K-5 2面	胴部	深鉢		①最大2mmの砂粒・雲母片をやや多く含む②良③にぶい黄褐色		ヘラ状工具による連続する横位の連続する刺突列。隆線による三角の区画内にヘラ状工具による区画線。	阿玉台Ib式
76	Ⅱ区73区K-4 2面、73区J-5 2面	胴部	深鉢		①最大3mmの砂粒・雲母片をやや多く含む②良好③にぶい褐色		ヘラ状工具による連続する横位の連続する刺突列。内傾する隆線による三角の区画。	阿玉台II式
77	Ⅱ区73.37土Na3、73区J-4 2面	胴部	深鉢		①最大3mmの砂粒・雲母片をやや多く含む②良好③にぶい黄褐色		刺突列がめぐる。輪積痕残る。	阿玉台II式
78	Ⅱ区73区I-4 2面	口縁	深鉢	平縁	①最大3mmの砂粒・雲母片をやや多く含む②良好③明褐色		口縁平坦に面取り。口縁下にヘラ状工具による連続する横位の連続する刺突列。	阿玉台II式
79	Ⅱ区63区J-22 2面	底部	深鉢		①最大4mmの砂粒・雲母片をやや多く含む②良好③明褐色	②(11)	深鉢底部無文部分。	阿玉台式
80	Ⅱ区73.20ピット	胴部			①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③明赤褐色		2本の沈線を弧状に施文。	中期前半
81	Ⅱ区73区J-3 2面	把手			①細砂粒を極僅か含む②良③にぶい橙色		橋状把手。下部側は本体からの剥がれ。両端、中央肉厚に整形。	中期?
82	Ⅱ区表採泥流面	底部	深鉢		①細砂粒を極僅か含む②良③橙色	②6.5	底部外面が強く絞り込まれた土器底部。底部中空。	中期?
83	Ⅱ区63.1河道	底部	深鉢		①最大4mmの砂粒をやや多く含む②良③にぶい褐色	②85	網代底。焼成不良。	中期?
84	Ⅱ区73区F-6 2面	口縁		平縁	①白色微細砂粒を僅かに含む②良好③にぶい褐色		口唇部内に1本の沈線めぐり、外面やや肥厚する。口縁部に右下がりの刻み目の付く隆線がめぐり、垂下する隆線との交点に刺突の意匠。内外面にミガキ。	堀之内2式
85	Ⅱ区73.6土	口縁	深鉢	平縁	①最大1mmの白色砂粒を少量含む②良好③黒褐色		無文の粗製深鉢土器。口縁内側へ折り返し。ナデ整形。削り後、横方向のナデに近いミガキ。	後～晩期?
86	Ⅱ区73.26土Na6	頸部			①白色微細砂粒を僅かに含む②良③橙色		頸部の屈曲部分?粗製土器。	後～晩期?
87	Ⅱ区63.25土	胴部	浅鉢		①白色微細砂粒をやや多く僅かに含む②良好③褐灰色		三分岐「日」字状と平行する浮線文。瘤状の抉りは粘土の貼付か?外面赤色塗彩。	氷I式古
88	Ⅱ区73区L-3 2面	口縁			①白色微細砂粒を僅かに含む②良好③黄褐色		内外面ミガキ。「日」字状の浮線によるモチーフは左右連結しない。口縁平坦な面取り、内に2条の平行する沈線。	氷I式古
89	Ⅱ区63.27土、73区M-2 2面	口縁	浅鉢	平縁	①白色微細砂粒を僅かに含む②良好③にぶい黄褐色		口縁平坦な面取り。口外帯に縦方向の刻み。変形工字文。外面赤色塗彩。	氷I式古
90	Ⅱ区73区L-2 2面	口縁		平縁	①微細砂粒を極少量含む②良好③褐色		外面黒色の精製土器。口縁部の瘤状の突起は粘土貼付痕あり。平行する浮線文。	氷I式古
91	Ⅱ区63区L-23 2面	口縁			①白色微細砂粒と最大2mmの砂粒を極少量含む②良好③にぶい橙色		推定12単位の山形の小突起。口縁部は縄文施文?口縁部下の沈線間隆線部は縦位の細密条痕文の施文?突起間の口縁端部は平坦な面取りの後、内面整形。口縁部沈線は尖った舌状の棒状工具による止め。並行する6本横位にすべて左→右へ施文。無文部は、横位のナデ。内面はミガキ後、1mm間隔の2本のペン先状の工具による横位の条線、間隔は10～20mm。	氷I式古併行
92	Ⅱ区63.1河道				①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良③黒褐色		結線する浮線文。	氷I式古併行

93	Ⅱ区63.25土№1、2、3、4、5		堯		①白色微細砂粒と最大1mmの砂粒を極少量含む②良好③黒褐色	1/4①(14)○ 肩部径(15)③ (21)	1・2単位の山形突起には、口縁部沈線より深くやや左に傾く縦位の刻み。口縁部断面はやや緩い平坦な面取り。幅3mmの棒状工具による沈線を横位に4条施文。頸部と内面は削り後横位にミガキ。口縁部にも縦位の細密条痕文を施文。幅10mm7本を単位。肩部～体部の細密条痕文は、①底部から上位→②肩部～体部の縦位→③肩部の縦位→④肩部一部で斜位、の順に施文。外面炭化物附着。底面粘土接合面での剥脱。	水I式古 ～中併行
94	Ⅱ区63.25土	口縁		平縁	①最大4mmの粗砂粒をやや多く含む②良③橙色		内外面やや荒れる。口縁山形小突起。口縁部は平坦に面取り、赤色塗彩?口縁直下にLRの単節縄文を横位に施文。幅3mm強の棒状工具による沈線で頸部を横位に区画。頸部は無文で粗いミガキ。内面は削り後、横方向のミガキ。	水I式古 ～中併行
95	Ⅱ区63.24土№2、73区R-2 2面	口縁		波状	①最大1mmの白色粗砂粒を少量含む②良好③黒褐色		口縁一部で縄文RLを縦位に施文。頸部にミガキ。口縁外面に3本の沈線がめぐる。口縁に突起。	水I式古 ～中併行
96	Ⅱ区63.27土	口縁	堯		①微細砂粒を極少量含む②良好③にぶい褐色		口縁緩い波状。口縁部断面は曲面に近い面取り。口縁直下にLRの単節縄文を横位に施文。幅3mm強の棒状工具による沈線を横位に2条施文。波頂部内外面には右に傾く縦位の沈線。内面は削り後、横方向のミガキ。	水I式古 ～中併行
97	Ⅱ区63区P-24 2面	口縁			①白色微細砂粒を極少量含む②良③にぶい褐色		口縁緩い波状の突起。口縁部断面は曲面に近い面取り。口縁直下に細密条痕文を斜位に施文。幅3mm強の棒状工具による単沈線を横位に施文。波頂部外面には縦位の沈線で施文。内面は削り後、横方向のミガキ。	水I式古 ～中併行
98	Ⅱ区73区H-7 2面	口縁			①白色微細砂粒を極少量含む②良好③にぶい赤褐色		口縁は粘土紐貼付による複合口縁か?整形後、縄文LRを横位に施文。断面三角に整形。口縁部は平坦な面取り。	水I式古 ～中併行
99	Ⅱ区73区J-4 2面	頸部			①白色微細砂粒を極少量含む②良好③にぶい褐色		無文帯と平行する沈線文。隆線部には縦位の細密条痕文。	水I式古 ～中併行
100	Ⅱ区63区J-25 2面				①白色微細砂粒と最大2mmの砂粒を極少量含む②良好③黒褐色		横位の平行沈線。外面炭化物附着。	水I式古 ～中併行
101	Ⅱ区63区J-23 2面				①白色微細砂粒を極少量含む②良好③褐色		一部結節に向かう浮線文。	水I式古 ～中併行
102	Ⅱ区73.3住				①白色微細砂粒を少量含む②良好③灰褐色		平行する浮線文。刺突は意匠か?沈線内のペン先状のヘラ押さえ痕は左→右。	水I式古 ～中併行
103	Ⅱ区73区P-2 2面				①白色微細砂粒を少量含む②良好③にぶい褐色		平行する沈線文。縦方向の細密条痕文?	水I式古 ～中併行
104	Ⅱ区63区J-24 2面				①最大6mmの礫と白色微細砂粒を少量含む②良好③にぶい褐色		平行する沈線文。	水I式古 ～中併行
105	Ⅱ区73.2住№18				①白色砂粒をやや多く含む②良③にぶい褐色		平行する沈線文。	水I式古 ～中併行
106	Ⅱ区63区K-24 2面				①粗砂粒を含む②不良③浅黄褐色		平行する沈線文。	水I式古 ～中併行
107	Ⅱ区63区P-24 2面				①白色微細砂粒を少量含む②良好③にぶい赤褐色		一部結節に向かう細い沈線。	水I式古 ～中併行
108	Ⅱ区				①微細砂粒を極少量含む②良③にぶい褐色		平行する沈線文。	水I式古 ～中併行
109	Ⅱ区63.28土	頸部			①微細砂粒を極少量含む②良好③灰褐色		頸部無文帯と浮線文。	水I式古 ～中併行
110	Ⅱ区73区J-6 2面、73区L-5 2面				①微細砂粒を極少量含む②良好③暗褐色		斜位の細密条痕文に沈線が横走する。	水I式古 ～中併行
111	Ⅱ区63.28土	口縁	浅鉢		①白色微細砂粒を極少量含む②良好③暗褐色		浮線文による変形工字文。口縁下に8mmの無文帯。口外帯には簡略化された刺突。	水I式中 併行
112	Ⅱ区73区K-4 2面	口縁			①白色微細砂粒を極少量含む②良好③にぶい赤褐色		外面黒色の精製土器。口縁部に瘤状の突起貼付、結線する浮線文。	水I式中 併行
113	Ⅱ区63区L-23 2面	頸～胴部	堯		①白色微細砂粒を少量含む②良③黒褐色		頸部無文。平行する浮線文の下位に斜位の細密条痕文。	水I式中 併行
114	Ⅱ区63.1河道				①白色微細砂粒を多く含む②良③黒褐色		4分岐に結線する浮線文。	水I式中 併行
115	Ⅱ区73.1埋堯	口縁下部～底部	堯		①最大3mmの砂粒を極僅かに含む②良好③黒褐色	4/5①(37)② 11○肩部39③残 存器高(51)	口縁下部には幅3mmの棒状工具による横位の沈線が廻り、沈線間の隆部にはLR縄文が横位に施文。頸部の無文部は、横位のミガキに近いナデを施し、頸部直上・直下には段を作出。肩部から胴部は細密条痕文(6～8本/12～16mm)が横位(肩部)、斜位(胴部上半)、縦位(胴部下半)に施文。細密条痕文施文後、肩部上半には幅3mmの沈線が4条廻り、刺突を施す。肩部下半には形の崩れた2段の綾杉文。底部直上は横位に右から左へのケズリによる整形。内面は横位の丁寧なナデ調整。外面は胴部上半、内面は胴部疎らに炭化物が附着。	水I式中 ～新併行

116	II区73.3埋堯	口縁部～胴部上位	壺		①白色微細砂粒と最大3mmの砂粒を含む②良好③にぶい黄褐色	1/2①20○肩部径48③残存器高(38)	口縁部がほぼ直立し、強く肩が張る。平坦に面取りされた口唇部はやや内側に傾く、口唇部外面は正面斜め上方から指頭による押圧を施す。口縁部には太さの異なる断面三角の突帯を2本貼り付け、直上直下を丁寧にナデ調整。突帯上には指頭による押圧を施す。頸部は細密条痕文(6～8本/12～16mm)を縦位に施す。頸部から肩部への移行部にも断面三角の突帯を貼り付け、指頭による押圧を施す。肩部から胴部上半は頸部同様の細密条痕文を縦位・横位に施す。内面は横位のナデ調整。頸部から肩部への移行部に接合痕(内傾接合?)が確認できる。	水I式中～新併行
117	II区73.17土Na1、2、4、5		浅鉢	平縁	①白色微細砂粒を少量含む②良③にぶい黄褐色	1/2①21②6③10	口外帯には、推定13単位の小突起、正面から棒状工具による刺突。突起間には緩やかに横位の丁寧なミガキ(赤色塗彩残存)。口外帯下には横位の丁寧なミガキの施される無文帯。概ね体部上位に横位、それ以下は縦位に縄文LRを施文。内面横位の丁寧なミガキ。成型時に2か所の穿孔。	水I式中～新併行
118	II区73区M-6 2面	頸部			①白色微細砂粒を極少量含む②良好③黒褐色		頸部の無文部分。丁寧なミガキ。	水I式中～新併行
119	II区63.1河道				①白色微細砂粒をやや多く含む②良③黒褐色		結線する浮線文。	水I式新
120	II区73区K-4 2面	口縁			①粗砂粒を含む②良好③淡黄色		口縁端部は平坦な面取り。口縁下に横位、斜位に沈線で施文。内面は横位のナデ。	水I式新併行
121	II区63区J-24 2面	口縁	深鉢		①粗砂粒を少量含む②良③にぶい橙色		口縁端部は整形後平坦な面取り。口縁端部外に不明瞭な5mm幅程度の無文部分(横ナデ?)を残す。口縁瘤状の突起かは不明。外面斜位の細密条痕文(単位不明)、表面に輪積痕残る。内面横位～斜位の削りと部分的なナデ。	水I式
122	II区63.25土				①粗砂粒を少量含む②良好③にぶい橙色		口縁端部から斜位右下への細密条痕文施文後、口縁から20mmの位置で横位に磨り消し。口縁端部の指頭による垂直方向の連続する押圧は10mm間隔。	水I式
123	II区63区N-23 2面	口縁			①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②堅牢③暗赤褐色		口縁外反し、口縁端部外面へ折り返し、鋭角に面取り整形。外面工具による横位の雑なナデ整形。内面ミガキ。	水I式
124	II区73区J-5 2面	胴部			①白色砂粒を僅かに含む②堅牢③明褐色		斜位の単位不明の細密条痕文施文後、横位の沈線を平行に施文。	水I式
125	II区73区K-3 2面、ab	胴部			①白色砂粒を少量含む②良好③明褐色		縦～斜位の単位不明の乱れた細密条痕文。内面横位のミガキ。	水I式
126	II区63.5焼土Na2	肩部	壺		①白色砂粒と最大5mmの礫を含む②良好③明褐色		斜位と横位の幅10mm5本の刻みを単位とする、肩部に斜位、胴部に横位の粗目の細密条痕文。	水I式
127	II区63.27土Na2	胴部			①最大5mmの礫と粗砂粒を僅かに含む②良好③にぶい褐色		幅11mm7本単位の縦方向の細密条痕文。	水I式
128	II区63区P-24 2面				①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③明黄褐色		縦位の細密条痕文。	水I式
129	II区63.24土Na1	胴部			①粗砂粒をやや多く含む②不良③橙色		内外面荒れ。細密条痕文の痕跡?	水I式?
130	II区63.27土Na1	口縁		平縁	①白色砂粒と最大5mmの礫を含む②良好③黄褐色		口縁内に沈線。口縁端部外に浮線状に面取り。内外面ナデによる整形、粗製無文。異系統の土器か?	水I式?
131	II区73区K-5 2面	口縁		平縁	①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③明褐色		肉厚する口縁外に沈線。口縁端部外に浮線状に面取り。内外面ナデによる整形、粗製無文。異系統の土器か?	水I式?
132	II区73.2住	頸～胴部			①白色細砂粒を僅かに含む②良好③にぶい橙色		胴部に上方向の強いナデ。精製無文。	水I式
133	II区73.1住Na50	口縁		平縁	①白色砂粒を多く含む②良③にぶい褐色		横方向の強いナデ整形。精製無文。	水I式
134	II区泥流面	頸～胴部			①粗砂粒を僅かに含む②堅牢③黒褐色		頸部～肩部に斜め方向のミガキ。精製無文。	水I式
135	II区73区J-6 2面	頸～胴部			①粗砂粒を極僅かに含む②良好③橙色		頸部にミガキに近いナデ。精製無文。	水I式
136	II区63区J-24 2面		浅鉢?		①粗砂粒を多く含む②良③明赤褐色		内外面ナデによる整形、粗製無文。	水I式?
137	II区63区M-23 2面	底～胴部			①粗砂粒を僅かに含む②堅牢③褐色		内外面ミガキ。精製無文。	水I式
138	II区63区J-24 2面				①粗砂粒を多く含む②良③橙色		内外面ナデによる整形、粗製無文。	水I式
139	II区KA10-27畑				①粗砂粒を僅かに含む②良好③にぶい黄褐色		内外面ミガキ。精製無文。	水I式

140	Ⅱ区63区J-23 2面	口縁～胴部		①粗砂粒を僅かに含む②良好③灰黄褐色	内外面ミガキ。精製無文。	氷I式
141	Ⅱ区73区G-11 2面	底部脇		①最大2mmの白色砂粒をやや多く含む②良好③にぶい黄橙色	内外面にミガキに近いナデ。精製無文。	氷I式
142	Ⅱ区63区N-25 2面	底部脇		①白色微細砂粒を極少量含む②良好③褐色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
143	Ⅱ区63.25土			①粗砂粒を多く含む②良好③黒褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。表面荒れる。	氷I式
144	Ⅱ区63.25土№7			①粗砂粒を多く含む②良③にぶい褐色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。表面荒れる。	氷I式
145	Ⅱ区63.25土			①細砂粒を少量含む②良好③浅黄橙色	太くて荒い細密条痕文(7本/12mm)を縦位に施文。	氷I式
146	Ⅱ区63.25土№6			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③にぶい橙色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
147	Ⅱ区63区K-24 2面			①白色砂粒を僅かに含む②良好③灰褐色	細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
148	Ⅱ区63.27土	底部脇		①白色砂粒と粗砂粒をやや多く含む②良③橙色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
149	Ⅱ区63.27土			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③橙色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
150	Ⅱ区63.27土			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③明赤褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
151	Ⅱ区63.28土			①細砂粒を少量含む②良好③にぶい橙色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
152	Ⅱ区63.28土			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③橙色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。表面荒れる。	氷I式
153	Ⅱ区73.2住			①白色砂粒と粗砂粒をやや多く含む②良③橙色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
154	Ⅱ区73.2住			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③明赤褐色	やや荒い細密条痕文(7本/11mm)を縦位に施文。	氷I式
155	Ⅱ区73.2住			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③にぶい褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を横位に施文。	氷I式
156	Ⅱ区73.1住			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③明赤褐色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
157	Ⅱ区73.3埋堯№1	底部脇?		①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③にぶい褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
158	Ⅱ区73.3埋堯			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③明褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
159	Ⅱ区73.1埋堯			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③黒褐色	やや荒い細密条痕文(7本/12mm)を斜位に施文。	氷I式
160	Ⅱ区73.3埋堯			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③明褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
161	Ⅱ区73区K-3 2面			①白色微細砂粒を極少量含む②良好③明赤褐色	細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
162	Ⅱ区63区J-23 2面			①白色砂粒と粗砂粒をやや多く含む②良好③橙色	やや荒い細密条痕文(7本/12mm)を斜位～斜位に施文。	氷I式
163	Ⅱ区63区J-23 2面	肩部	壺	①白色砂粒と粗砂粒をやや多く含む②良好③橙色	やや荒い細密条痕文(6本/12mm)を縦位のち斜位に施文。肩部の調整。→は施工具の方向。	氷I式
164	Ⅱ区73区K-5 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②不良③浅黄橙色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
165	Ⅱ区73区K-2 2面			①白色微細砂粒を僅かに含む②良③橙色	刷毛目か細密条痕文(単位不明)を斜位～縦位に施文。	氷I式
166	Ⅱ区73区O-1 2面			①最大4mmの粗砂粒をやや多く含む②良好③灰褐色	刷毛目か細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式

167	Ⅱ区73区K-2 2面			①白色砂粒と最大5mmの礫を含む②良好③明褐色	細密条痕文(単位不明)を横位に施文。	氷I式
168	Ⅱ区63区M-23 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③橙色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
169	Ⅱ区63区K-24 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③明黄褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
170	Ⅱ区73区K-5 2面			①粗砂粒を多く含む②良好③明黄褐色	細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
171	Ⅱ区63区K-23 2面			①粗砂粒を多く含む②良好③褐色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を施文。	氷I式
172	Ⅱ区63区N-24 2面			①粗砂粒を多く含む②良好③明黄褐色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
173	Ⅱ区63区M-23 2面			①粗砂粒を多く含む②良好③にぶい褐色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
174	Ⅱ区63区K-24 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③橙色	やや荒い細密条痕文(7本/11mm)を斜位に施文。	氷I式
175	Ⅱ区63区M-23 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良好③橙色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
176	Ⅱ区63区I-24 2面			①粗砂粒を多く含む②良好③にぶい黄褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。表面荒れる。	氷I式
177	Ⅱ区63区J-24 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②良③浅黄褐色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。器面に凹凸。	氷I式
178	Ⅱ区63区N-23 2面			①最大3mmの礫と白色細砂粒を僅かに含む②不良③浅黄褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。表面荒れる。	氷I式
179	Ⅱ区63区J-24 2面			①細砂粒を少量含む②良好③にぶい黄褐色	細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
180	Ⅱ区63区J-23 2面			①粗砂粒を多く含む②良③橙色	刷毛目ないしは細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
181	Ⅱ区63区K-23 2面			①白色砂粒を僅かに含む②良好③黒褐色	やや荒い細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
182	Ⅱ区63区N-24 2面			①最大5mmの礫と粗砂粒を僅かに含む②良好③黒褐色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。	氷I式
183	Ⅱ区63.25土			①細砂粒を少量含む②良好③浅黄褐色	太くて荒い細密条痕文(単位不明)を斜位に施文。	氷I式
184	Ⅱ区63区J-23 2面			①最大5mmの礫と粗砂粒を僅かに含む②良③褐色	細密条痕文(単位不明)を縦位に施文。表面荒れる。輪積痕。	氷I式

遺物番号	出土位置	種類	①長さ②幅③厚さ④重量 mm・g	形状・特徴	備考
185	Ⅱ区73区H-8 2面	打製石斧	①126②71③24④203	完形。挟りの浅い分銅型。	細粒輝石安山岩
186	Ⅱ区73区J-4	打製石斧	①98②38③10④41	完形。短冊形。裏面の整形不良。	細粒輝石安山岩
187	I区泥流中	石匙	①(32)②(32)③8④6.5	正面左側を欠損。横長剥片を素材とする。2辺に刃部を形成している。基部は未調整。	チャート
188	Ⅱ区63.24土№4	石匙	①56②24③10④13	完形。縦長剥片を素材とする。3辺に刃部を形成。	黒曜石
189	Ⅱ区63.4焼土	石鎌	①29②15③5④1.4	完形。有茎。側辺はやや屈曲し外反、基部への挟り顕著。	細粒輝石安山岩
190	Ⅱ区73区M-2 2面	石鎌	①(25)②14③4.5④1.1	茎部を欠損。有茎。側辺は直線的。	珪質凝灰岩
191	Ⅱ区73区H-11 2面	石鎌	①25②15③4.5④1	完形。無茎。基部は深い弧状を呈し、側辺は直線的。	黒曜石
192	Ⅱ区73区G-8	石鎌	②17③4.5④0.9	先端部を欠損。無茎。側辺は返し部で内側へやや屈曲。	黒曜石
193	Ⅱ区73.1住	石鎌	②(14)③3④0.6	先端部と両基部を欠損。無茎。基部は深い弧状を呈し、側辺は直線的。	細粒輝石安山岩
194	Ⅱ区73.17土S-1	台石	①280②240③85④9100	扁平な円礫。両面に磨面と孔。	粗粒輝石安山岩

195	Ⅱ区63.22土	磨石	①101②90③54④742	側部分一部を除き、全面に良好な磨面。ハッチング部分は赤色塗料付着。	粗粒輝石安山岩
196	Ⅱ区63.24土№5	磨石	①72②47③28④151	両面に良好な磨面。	粗粒輝石安山岩
197	Ⅱ区63.25土	磨石	①72②56③44④235	磨面が確認できるのは両面とも部分的である。	粗粒輝石安山岩
198	Ⅱ区73.26土№1	磨石	①121②75③61④844	両面に平坦な磨面。	粗粒輝石安山岩
199	Ⅱ区73.26土№2	台石	①158②145③55④2340	扁平な円礫。片面平坦で良好な磨面。	粗粒輝石安山岩
200	Ⅱ区73.26土№3	磨石	①130②105③57④1179	扁平な円礫。両面平坦な磨面。	粗粒輝石安山岩
201	Ⅱ区73.26土№4	磨石	①137②93③65④1162	やや扁平な円礫。片面平坦な磨面。	粗粒輝石安山岩
202	Ⅱ区73.26土№5	台石	①190②155③70④3240	扁平な円礫。片面平坦な磨面。	粗粒輝石安山岩
203	Ⅱ区73.26土№7	玉	①12.2②9.1③5.8④0.8	穿孔は片側からのテーバー形状。両側の径3.6mmと2.2mm。	石英（緑色）
204	Ⅱ区73.26土№8	玉	①17.6②9.5③6.8④1.2	穿孔は片側からのテーバー形状。穿孔軸歪む。両側の径2.6mmと1.6mm。原石に稜をもち、打ち割り後、2面に平面磨加工が施されたものか？	石英（緑色） ニッケル含
205	Ⅱ区63.27土№1	磨石	①116②94③84④1315	球に近い円礫。全面が磨面。	粗粒輝石安山岩
206	Ⅱ区63.5焼土№4	磨石	①125②85③60④992	やや扁平な円礫。両面に良好な磨面。	粗粒輝石安山岩
207	Ⅱ区63区N-24 2面	磨石	①94②63③48④443	やや扁平な円礫。両面に磨面。	粗粒輝石安山岩
208	Ⅱ区63区K-23 2面	磨石	①190②80③43④1262	やや扁平な円礫。両面に磨面。片面の窪みは自然面。	粗粒輝石安山岩
209	Ⅱ区63区K-23 2面	磨石	①97②79③39④406	4面に良好な磨面。	粗粒輝石安山岩
210	Ⅱ区63区J-24 2面	磨石	①71②30③27④94	両面に良好な磨面。	粗粒輝石安山岩
211	Ⅱ区63区J-24 2面	磨石	①120②45③27④244	両面に良好な磨面。	細粒輝石安山岩

【遺物実測図・写真図版】

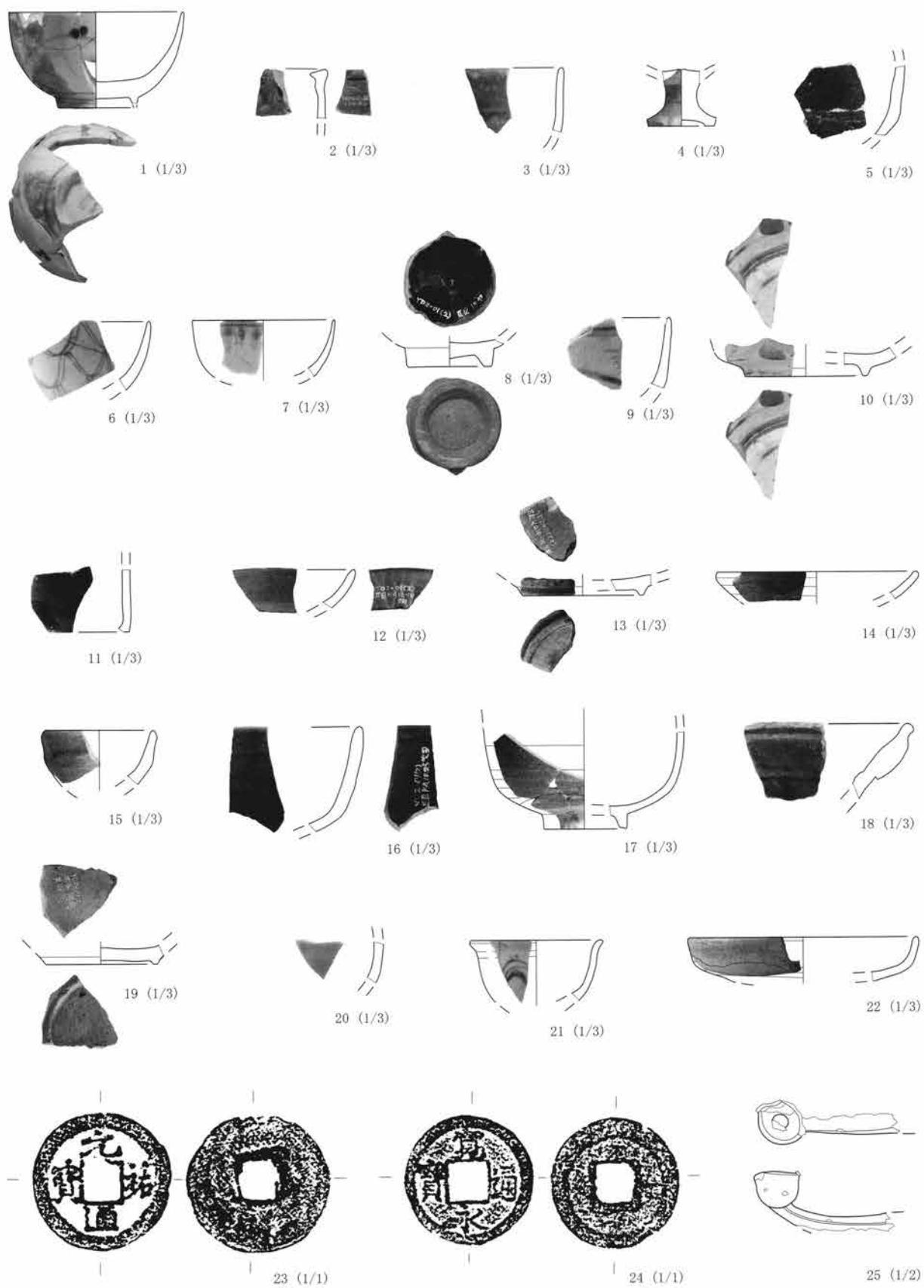
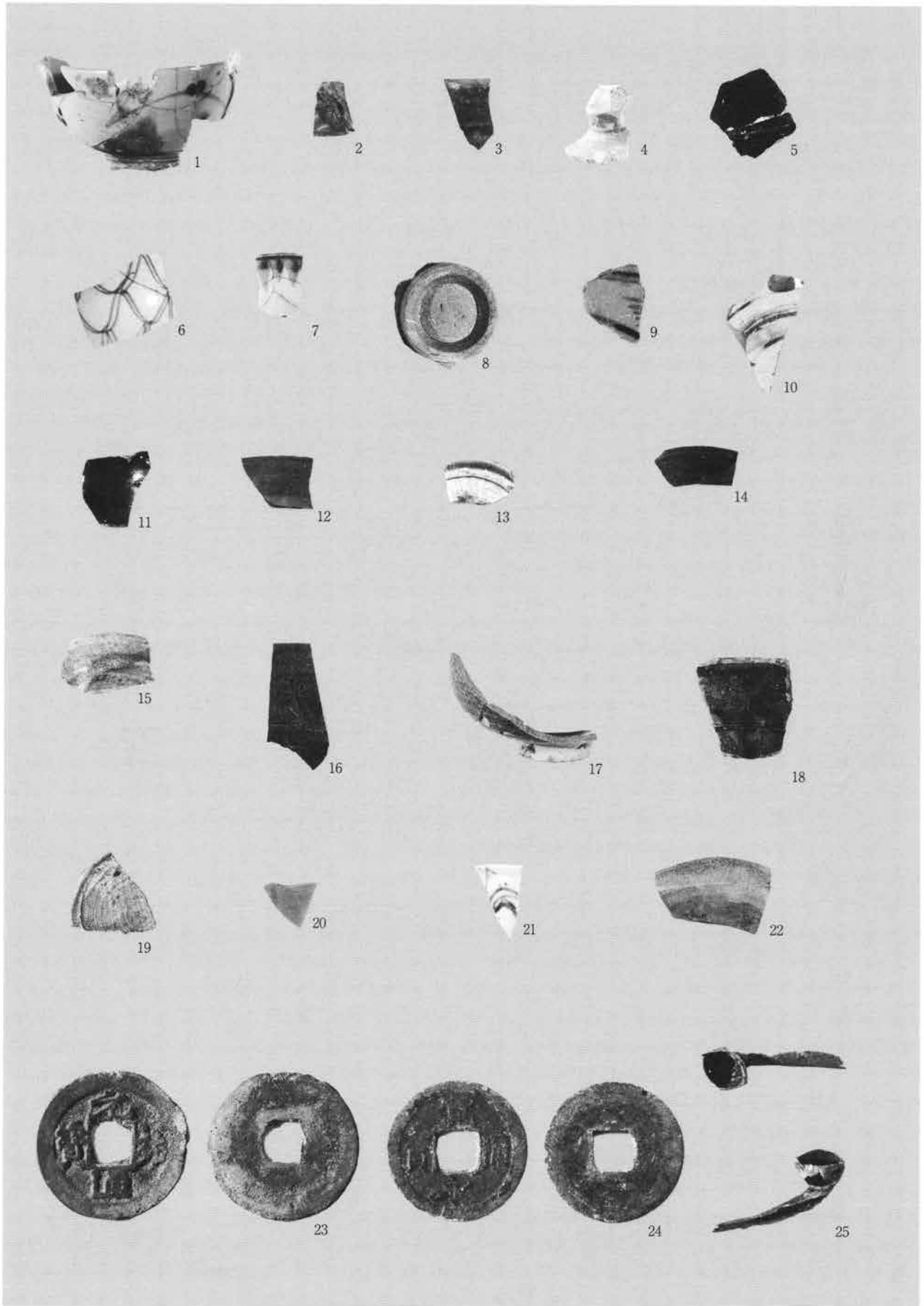


图 74 泥流面遺物 1 ~ 25



泥流面遺物 1 ~ 25

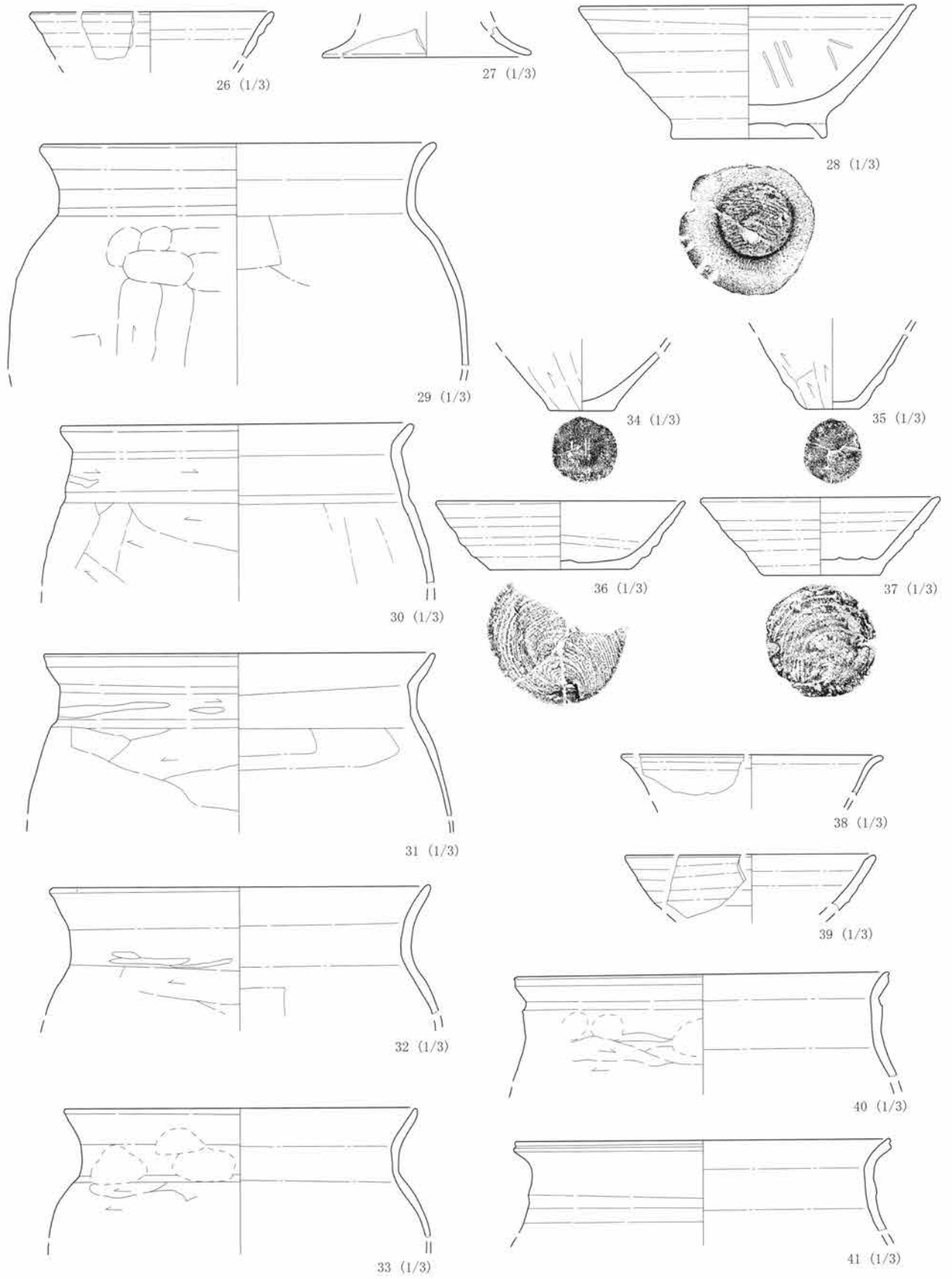
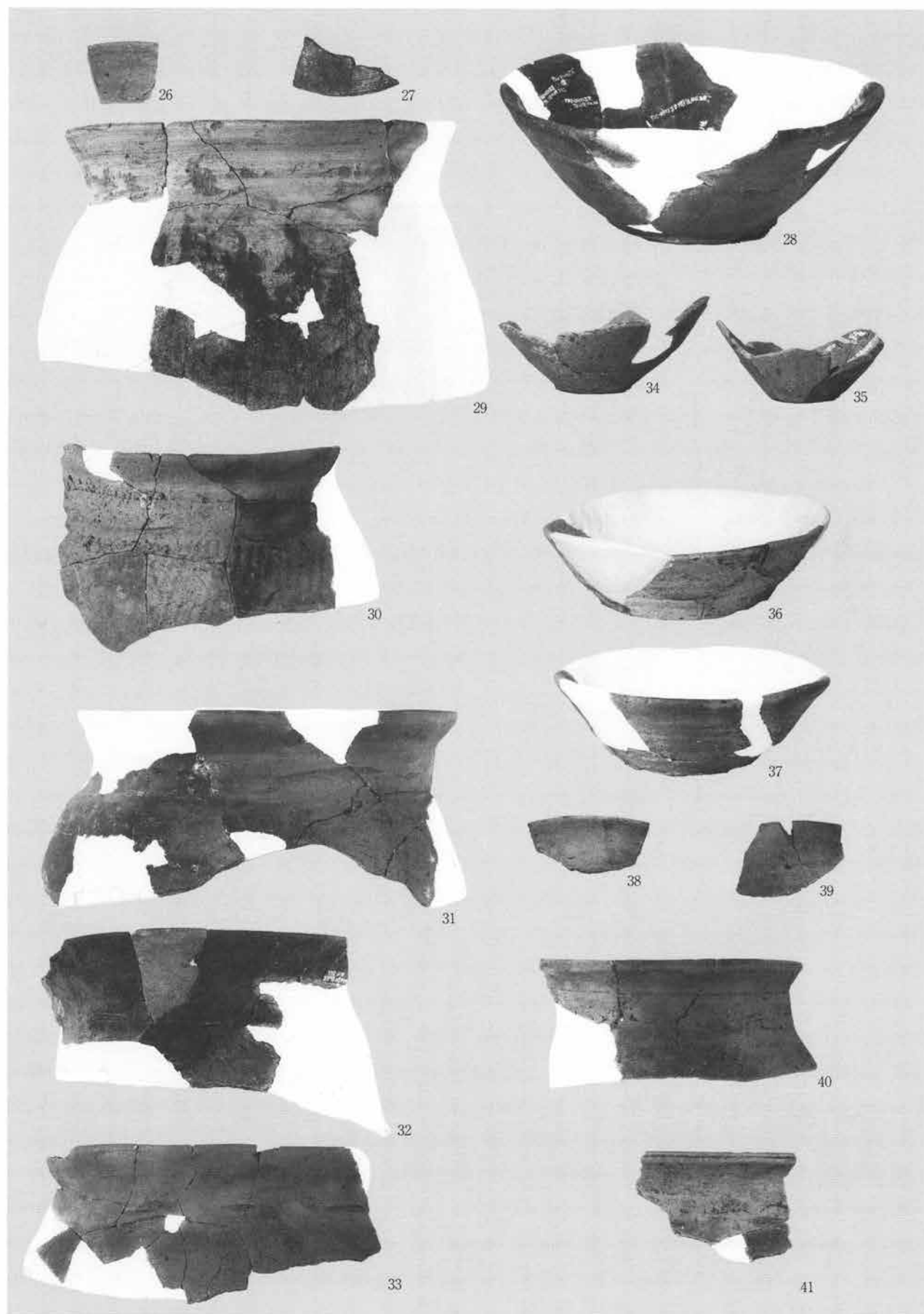
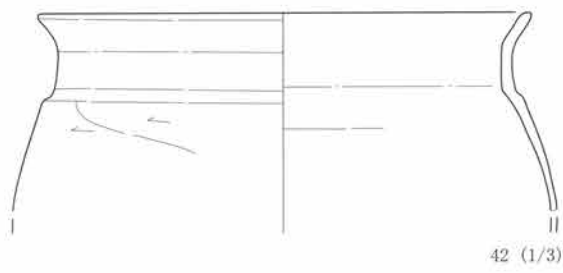


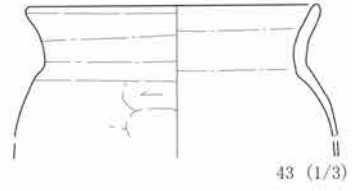
图 75 第2面遺物 26~41



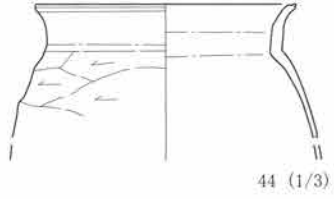
第2面遺物 26 ~ 41



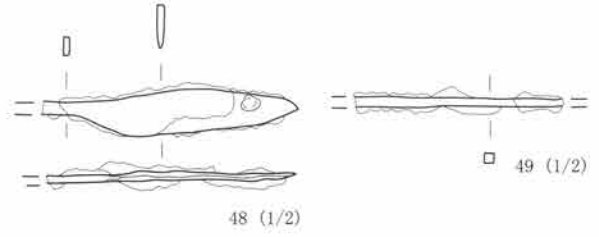
42 (1/3)



43 (1/3)

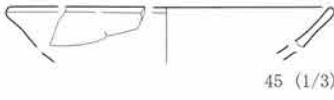


44 (1/3)

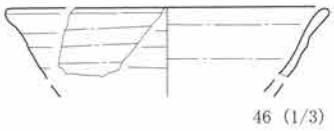


48 (1/2)

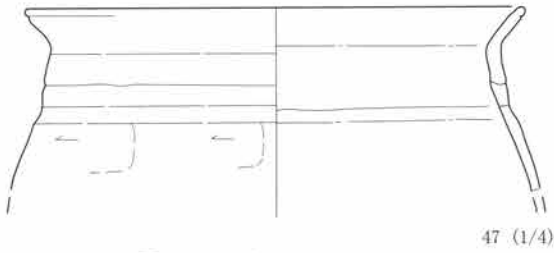
49 (1/2)



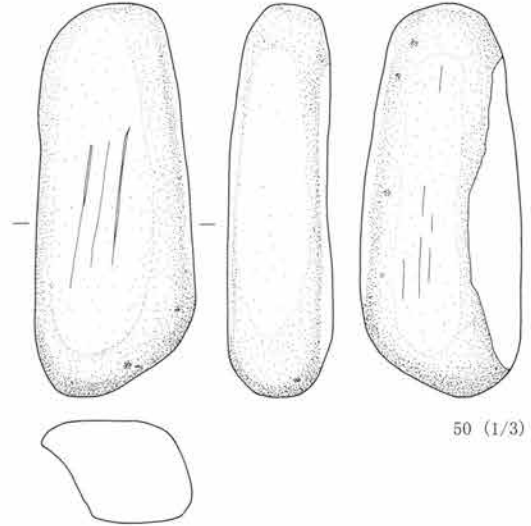
45 (1/3)



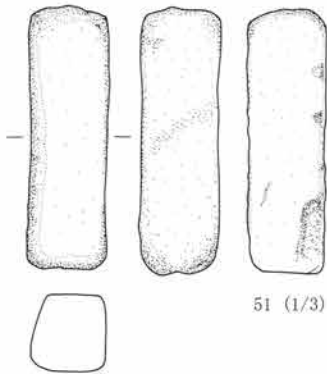
46 (1/3)



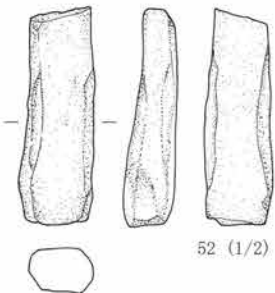
47 (1/4)



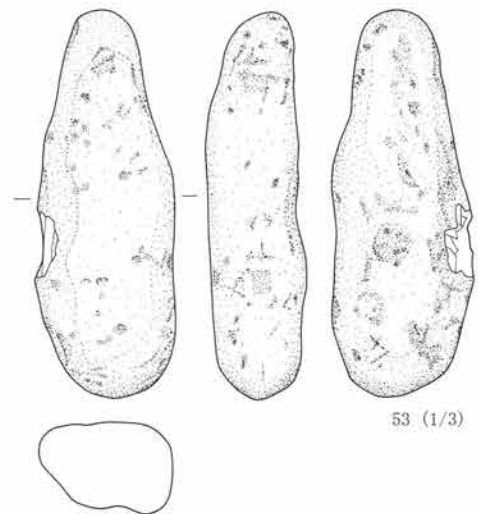
50 (1/3)



51 (1/3)

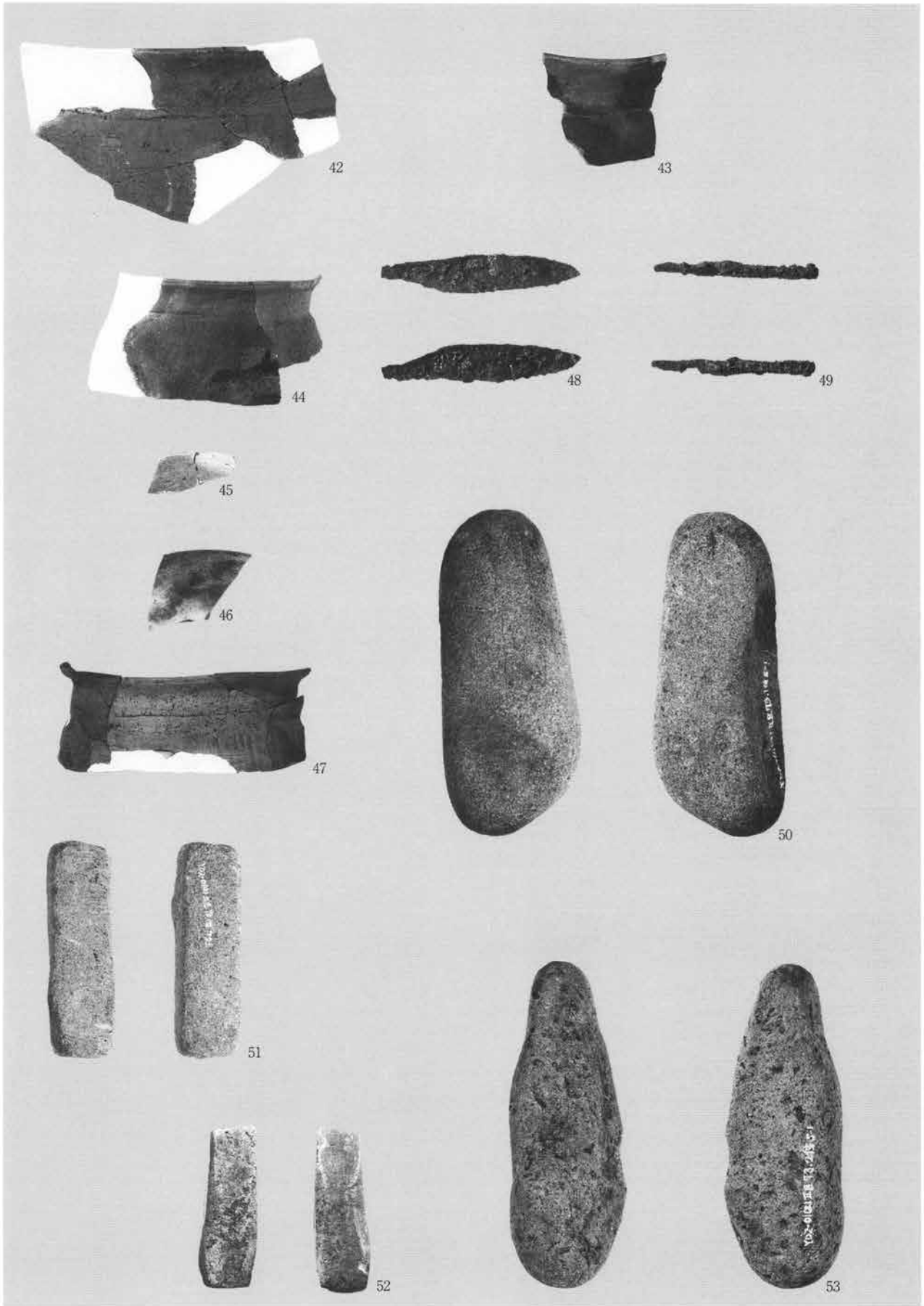


52 (1/2)



53 (1/3)

图 76 第2面遺物 42 ~ 53



第2面遺物 42 ~ 53

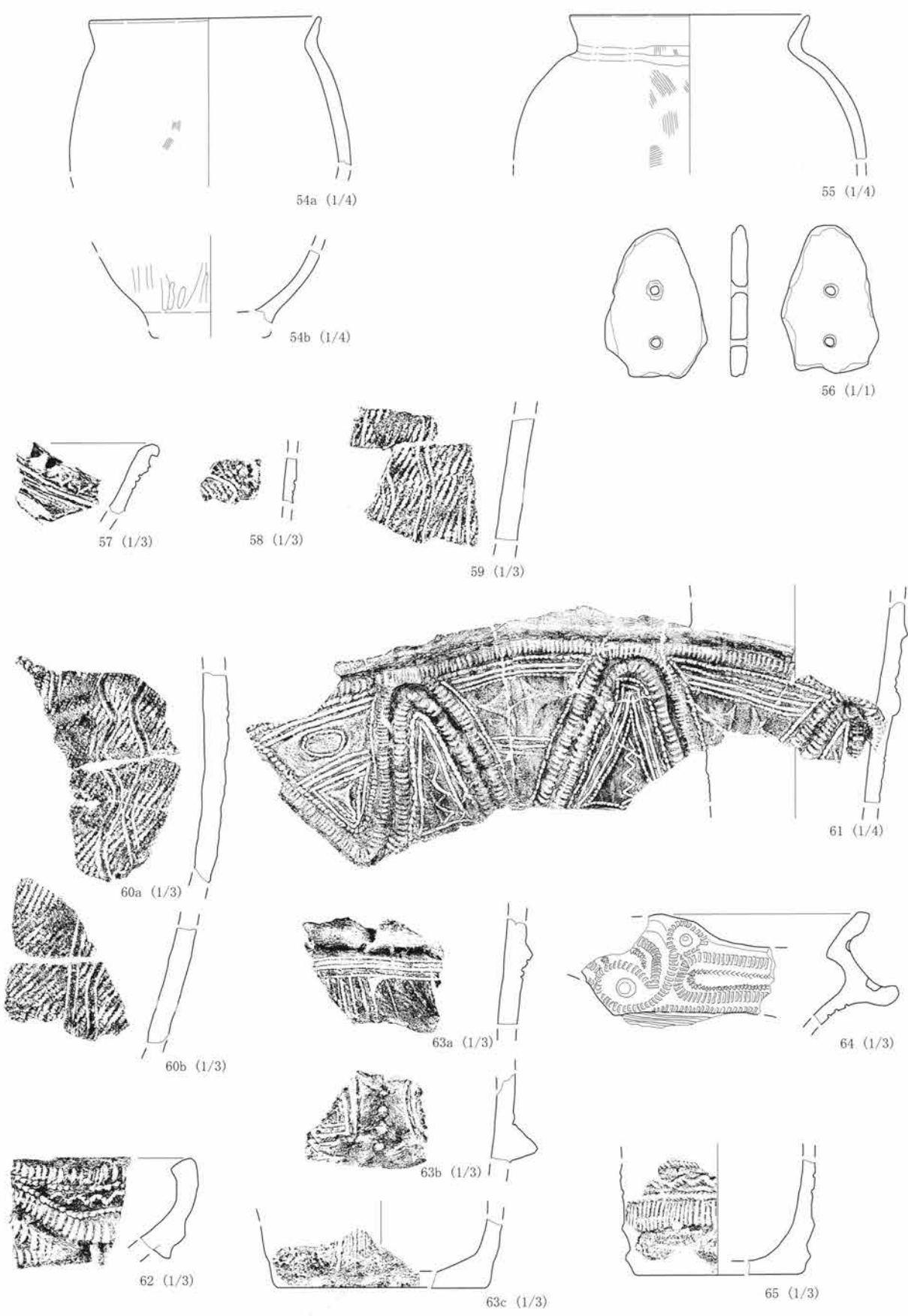
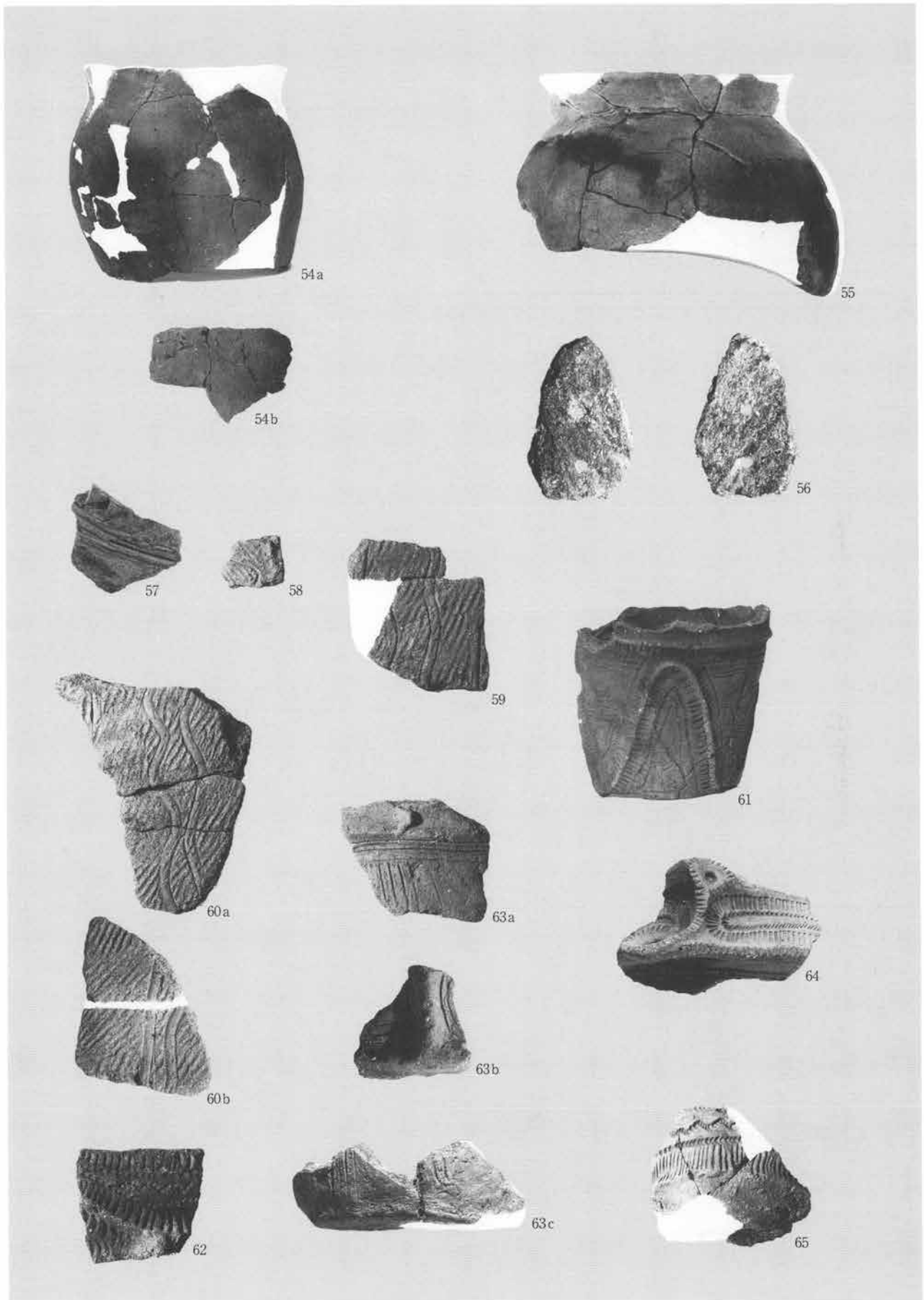


图 77 第2面遺物 54 ~ 65



第2面遺物 54 ~ 65

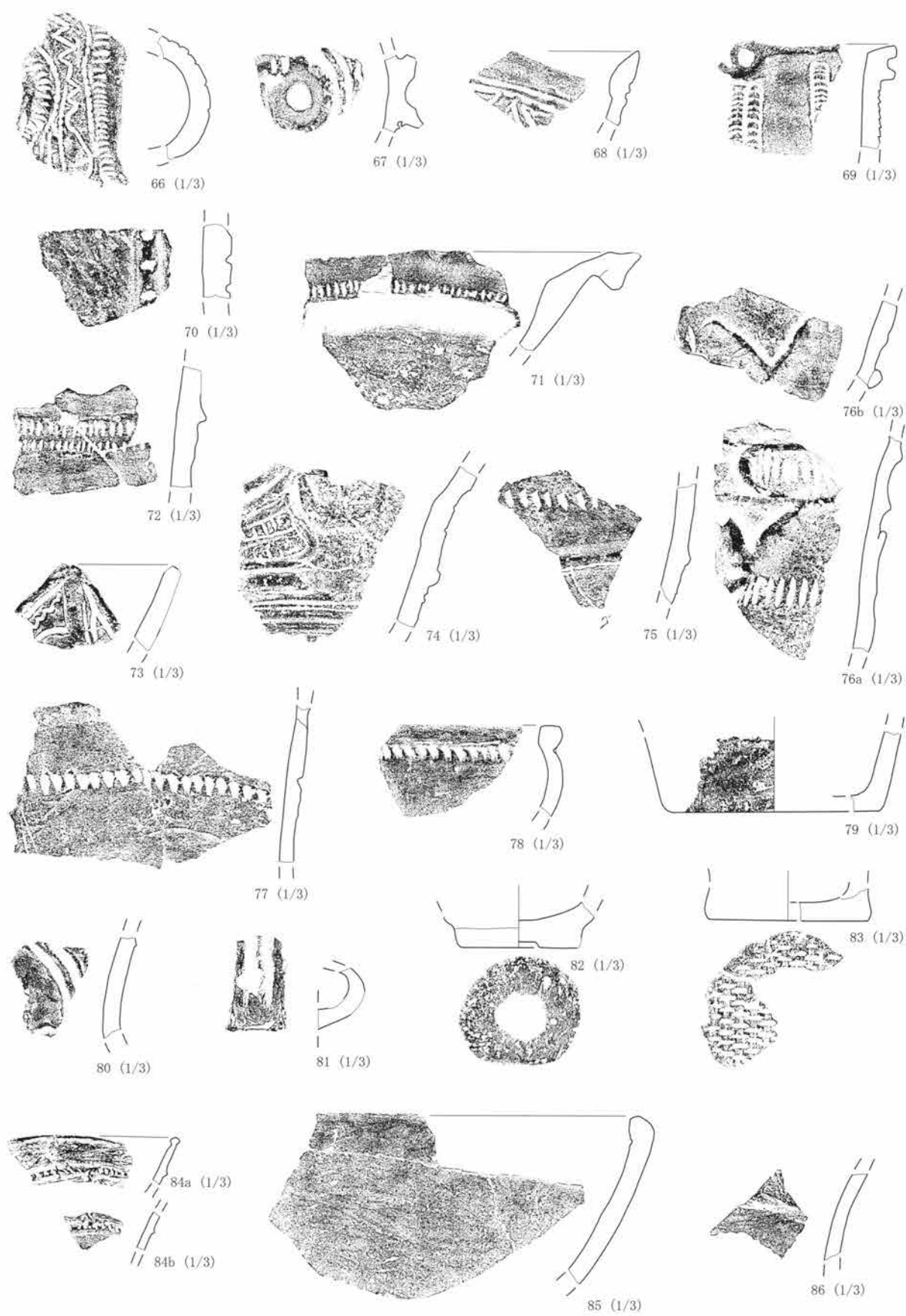
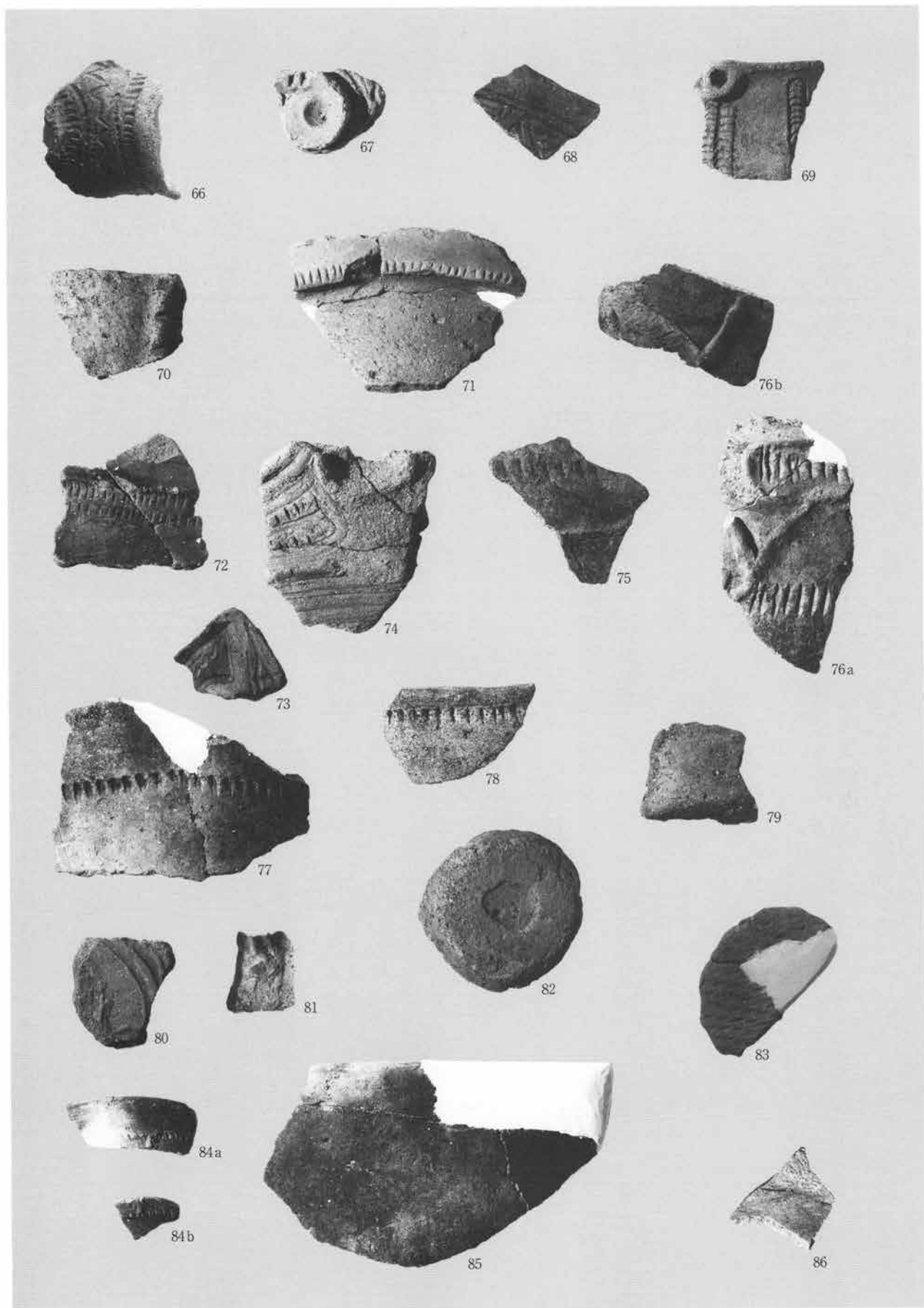


图 78 第2面遺物 66 ~ 86



第2面遺物 66 ~ 86

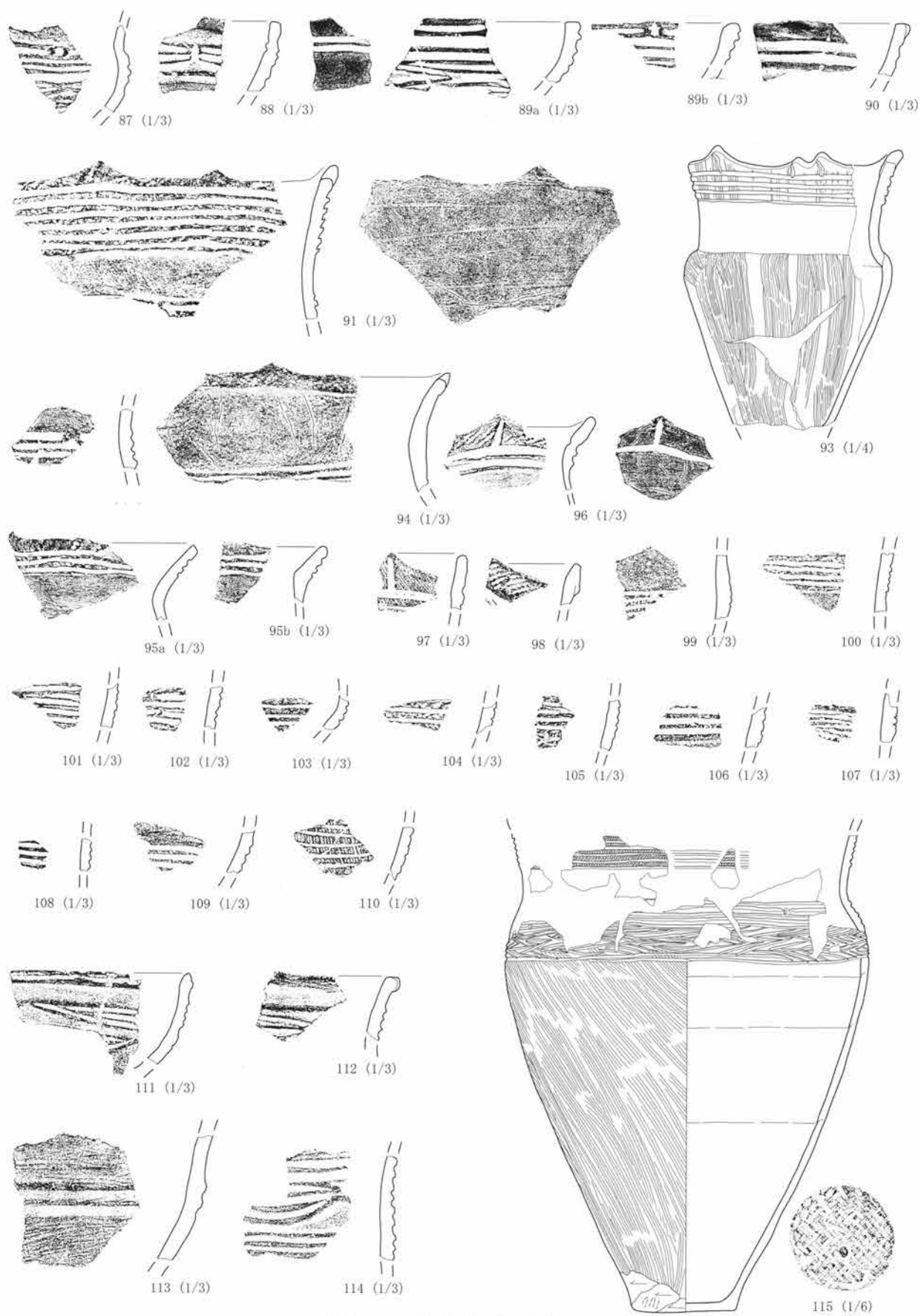
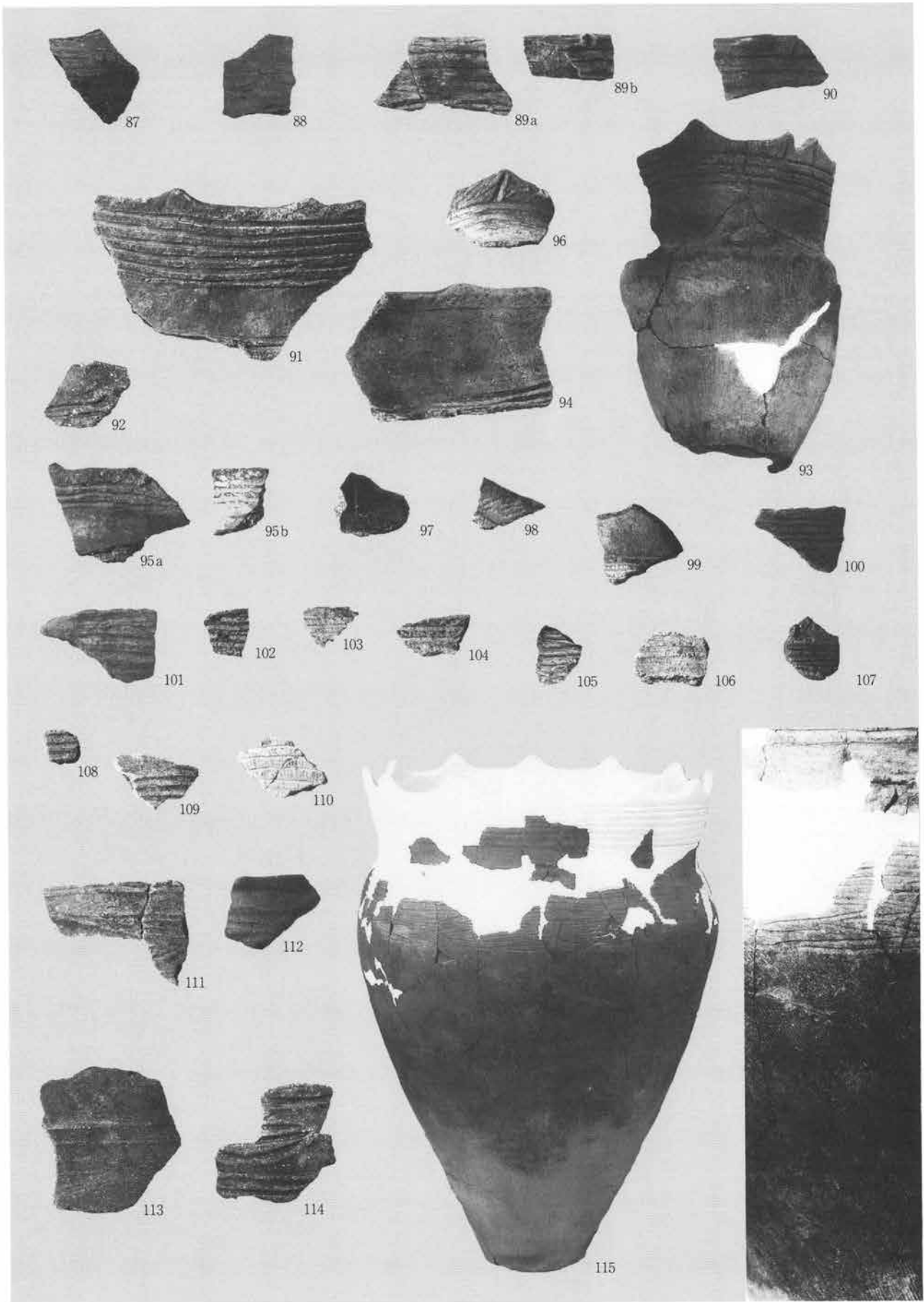


图 79 第2面遺物 87~115



第2面遺物 87 ~ 115

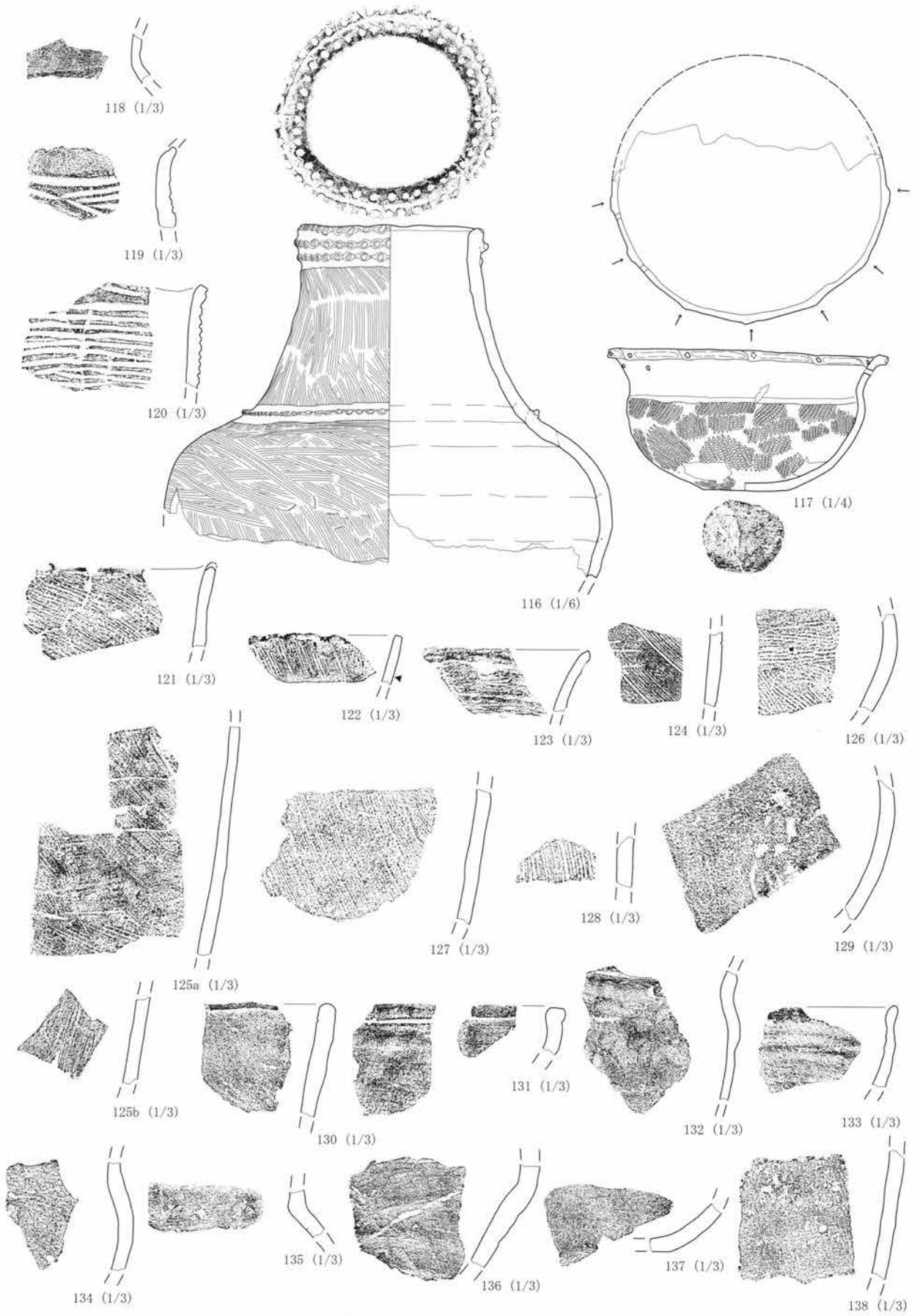
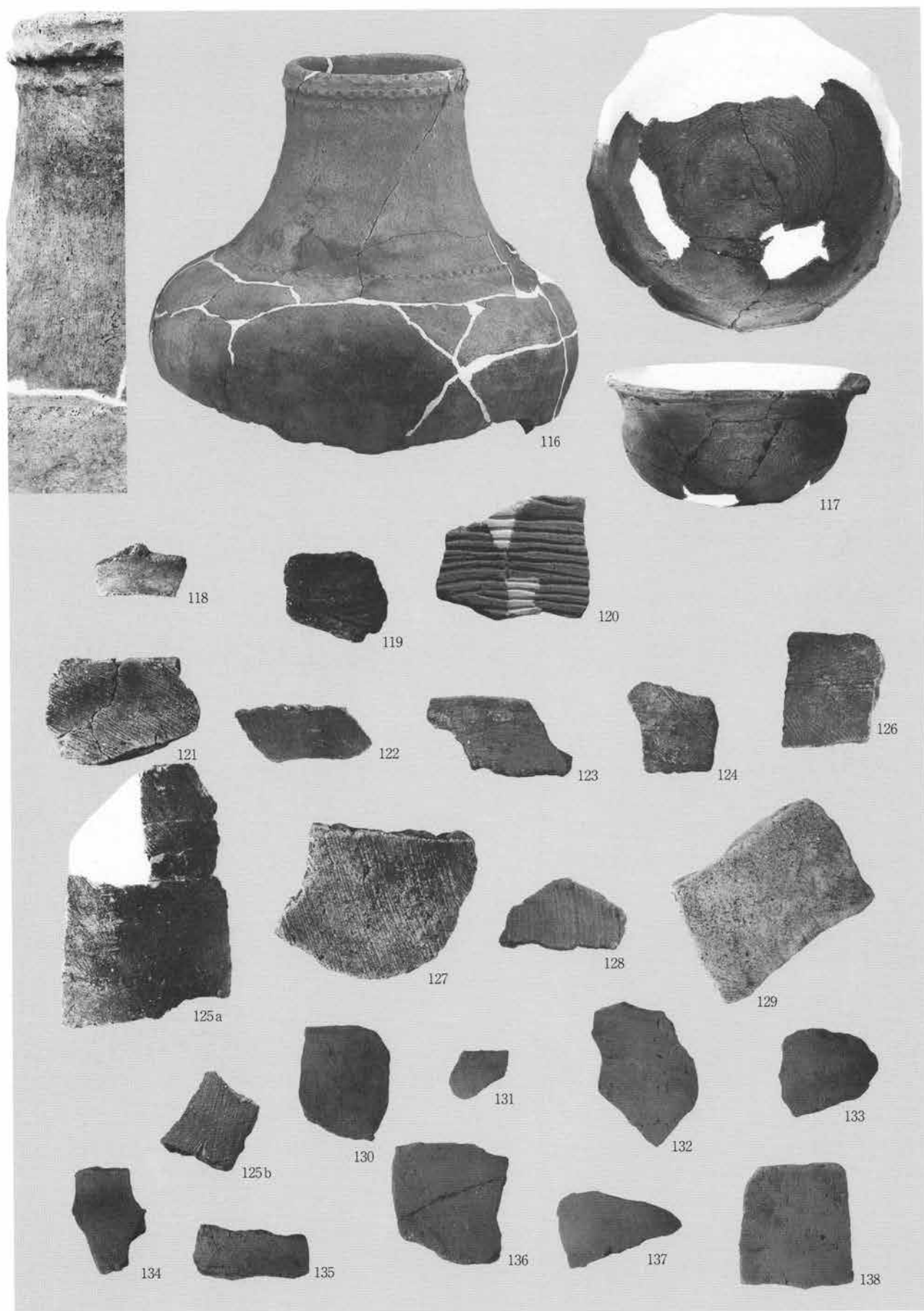


图 80 第2面遺物 116~138



第2面遺物 116 ~ 138

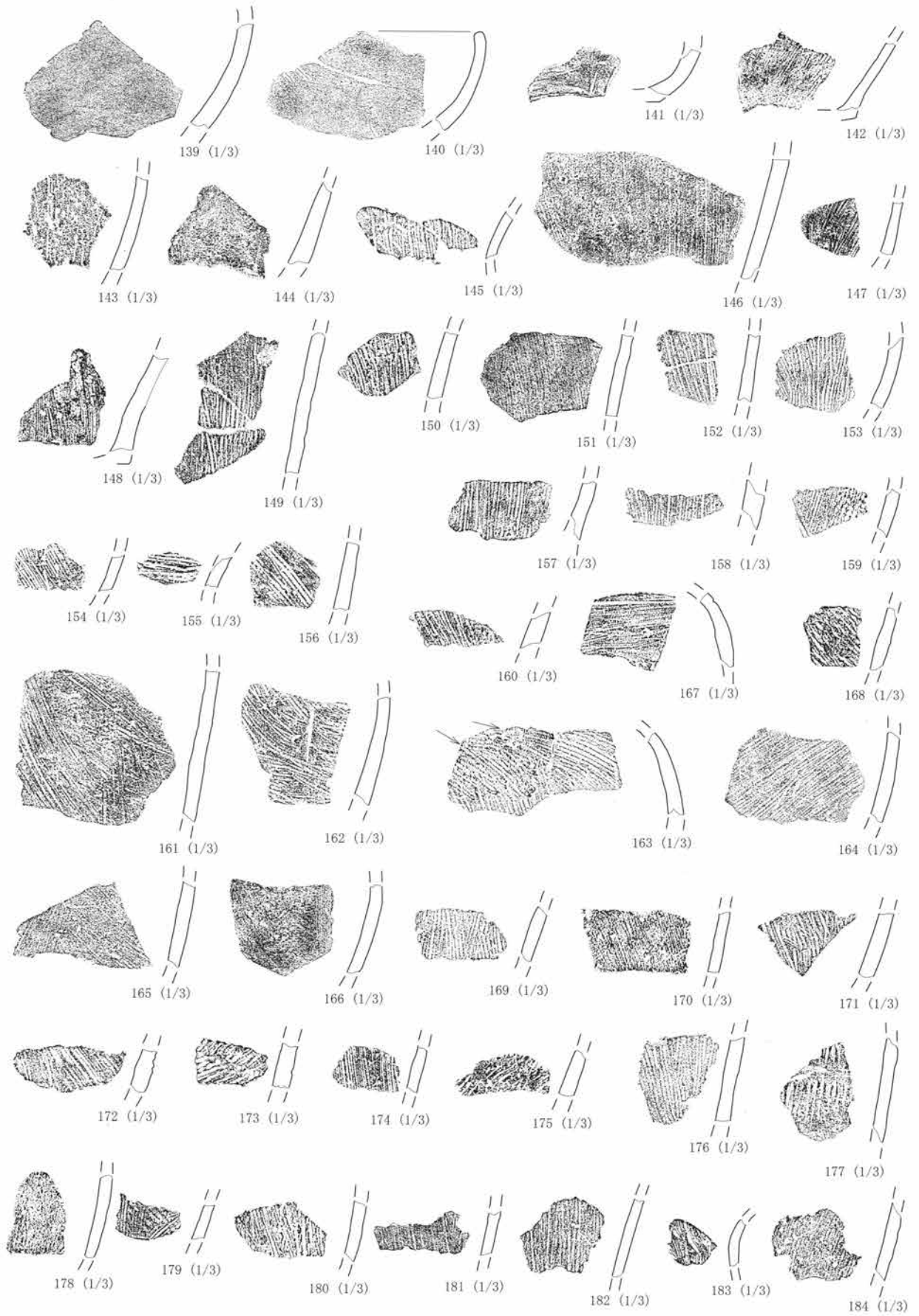
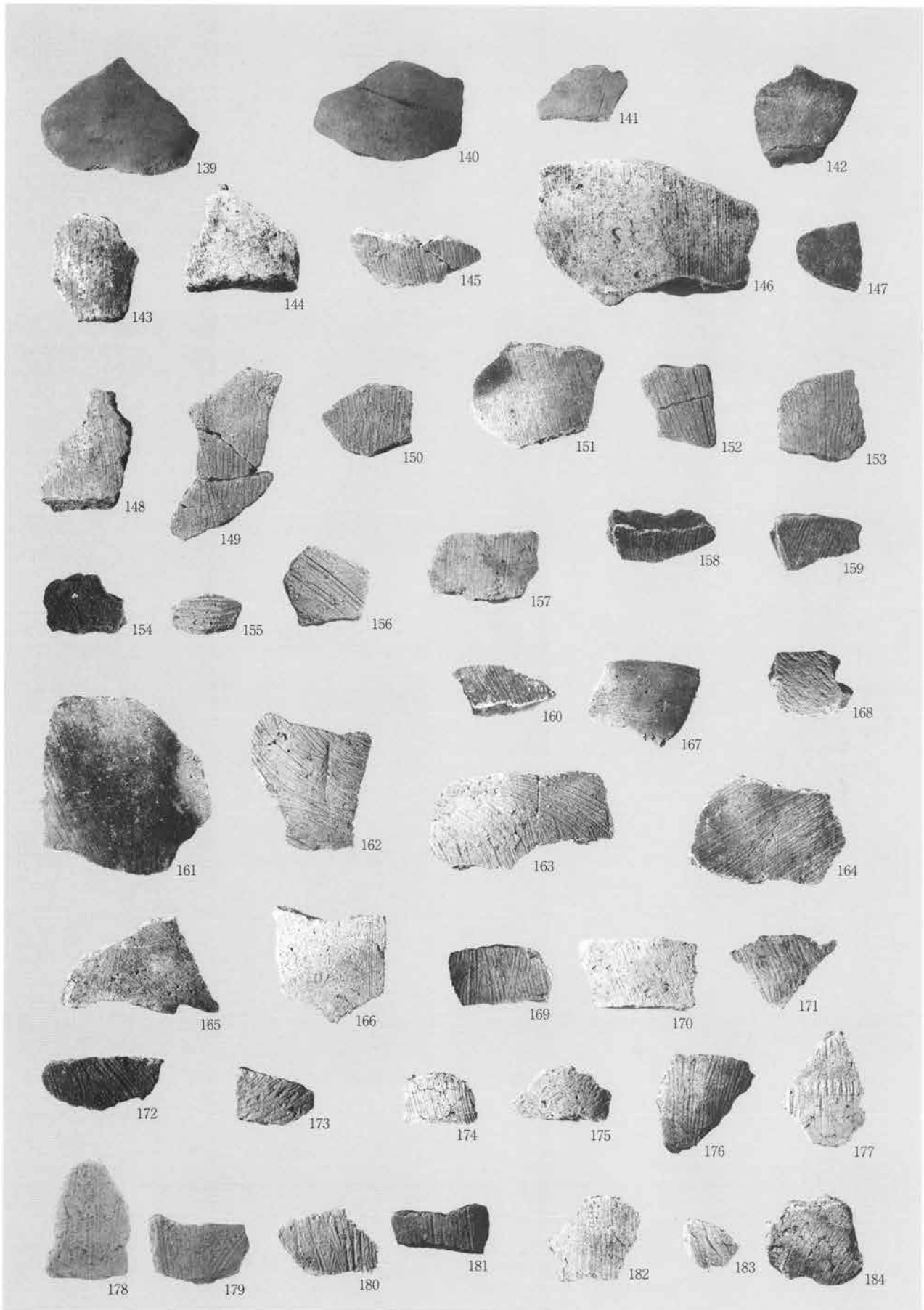


图 81 第2面遺物 139~184



第2面遺物 139 ~ 184

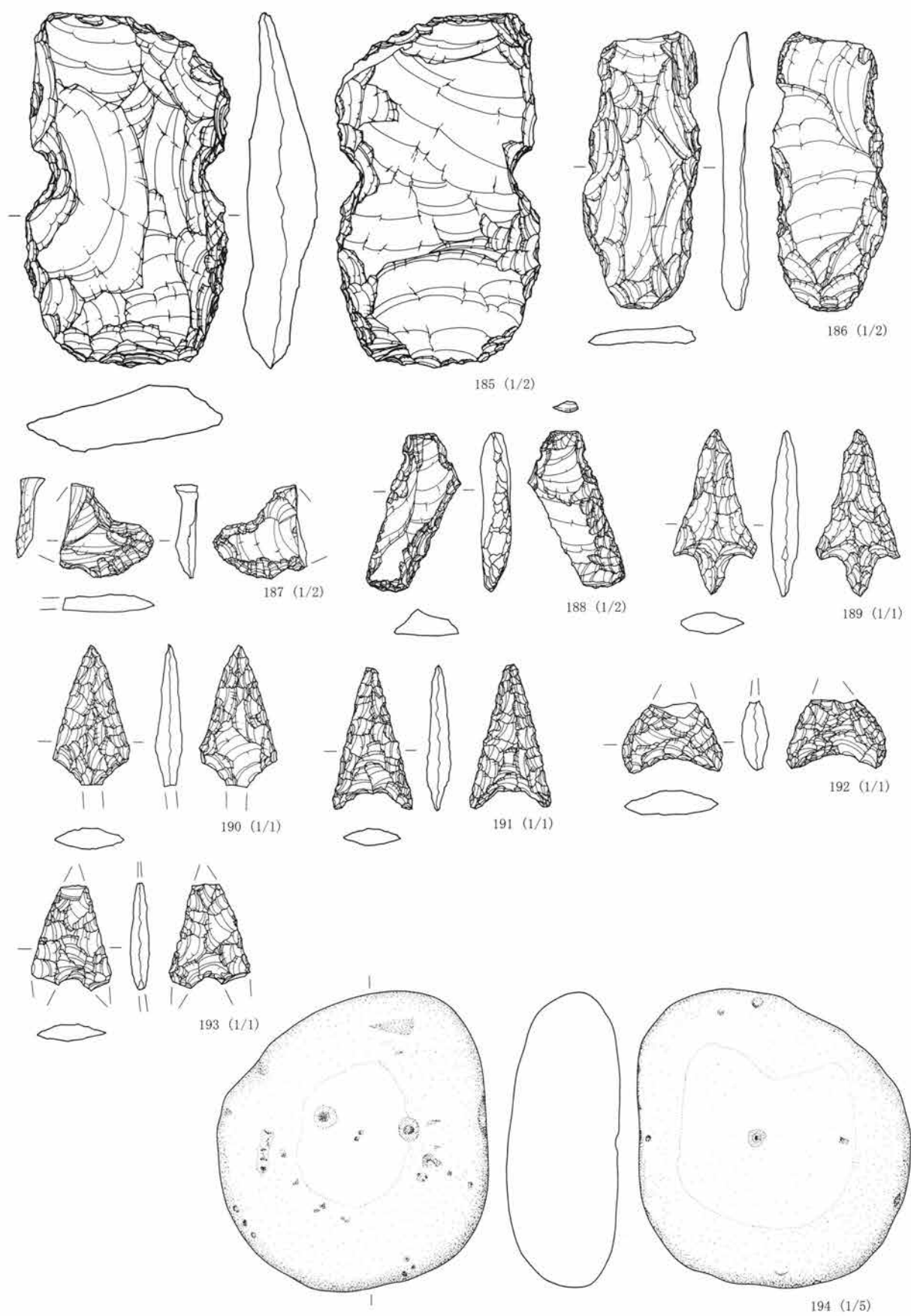
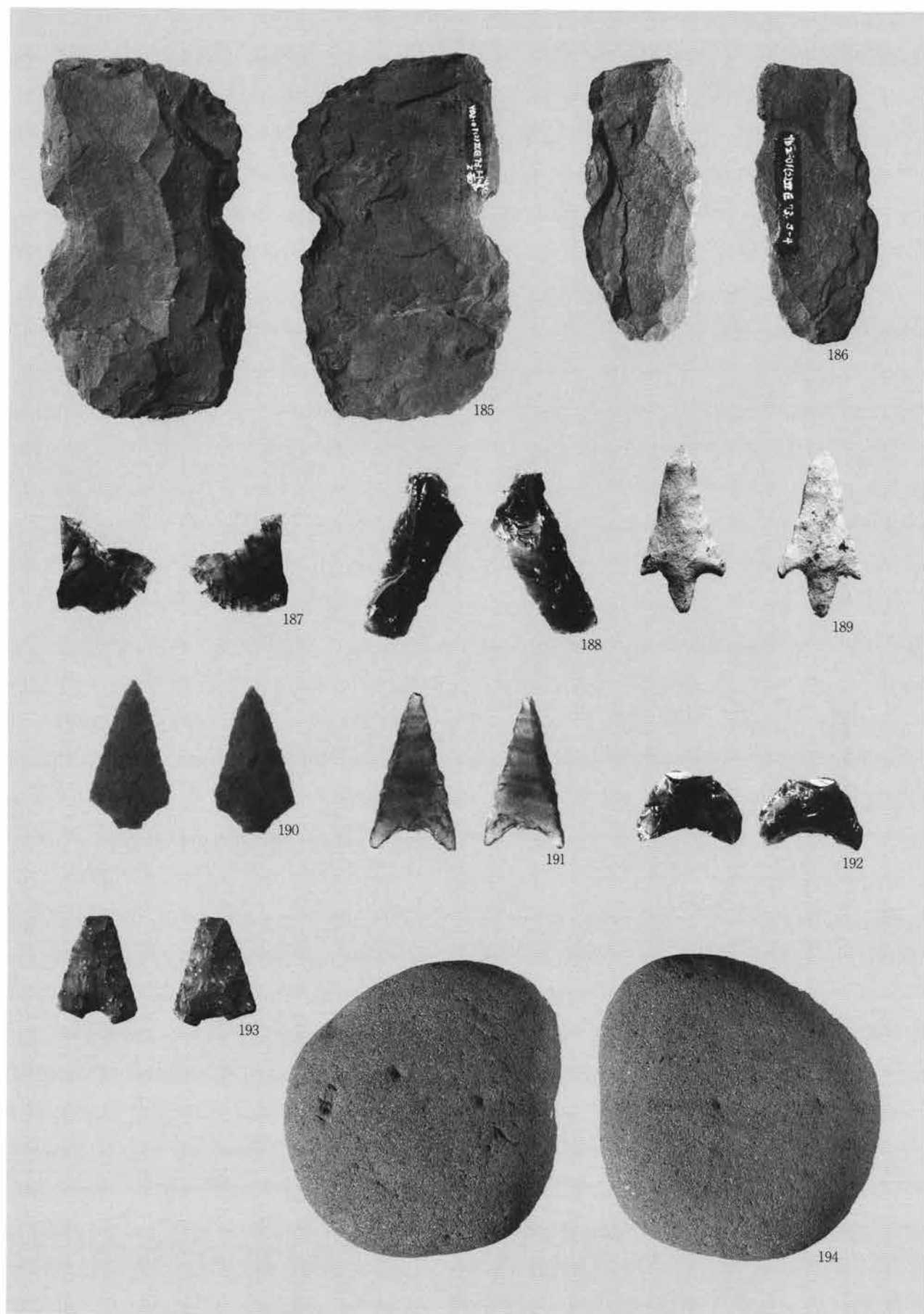


图 82 第 2 面遺物 185 ~ 194



第2面遺物 185 ~ 194

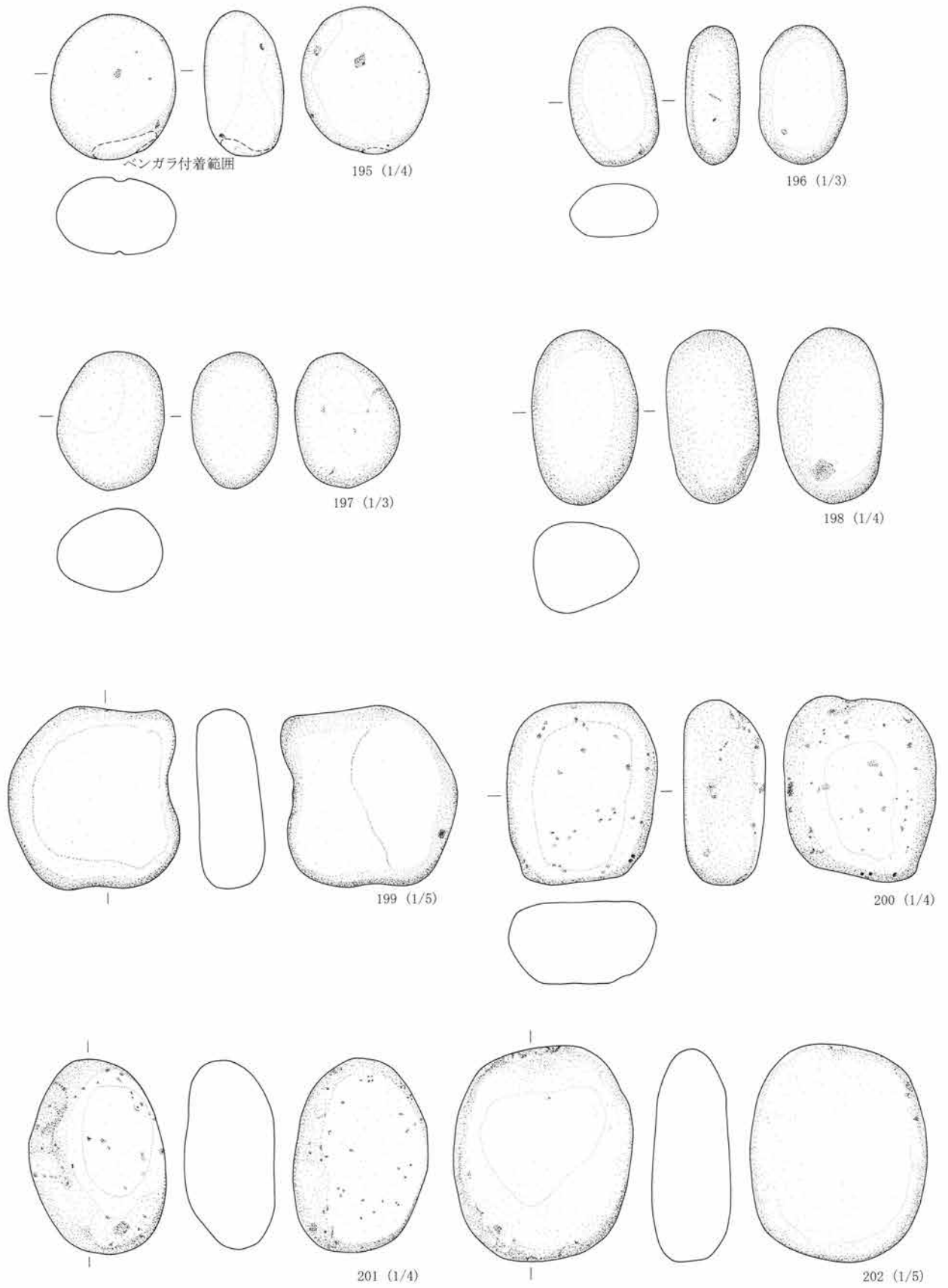
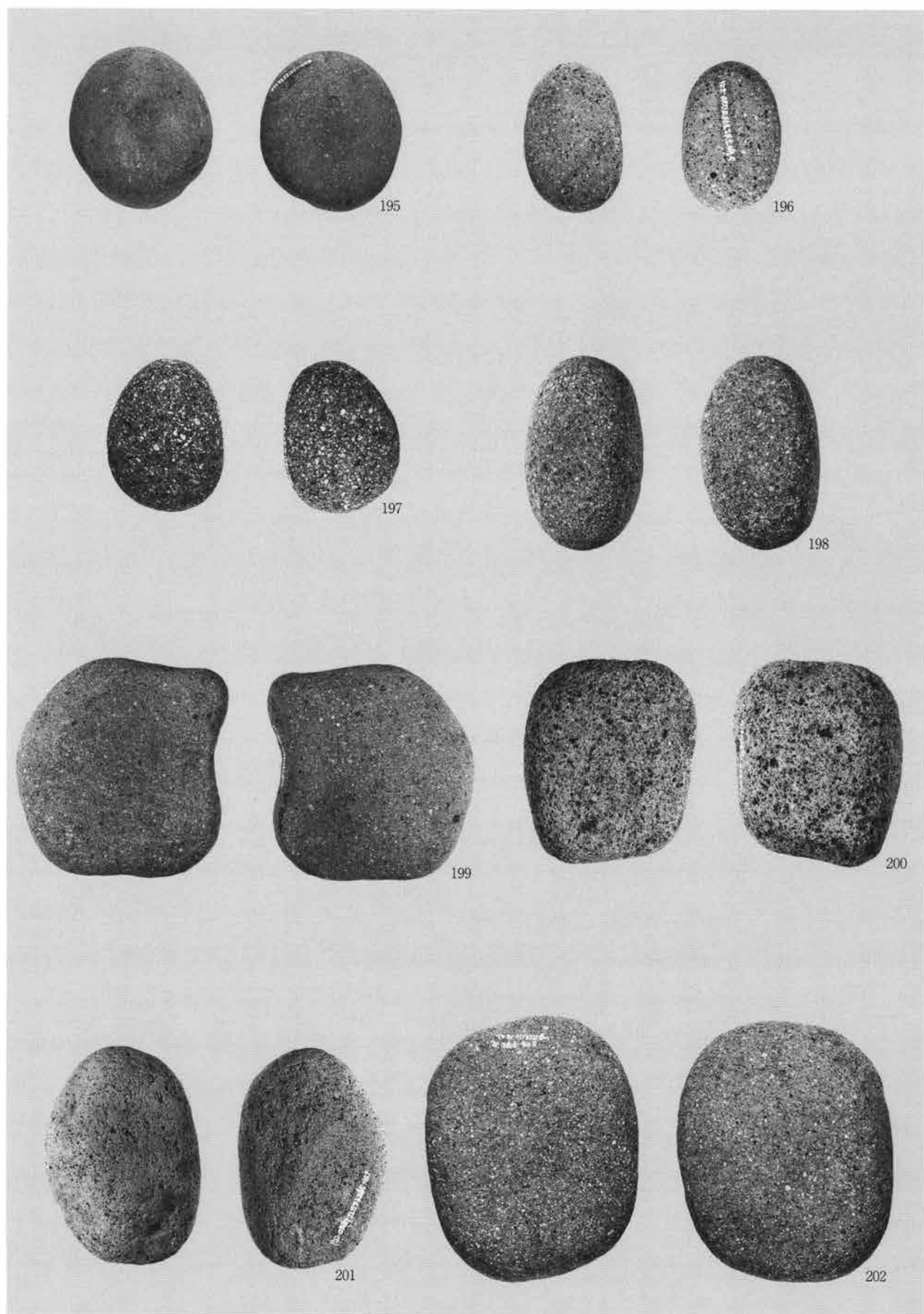


図 83 第2面遺物 195 ~ 202



第2面遺物 195 ~ 202

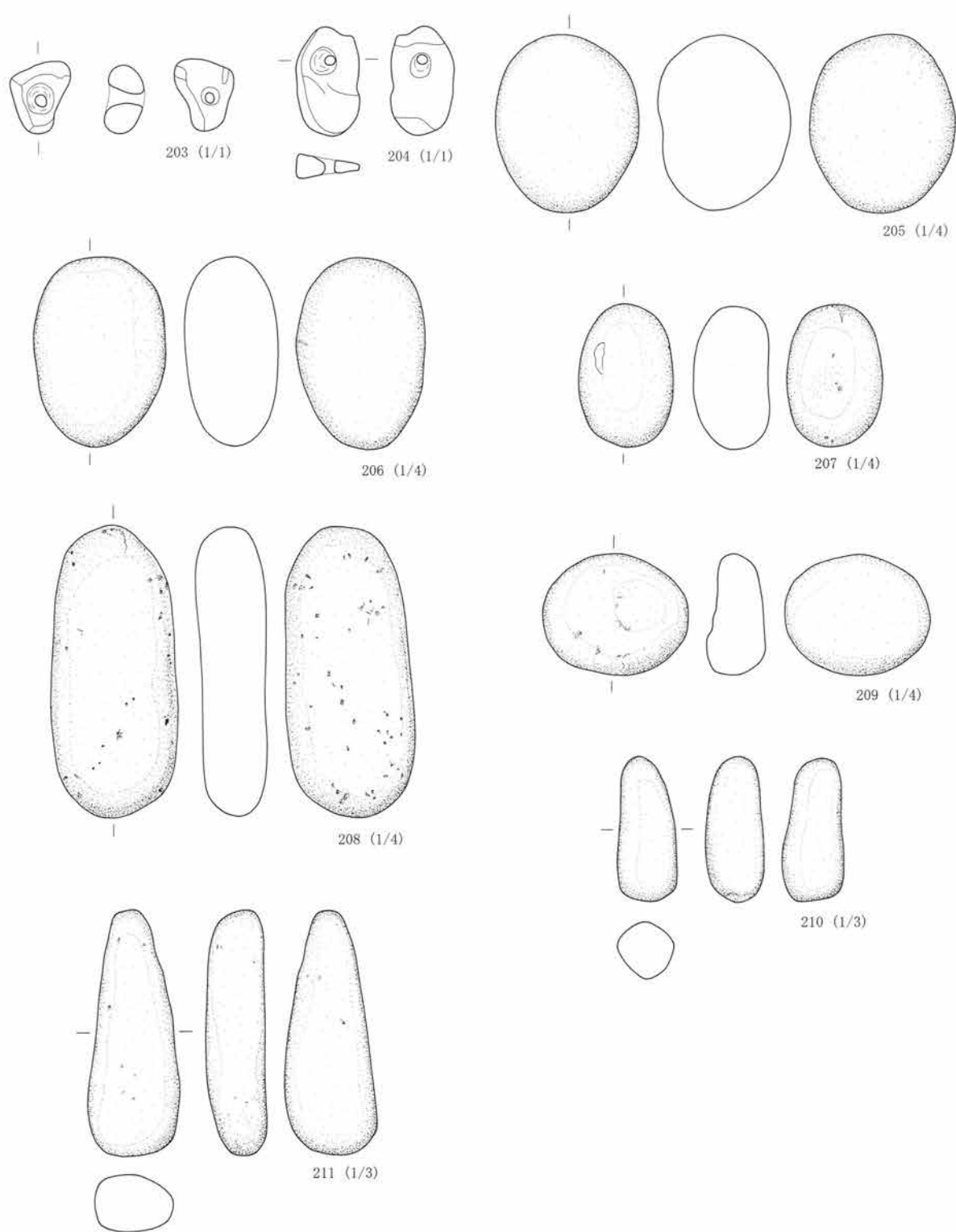
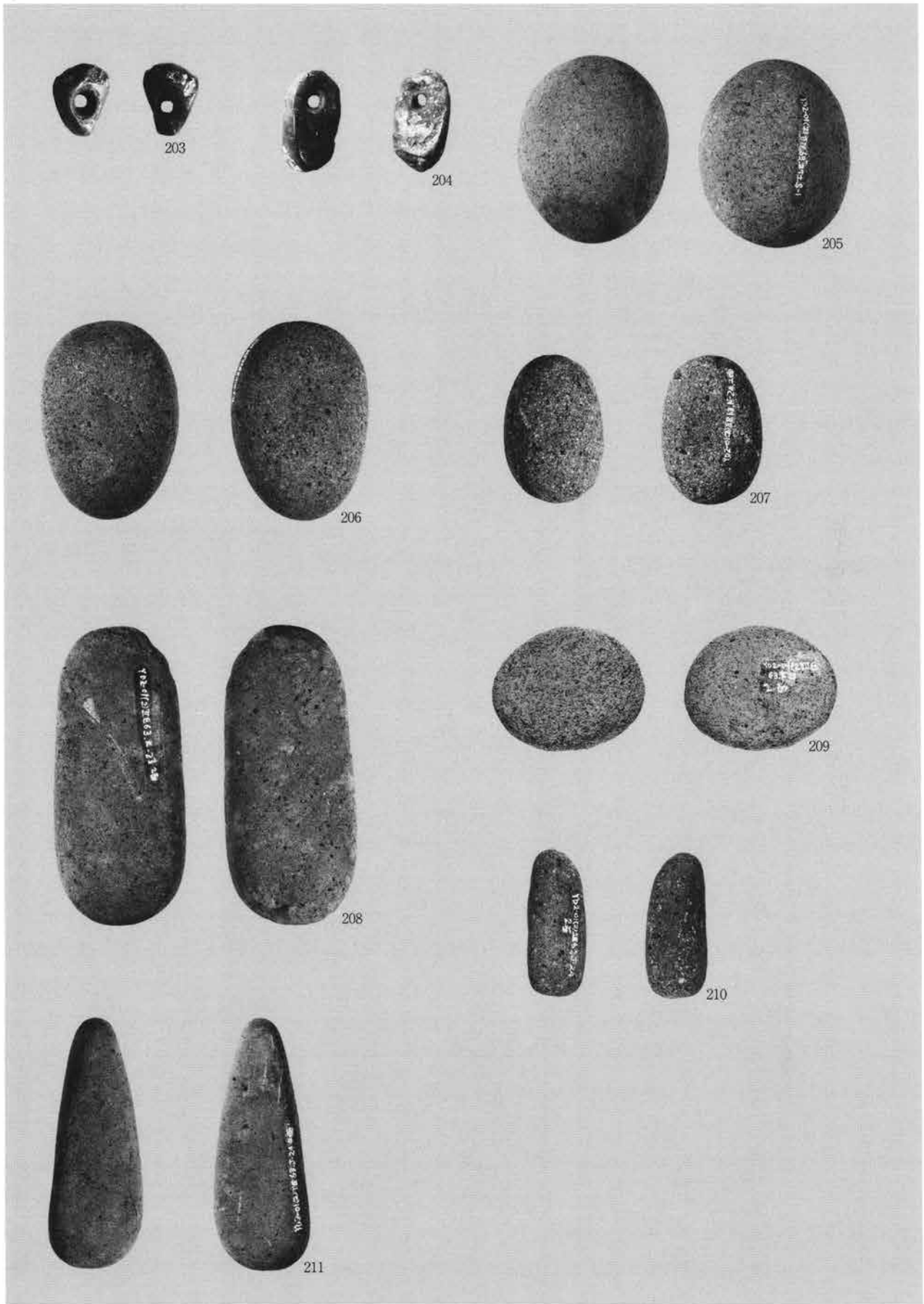


图 84 第2面遺物 203 ~ 211



第2面遺物 203～211



写真1. I区調査区全景 東→



写真2. II区調査区全景 上が西→



写真1. 1区KA1号畑 西→



写真2. 1区KA1号平坦面 西→

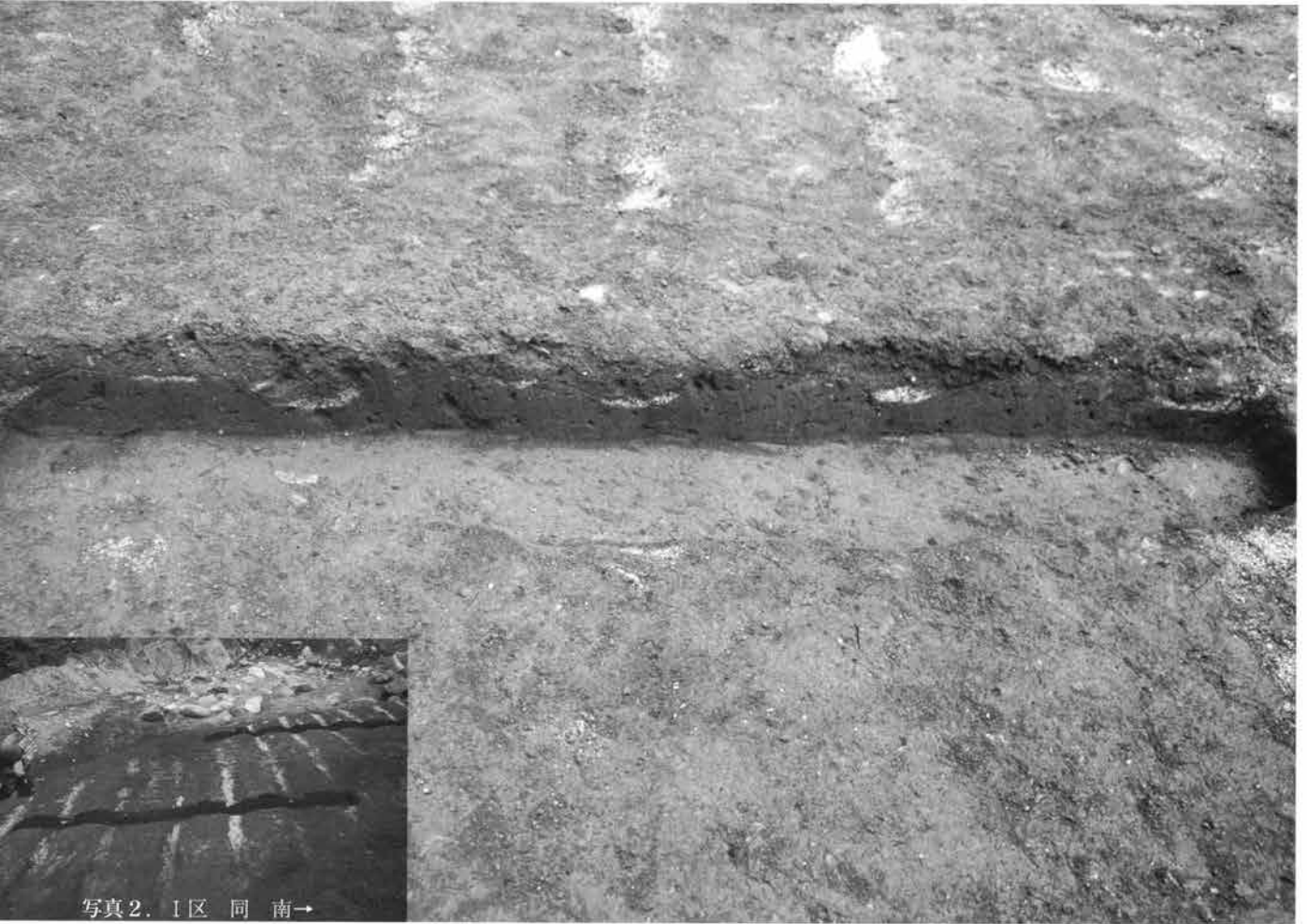


写真1. I区KA1号畑畝断面 a-a' 南→

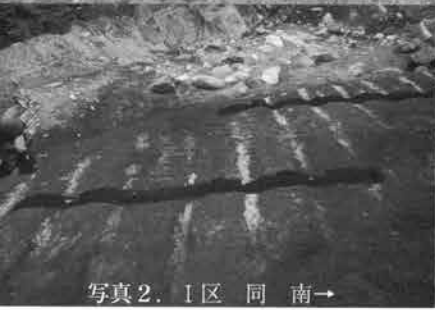


写真2. I区 同 南→



写真3. I区 同 畝断面 a-a' As-A 灰検出状況 南→



写真4. I区 同 南→



写真1. I区KA 2-1号畑 西→



写真2. I区KA 2-3・KA 2-4号畑 西→



写真1. I区KA 2-2号畑平坦面の痕跡? (写真中央) 西→

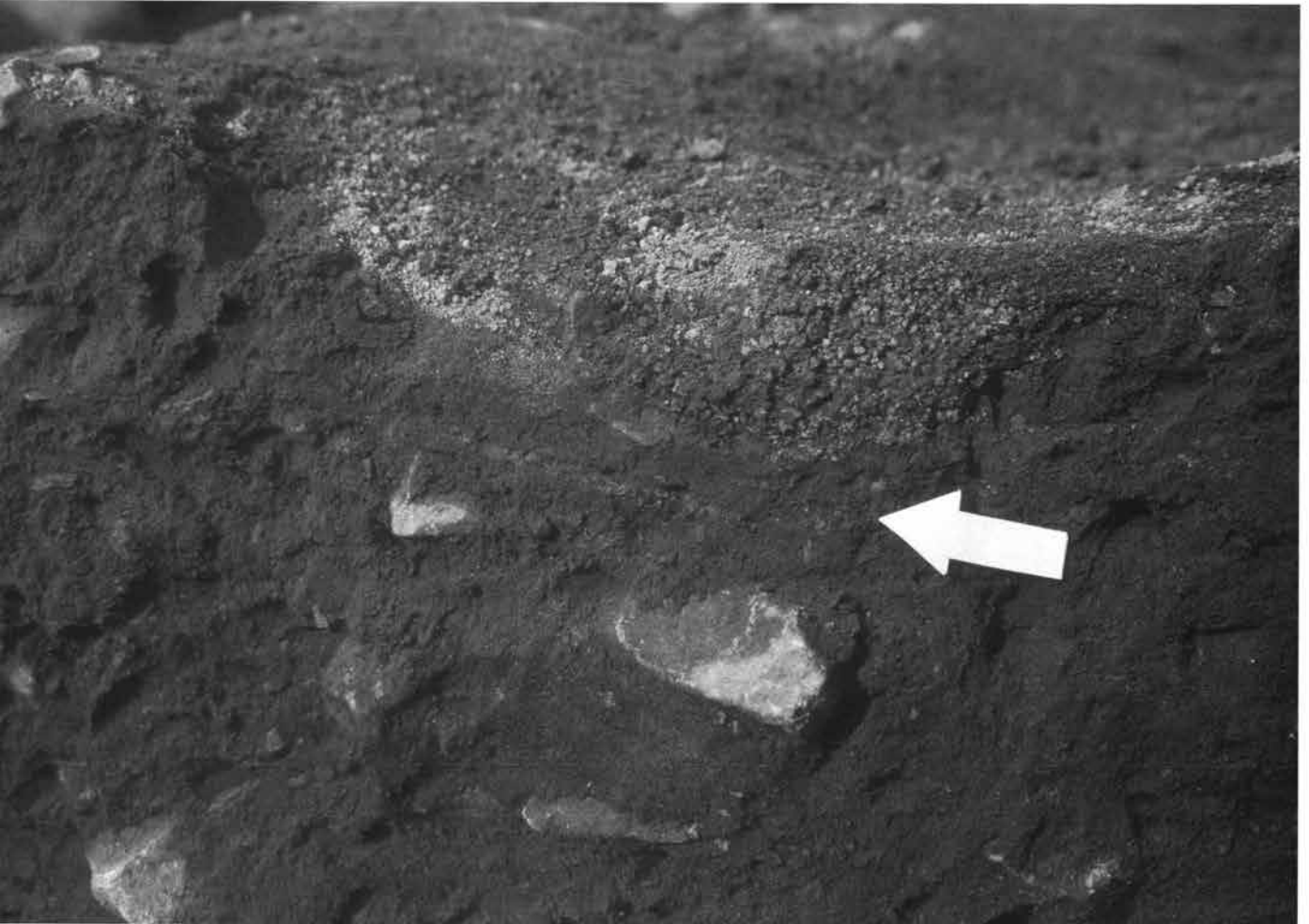


写真2. I区As-A灰層(天明三年新暦6月26日降下) 西→



写真1. I区KA 2-4号畑 西→



写真2. I区KA 6号畑 北→



写真3. I区KA 4号畑 断面 西→



写真4. I区KA 8-2号平坦面 北東→



写真5. I区KA 8-1号平坦面 南東→



写真1. II区KA9-3号平坦面 北→



写真2. II区KA10-2号平坦面 北→



写真3. II区KA9-5号畑断面 a-a' 西→



写真4. II区KA10-15号畑断面 a-a' 西→

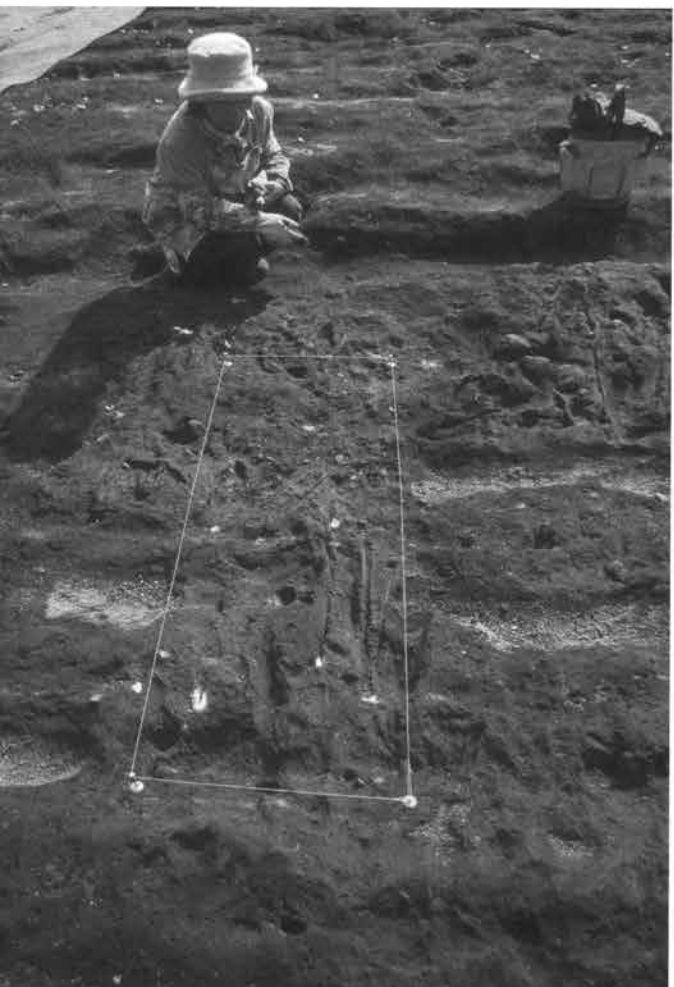


写真5. II区KA10-2号畑 作物痕跡倒伏方向 北→



写真6. II区 同 株痕近接 北→



写真7. II区KA10-5号畑付近 泥流中の木材 北→



写真1. II区KA10-21号畑断面 a-a' 東→



写真2. II区KA10-23号畑断面 a-a' 東→



写真3. II区KA11-5号平坦面 北→



写真4. II区 同 西→



写真1. I区1号ヤックラ 北→



写真2. I区2号ヤックラ 南→



写真3. I区3・4号ヤックラ 西→



写真4. I区4号ヤックラ 西→



写真5. I区5号ヤックラ 西→



写真1. I区5号ヤックラ(南部分) 南西→



写真2. I区 同 (南端部)



写真3. I区 同 (55区N-16G付近) 北→



写真4. I区 同 断面A-A' 南西→



写真5. I区 同 (崩落前の状態) 北→



写真1. I区6号ヤックラ 北西→



写真2. I区7号ヤックラ断面 東→



写真3. I区 同 西→



写真4. I区 同 拡張トレンチ (KA 2-1号畑境確認) 北→



写真5. I区 同 拡張トレンチ (KA 2-2号畑境確認) 北西→



写真1. I区8号ヤックラ断面 北東→



写真2. I区9号ヤックラ 北→



写真3. I区10号ヤックラ 東→



写真4. I区11号ヤックラ 北東→



写真5. I区 同 断面A-A' 北→



写真1. I区14号ヤックラ 南→



写真2. II区15号ヤックラ断面 A - A' 北→



写真3. II区 同 北→

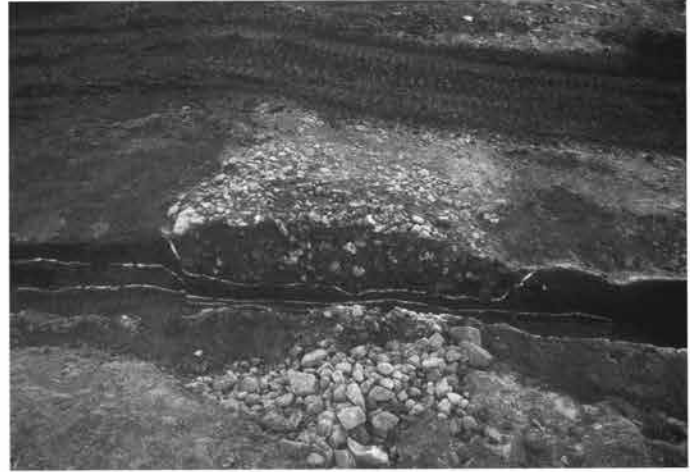


写真4. II区16号ヤックラ断面 A - A' 東→



写真5. II区 同 北→



写真1. II区17・18号ヤックラ 北→



写真2. II区 同 南→



写真3. II区 同 遺物出土状況 南→



写真4. II区19号ヤックラ 北→



写真5. II区 同 掘り方 北→



写真1. I区2号道 西→



写真2. I区1号道 北→



写真3. I区4号道調査前 東→



写真4. I区 同 断面A-A' 南→



写真1. I区4号道 東→



写真2. I区 同 現況 東→



写真1. I区KA 2-4号畑泥流中の礫による攪乱状況 北→



写真2. I区KA 1号畑泥流中の礫 西→



写真3. I区KA 2-4号畑(泥流中の礫) 北西→



写真4. II区基本土層トレンチ東壁 西→

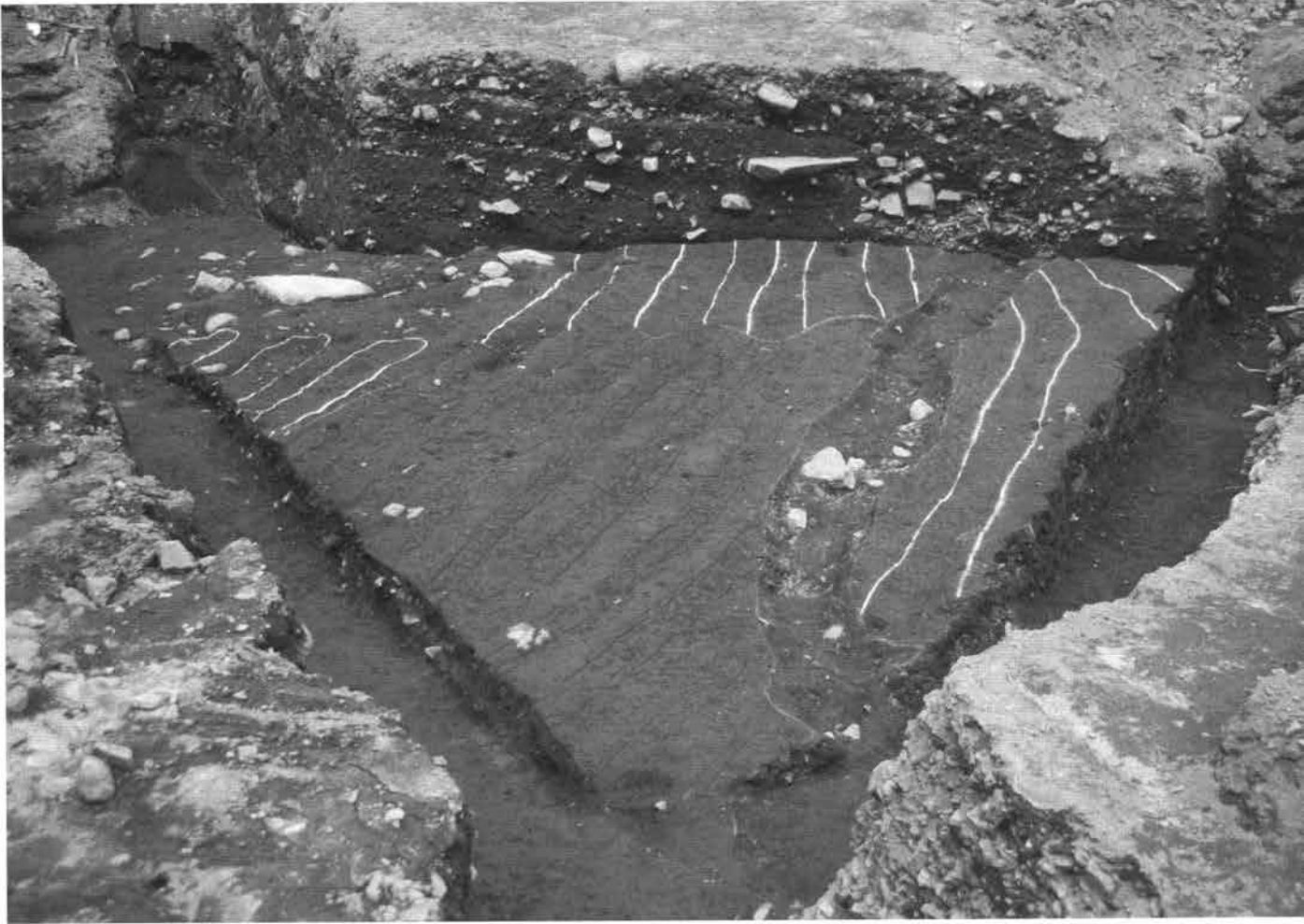


写真1. I区55区1号畠検出状況 南東→



写真2. I区同断面 南東→



写真1. I区55区1号畠検出状況 南西→

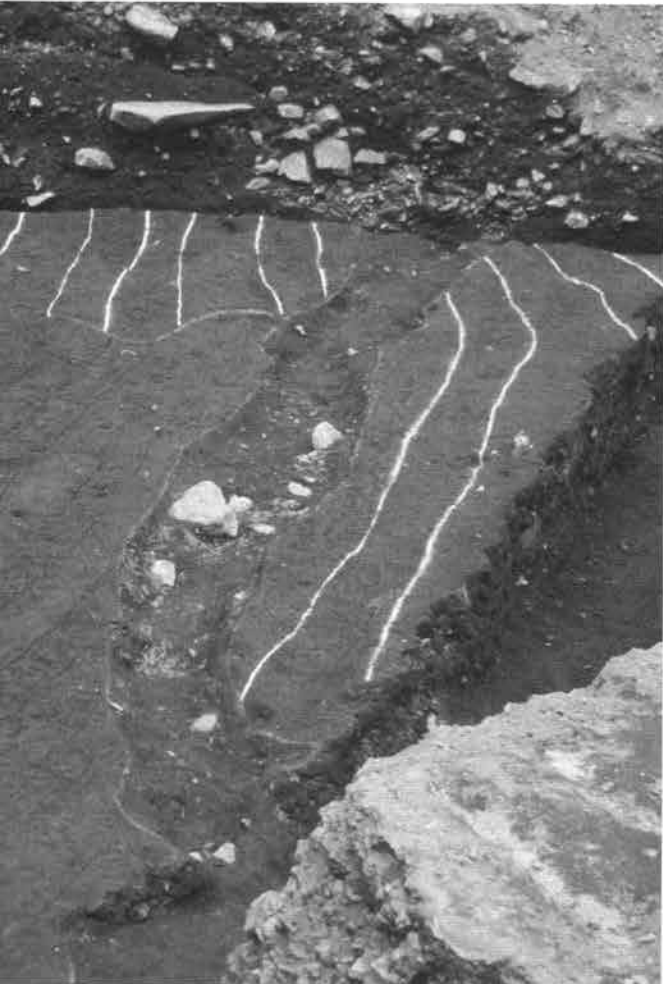


写真2. I区55区1号溝 南東→



写真3. I区 同 南東→

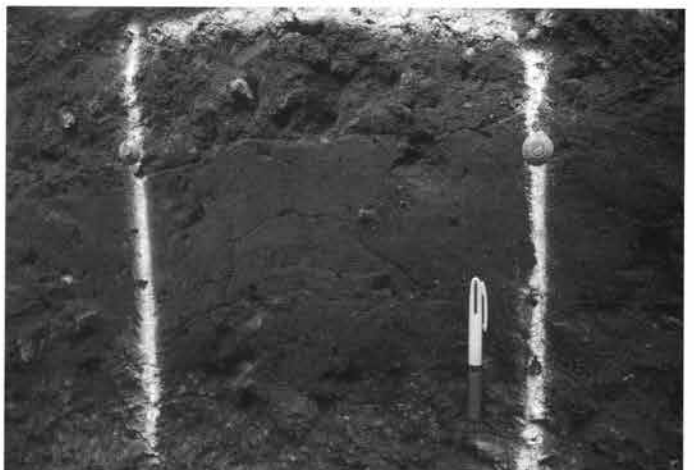


写真4. I区 同 拡張トレンチ a-a' 西→

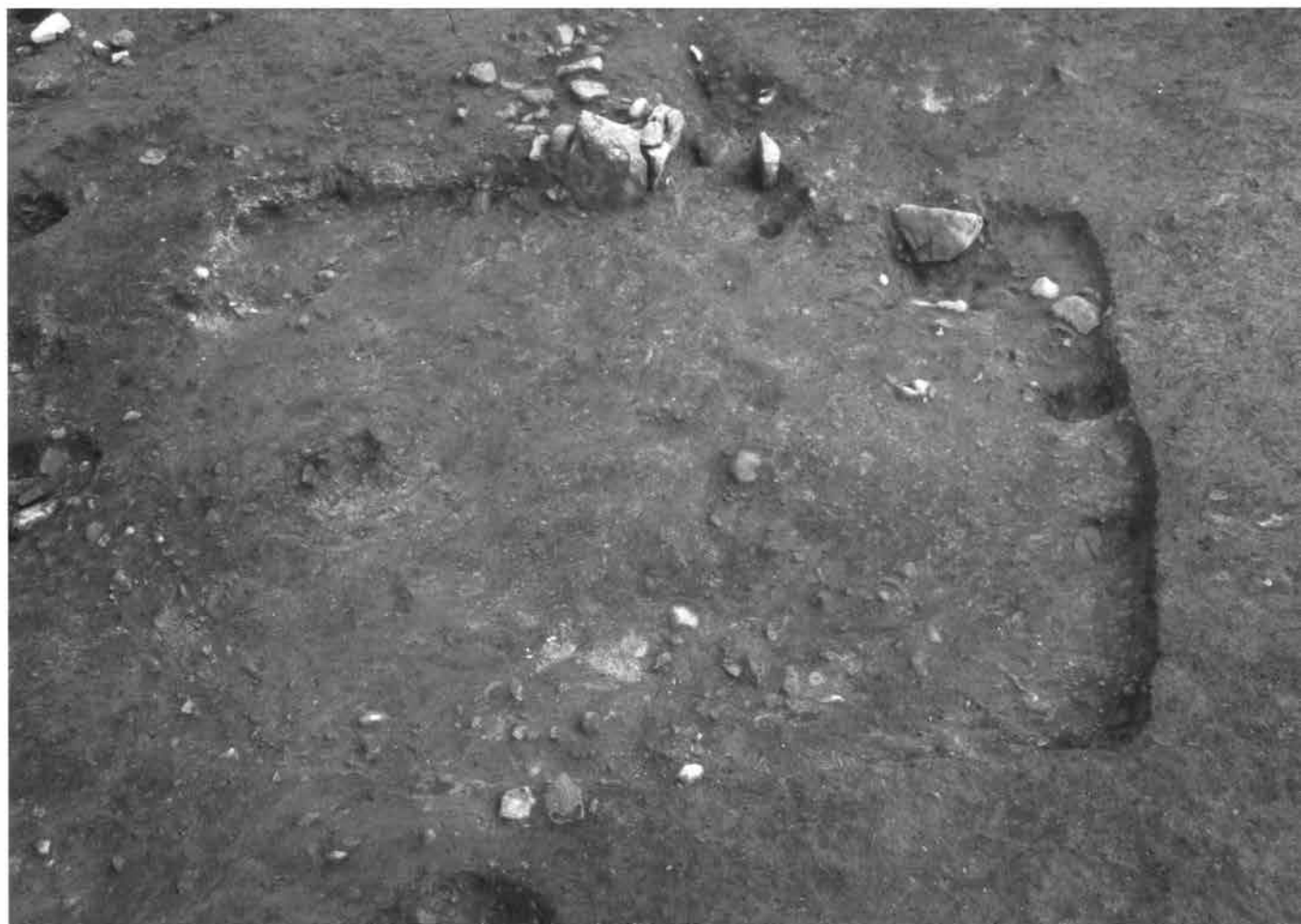


写真1. II区73区1号住居 南西→



写真2. II区 同 カマド 南西→



写真3. II区 同 南→



写真4. II区 同 貯蔵穴 南西→

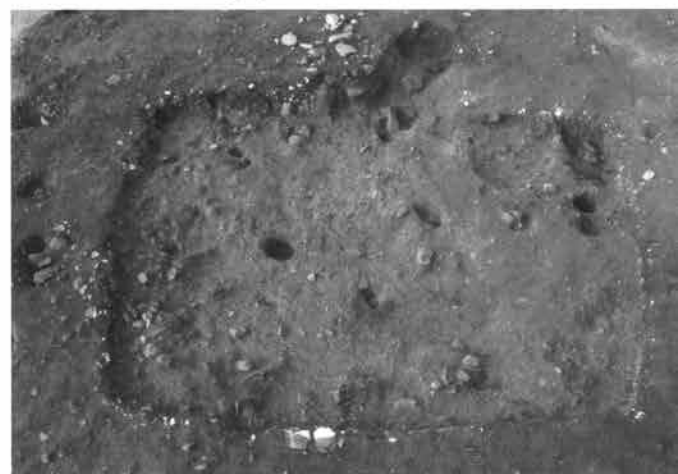


写真5. II区 同 掘り方 南西→

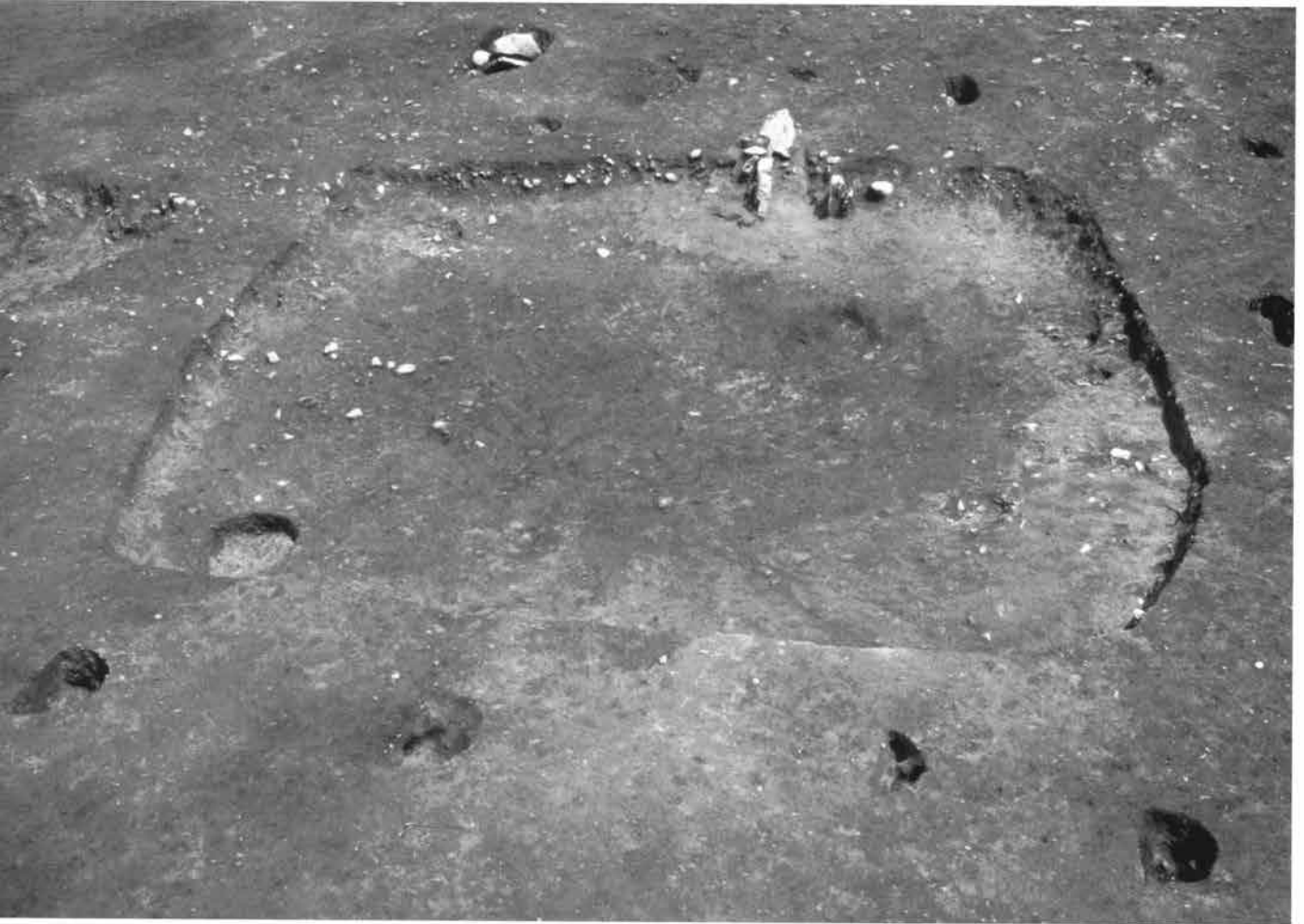


写真1. II区73区2号住居 西→



写真2. II区73区K+3ライン断面 西→



写真1. II区 73区2号住居 遺物出土状況(貯蔵穴上の礫) 南→



写真2. II区 同 断面図A-A' As-Kkテフラ近接 西→



写真3. II区 同 周溝 南→



写真4. II区 同 カマド 西→



写真5. II区 同 2号ピット 南→

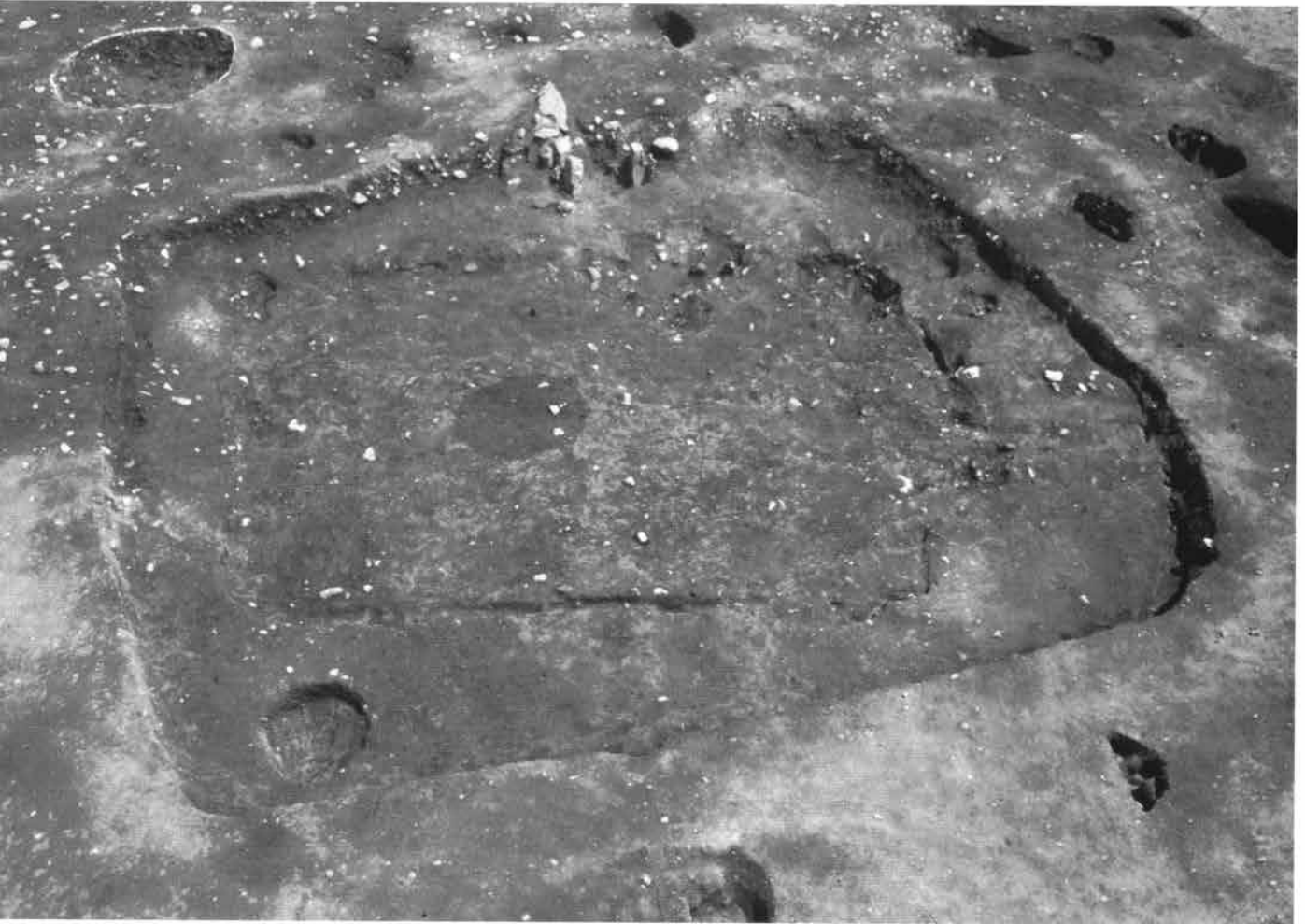


写真1. II区73区3号住居 西→

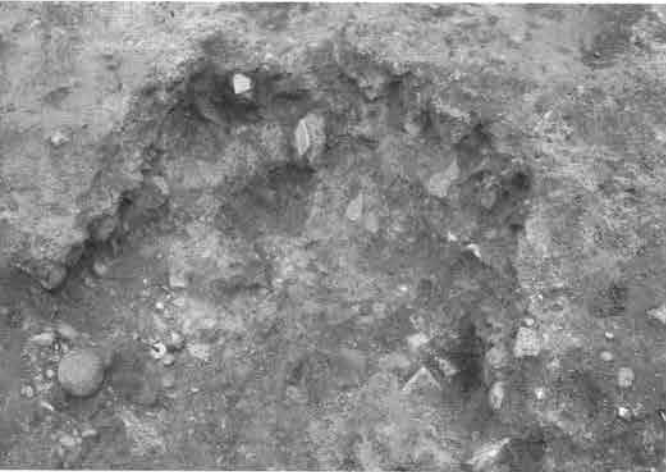


写真2. II区 同 カマド掘り方 西→

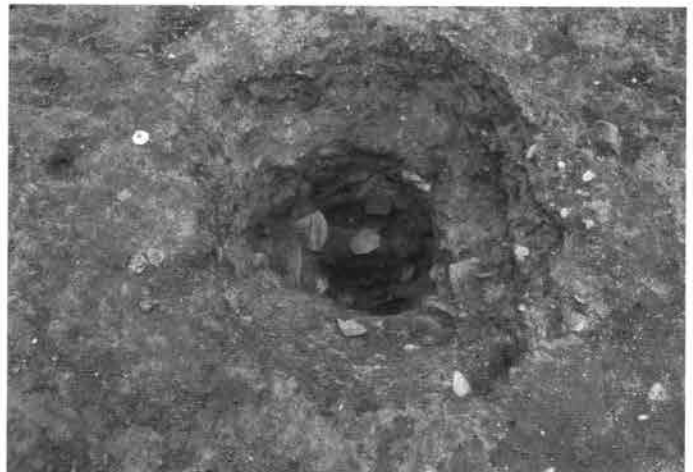


写真3. II区 同 床下土坑 南→



写真4. II区73区2・3号住居 南→



写真5. II区73区3号住居調査風景



写真1. II区73区1・3号埋甕検出状況 南西→



写真2. II区 同 南西→



写真3. II区 同 断面D-D' 南→



写真4. II区 同



写真5. II区 同 南西→



写真1. II区73区1・3号埋甕 断面A-A' 南西→



写真2. II区 同 掘り方 南西→

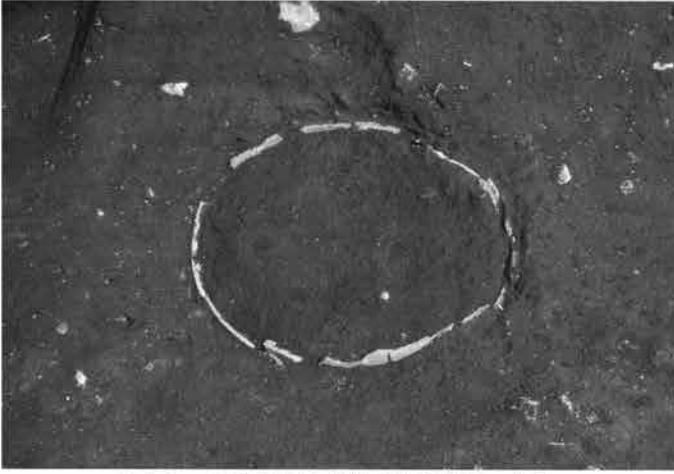


写真1. II区73区1号埋甕検出状況 南西→



写真5. II区73区3号埋甕検出状況 南西→



写真2. II区 同 北→

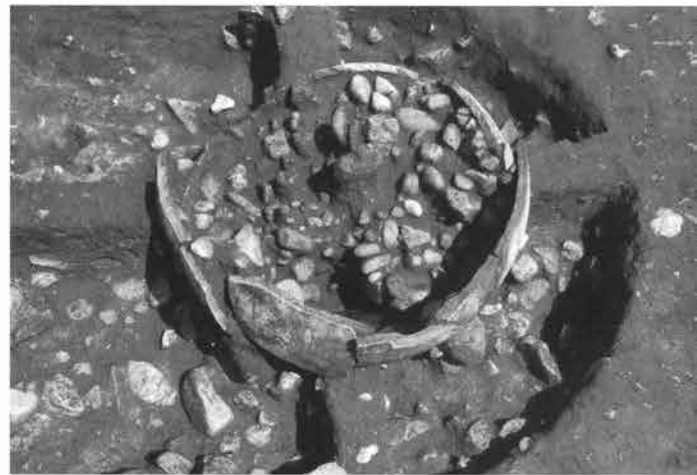


写真6. II区 同 南西→



写真3. II区 同 断面 南西→



写真7. II区 同 南西→

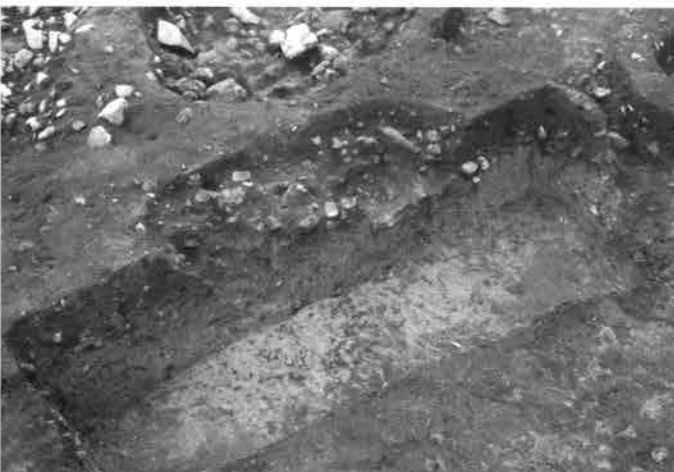


写真4. II区73区1・3号埋甕掘り方 南西→



写真8. II区 同 断面 南西→



写真1. II区73区3号埋甕内礫

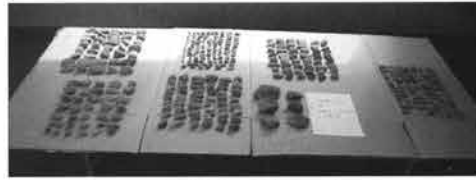


写真2. II区 同

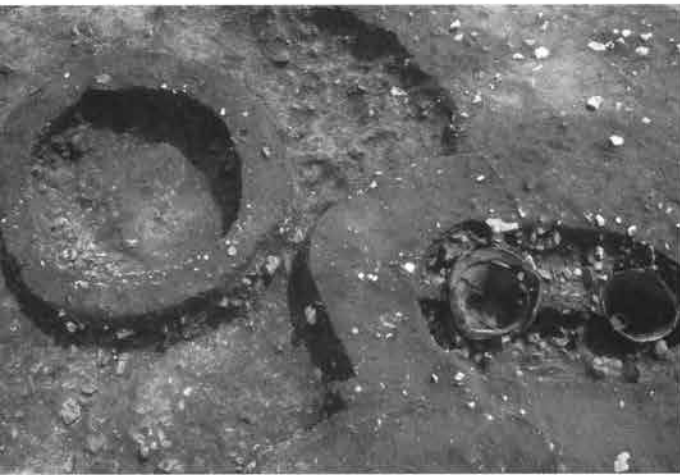


写真3. II区73区1・3号埋甕・73区26号土坑 北→



写真4. II区 73区26号土坑 南東→



写真5. II区 73区1号埋甕検出状況(作業風景) 西→



写真1. II区 73区1・3号埋甕周辺 南→



写真2. II区 同 作業風景



写真3. II区調査風景 南→



写真4. II区63区2号埋甕 南→



写真5. II区 同 検出状況 南→



写真1. II区63区18・19号土坑 北→



写真2. II区63号18・19・20号土坑断面A-A' 南→



写真3. II区63区21号土坑断面A-A' 東→



写真4. II区63区22号土坑 東→



写真5. II区 同 (63区5号焼土) 東→



写真1. II区63区23号土坑 南→

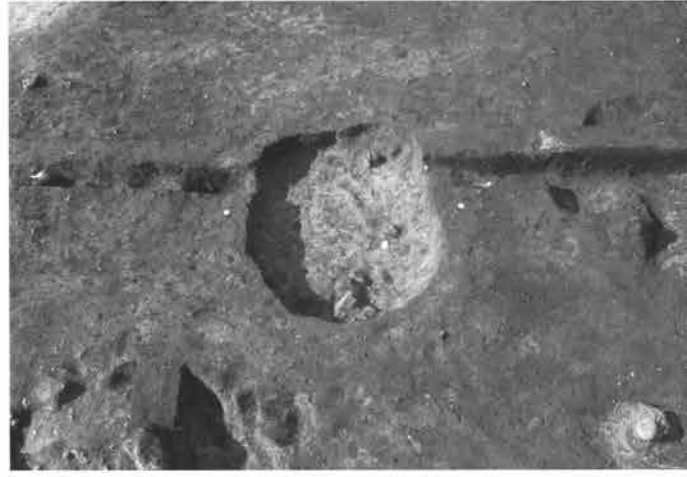


写真2. II区63区24号土坑 南→

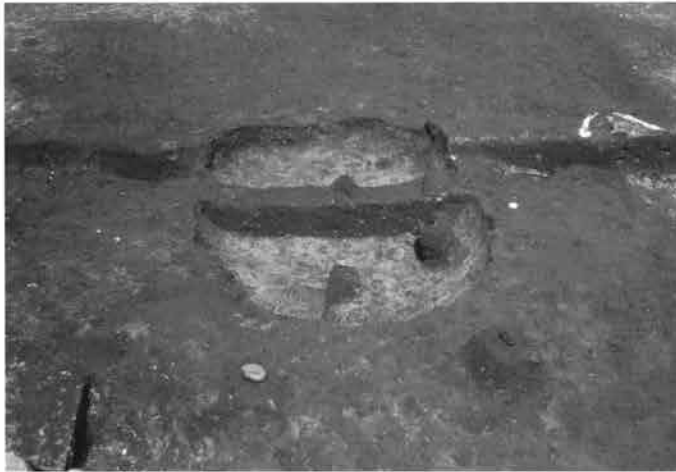


写真3. II区 同 断面A-A' 南→



写真4. II区63区25号土坑 東→



写真5. II区 同 断面及び遺物出土状況 東→



写真1. II区63区27号土坑遺物出土状況 北→



写真2. II区63区27・28号土坑 西→



写真3. II区 同 断面A-A' 北東→



写真4. II区63区30号土坑 南→



写真5. II区63区32号土坑 東→



写真1. II区63区34号土坑 南→。



写真2. II区63区38号土坑 南→。



写真3. II区63区40号土坑 南東→



写真4. II区73区3号土坑 南→



写真5. II区73区4号土坑 南→



写真6. II区73区7号土坑 南→



写真7. II区73区8号土坑 南→



写真8. II区73区9号土坑 南→



写真1. II区73区10号土坑 南→

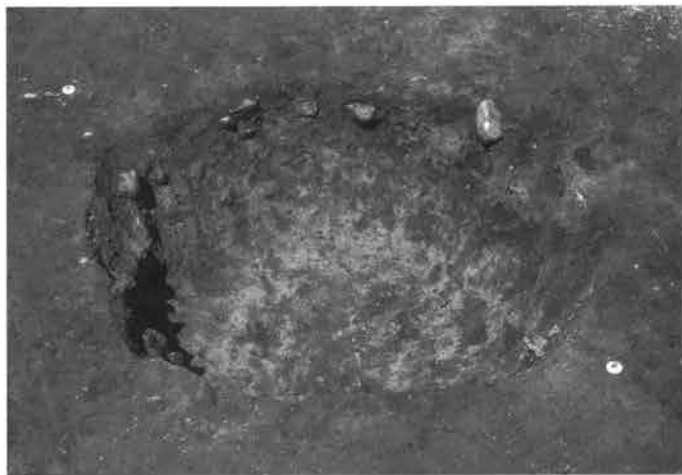


写真2. II区73区11号土坑 南→

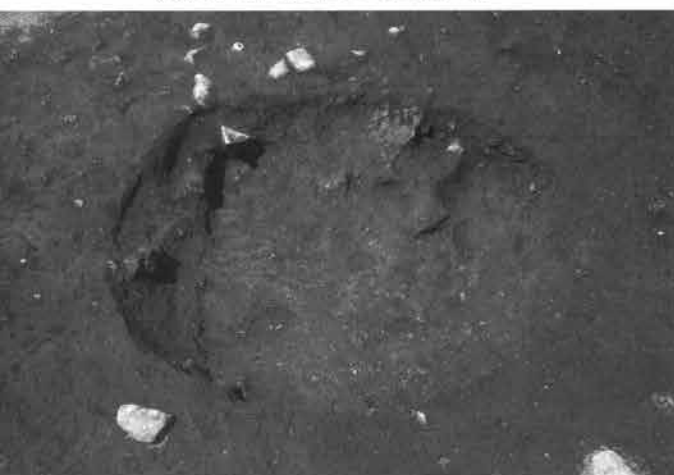


写真3. II区73区12号土坑 南→



写真4. II区73区14号土坑 南→

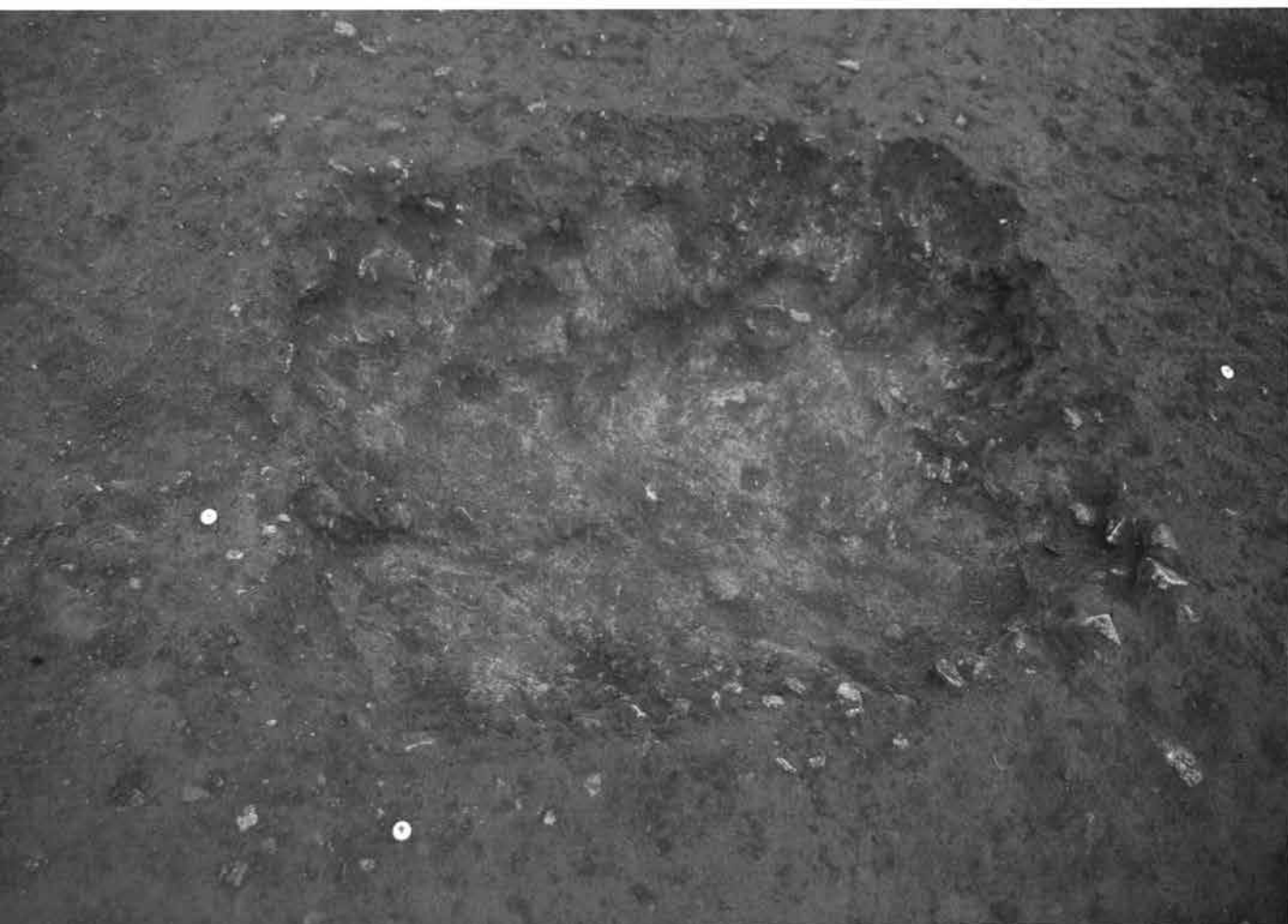


写真5. II区73区16号土坑 南→

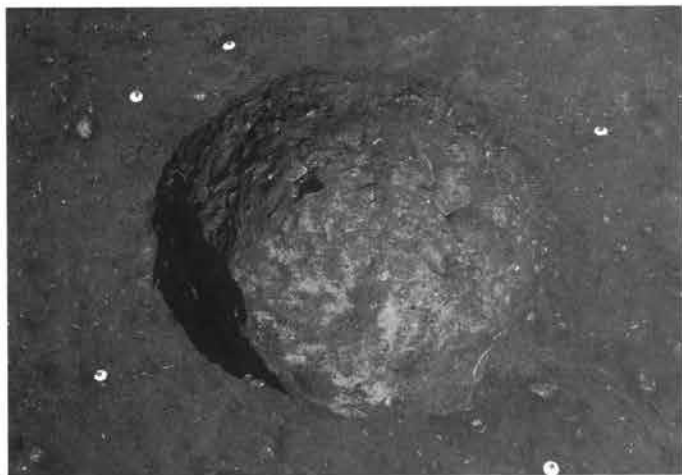


写真1. II区73区17号土坑 南→



写真2. II区同 遺物出土状況 西→



写真3. II区同 西→



写真4. II区同 南→



写真1. II区 73区 26号土坑 南→

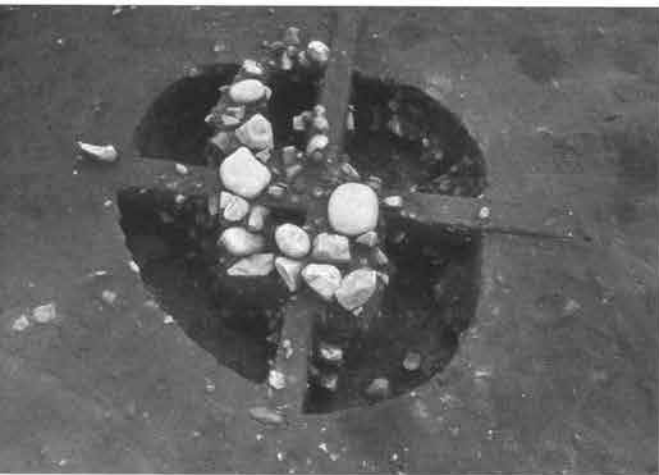


写真2. II区 同 南→



写真3. II区 同 底部焼土近接 南→

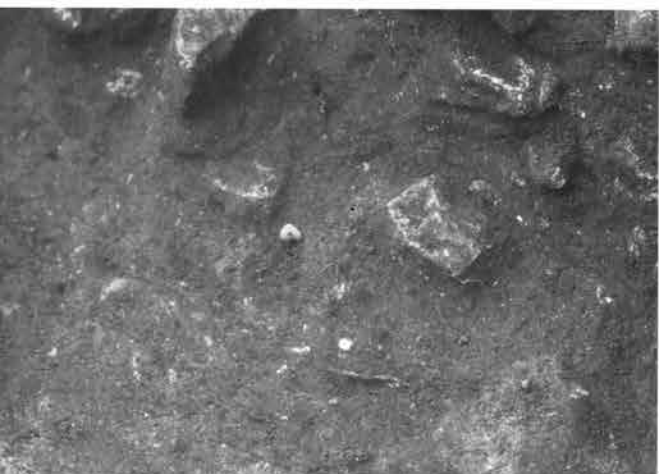


写真4. II区 同 遺物(玉)出土状況 南→



写真5. II区 同 出土遺物



写真1. II区73区26号土坑断面A-A' 南→

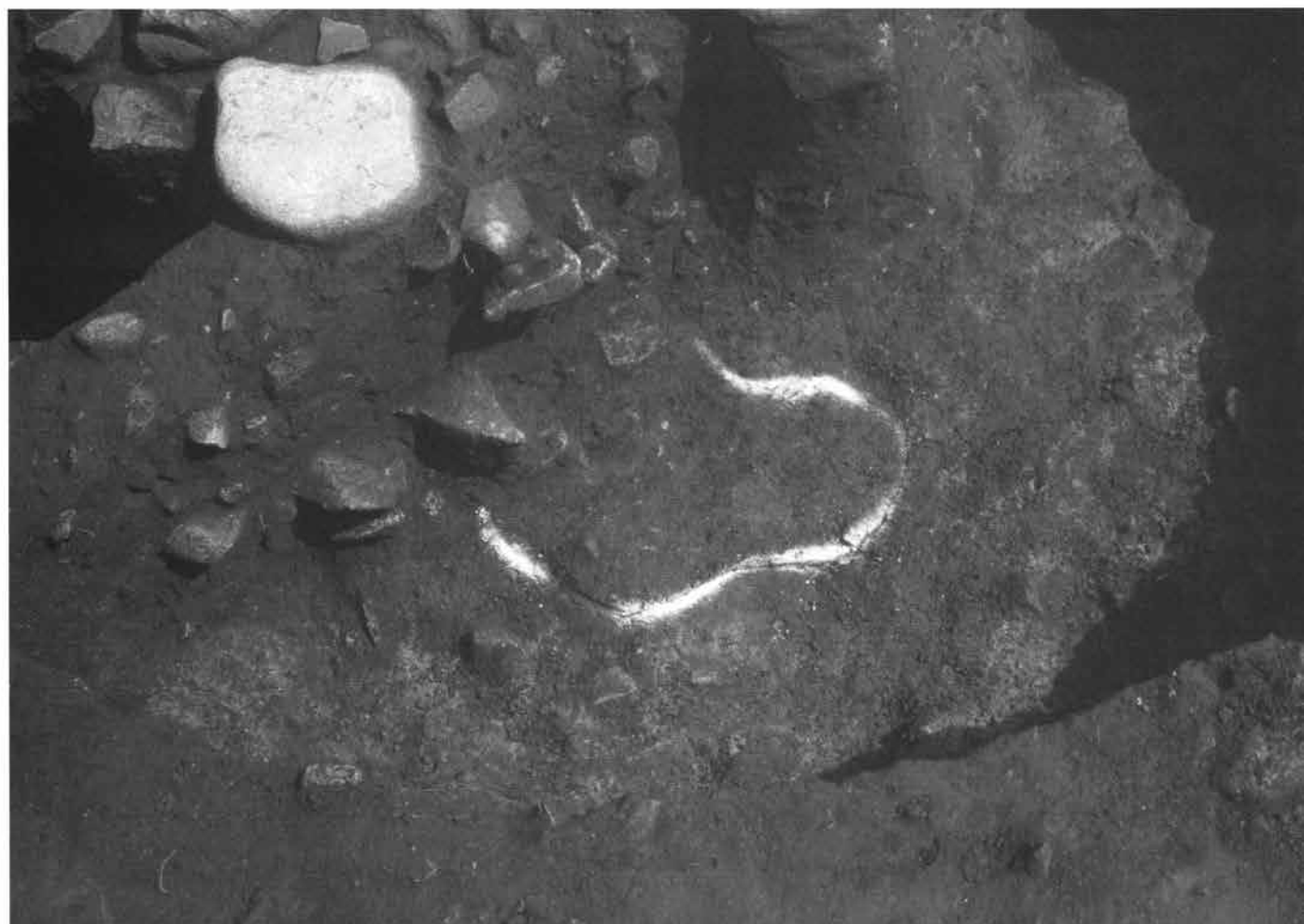


写真2. II区同 底部烧土痕 南西→

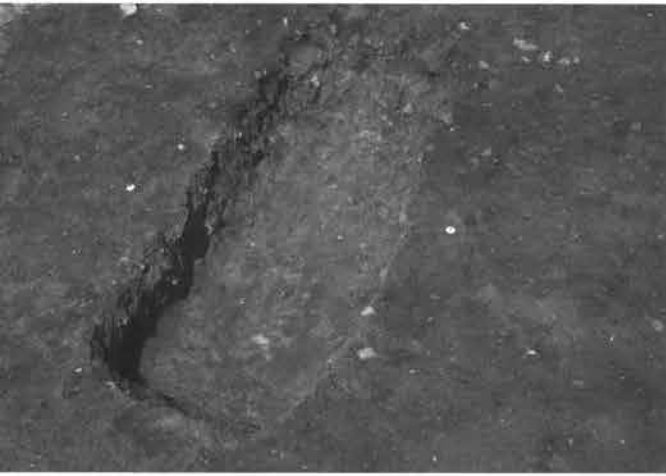


写真1. II区73区29号土坑 南→



写真2. II区73区31号土坑石出土状況 南→



写真3. II区73区33号土坑 南東→

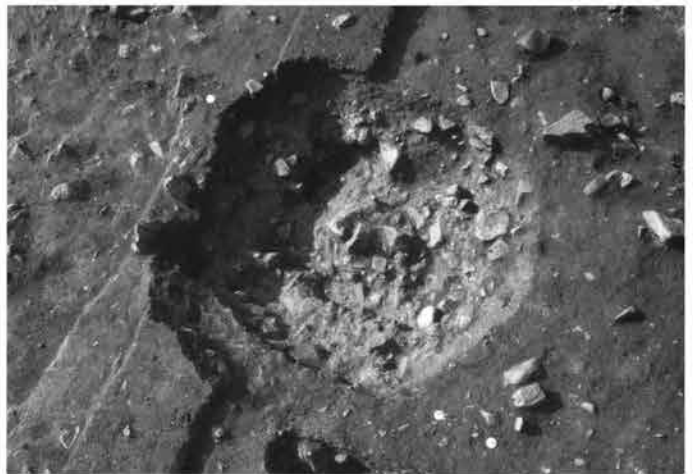


写真4. II区73区35号土坑 南→

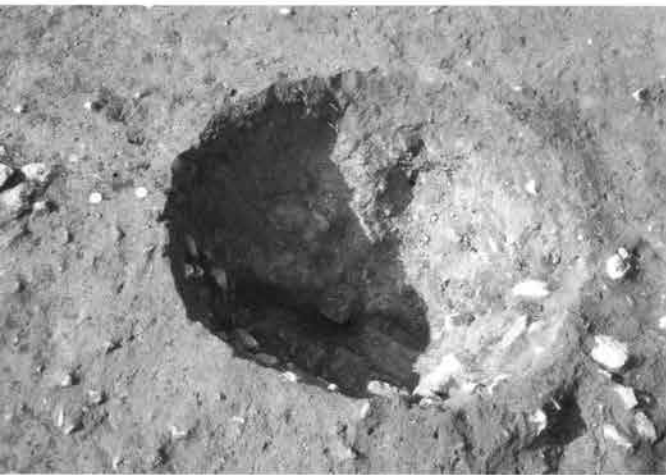


写真5. II区73区36号土坑 南→



写真6. II区73区37号土坑 南→



写真7. II区73区39号土坑 南→



写真8. II区 同 ベンガラ出土状況 南→



写真1. II区63区1・2号焼土 南東→



写真2. II区 同 南東→



写真3. II区63区4号焼土 南西→



写真4. II区63区5号焼土断面 A - A' 東→



写真5. II区 同 北東→



写真1. II区73区3号烧土断面 南→



写真2. II区73区6号烧土 南→



写真1. II区全景 ピット検出 南→



写真2. II区全景近接 ピット検出 西→



写真1. II区63区1号河道 南東→



写真2. II区 同 南東→

報告書抄録

書名ふりがな	かわらゆかつぬまいせきかっこに
書名	川原湯勝沼遺跡(2)
副書名	ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	6
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	356
編著者名	関 俊明 / 篠原正洋
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20051001
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かわらゆかつぬまいせき
遺跡名	川原湯勝沼遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざかわらゆ
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字川原湯
市町村コード	10424
遺跡番号	
北緯(日本測地系)	363230
東経(日本測地系)	1384127
北緯(世界測地系)	363241
東経(世界測地系)	1384115
調査期間	20030701-0903 / 20031001-1226 / 20040405-0430
調査面積	10792 (I区) / 5782 (II区)
調査原因	ハッ場ダム建設工事 / 付替国道145号川原湯地区改良工事 (I区) 県道林吾妻線2号橋下部工事 (II区)
種別	集落 / 田畑 / その他
主な時代	縄文 / 古墳 / 平安 / 近世 (天明三年)
遺跡概要	集落 - 平安 - 竪穴住居 3 / 田畑 - 近世 (天明三年) - 畑 11 + ヤックラ 19 + 道 5 + 溝 3 / その他 - 縄文・古墳以降 - 溝 1 + 畠 1 + 埋設土器 3 + 土坑 38 + 焼土 6 + ビット 45 + 河道 1
特記事項	縄文時代晩期の埋設土器、古墳時代の遺物、平安時代の住居、天明三年畑跡



財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第356集

川原湯勝沼遺跡(2)

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

平成 17 年 10 月 1 日 印刷

平成 17 年 10 月 1 日 発行

編集・発行 / 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

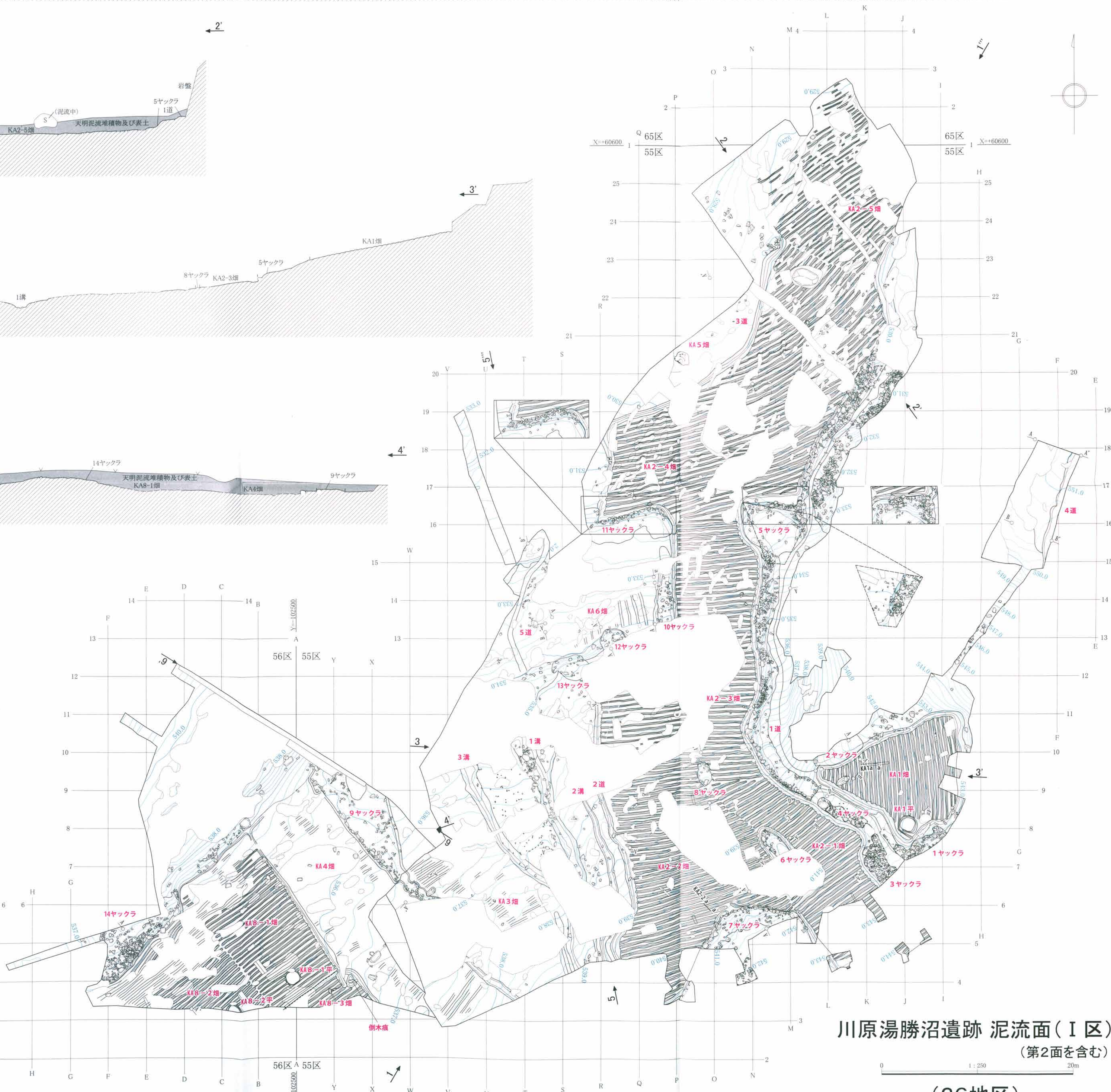
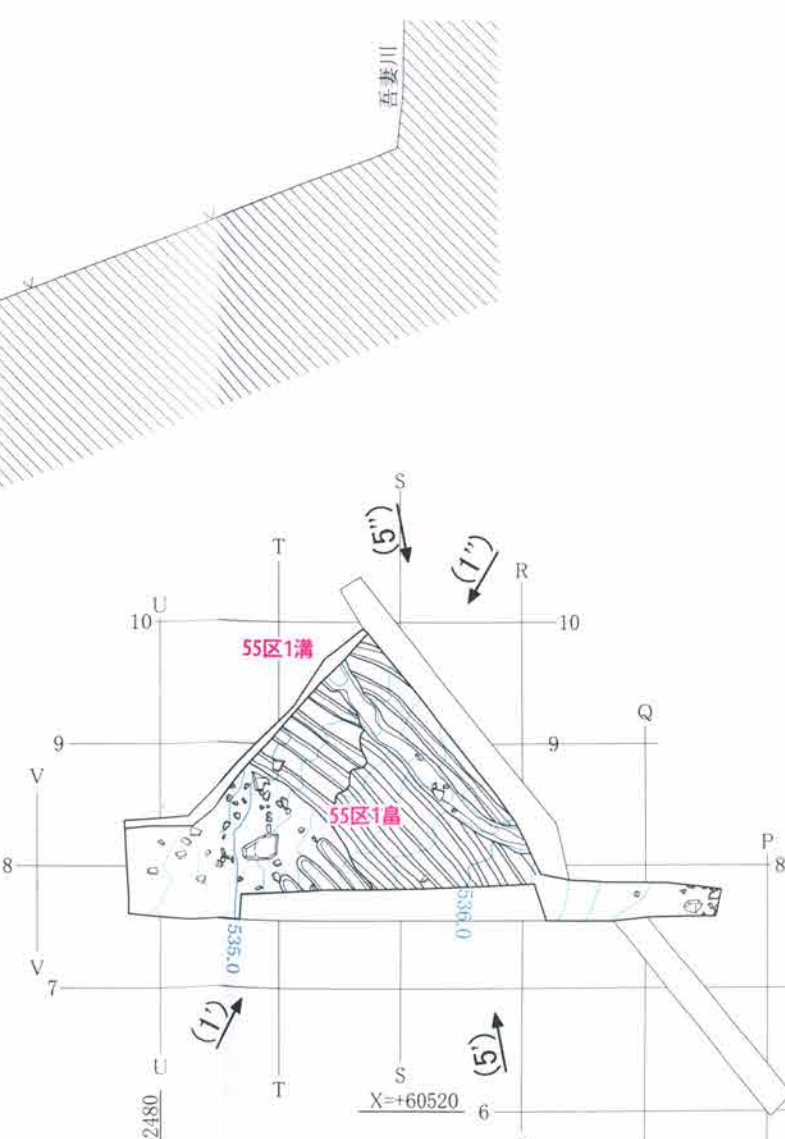
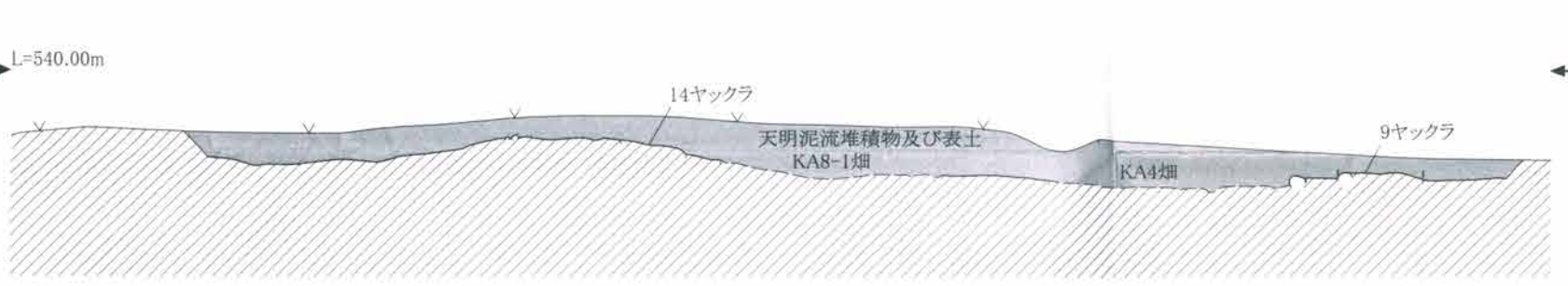
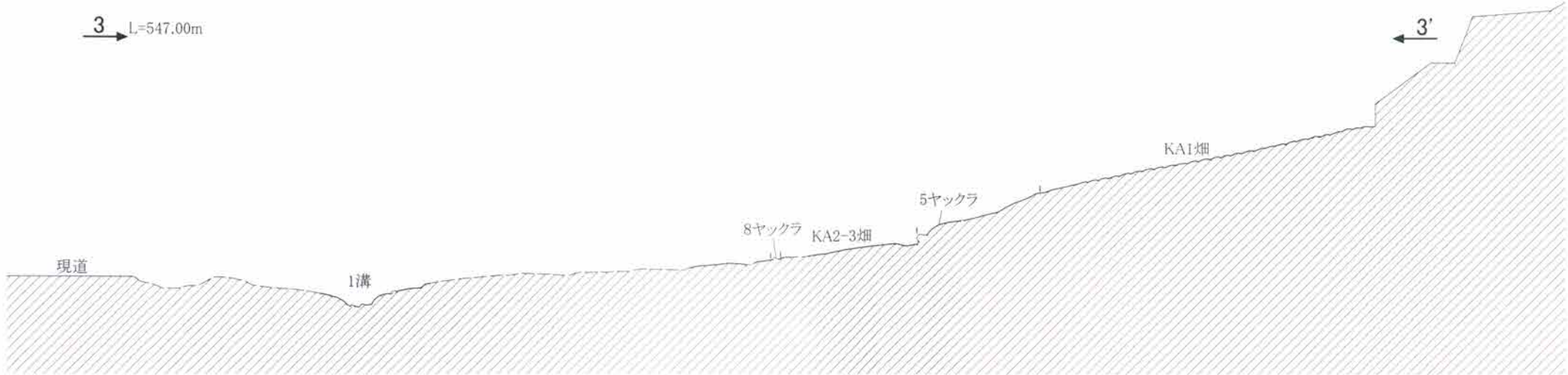
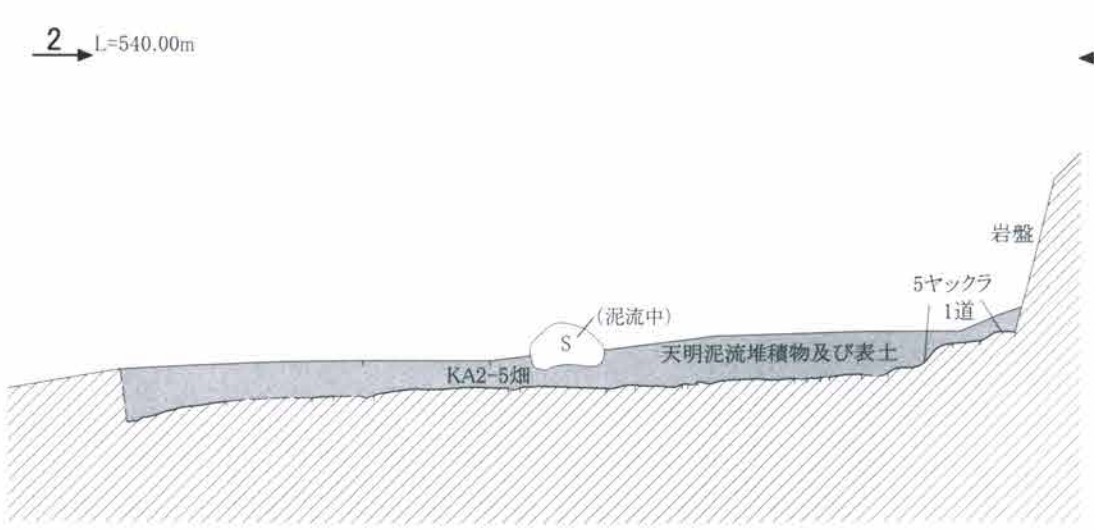
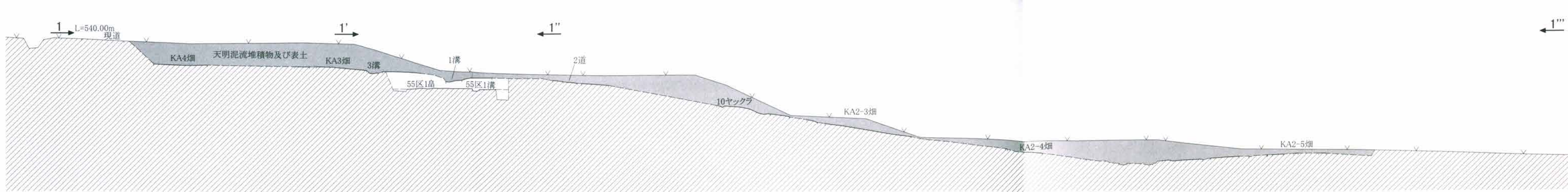
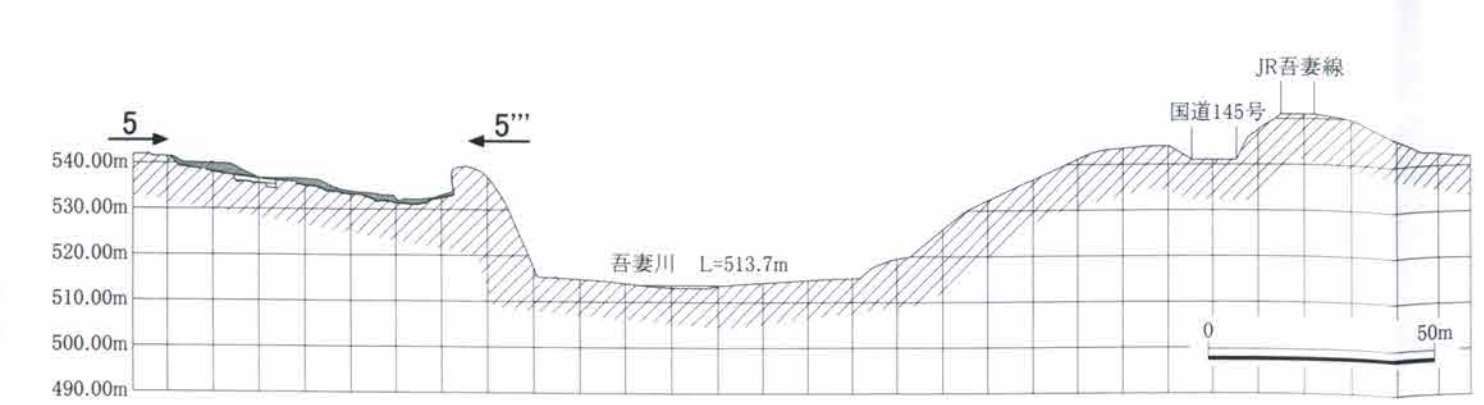
〒 377-8555 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田 784-2

電話 0279(52)2511 (代表)

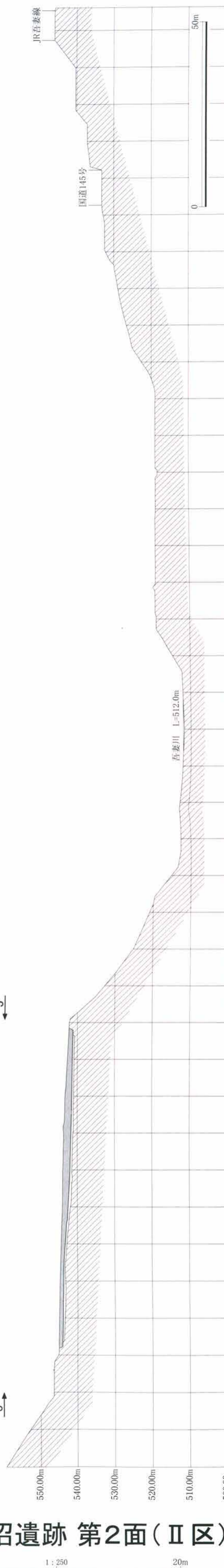
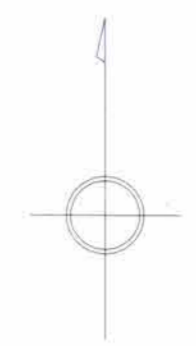
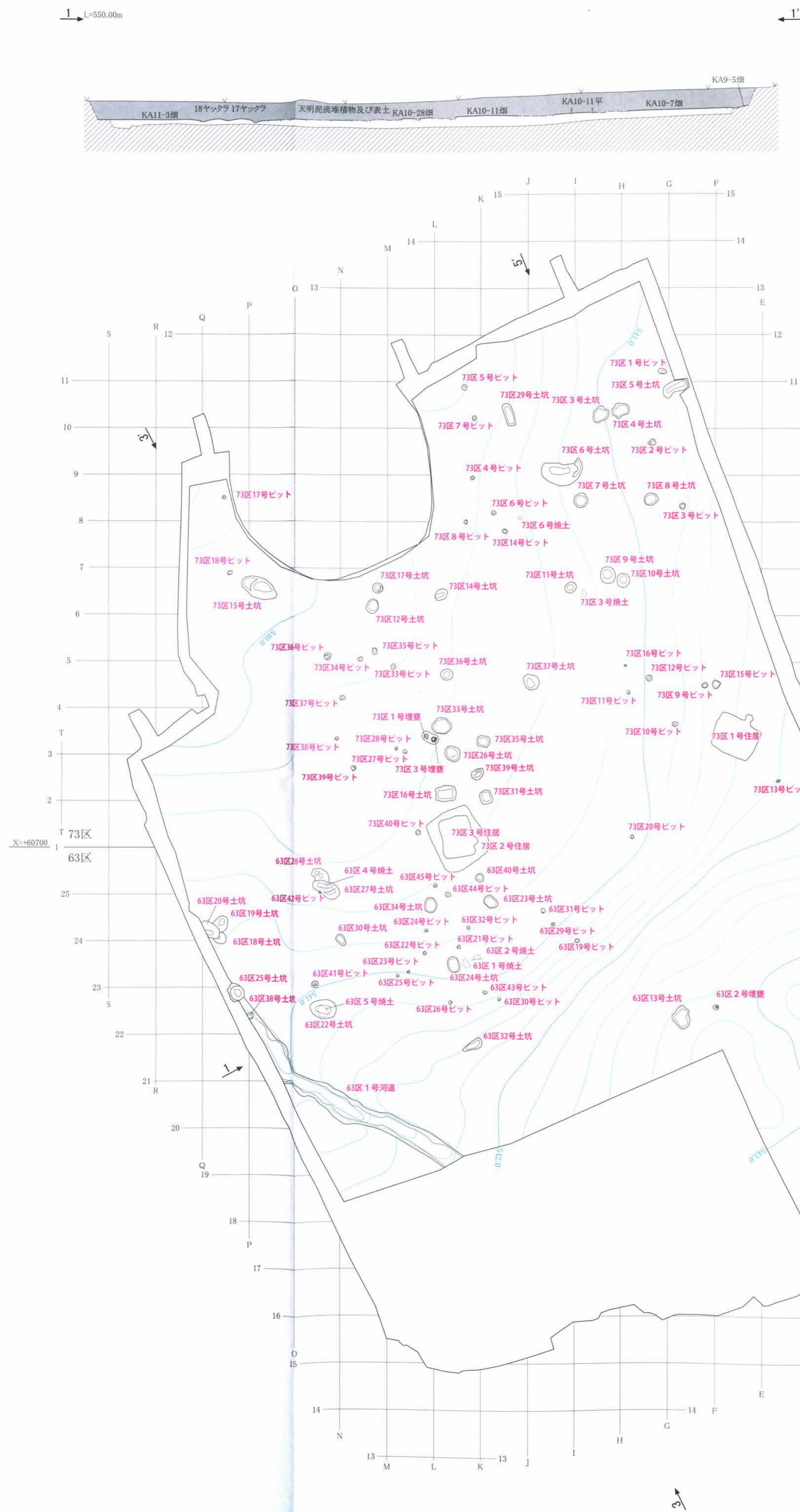
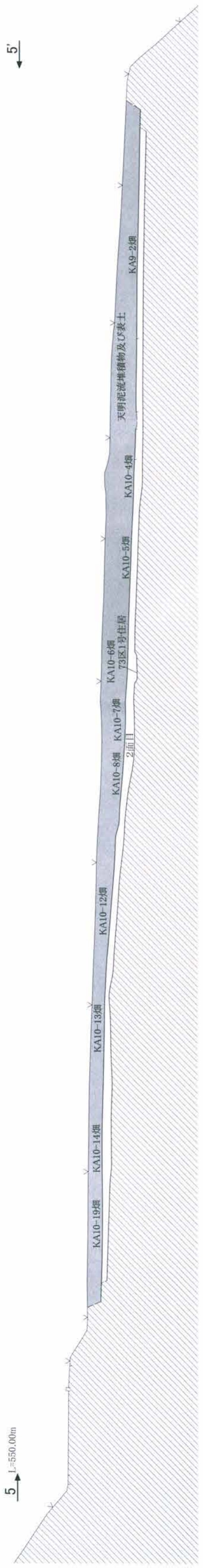
<http://www.gunmaibun.org/>

印刷 / 松本印刷工業株式会社

電話 027(221)5015 (代表)

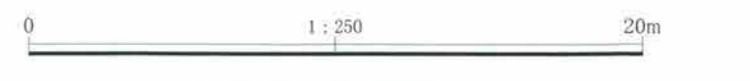


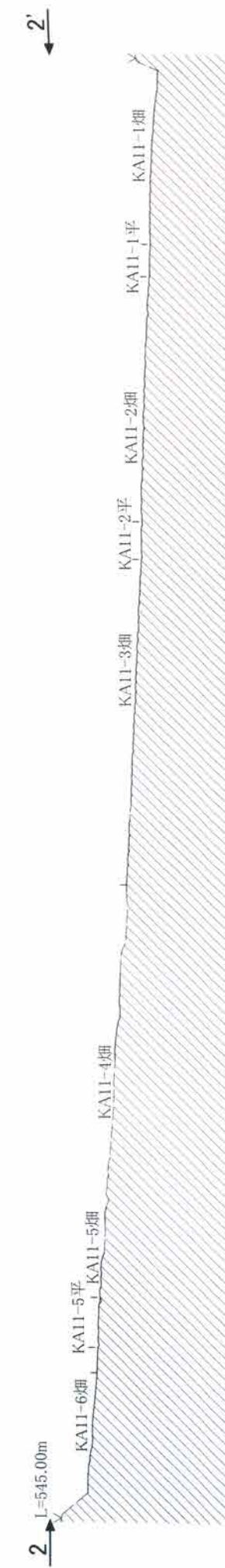
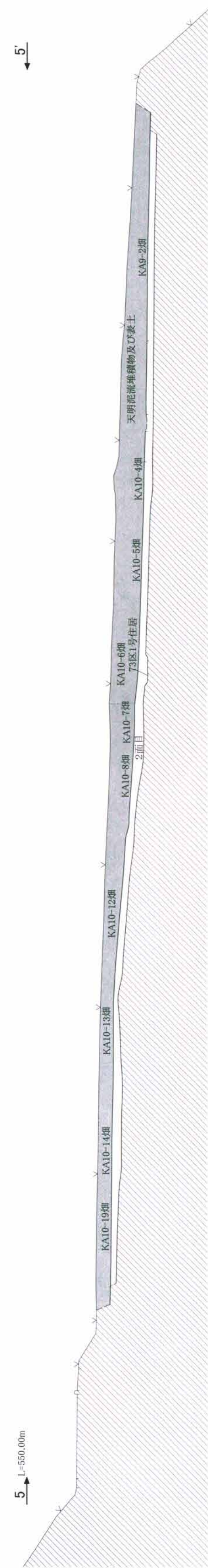
川原湯勝沼遺跡 泥流面 (I区)
 (第2面を含む)
 (26地区)



川原湯勝沼遺跡 第2面(Ⅱ区)

(26地区)





川原湯勝沼遺跡 泥流面(Ⅱ区)
(26地区)

